

令和 6(2024)年度 九州栄養福祉大学・大学院 教員情報

【食物栄養学部 食物栄養学科】・【健康科学研究科 健康栄養学専攻】

スギモト ヤスシ
杉元 康志

SUGIMOTO Yasushi

学長補佐（食物栄養学部担当）・食物栄養学部長・
大学院 健康科学研究科長・教授

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・栄養福祉論 ・食品加工学 ・食品加工学実習 ・基礎生物学 ・食品機能論 ・食品学実験 I ・栄養福祉論 ・専門ゼミナール ・卒業論文 ・管理栄養士演習 I、管理栄養士演習 II ----- 〔九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科〕 ・健康科学特別講義 I、健康科学特別講義 II ・健康科学研究法特論 II、健康科学研究法特論演習 ・食品学特論 I、食品学特論 II ・特別研究 I、特別研究 II	
専 門 分 野	■ タンパク質科学 ■ 分子生物学 ■ 食品化学	
最 終 学 歴	鹿児島大学大学院 農学研究科 修了	
学 位	農学博士（九州大学）	
職 歴	西南女学院短期大学 食物栄養科 講師 (昭和 50(1975)年 4 月～昭和 56(1981)年 3 月) 西南女学院短期大学 食物栄養科 助教授 (昭和 56(1981)年 4 月～平成 8(1996)年 3 月) カナダ・カルガリー大学医学部 客員研究員 (昭和 60(1985)年 10 月～昭和 61(1986)年 9 月) 鹿児島大学 農学部 助教授 (平成 8(1996)年 4 月～平成 13(2001)年 2 月) 鹿児島大学 農学部 教授 (平成 13(2001)年 3 月～平成 13(2001)年 3 月) 鹿児島大学大学院 連合農学研究科 教授 (平成 13(2001)年 4 月～平成 28(2016)年 3 月) 鹿児島大学大学院 連合農学研究科 副研究科長 (平成 24(2012)年 4 月～平成 25(2013)年 3 月) 鹿児島大学大学院 連合農学研究科 研究科長 (平成 25(2013)年 3 月～平成 28(2016)年 3 月) 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 教授 (平成 28(2016)年 4 月 1 日～現在に至る) 鹿児島大学 名誉教授 (平成 28(2016)年 4 月～現在に至る) 九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科長 (平成 30(2018)年 4 月～現在に至る) 九州栄養福祉大学学長補佐（食物栄養学部担当） (令和 2(2020)年 4 月～現在に至る) 九州栄養福祉大学食物栄養学部長 (令和 2(2020)年 4 月～令和 6(2024)年 3 月) 学校法人東筑紫学園 評議員 (令和 2(2020)年 4 月～現在に至る) 学校法人東筑紫学園 理事 (令和 2(2020)年 4 月～現在に至る) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学地域連兼センター長 (令和 5(2023)年 7 月～現在に至る)	
教育上の業績	○西南女学院短期大学で栄養士養成の教育に携わった。 ○鹿児島大学農学部生物資源化学科および大学院にて多くの学士、修士を輩出した。 ○鹿児島大学大学院連合農学研究科にて博士課程の運営・管理に携わりながら教育システムの構築し、多くの博士を輩出した。	

<p>主な研究活動</p>	<p>【論文】 タンパク質の構造と機能の研究を中心に生化学、分子生物学、発生生物学アプローチを行った。主な発表論文は以下の通りである。</p> <hr/> <ol style="list-style-type: none"> 1. Egg-yolk trypsin inhibitor identical to albumen ovomucoid. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 788:117-123(1984) 2. Purification and characterization of benzoyl-L-tyrosine ethyl ester hydrolase from the yolk sac membrane of chicken egg. (共著) Biochemistry and Cell Biology 64: 543-547(1986) 3. Flow of egg white ovalbumin into the yolk sac during embryogenesis. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 992: 400-403(1989) 4. Comparison of egg and embryo proteins and a trial to detect proteolytic activities in eggs of <i>Bombyx mori</i>. (共著) Comparative Biochemistry and Physiology 96B: 253-256 (1990) 5. Gene structure and multiple mRNA species of <i>Drosophila melanogaster</i> aldolase generating three isozymes with different enzymatic properties. (共著) Journal of Biochemistry 12:677-688(1992) 6. Isolation and characterization of cDNA and genomic promoter region for a heat shock protein 30 from <i>Aspergillus nidulans</i>. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 1219: 555-558 (1994) 7. Analysis of the in vitro translation product of a novel-type <i>Drosophila melanogaster</i> aldolase mRNA in which two carboxyl-terminal exons remain unsliced. (共著) Archives of Biochemistry and Biophysics 323:361-366.(1994) 8. A proteinase inhibitor from egg yolk of hen is an ovoinhibitor analog. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 1295:96-102.(1996) 9. Ovalbumin in developing chicken eggs migrates from egg white to embryonic organs while changing its conformation and thermal stability. (共著) Journal of Biological Chemistry 274:11030-11037.(1999) 10. Ovotransferrin antimicrobial peptide(OTAP-92) kills bacteria through a membrane damage mechanism. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 1523:196-205.(2000) 11. Occurrence of ovalbumin in ovarian yolk of the chicken during oogenesis. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 1526:1-4. (2001) 12. Oviductin, the oviductal protease that mediates gamete interaction by affecting the vitelline coat in <i>Bufo japonicus</i>: its molecular cloning and analyses of expression and posttranslational activation. (共著) Developmental Biology 243:176-184. (2002) 13. Perchloric acid-soluble protein regulates cell proliferation and differentiation in the spinal cord of chick embryo. (共著) FEBS letters 579: 2416-2420.(2005) 14. Thermostabilized ovalbumin that occurs naturally during development accumulates in embryonic tissues. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 1723:106-113. (2005) 15. Transition of ovalbumin to thermostable structure entails conformational changes involving the reactive center loop. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 1770:5-11. (2007) 16. Aggregates with lysozyme and ovalbumin show features of amyloid-like fibrils. (共著) Biochemistry and Cell Biology 89: 533-544. (2011)
	<ol style="list-style-type: none"> 17. Analysis of core region from egg white lysozyme forming amyloid fibrils. (共著) International Journal of Biological Science 9: 219-227. (2013)
	<ol style="list-style-type: none"> 18. Amyloid fibril formation in vitro from halophilic metal binding protein: its high solubility and

	<p>reversibility minimized formation of amorphous protein aggregations. (共著) Protein Science 22: 1582-1591. (2013)</p>
	<p>19. Amyloidogenic lysozymes accumulate in the endoplasmic reticulum accompanied by the augmentation of ER stress signals. (共著) Biochimica et Biophysica Acta 1850:1107-1119. (2015)</p>
	<p>20. Amyloid fibril formation from a 9 amino acid peptide, 55th-63rd residues of human lysozyme. (共著) International Journal of Biological Macromolecules 80:208-216. (2015)</p>
	<p>21. Lysozyme Mutants Accumulate in Cells while Associated at their N-terminal Alpha-domain with the Endoplasmic Reticulum Chaperone GRP78/BiP. (共著) International Journal of Biological Science 12: 184-197. (2016)</p>
	<p>22. Insoluble expression of highly soluble halophilic metal binding protein for metal ion biosorption: Application of aggregate-prone from hen egg white lysozyme. (共著) Protein Expression & Purification 156:50-57. (2019)</p>
	<p>23. Repression effects of hydrolysates from hen-egg proteins on amyloid fibril formation. (共著) Journal of Poultry Science 59: 384-391. (2022)</p>
	<p>24. Stability of hen egg-white lysozyme during embryonic development(共著) Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry 86: 353-361. (2022)</p>
	<p>【学術報告】</p>
	<p>1. 鶏卵タンパク質由来ペプチドの新規機能の探索と有効利用 「旗影会学術報告 2016 年報告」 (平成 29(2017)年 5 月 http://www.nakashima-foundation.org/kieikai/pdf/28/2016T015.pdf)</p>
	<p>【学会講演】</p>
	<p>1. 分泌タンパク質の不良化によるアミロイド線維形成と小胞体ストレス (第 160 回日本獣医学会学術集会シンポジウム「機能性食品の新たな研究展望」平成 29(2017)年 9 月)</p>
所属学会	<p>日本生化学会 (昭和 50(1975)年 9 月～現在に至る) 同 評議員 (平成 14(2002)年～現在に至る) 同 代議員 (平成 28(2016)年～現在に至る) 日本生化学会九州支部 (評議員) (平成 14(2002)年～現在に至る) 日本農芸化学会 (昭和 48(1973)年 9 月～現在に至る) 同 評議員 (平成 22(2010)年～平成 23(2011)年) 同 代議員 (平成 24(2012)年～平成 25(2013)年) 日本農芸化学会西日本支部参与 (平成 18(2006)年～現在に至る) 日本分子生物学会 (昭和 63(1988)年 12 月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎栄養学 ・生化学Ⅰ、生化学Ⅱ ・生化学実験 ・栄養福祉論 ・専門ゼミナール、卒業論文 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習ⅠA、管理栄養士演習ⅠB、管理栄養士演習Ⅱ、 ・食健康センター活動(演習) <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・食環境地域連携演習 <p>[大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生化学特論Ⅰ、生化学特論Ⅱ ・健康科学特別講義Ⅰ、健康科学特別講義Ⅱ ・健康科学研究法特論Ⅰ、健康科学研究法特論Ⅱ ・特別研究Ⅰ、特別研究Ⅱ 	
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 生化学 ■ タンパク質分子科学 	
最 終 学 歴	九州大学大学院 農学研究科博士課程農芸化学専攻 修了	
学 位	農学博士 農芸化学修士	
職 歴	<p>マックスプランク分子遺伝学研究所 研究員 (昭和59(1984)年9月～昭和61(1986)年8月)</p> <p>九州大学 農学部 助手 (昭和61(1986)年9月～昭和63(1988)年6月)</p> <p>佐賀大学 農学部 助教授 (昭和63(1988)年7月～平成14(2002)年4月)</p> <p>第32次南極地域観測隊 生物・医学担当夏隊員 (平成2(1990)年11月～平成3(1991)年3月)</p> <p>鹿児島大学大学院 連合農学研究科 助教授併任 (平成3(1991)年4月～平成14(2002)年4月)</p> <p>テキサス大学 化学・生化学科 文部省在外研究員 (平成11(1999)年3月～平成11(1999)年7月)</p> <p>ケンブリッジ大学 生化学科 文部省在外研究員 (平成11(1999)年7月～平成11(1999)年12月)</p> <p>佐賀大学 農学部 教授 (平成14(2002)年5月～令和3(2021)年3月)</p> <p>鹿児島大学大学院 連合農学研究科 教授併任 (平成14(2002)年5月～令和3(2021)年3月)</p> <p>佐賀大学 総合分析実験センター センター長併任 (平成15(2003)年4月～平成15(2003)年9月)</p> <p>佐賀大学 総合分析実験センター センター長併任 (平成18(2006)年4月～平成20(2008)年3月)</p> <p>佐賀大学 農学部長、農学研究科長併任 (平成25(2013)年4月～平成29(2017)年3月)</p> <p>佐賀大学 名誉教授 (令和3(2021)年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科 教授 (令和3(2021)年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (令和3(2021)年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部長 (令和6(2024)年4月～現在に至る)</p>	
免 許 資 格 等	<ul style="list-style-type: none"> ・第一種放射線取扱主任者免状 ・日本スポーツ協会公認トライアスロンコーチ1 	
特 許 等	<ul style="list-style-type: none"> ・低温アルカリプロテアーゼ、これを生産する微生物及び当該アルカリプロテアーゼの製造法 発明者：渡邊啓一、佐伯勝久、森 啓、小林 徹、伊藤 進 特許番号：特開平8-322562号(平成8(1996)年) ・低温至適プロテアーゼ、これを生産する微生物及び当該プロテアーゼの製造法 発明者：高岩美喜雄、奥田光美、小林 徹、伊藤 進、渡邊啓一 特許番号：特開平8-322564号(平成8(1996)年) ・低温プロテアーゼ、これを生産する微生物、この製造法及びこれを用いる食肉軟化法 発明者：桜井葉子、佐伯勝久、森 啓、滝川博文、渡邊啓一 特許番号：特開平9-206075号(平成9(1997)年) ・納豆菌由来のプロテアーゼの精製、およびそれに基づく該酵素の結晶化 発明者：渡邊啓一、本島浩之、牛嶋春佳、淵田直樹、黒川 彩、梶原貴之 特許番号：特開2012-170352号(平成23(2011)年) 	

教育上の業績	<p>○九州大学農学部助手として、学士、修士、博士の教育に携わった。</p> <p>○佐賀大学農学部、大学院農学研究科および鹿児島大学大学院連合農学研究科にて、多くの学士、修士、博士を輩出した。</p> <p>○佐賀大学農学部長、農学研究科長として、学部と大学院の教育システムの改組構築に携わった。</p>
---------------	---

【教育方法の実践例等】	
	<p>○ネット授業の展開 (平成 14(2002)年 10 月～令和 3(2021)年 3 月) 佐賀大学ネット授業 (くらしの中の生命科学) で「生命をつかさどるタンパク質」についての講義の動画を収録し、後期の全学教育科目として開講した。</p> <p>○コンピューターグラフィックスを活用した授業 (平成 14(2002)年 4 月～令和 3(2021)年 3 月) 佐賀大学において、コンピューター接続プロジェクトを活用し生体分子動画ソフトやビデオファイルを用いて、生体分子の構造と機能の関係について視覚的に理解を深め、興味を持てるよう取り組んだ。</p> <p>○アクティブラーニング導入 (平成 28 (2016)年 4 月～令和 3(2021)年 3 月) 佐賀大学における卒業研究では、学生が自ら主体となって、研究テーマ方向性を定め、研究を進めていけるように指導した。一般の授業においては、学生が自ら課題に取り組んだり、授業の予習復習を行ったりして能動的に学習できるように指導した。</p> <p>○オンライン授業の展開 (令和 2(2020)年 4 月～令和 3(2021)年 3 月) 佐賀大学において、授業をオンデマンド (資料または動画配信) 型と同時中継型を組み合わせて実施し、定期試験も、同時中継型のオンラインで実施した。</p>
【作成した教材等】	
	<p>1. 酵素の精製と酵素学的性質を理解するためのコイ骨格筋を利用した教材 (平成 4(1992)年 9 月) (概要) 酵素の精製と酵素学的な性質調べる実験法を学生が理解するために、コイの骨格筋を材料として、乳酸デヒドロゲナーゼの精製と諸性質を調べる教材を作成した。</p> <p>2. 溶菌酵素、蛋白質分解酵素の実験教材 (平成 14(2002)年 11 月) (概要) 溶菌酵素による細菌の溶解、蛋白質分解酵素によるカゼイン蛋白質の分解を学生が簡単に体験し、理解できる教材を作成した。</p> <p>3. 各授業の講義動画製作 (令和 2(2020)年 4 月～令和 3(2021)年 3 月) (概要) オンライン授業実施に向けて、各担当授業の講義動画を作成した。</p>
主な研究活動	【著書】
	<p>1. 「バイオテクノロジー 生化学から物質生産へ」 (共著) 第 3 章. 3. ヒマ種子毒タンパク質リシン A 鎖の構造と活性. (船津軍喜、渡辺啓一), pp.181-188. 学会出版センター (昭和 60(1985)年 4 月) (概要) ヒマ種子中に含まれる毒タンパク質リシンは、タンパク質合成を阻害する A 鎖と細胞表面の糖鎖レセプターに結合する B 鎖が 1 個の S-S 結合で結ばれたヘテロダイマー構造を有する。リシンの毒性の本体である A 鎖の構造とリボソーム不活化活性の関係についての研究成果をまとめた。</p>
【学術論文】	
	<p>1. Expression, purification, and characterization of cold-adapted inorganic pyrophosphatase from psychrophilic <i>Shewanella</i> sp. AS-11 (共著) 共著者 : E.L. Ginting, S. Iwasaki, C. Maeganeku, H. Motoshima and <u>K. Watanabe</u> Prep. Biochem. Biotechnol., 44(5): 480-492 (平成 26(2014)年) (概要) 無機ピロホスファターゼは、2 価の金属イオン存在下で活性化され、無機ピロリン酸を無機リン酸に加水分解し、生物のエネルギー代謝に必須の酵素である。ここでは、南極産好冷細菌 <i>Shewanella</i> sp. AS-11 由来の無機ピロホスファターゼ (Sh-PPase) をクローニング、発現、精製し、その特性を明らかにした。Sh-PPase は、サブユニット分子量 34 kDa の二量体で、ファミリー II 酵素であり、活性に Mg²⁺ よりも Mn²⁺ を優先的に利用した。Sh-PPase の活性、温度依存性、熱安定性などの特性は、二価金属イオンの影響を受け、低温適応特性を得るためには、マンガンイオンが必要であることが分った。</p>

2. Functional characteristics of inorganic pyrophosphatase from psychrotroph *Shewanella* sp. AS-11, upon activation by various divalent cations (共著)

共著者 : E.L. Ginting, C. Maeganeku, H. Motoshima and K. Watanabe
 Asian J. Chem., 26(2): 611-616 (平成 26(2014)年)

(概要)

様々な 2 価金属イオンが南極産好冷細菌 *Shewanella* sp. AS-11 由来の無機ピロホスファターゼ (Sh-PPase) に及ぼす影響を調べた結果、 Co^{2+} 、 Mn^{2+} 、 Zn^{2+} が酵素を著しく活性化した。これらの金属イオンは、 k_{cat} を増加させ、 K_m には影響しなかったことから、基質結合を変えずに触媒反応速度を増加させることが分かった。 Mn^{2+} 活性化 Sh-PPase の至適温度は最も低く 5°C で、 Zn^{2+} 、 Co^{2+} 、 Mg^{2+} 活性化酵素の至適温度はそれぞれ 20°C 、 30°C 、 40°C であった。 Co^{2+} または Mn^{2+} 活性化酵素は 40°C まで安定で、 Zn^{2+} 活性化酵素は 50°C まで安定であった。以上の結果より、2 価金属イオンは Sh-PPase の触媒効率、温度依存性、熱安定性に著しい影響を与え、低温適応には、 Mn^{2+} または Co^{2+} が必要であることが明らかになった。

3. Spectroscopic analyses of manganese ions effects on the conformational changes of inorganic pyrophosphatase from psychrophilic *Shewanella* sp. AS-11 (共著)

共著者 : Elvy Like Ginting, Chihiro Maeganeku, Hiroyuki Motoshima and Keiichi Watanabe
 The Protein Journal, 33(1): 11-17 (平成 26(2014)年)

(概要)

好冷細菌 *Shewanella* sp. AS-11 由来の無機ピロホスファターゼ (Sh-PPase) が低温環境下で機能するためには Mn^{2+} が必要である。 Mn^{2+} 活性化 Sh-PPase の機能特性は、酵素分子のコンフォメーション変化に関係している可能性がある。本研究では、 Mn^{2+} 活性化に伴う酵素の構造変化を、内在性 Trp 残基の蛍光分光分析、1-アニリノ-8-ナフタレンスルホン酸蛍光分析、円偏光二色性分光分析により解析した。 Mn^{2+} による活性化は、Trp 残基の柔軟性と酵素の二次構造に影響を与えなかったが、Trp 残基周辺のマイクロ環境と酵素分子表面は、より親水的になった。これらの結果は、 Mn^{2+} による活性化が酵素分子のコンフォメーション変化をもたらすことを示している。

4. Cold adaptation: Structural and functional characterizations of psychrophilic and mesophilic acetate kinase (共著)

共著者 : Md. Abul Kashem Tang, Hiroyuki Motoshima and Keiichi Watanabe
 The Protein Journal, 33(4): 313-322 (平成 26(2014)年)

(概要)

酢酸キナーゼは、ATP から酢酸へのマグネシウム依存的な可逆的リン酸基転移を触媒し、アセチルリン酸と ADP を形成する。本研究では、酵素の低温適応について調査するために、好冷細菌 *Shewanella* sp. AS-11 (SAK) および大腸菌 (EAK) 由来の組換え酢酸キナーゼを、発現・精製し、構造的・機能的性質を比較した。SAK は、EAK と比較して至適温度が低温側にシフトしており、熱安定性低かった。すなわち、SAK は低温適応型酵素であり、EAK よりも酢酸に対する親和性が高いことが明らかになった。アセチルリン酸と ADP 形成方向では、酢酸に対する触媒効率 (k_{cat}/K_m) は 10°C で SAK が EAK より 8 倍高かった。SAK/EAK の活性比は、前進反応、後退反応ともに温度の低下とともに増加し、SAK の活性化エネルギー、エンタルピーおよびエントロピーは、EAK よりも低かった。SAK のモデル構造は、EAK と比較して塩橋と陽イオン- π 相互作用の数が有意に減少していた。これらの結果は、SAK の分子内静電相互作用の弱まりが、より柔軟な構造に関与していることを示唆しており、これが低温適応の原因であると考えられる。

5. Nucleoside diphosphate kinase from psychrophilic *Pseudoalteromonas* sp. AS-131 isolated from Antarctic Ocean (共著)

共著者 : Yasushi Yonezawa¹, Aiko Nagayama, Hiroko Tokunaga, Matsujiro Ishibashi, Shigeki Arai, Ryota Kuroki, Keiichi Watanabe, Tsutomu Arakawa and Masao Tokunaga
 The Protein Journal, 34(4): 275-283 (平成 27(2015)年)

(概要)

南極海から分離された好冷細菌 *Pseudoalteromonas* sp. AS-131 由来ヌクレオシド二リン酸キナーゼ (ASNDK) 遺伝子を大腸菌で発現させ、精製した。緑膿菌から単離された中温性 NDK と比較して、ASNDK は非常に熱変性しやすい性質を示した。酵素活性の至適温度は 30°C 低く、熱安定性は大幅に低下し (T_m 値は 38°C 低い)、 K_m は 4 倍高く、反応温度を 20°C から 37°C に上げると k_{cat}/K_m は 0.4 倍低下した。ASNDK のサブユニット構造は、NDK と同様に二量体であることが示唆された。

6. Parameterization of G-93 isoprene emission formula for tropical trees *Casuarina equisetifolia* and *Ficus septica* (共著)

共著者 : Ishmael Mutanda, Masashi Inafuku, Hironori Iwasaki, Seikoh Saitoh, Masakazu Fukuta, Keiichi Watanabe and Hirosuke Oku
 Atmospheric Environment, 141: 287-296 (平成 28(2016)年)

(概要)

熱帯樹木は、イソプレンの大気中への排出量の大部分を占めている。Guenther 1993 (G-93) モデルは、陸上植物の葉によるイソプレン排出を予測するためのアルゴリズムとして最も広く使用されている。熱帯地域における G-93 モデルの性能を向上させるために、熱帯樹木の *Casuarina equisetifolia* と *Ficus septica* の屋外における日周葉スケール観測を実施した。温度と光変数の G-93 パラメータを、「ピンポン」最適化と名付けたベストフィットの慣行を用いて、相互にステップ・バイ・ステップで繰り返し最適化する手法を開発した。最適化した公式は、熱帯樹木からのエミッション・プロファイルの高照度および高温応答の捕捉を大幅に改善する一方、ポプラの樹種についても良好な結果を示した。G-93 式をパラメータ化することで、熱帯樹木 *C. equisetifolia* と *F. septica* の日周イソプレン放出量の予測性能が大幅に向上し、既定の G-93 式では 73~77% で説明されていた変動の 81~96% を説明できるようになった。我々は、熱帯生態系からの地域的な排出量をより正確に予測するために、G-93 モデルを最適化する必要があることを提案する。

7. Temperature controls on the basal emission rate of isoprene in a tropical tree *Ficus septica*: exploring molecular regulatory mechanisms (共著)

共著者: Ishmael Mutanda, Masashi Inafuku, Seikoh Saitoh, Hironori Iwasaki, Masakazu Fukuta, Keiichi Watanabe, Hirotsuke Oku

Plant, Cell & Environment, 39(10): 2260–2275 (平成 28(2016)年)

(概要)

植物からのイソプレン放出は、短期的にも長期的にも環境温度に非常に敏感である。30°C から 12°C まで、1 日の気温を下げると、*F. septica* は 12°C でイソプレン放出を完全に停止し、30°C に戻して 2 日目には回復した。ここでは、2-C-メチル-D-エリスリトール 4-リン酸 (MEP) 経路のトランスクリプトームデータ、遺伝子発現、代謝物プールを総合的に解析することで、環境温度に応答したイソプレン放出制御について調べた。MEP 経路の遺伝子と代謝物の動態は、基質レベルの制限が、基礎エミッションの主要な制御因子であることを支持しなかったが、トランスクリプトームデータ、ネットワーク推論、および IspS プロモーター上の推定制御要素は、概日リズムと植物ホルモンシグナル伝達プロセスによる IspS 遺伝子の転写制御を示唆した。これらの経路に関与する 29 遺伝子の発現レベルを定量的リアルタイム PCR 法で調べた。数時間から数日の時間スケールでの基礎イソプレン放出に対する温度制御は、概日時計による同調のもとで、植物ホルモンを介した IspS 遺伝子の転写調節によって制御されていることを提唱する。

8. *Arabidopsis* LBP/BPI related-1 and -2 bind to LPS directly and regulate PR1 expression (共著)

共著者: Sayaka Iizasa, Eiichi Iizasa, Sawako Matsuzaki, Hiroyuki Tanaka, Yutaka Kodama, Keiichi Watanabe and Yukio Nagano

Scientific Reports, 6: 27527 (平成 28(2016)年)

(概要)

リポ多糖 (LPS) はグラム陰性菌の外膜の主要構成成分であり、動植物の免疫反応を引き起こす病原体関連分子パターンとして働く。LPS に結合し、哺乳類の免疫に重要な役割を果たす LPS 結合タンパク質 (LBP) や殺菌性透過性増加タンパク質 (BPI) はよく研究されている。シロイヌナズナゲノムには LBP/BPI 関連タンパク質をコードする 2 つの遺伝子 *AtLBP/BPI related-1* (*AtLBR-1*) と *AtLBP/BPI related-2* (*AtLBR-2*) が存在している。これらのタンパク質を大腸菌で発現させると、N 末端ドメインが細胞壁由来の LPS と共精製され、*AtLBR* はラフ型とスムーズ型の両方の LPS に直接結合した。また、LPS 処理した *atlbr* 変異体シロイヌナズナは、防御関連遺伝子 *pathogenesis-related 1* (*PR1*) の誘導が著しく遅れるが、他の *PR* 遺伝子は誘導されなかった。さらに、LPS 処理した *atlbr* 変異体では、活性酸素種 (ROS) の発生に異常が見られた。これらの結果は、哺乳類の LBP や BPI と同様に、*AtLBR* も植物の LPS 誘導免疫応答に重要な役割を果たしていることを示している。

9. A microfluidic-based protein crystallization method in 10 micrometer-sized crystallization space (共著)

共著者: Masatoshi Maeki, Shohei Yamazaki, Ashtamurthy S. Pawate, Akihiko Ishida, Hirofumi Tani, Kenichi Yamashita, Masakazu Sugishima, Keiichi Watanabe, Manabu Tokeshi, Paul J. A. Kenis and Masaya Miyazak

CrystEngComm, 18: 7722-7727 (平成 28(2016)年)

(概要)

タンパク質の結晶化とそれに続く X 線回折による立体構造解析は、タンパク質の生物学的機能の解明や効果的な合理的創薬設計のために必要である。ここでは、X 線分析に適したタンパク質単結晶を選択的に形成するために、高さ 10 μm と 50 μm の結晶化チャンバーを持つチップを用いた簡単なマイクロ流体法を実証した。リゾチーム、*Pseudoalteromonas* sp. AS-131 由来グルコキナーゼ (PsGK)、NADPH-シトクロム P450 酸化還元酵素-ヘムオキシゲナーゼ複合体の 3 種類のタンパク質を結晶化した。タンパク質の種類にかかわらず、結晶成長方向が結晶化室の高さに依存することを実証した。この結果は、閉じ込められた微小空間がタンパク質分子を特定の結晶面に付着させ、各結晶面の成長速度に影響を与えていること

を示唆している。このマイクロ流体ベースのタンパク質結晶化法は、針状タンパク質結晶の集合体から X 線分析に適したタンパク質単結晶を形成することができる。

10. Transcriptome analysis reveals key roles of AtLBR-2 in LPS-induced defense responses in plants (共著)

共著者 : Sayaka Iizasa, Eiichi Iizasa, Keiichi Watanabe and Yukio Nagano
BMC Genomics, 18: 995 (平成 29(2017)年)

(概要)

グラム陰性細菌由来のリポ多糖 (LPS) は、動物や植物において自然免疫応答を引き起こす。シロイヌナズナの AtLBR-2 は緑膿菌由来の LPS (pLPS) に直接結合し、pLPS が誘導する防御応答、例えば病原体関連 1 (PR1) の発現や活性酸素種 (ROS) の産生を制御する。本研究では、RNA-Seq 技術を用いて、野生型 (WT) および atlbr-2 変異体シロイヌナズナにおいて、pLPS によるトランスクリプトーム変化を調べた。65 の AtLBR-2 依存性発現上昇遺伝子は、いくつかの防御関連 GO タームのエンリッチメントに重要であるようである。さらに、AtLBR-2 は防御関連遺伝子のアップレギュレーションや、LPS を含む病原体に対する防御に関与する SA シグナル伝達経路に不可欠なキー分子である可能性がある。

11. Molecular characterization of mimosinase and cystathionine β -lyase in the Mimosoideae subfamily member *Mimosa pudica* (共著)

共著者 : Shigeki Oogai, Masakazu Fukuta, Keiichi Watanabe, Masashi Inafuku and Hirotsuke Oku
Journal of Plant Research, 132: 667–680 (平成 31・令和元(2019)年)

(概要)

ミモシナーゼとシスタチオン β -リアーゼ (CBL) の遺伝子をオジギソウ (*Mimosa pudica*) からクローニングし、両者の分子間関係を初めて調べた。ミモシナーゼはミモシンとシスタチオンの両方を分解し、CBL はシスタチオンのみを基質とした。活性部位アミノ酸残基の比較、分子動力学シミュレーション、変異体解析の結果より、ミモシナーゼが CBL から進化した過程を考察することができた。

12. X-ray crystallography and electron paramagnetic resonance spectroscopy reveal active site rearrangement of cold-adapted inorganic pyrophosphatase (共著)

共著者 : Masaki Horitani¹, Kazuki Kusubayashi¹, Kyoka Oshima¹, Akane Yato,
Hiroshi Sugimoto and Keiichi Watanabe
Scientific Reports. 10: 4368 (令和 2(2020)年)

(概要)

Mn で活性化した好冷菌由来の無機ピロホスファターゼは、5°C で最適活性を示す。基質なしと有りの状態で、X 線結晶構造解析と電子常磁性共鳴測定を行った結果、本酵素が反応中に活性部位の再配置を起こすことが明らかとなり、その「ゆるい」構造が低温活性に重要な役割を果たしていることが示唆された。

13. Administration of Jerusalem artichoke reduces the postprandial plasma glucose and glucose-dependent insulintropic polypeptide (GIP) concentrations in humans (共著)

共著者 : Takahashi H., Nakajima A., Matsumoto Y., Mori H., Inoue K., Yamanouchi H., Tanaka
K., Tomiga Y., Miyahara M., Yada T., Iba Y., Matsuda Y., Watanabe K., & Anzai K.
Food & Nutrition Research. 66: 7870 (令和 4(2022)年)

(概要)

食後血糖値とインクレチンホルモン濃度へのキクイモ摂取の影響を調べた結果、キクイモは食後のグルコースと GIP 濃度を有意に減少させることが示された。その効果は量依存的であり、キクイモを少なくとも 100 g 摂取することが必要であった。これらの結果は、キクイモ摂取が、糖尿病前症患者および健康人の食後の血糖管理に有用であることを示唆している。

14. Repression effects of hydrolysates from hen-egg proteins on amyloid fibril formation (共著)

共著者 : Yukiko Muroi, Izumi Aburaya, Takuro Shima, Mitsuharu Matsumoto, Ryo Sasahara,
Takahisa Suzuki, Keiichi Watanabe, Koji Wada and Yasushi Sugimoto
The Journal of Poultry Science. 59: 384-391, (令和 4(2022)年)

(概要)

鶏卵タンパク質のプロテアーゼ消化物 (ペプチド) がアミロイド線維の形成を抑制する効果を調べた。その結果、卵白とカラザ由来のペプチドがアミロイド線維形成タンパク質 (HEWL) に対して強い抑制効果を示した。また、これらのペプチドはヒトリゾチームとヒトアミロイド β ペプチド 1-42 の線維形成も抑制し、2 価の金属イオンによるアミロイド線維形成の促進も阻止した。これらの発見は、鶏卵由来のペプチドがアミロイド病態の予防や治療に役立つ可能性を示している。

15. Stability of hen egg-white lysozyme during embryonic development (共著)

共著者 : Yukiko Muroi, Izumi Aburaya, Yuki Kiyokawa, Keiichi Watanabe, Koji Wada, Yoshito Abe,

and Yasushi Sugimoto

Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry, 86, 353–361, (令和4(2022)年)

(概要)

発生過程で卵白タンパク質リゾチームの機能が維持されているかを調べた結果、リゾチームは、*Micrococcus lysodeikticus* に対する酵素活性および溶菌活性、*Staphylococcus aureus* に対する増殖阻害能を有することが認められた。また、胚発生が進行するにつれて、リゾチームは基質親和性と反応速度の変化、変性温度のわずかな低下、および表面疎水性の増加を示した。さらに、トリプトファン環境にも変化が認められた。これらの結果は、リゾチームが発生後期まで酵素活性と抗菌活性を維持しつつ、一部の構造変化が生じていることを示している。

16. The complete chloroplast genome sequence of *Lithospermum erythrorhizon*: Insights into the phylogenetic relationship among *Boraginaceae* species and the maternal lineages of purple gromwells (共著)

共著者: Takahiro Okada, Keiichi Watanabe

Plant Gene, 37, 100447, (令和6(2024)年)

(概要)

薬用植物ムラサキ (*Lithospermum erythrorhizon*) は、かつて、日本各地の山地草原に広く自生し、その根は伝統的に染料や薬用に用いられてきた。しかし、過剰な収穫や自然環境の変化により、この種の個体数は過去数十年間で著しく減少している。外国産の近縁種との交雑も懸念されており、国内品種を保護するためには、その純系を正確に表すゲノム情報を得ることが重要である。本研究では、日本産ムラサキの葉緑体ゲノムを完全解読した。DNA長は150,478 bpで、80のタンパク質コード遺伝子、4つのリボソームRNA遺伝子、29の転移RNA遺伝子がコードされていた。中国品種の葉緑体ゲノムデータと比較したところ、70 bpの挿入/欠失が同定され、両国品種の母系が明らかに異なることが示された。

【学会発表等】

1. 「高オレイン酸系統大豆を用いた豆腐の構造特性における脂質の影響」

(口頭発表)

共同発表者: 城野愛巳、丸岡早紀、江口日向子、穴井豊昭、渡邊啓一

(主催等) 日本農芸化学会

(開催場所) 福岡 (オンライン)

(開催年月) 令和2(2020)年3月

(概要)

分離大豆タンパク質に高オレイン酸系統大豆油または通常の大豆油を添加し、豆乳・豆腐を作成し、走査型電子顕微鏡で観察した。その結果、高オレイン酸大豆油の方がより高い密度の網目構造をした豆腐を形成することが明らかになった。

2. 「RNA-Seq解析を利用したムラサキにおける栄養依存的なシコニン産生抑制機序の推定」

(口頭発表)

共同発表者: 岡田貴裕、松田紗良、丸岡早紀、松本雄一、末岡昭宣、渡邊啓一

(主催等) 日本農芸化学会

(開催場所) 仙台 (オンライン)

(開催年月) 令和3(2021)年3月

(概要)

ムラサキ根が産生する色素シコニンの蓄積は、栄養過多で阻害される。そのメカニズムを明らかにするために、網羅的なRNA-Seq比較発現解析を行った。

3. 「ムラサキ未利用部分の免疫調節機能の探索」(ポスター発表)

共同発表者: 岡田貴裕、上原未希、末岡昭宣、渡邊啓一

(主催等) 日本薬学会

(開催場所) 広島 (オンライン)

(開催年月) 令和3(2021)年3月

(概要)

ムラサキ根以外に未知な機能性を見いだすことを目的とし、花および葉エキスの免疫調節機能を検討した。その結果、葉の抽出物に免疫調節機能があることが確認できた。

4. 「ゲノム再シーケンシング解析によるムラサキ国内栽培品種・海外品種の比較」

(口頭発表)

共同発表者: 岡田貴裕、渡邊啓一

(主催等) 日本農芸化学会

(開催場所) 京都 (オンライン)

(開催年月) 令和4(2022)年3月

	<p>(概要) 海外のムラサキ保存株から構築された既報のリファレンス配列をもとに、在来株の全ゲノム再シーケンシング解析を行った結果、海外株と在来株とはゲノム DNA に相当な差異があることが判明した。</p>
	<p>5. 「結晶構造解析と組み合わせた X 線吸収分光法による低温適応無機ピロホスファターゼの触媒反応機構の解明」 (口頭発表) 共同発表者：丸岡早紀、馬込栄輔、瀬戸山寛之、河本正秀、堀谷正樹、<u>渡邊啓一</u> (主催等) 日本農芸化学会 (開催場所) 京都 (オンライン) (開催年月) 令和 4(2022)年 3 月</p>
	<p>(概要) 結晶構造解析と組み合わせた X 線吸収分光法により、低温適応無機ピロホスファターゼの活性中心 Zn(II)周辺の微細構造解析を行った結果、触媒反応機構として、2 個の活性中心金属を架橋する水の O 原子がオキソ型 (O²⁻) でリン原子を求核攻撃し、加水分解反応が進むというユニークな触媒反応機構が示唆された。</p>
	<p>6. 「EXAFS study of cold-adapted family II dinuclear metal inorganic pyrophosphatase suggests a unique catalytic mechanism」 (口頭発表) 共同発表者：Saki Maruoka, Eisuke Magome, Hiroyuki Setoyama, Masahide Kawamoto, Masaki Horitani, <u>Keiichi Watanabe</u> (主催等) The International X-ray Absorption Society (開催場所) Sydney (オンライン) (開催年月) 令和 4(2022)年 7 月</p>
	<p>(概要) 低温適応無機ピロホスファターゼの EXAFS 解析により、2 個の活性中心金属を架橋する水の O 原子が、オキソ型 (O²⁻) でリン原子を求核攻撃するというユニークな触媒反応機構が示唆された。</p>
	<p>7. 「アミロイド繊維形成における鶏卵タンパク質加水分解物の抑制効果」 (口頭発表) 共同発表者：油屋和、室井由起子、杉元康志、<u>渡邊啓一</u>、和田浩二 (主催等) 日本食品科学工学会 (開催場所) 東京 (オンライン) (開催年月) 令和 4(2022)年 8 月</p>
	<p>(概要) ヒトリゾチーム (h-Lz) およびヒトアミロイドβペプチド 1-42 (Aβ1-42) の繊維形成に対してもカラザペプチドは強い抑制効果を示した。さらに、アミロイド繊維形成を促進する 2 価の金属イオンの効果を減少させる効果を持つことも確認された。</p>
	<p>8. 「長野県原産および中国産ムラサキの比較プラストーム解析」 (口頭発表) 共同発表者：岡田貴裕、<u>渡邊啓一</u> (主催等) 日本農芸化学会 (開催場所) 広島 (オンライン) (開催年月) 令和 5(2023)年 3 月</p>
	<p>(概要) 長野県原産および中国産ムラサキの比較において、葉緑体ゲノムの 44 箇所にも構造バリエーションを見いだした。特に顕著な差異として、<i>rbcl-accD</i> 遺伝子間領域に比較的大きな In/Del を見いだした。この構造バリエーションは、解析対象の母系が明確に異なることを示している。</p>
	<p>9. 「葉緑体ゲノム情報に基づくムラサキ在来種の母系の理解」 (口頭発表) 共同発表者：岡田貴裕、矢崎一史、<u>渡邊啓一</u> (主催等) 日本農芸化学会 (開催場所) 東京 (開催年月) 令和 6(2024)年 3 月</p>
	<p>(概要) 日本各地に生息するムラサキの葉緑体ゲノムについて次世代シーケンシング解析を行い、それらの構造バリエーションに基づき、在来種の母系情報を検討した結果、大きく 2 系統に分かれることが明らかになった。</p>
	<p>10. 「豆腐の微細構造とゲル強度に及ぼすトリグリセリドの脂肪酸組成の影響」 (口頭発表) 共同発表者：油屋和、丸岡早紀、室井由起子、杉元康志、<u>渡邊啓一</u> (主催等) 日本農芸化学会 (開催場所) 東京 (開催年月) 令和 6(2024)年 3 月</p>
	<p>(概要)</p>

	<p>分離大豆タンパク質 (SPI) に大豆油またはオリーブオイルを添加し乳化後、硫酸カルシウムを添加して豆腐を作成し、破断強度試験を行った。その結果、オリーブオイル豆腐は、大豆油豆腐よりゲル強度が高く、弾力があることが分った。このオリーブオイル豆腐の物性は、高オレイン酸系統大豆油豆腐が通常の大豆油豆腐より密度の高い微細構造を有していたという結果と一致しており、トリグリセリド中の高いオレイン酸含量 (80%) に起因することが示唆された。</p>
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 佐賀県農政審議会 会長 (平成 25(2013)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月) • 一般社団法人 ジャパン・コスメティックセンター 理事 (平成 25(2013)年 11 月～平成 29(2017)年 5 月) • 佐賀・福岡地域機能性農産物推進協議会 会長 (平成 28(2016)年 2 月～現在に至る)
<p>所属学会</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 日本生化学会 会員 (昭和 55(1980)年 4 月～現在に至る) <li style="padding-left: 20px;">同評議員 (平成 25(2013)年 4 月～現在に至る) <li style="padding-left: 20px;">同九州支部長 (平成 25(2013)年 4 月～平成 26(2014)年 3 月) • 日本農芸化学会 会員 (昭和 55(1980)年 4 月～現在に至る) <li style="padding-left: 20px;">同西日本支部参与 (平成 15(2003)年 4 月～現在に至る) • 薬用植物栽培研究会第 3 回研究総会大会長 (令和元(2019)年 12 月～令和 3(2021)年 12 月) • 日本生物物理学会 会員 (令和 3(2021)年 4 月～現在に至る) • 日本 XAFS 研究会 会員 (令和 3(2021)年 4 月～現在に至る) • The Protein Society (USA) 会員 (令和 6(2024)年 4 月～現在に至る)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・コンピュータリテラシーⅠ、コンピュータリテラシーⅡ ・栄養情報処理演習Ⅰ、栄養情報処理演習Ⅱ
専 門 分 野	■ 制御工学 ■ 情報科学
最 終 学 歴	九州工業大学大学院 情報工学研究科 情報科学専攻 博士後期課程退学
学 位	修士 (情報工学)
職 歴	東筑紫短期大学 生活文化学科 講師 (平成 11(1999)年 4 月～平成 13(2001)年 3 月) 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 (平成 13(2001)年 4 月～平成 19(2007)年 3 月) 九州栄養福祉大学食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 (平成 19(2007)年 4 月～平成 30(2018)年 3 月) 九州栄養福祉大学食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (平成 30(2018)年 4 月～現在に至る) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 情報管理センター 主事 (平成 15(2003)年 4 月～平成 28(2016)年 3 月) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 情報管理センター 副センター長 (平成 28(2016)年 4 月～平成 30(2018)年 3 月) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 情報管理センター センター長 (平成 30(2018)年 4 月～現在に至る) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学図書館長 (令和 2(2020)年 4 月～現在に至る)
教育上の業績	○個人所有のパソコンを管理する上で必要となる具体的内容、手順について解説したオリジナルテキスト「パソコン管理入門」を作成した。 「コンピュータリテラシーⅠ」の教材として利用されるとともに、希望学生に随時配布されている。(平成 18(2006)年～現在に至る) ○電子メール教育用テキストとして「Web メール入門」を作成した。学生および教職員に配布され、利用されている。(平成 23(2011)年～現在に至る) ○オンラインストレージ教育用テキストとして「クラウドドライブ入門」を作成した。学生および教職員に配布され、利用されている。(令和 2(2020)年～現在に至る) ○本学ならびに併設校 東筑紫短期大学におけるオンライン授業システムの整備に、情報管理センター職員と共同で取り組んだ。本システムは、教員が通常授業と同形式で実施した授業を Web カメラで撮影して配信するシステムと、学生からの質問・フィードバックを受け付けるチャットシステムからなる。システムの利用方法を「オンライン授業システム簡易マニュアル」「オンライン授業受講の手引き」としてまとめ、教職員および学生に配布した。学生はほぼすべての授業を同じ要領で受講することができている。(令和 2(2020)年)
主な研究活動	【著書】 「情報科学 改訂版」(西日本法規出版、平成 17(2005)年 12 月) (概要) 本書は、情報処理の入門者、初級システムアドミニストレータ試験の受験者、ならびに情報処理教育担当者を対象としたテキストである。従来の初級システムアドミニストレータ試験の出題分野に加え、(同試験でセキュリティ分野が重要視される以前より)「不正アクセス対策」「コンピュータウイルス対策」「暗号化技術」をはじめとするセキュリティ分野に大幅に紙面を割いて詳しく解説した先駆的な書籍である。改訂版では情報技術の発展に伴い古くなったと思われる部分の見直し、冗長と思われる記述や図表の見直しを行ったほか、「システム開発」に関する章の追加を行った。 (編者：山田啓一、分担執筆：山本浩貴、赤松貴文、佐々木彰治、福永良浩。執筆ページ：pp147-266)

	<p>「ITセミナー」(ふくろう出版、平成25(2013)年5月)</p> <p>(概要)</p> <p>本書は、文科系の大学生ならびにITパスポート試験の受験者を対象としたテキストである。ITパスポート試験は、情報技術の技術的な側面に加え、企業と法務、経営戦略、システム戦略、システム開発などに関する知識を問う試験であることから、本書は情報技術を仕事に役立てるという視点から、ITパスポート試験が対象とする範囲を網羅した内容となっている。</p> <p>(分担執筆：山田啓一、木下和也、福永良浩、赤松貴文、山本浩貴、坂本健成。執筆ページ：pp140-207)</p>
	<p>「マネジメントのためのICT基礎講座」(晃洋書房、平成27(2015)年4月)</p> <p>(概要)</p> <p>本書では、ITパスポート試験が対象とする情報技術の技術的な側面に加え、企業と法務、経営戦略、システム戦略、システム開発などに関する内容を網羅している。本書は、前著「ITセミナー」をさらに進化させたものであり、情報技術を仕事に役立てられるようにすることを目指し、ITパスポート試験の過去問題に加え、日商PC検定試験の類似問題も掲載している。</p> <p>(分担執筆：福永良浩、木下和也、赤松貴文、山本浩貴、坂本健成。執筆ページ：pp144-222)</p>
<p>【論文】</p>	
	<p>1. 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 11 —LEAF Bering-uClibc を用いたファイアウォールの構築—」 (東筑紫短期大学研究紀要 第45号、平成26(2014)年12月)</p> <p>(概要)</p> <p>本稿では、永らく本学および併設校 東筑紫短期大学におけるファイアウォールOSであったfloppyfwの開発停滞を受け、OSにLEAF Bering-uClibcを用いたファイアウォールの構築について述べている。LEAF Bering-uClibcは活発な開発が行われているOSであり、floppyfwと比較して、安全性、安定性、拡張性の高いファイアウォールを構築することができた。</p> <p>(萩原真人、赤松貴文：pp169-180。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
	<p>2. 「LEAF Bering-uClibc を用いたキャンパス間VPNの構築」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第11号、平成26(2014)年12月)</p> <p>(概要)</p> <p>本稿では、floppyfwの開発停滞を受け、OSにLEAF Bering-uClibcを用いたルータによるVPNについて述べている。専用線と比較すると安全性は劣るが、各拠点のISPを統一し、拠点間通信にインターネットを経由しないようにすることで、できる限りセキュアで高速な拠点間ネットワークを安価に実現することができた。(pp215-225。)</p>
	<p>3. 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 12 —ownCloud を用いたオンラインストレージの構築—」 (東筑紫短期大学研究紀要 第46号、平成27(2015)年12月)</p> <p>(概要)</p> <p>本稿では、教職員、学生の業務効率および作業効率の向上を図るため、ownCloudを用いたオンラインストレージサービスの構築について述べている。ownCloudは、商用のオンラインストレージサービスと同等の機能を有しており、Webブラウザをはじめ、デスクトップクライアント、スマートフォンからアクセス可能である。ownCloudとLDAPサーバを連携させることで、本学教職員、学生は、その他の学内サービスと同じユーザID、パスワードでオンラインストレージサービスを利用できるようになった。</p> <p>(萩原真人、赤松貴文：pp147-160。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
	<p>4. 「IPカメラを用いたリモート監視システムの構築 2」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第12号、平成27(2015)年12月)</p> <p>(概要)</p> <p>本稿では、リモート監視システムを低コストで構築することを目標に、複数のIPカメラからキャプチャ画像を取得して表示する集中監視画面の構築、および特定のIPカメラのリアルタイム映像を取得して表示するライブ映像画面の構築を行った。異なる種類のIPカメラが混在することを想定したデータ構造とすることで、IPカメラの増設に対応可能な柔軟性のあるシステムとなった。(pp219-227。)</p>

	<p>5. 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 13 –LEAF Bering-uClibc 用ソフトウェアパッケージのビルド環境の構築–」 (東筑紫短期大学研究紀要 第 47 号、平成 28(2016)年 12 月)</p>
	<p>(概要) 本稿では、本学および併設校 東筑紫短期大学のファイアウォール OS に採用している LEAF Bering-uClibc 上で動作するソフトウェアパッケージのビルド環境の構築について述べている。LEAF Bering-uClibc 用パッケージが提供されていないソフトウェアについても、パッケージを独自にビルドすることで利用可能となり、LEAF Bering-uClibc により多くの機能を追加することができるようになった。 (萩原勇人、赤松貴文：pp9-20。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
	<p>6. 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 14 –LEAF Bering-uClibc 用ソフトウェアパッケージのビルド環境の構築 2–」 (東筑紫短期大学研究紀要 第 49 号、平成 30(2018)年 12 月)</p>
	<p>(概要) 本稿では、改めて LEAF Bering-uClibc 5 のソフトウェアパッケージのビルド環境の構築手順について述べている。これは、LEAF Bering-uClibc の開発主体がバージョン 6 に移行したことにより、前稿で述べた手順ではビルド環境を構築することができなくなったことによる。また、LEAF Bering-uClibc 用パッケージが提供されていない 2 つのソフトウェアについてパッケージのビルドを行い、LEAF Bering-uClibc の機能拡張を行った。 (萩原勇人、赤松貴文：pp163-177。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
	<p>7. 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 15 –Nextcloud を用いたセキュアなオンラインストレージ環境の構築–」 (東筑紫短期大学研究紀要 第 50 号、令和元(2019)年 12 月)</p>
	<p>(概要) 本稿では、九州栄養福祉大学および併設校 東筑紫短期大学の教職員と学生向けのオンラインストレージの実運用に向け、セキュアなオンラインストレージ環境の構築について述べている。ownCloud をベースとして開発された Nextcloud を用いることで、2 段階認証に対応したセキュアなオンラインストレージ環境を構築することが確認できた。 (萩原勇人、赤松貴文：pp209-226。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
	<p>8. 「オープンソース・ソフトウェア活用事例 16 –Xibo を用いたデジタルサイネージシステムの構築–」 (東筑紫短期大学研究紀要 第 50 号、令和 2(2020)年 12 月)</p>
	<p>(概要) 本稿では、従来の掲示板やポータルサイトの掲示機能などのプル型メディアによる情報発信を補完するために構築したプッシュ型メディアシステムであるデジタルサイネージシステムについて述べている。デジタルサイネージを利用することで、ダイナミックな掲示をすることが可能となった。 (萩原勇人、赤松貴文、長田裕之、下田健太郎：pp139-152。共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 研修会講師 (平成 17(2005)年 8 月) ・北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 研修会講師 (平成 18(2006)年 8 月) ・福岡市立粕屋東中学校 3 年生学年集会講師 (平成 19(2007)年 2 月) ・北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 研修会講師 (平成 19(2007)年 8 月) ・北九州市民カレッジ講師 (令和 3(2021)年 1 月) ・北九州市民カレッジ講師 (令和 5(2023)年 1 月)
<p>所属学会</p>	<p>計測自動制御学会 (平成 8(1996)年 7 月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>〔食物栄養学部 食物栄養学科〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒の栄養指導Ⅰ、児童・生徒の栄養指導Ⅱ ・栄養教育論実習Ⅰ ・栄養教育実習事前・事後指導 ・栄養教育実習 ・教職実践演習（栄養教諭） ・食健康センター活動 ・管理栄養士演習ⅠA、管理栄養士演習ⅠB
専 門 分 野	■教員養成専門分野（栄養教諭）
最 終 学 歴	山口女子大学（現：山口県立大学） 家政学部 食物栄養学科 卒業
学 位	学士（家政学）
職 歴	<p>田川郡糸田町立糸田小学校 技師 1986年4月～1995年3月</p> <p>田川郡赤池町立市場小学校 主任技師 1995年4月～2004年3月</p> <p>福岡県教育庁筑豊教育事務所 主任技師 2004年4月～2005年3月</p> <p>福岡県教育庁 教育振興部 スポーツ健康課 技術主査 2005年4月～2007年3月</p> <p>福岡県教育庁 教育振興部 体育スポーツ健康課 （課名変更）指導主事 2007年4月～2011年3月</p> <p>田川郡糸田町立糸田小学校 栄養教諭 2011年4月～2016年3月</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 2016年4月～2022年3月</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科長 教授 2022年4月～現在に至る</p>
教育上の業績	<p>○ 作成した教科書</p> <p>「よくわかる栄養教諭—食育の基礎知識— 第二版」(共著) 同文書院 2016年4月 編著 藤澤良知・芦川修貳・古畑公・田中弘之・田中延子 著 土谷政代・太田裕美子・白尾美佳・亀田明美・守田真里子・登坂三紀夫 山口蒼生子・梅垣敬三・小河原佳子・堤ちはる・原ゆみ・安倍ちか 12章3節 学校給食で伝えたい食文化 p267～270</p> <p>「栄養教諭のための教育実践演習・栄養教育実習ノート」(共著) 学建書院 2021年2月 監修 芦川修貳 編集代表 田中延子 編集 守田真里子・高田尚美 著 秋葉佳子・芦川修貳・安倍ちか・岩田雪子・内田良子・太田裕美子・岸根美絵・後藤純子 島村幸代・高田尚美・高橋和子・竹内佳代子・田中延子・田中広美・土谷政代・飛松佳子 中津井貴子・西内恵子・水島眞由美・守田真里子・山際昌枝 p23・24 p70～72</p>
主な研究活動	<p>【学術論文】</p> <p>1. 小学校高学年時の朝食時の食環境がストレス対処能力に及ぼす影響 (共同研究) 日本食育学会誌 第13巻 第3号 201-210 2019年7月 (概要) 太田雅規・梅木陽子・安倍ちか・江副貴子・浜谷小百合・沖田千代 小学校高学年時の朝食における欠食や孤食、共食といった食環境が、成人してからのSOCの形成に及ぼす影響等を調査分析することで、小児期における朝食時の家族の食事の重要性について検証した。</p> <p>2. 児童の食行動・食意識と心身の健康状態との関連性 (共同研究) 九州栄養福祉大学研究紀要第17号 2020年12月 (概要) 安倍ちか・沖田千代・梅木陽子・浜谷小百合・太田雅規 学校給食をはじめとする食に対する意識や家庭における食環境等が子供の心身の健康状態に及ぼす影響について究明し、今後の子供への食育に役立てることを目的とした。</p> <p>3. コロナウイルス感染症拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響： その1～生活面に着目して～ (共同研究) 九州栄養福祉大学研究紀要第18号 p71～p83 2021年12月</p>



(概要) 樋口綾子・安倍ちか

コロナ禍で学生がどのような生活を送り、不安を抱えているかなど、「研究その1」として生活面に着目して調査分析を行った。全体の約6割の学生が、「大学の学び」や「就職活動」に不安を感じていることが明らかとなった。

4. コロナウイルス感染症拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響：

その2～心身の健康状態に着目して～ (共同研究)

九州栄養福祉大学研究紀要第18号 p85～p97

2021年12月

(概要) 安倍ちか・樋口綾子

コロナ禍における学生の生活が心身の健康にどう影響を与えているのかを「研究その2」として、心身の健康状態に着目して分析を行った。

【学会発表】

1. 福岡食育推進事業が終わった後の食育の指標とした児童のSOC(首尾一貫感覚)の推移

(主催) 第7回日本食育学会

(開催場所) 福岡

(開催年月日) 2019年6月

(概要) 沖田千代 梅木陽子 安倍ちか 太田雅規

平成28年度文部科学省の事業「スーパー食育スクール事業(SSS)」で、児童の「意識化」「行動化」「習慣化」を促した食生活改善プログラムに取り組むことにより、SOC(首尾一貫感覚)は、「意識化」で有意な上昇を見せ、「意識化」が上昇した児童は行動化の改善が見られ一定の成果が認められた。さらに、SSS終了後から次年度の「つながる食育事業」の食育開始前のデータについてSOCを中心に解析した。

2. 食の自立をめざす生徒の育成～みんなでつなげる「ちっこ食育プログラム」

(主催) 第45回 福岡県栄養改善学会

(開催場所) 福岡

(開催年月日) 2019年10月

(概要) 丸山優子 梅木陽子 沖田千代 安倍ちか

学校を中心とし、関係職員、家庭、関係機関と連携した「ちっこ(筑後)食育プログラム」を実施し、望ましい食生活の意識を高め、食の自立をめざす生徒を育成する方策を検討した。

3. 学校給食における衛生管理手法の周知と食中毒発生の減少との関連性の検証～各種マニュアルの活用を中心に～

(主催) 第15回日本給食経営管理科学術総会 (示説発表)

(開催場所) 愛知県

(開催年月日) 2019年11月

(概要) 守田真里子 安倍ちか 太田裕美子 高田尚美 土谷政代 田中延子

学校給食における食中毒の件数は、平成9年度から激減しており、この背景には、文部科学省策定の「学校給食衛生管理の基準」や、科学的根拠に基づいた各種マニュアルにより衛生管理の向上を図ってきたことが影響していると考えられることから、本研究では各種マニュアルの活用や指導状況を検証するとともに、衛生管理における今後の課題について検討した。

4. 児童の食行動・食意識と心身の健康状態との関連性

(主催) 第8回日本食育学会総会・学術大会

(開催場所) 誌上発表

(開催年月日) 2020年5月

(概要) 安倍ちか 浜谷小百合 梅木陽子 沖田千代 太田雅規

子供たちの心身の不調については、児童の食行動や食意識等が不定愁訴の背景にあることが考えられることから、本研究では、学校給食に対する意識(好き・苦手)や家庭における食に関する会話の頻度等について心身の不調との関連性を中心に解析し、検討した。概要)

	<p>5. 学校給食における衛生管理手法の周知と食中毒発生の減少との関連性の検証～調理場運営(形態)方式等の相違から～ (主 催) 第67回日本栄養改善学会学術総会 (開催場所) 誌上発表 (開催年月日) 2020年9月 (概要) 太田裕美子 安倍ちか 高田尚美 土谷政代 守田真里子 田中延子 学校給食における食中毒防止の方策を探るため、調理場方式の相違から考えられる課題等について検討した。</p>
	<p>6. 教員の食育に関する研修体制等の現状と課題についての調査研究～教員の食育に関する研修の実施状況と食育推進との関連性について (主 催) 第9回日本食育学会学術大会 (開催場所) 誌上発表 (開催年月日) 2021年6月 (概要) 安倍ちか 内田良子 西内恵子 飛松佳子 都道府県及び政令指定都市の教育委員会において、教員に対する食育の必要性や指導の在り方について学ぶ機会がどの程度設定されているのかを把握するとともに、学校における食育の推進に及ぼす影響等を検証した。</p>
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州市立年長者研修大学校周望学舎の研修会講師 (2019年8月) ・平成31年度宗像市栄養教諭・食育担当者等研修会講師 (2019年9月) ・「学校給食ハンドブック-管理運営編-作成アドバイザー (2019年9月) ・福岡県若年教員研修(栄養教諭)1年目講師 (2020年1月) ・福岡県重点課題「学校における食育の推進」専門委員 (2020年7月) ・北九州市学校給食調理等業務委託業者選考委員 (2121年1月) ・福岡県若年教員研修(栄養教諭)1年目講師 (2022年6月) ・久留米市学校給食費改定検討委員会委員 (2022年7月) ・那珂川市食生活改善推進会定例会の講師 (2023年3月) ・令和4年度福岡県若年教員研修(栄養教諭)1年目講師 (2023年6月) ・令和4年度 市場みらい塾料理教室」講師 (2023年8・9月) ・嘉麻市立上山田小学校 食育研究発表会 講師 (2023年9月) ・令和5年度 鞍手高校 PTA 厚生委員会研修会 講師 (2023年12月) ・久留米市学校給食運営審議会 委員 (2024年2月)
<p>所属学会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・久留米市中央学校給食共同調理場維持管理運営包括委託事業プロポーザル審査委員会 委員 (2024年3月) 日本栄養士会 1987年4月～現在に至る 日本栄養改善学会 2017年4月～現在に至る 一般社団法人日本家政学会 2017年9月～現在に至る 日本食育学会 2019年5月～現在に至る
<p>受賞歴</p>	<ul style="list-style-type: none"> 平成27年度 福岡県公立学校優秀教職員表彰 福岡県教育委員会 2016年1月 平成27年度 文部科学大臣 優秀教職員表彰 2016年1月

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病態生理学 ・臨床栄養学 I ・疾病の成り立ちと病態 ・細菌性食中毒学 ・管理栄養士演習 I、II <p>-----</p> <p>[リハビリテーション学部]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域保健学 <p>-----</p> <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解剖生理学 I、解剖生理学 II 	
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 臨床栄養学 ■ 公衆衛生学 	
最 終 学 歴	東京大学 農学部農芸化学科	1968年4月～1972年4月
	九州大学 医学部医学科	1975年4月～1981年3月
学 位	学士(農学)、学士(医学)	
職 歴	<p>日本専売公社 1972年4月～1975年3月</p> <p>九州大学附属病院耳鼻咽喉科 1981年6月～1982年5月</p> <p>北九州市立小倉病院耳鼻咽喉科 1982年6月～1984年12月</p> <p>北九州市役所衛生局 1985年1月～1996年9月</p> <p>北九州市保健所長 1996年10月～2012年3月</p> <p>北九州市保健福祉局 保健医療行政担当理事 2012年4月～2015年3月</p> <p>北九州市保健福祉局 参与 2015年4月～2019年3月</p> <p>北九州市総務局人事部給与課 産業医 2015年4月～2020年3月</p> <p>西南女学院大学保健福祉学部看護科非常勤講師 「健康政策論」担当 2015年7月～2021年3月</p> <p>九州栄養福祉大学リハビリテーション学部非常勤講師 「地域保健学」担当 2015年7月～2020年3月</p> <p>産業医科大学産業保健学部非常勤講師 「保健医療福祉行政論 I」担当 2017年10月～～現在に至る</p> <p>○九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科 教授 2020年4月～現在に至る</p> <p>○東筑紫短期大学 食物栄養学科 兼任講師 2020年4月～現在に至る</p>	
教育上の業績		
主な研究活動	<p>【著書】※研究協力等</p> <p>平成12年度北九州市地域保健推進事業</p> <p>「今後の指定都市型保健所と地域保健のあり方に関する研究」報告書(2001.3)</p> <p>事業者：中原 俊隆(京都大学医学部公衆衛生学教室教授)</p> <p>(概要)</p> <p>厚生省の委託事業に研究協力者として北九州市保健所として参画。</p> <p>京都大学の中原教授が主宰される検討会に数回参加し、北九州市保健所を1か所に集約した経緯やメリットなどの意見を述べた。報告書は中原教授がまとめられた。</p>	
主な社会活動	<p>・令和3年度北九州市民カレッジ【大学連携リレー講座 コロナ禍での暮らし方】での講師 (2022年1月)</p>	
所属学会		
受賞歴		

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食と哲学、倫理学 <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療人のための哲学 <p>[東筑紫短期大学 保育学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・哲学
専 門 分 野	■ 哲学
最 終 学 歴	九州大学大学院 文学研究科 哲学専攻 (博士後期課程単位取得退学)
学 位	修士 (文学)
職 歴	<p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「哲学入門Ⅰ・Ⅱ」、○「心と脳の哲学Ⅰ・Ⅱ」担当 (平成13(2001)年4月～平成19(2007)年3月) <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「哲学入門Ⅰ・Ⅱ」、○「心と脳の哲学Ⅰ・Ⅱ」、 ○「食と哲学Ⅰ・Ⅱ」、○「哲学」担当 (平成19(2007)年4月～平成25(2013)年3月) <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「食と哲学Ⅰ・Ⅱ」(平成29年度まで)、 ○「哲学」(平成26年度まで)、 ○「食と哲学」(平成28年度から)、 ○「倫理学」(平成30年度から) ○「医療人のための哲学」(令和2年度から)担当 (平成25(2013)年4月～現在に至る) <p>九州栄養福祉大学 学生部 学生指導課指導主事 (平成13(2001)年4月～平成21(2009)年3月)</p> <p>学校法人東筑紫学園 学園史編纂室 編集主事 (平成21(2009)年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	講義中、哲学者や思想家の考えを紹介する場合、肝心な箇所については出来るだけ原典を示し解説するよう心掛けた。
主な研究活動	<p>【翻訳】</p> <p>ジェイムズ『信じる意志』(訳、その6) (九州栄養福祉大学研究紀要第12号、平成27(2015)年12月)</p> <p>(概要) 実証的証拠を有さぬことを以て宗教的信仰を拒否する自然科学者たちに対し、人間には宗教的仮説を信じる態度をとる権利があることを主張し、かれらの不条理を論難した本書の翻訳「その6」。</p> <p>ジェイムズ『信じる意志』(訳、その7) (九州栄養福祉大学研究紀要第18号、令和3(2021)年12月)</p> <p>(概要) 実証的証拠を有さぬことを以て宗教的信仰を拒否する自然科学者たちに対し、人間には宗教的仮説を信じる態度をとる権利があることを主張し、かれらの不条理を論難した本書の翻訳「その7」。</p>
所 属 学 会	<p>九州大学哲学会員 (昭和59(1984)年9月～現在に至る)</p> <p>日本哲学会員 (平成3(1991)年6月～現在に至る)</p> <p>中世哲学会員 (平成4(1992)年11月～現在に至る)</p> <p>西日本哲学会員 (平成4(1992)年11月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・調理学 ・応用栄養学Ⅱ、応用栄養学Ⅲ ・食健康センター活動 ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ
専 門 分 野	■ 調理学 ■ 応用栄養学
最 終 学 歴	神戸女子大学大学院 食物栄養学専攻 博士前期課程 修了
学 位	博士（食物栄養学）
職 歴	神戸女子大学家政学部 助手 (平成 5(1993)年 4 月～平成 13(2001)年 3 月) 九州栄養福祉大学食物栄養学部 講師 (平成 13(2001)年 4 月～平成 19(2007)年 3 月) 九州栄養福祉大学食物栄養学部 准教授 (平成 19(2007)年 4 月～平成 25(2013)年 3 月) 九州栄養福祉大学食物栄養学部 教授 (平成 25(2013)年 4 月～現在に至る) 九州栄養福祉大学食物栄養学部 食物栄養学科長 (平成 30(2018)年 4 月～令和 4(2022)年 3 月)
教育上の業績	○緩和ケア病棟における食事に関する研究を、病院と協力して行った。 ○小麦粉のベーカリー食品の特徴について農研機構 九州沖縄農業研究センターと協定研究を行った。 ○学生による美化委員会の組織を立ち上げ、運営の指導を行った。 ○管理栄養士演習科目担当者として、学生の資格修得のための対策を援助している。
主な研究活動	【 論 文 】 「Effect of Capsicum Powder on Breadmaking Properties」 Cereal.chem 2009 86 (6) 633-636 (共著) (概要) Blending dried fruit of Capsicum species such as paprika, tomapi, pimento, and cayenne to wheat flour enhances breadmaking properties of bread height and specific volume. However, due to protease, immature green fruit did not cause this improvement of breadmaking properties. Heat-stable and LMW materials in red paprika promote the breadmaking properties. 「Effects of Size of Cellulose Granules on Dough Rheology, Microscopy, and Breadmaking Properties」 Journal of Food Science 2007 72(2) 79-84 (共著) (概要) Breadmaking was performed with cellulose-blended wheat flour. Cellulose granules (7 types) of various sizes (diameter) were prepared by kneading. With increase of the blend percent of the cellulose samples from 10% to 20%, breadmaking properties such as bread height and specific volume (SV) gradually decreased in every sample; however, the decreasing levels of the properties in 7 types of various sizes varied. The decrease of bread height and SV was associated with the size of the cellulose granule. 包丁操作の運動解析：初学者と習熟者の特徴 (特集 手持ち操作の習熟) (バイオメカニズム学会誌 44(4), 229-235, 2020) (概要) 包丁の柄の前後に 6 軸モーションセンサー (加速度・角速度) を取り付けられた装置を作成し、キュウリの小口スライス中の動作を記録し、熟練者と初心者の動きを比較した。習熟者では、接触による抵抗を受けてもぶれが少なく、状態回復を行っている、また習熟者では初学者に比較してピッチ軸の回転運動が大きく、包丁を前方に送り出すことが明らかとなった。(JSPS 科研費 JP17K19942)



「包丁操作時の学習者と熟練者の包丁運動データの比較」

(食生活研究 2019 39(6), 338-357) (共著)

(概要)

包丁の柄の前後に6軸モーションセンサー(加速度・角速度)を取り付けた装置を作成し、キュウリの小口スライス中の動作を記録し、熟練者と初心者の動きを比較した。その結果一定の傾向が認められ、本装置を用いて得られるロール・ヨーの傾向及び、FFTの雑音成分から、熟練度を測ることができる可能性が示された。(JSPS 科研費 JP17K19942)

「大学における調理実習教育の現状と担当教員の把握する学生の実態」

(日本調理科学会誌 2012 45 255-264) (共著)

(概要)

大学における調理実習教育に関する現状と担当教員の把握する学生の実態について、九州に所在する大学において調理実習科目を担当している教員を対象として、アンケート調査を実施した。調理実習科目の開講状況は、栄養士養成系および家政・教員養成系において、平均開講総単位数は2.8単位、平均必修単位数は2.2単位および0.6単位であった。

調理実習の時間割上の時間は、栄養士養成系では約2コマ180分を設定している大学が70.0%、家政・教員養成系では1.5コマと2コマが共に40.0%であった。

調理に関する学生の知識および技術に関しては、両系統ともに低下しているという回答が多かった。調理実習を時間内に終わらせるために、種々の工夫が行われ、具体的な内容としては特に「料理の組み合わせ工夫する」が両系統とも半数を超えていた。学生のスキルは今後もますます低下する傾向にあり、具体的な対策が必要とされる。

「米粉とデンプンの調理性」

(日本調理科学会誌 2009 42 (5) 361-365)

(概要)

現在の学生の米粉に対する意識調査と、学生実験への米粉導入方法を検討した。学生実験で実施しているスポンジケーキの材料として米粉を導入するための試みの1例を報告した。従来の米粉と異なり、パンやケーキに用いることが可能となった新しい米粉の調理性を理解することを目的としている。(クッキングルーム)

「新しい米粉とデンプンの調理性」

(New Food Industry 2009 51(12) 65-77)

(概要)

新しい製法の米粉と従来の方法で製造された米粉について、ベーカリー食品に関するこれまでの研究をまとめた。我々がこれまで行ってきたでんぷんを用いたベーカリー食品の調理性とも関連付けて考察した。

「スポンジ組織のレオロジー特性—澱粉粒と気泡の相互作用 (総説)」

(日本バイオレオロジー学会誌 2006 20(2) 20-31)

(概要)

スポンジケーキに特徴的な食感をもたらすスポンジ組織のレオロジー的特性と、その組織の気孔構造が形成されるメカニズムの解明のために行ってきた研究の総説。

「レオメータを用いた国産小麦のスポンジケーキのくちろけ食感の比較」

(九州栄養福祉大学紀要 (14), 31-37, 2017) (共著)

(概要)

国産小麦のスポンジケーキについて、新しく開発されたソフトによって解析し、輸入小麦と異なる国産小麦粉特有の性質を明らかとした。

「緩和ケア病棟の患者に適した食事の開発：ちらし寿司」

(九州栄養福祉大学研究紀要 (13), 37-48, 2016)

(概要)

食事量の減少が、患者様のQOLの低下に直結する緩和ケア病棟の食事について、調理科学的アプローチを行っている。本研究では、柔らかく飲み込みやすいソフト食の調製を、高齢者に好まれるメニューであると同時に行事食にも多用される「ちらし寿司」について検討した。

「管理栄養士課程におけるリメディアル教育への取り組み」

(九州栄養福祉大学紀要 (10), 257-270, 2013) (共著)

(概要)

新入生を対象に管理栄養士に必要なとされる計算問題について、補講を実施し、その効果を検討した。

	<p>「食材を用いる生物教育—小学校6年生を対象としたスルメイカの体の構造学習と調理の合同実習—」 (九州栄養福祉大学紀要 (5), 29-39, 2008) (共著)</p> <p>(概要) 小学校で「からだのつくりとはたらき」を学習した後の児童を対象とし、スルメイカを用いた「からだの構造学習」と「調理」の合同実習を考案した。解剖実習は理科の教諭が行い、調理は家庭科の教諭或いは栄養教諭が受け持つ想定とした。</p>
	<p>「女子学生の味覚感受性と料理の味付けにおける嗜好濃度との関連性」 (九州栄養福祉大学紀要 (5), 29-39, 2008) (共著)</p> <p>(概要) 本研究では本学女子学生を対象に味覚閾値検査を実施し、その調査結果から高、中および低味覚感受性に相当する被験者を抽出した。各群の被験者が好みの味付けをした調理品について、塩分および糖分濃度を測定したこれらの結果から、女子学生の味覚感受性と基本料理の味付け嗜好濃度との関連性について検討した。</p>
作成した教科書	<p>「食べ物と健康 調理学」 (共同執筆) (医歯薬出版)</p> <p>「調理を学ぶ」 (共同執筆) (八千代出版)</p> <p>「調理科学実験 [第二版]」 (共同執筆) (医歯薬出版)</p> <p>「食品加工学実験書」 (共同執筆) (化学同人)</p> <p>「新版 総合調理科学辞典」 (共同執筆) (光成館)</p> <p>「カラーアトラス スルメイカの解剖」 (共同執筆)</p> <p>「食品学入門」 (共同執筆) (建帛社)</p> <p>「調理科学 [第3版]」 (共同執筆) (建帛社)</p>
出版物	<p>伝え継ぐ日本の家庭料理 野菜のおかず 春から夏 (農山漁村文化協会)</p> <p>日本調理科学会 企画・編集 (共同執筆)</p>
主な社会活動	<p>・一般企業の男性料理教室講師 (平成27(2015)年～現在に至る) TOTO 株式会社人材開発部ダイバーシティ推進部と連携し、「女性の活躍推進」のための男性の家事参加促進を狙いとして、料理の基本(準備から片付けまで)を学ぶ料理教室を開催している。</p> <p>・シニアを対象とした運動および食育教室の講師 財団法人健康・体力づくり事業財団、体力づくり道府県民会議主催、後援：福岡県、北九州市、(財)北九州市体育協会 (平成21～22年) 平成23(2011)年よりスポーツクラブが引き継ぎ開催(平成23(2011)年～現在に至る) 北九州市民を対象としたスポーツと食育を組み合わせた教室の食育担当講師として、調理実習および講義を実施。</p> <p>・北九州市葛原小学校 家庭教育学級 講師 平成24(2012)年10月 「胆騒」をテーマとした食育教会と調理実習を担当。葛原小学校 PTA 主催</p> <p>・平成21年度 八幡東アカデミー事業 「イカの不思議発見塾」 調理実習担当 八幡東アカデミー主催 八幡東生涯学習センターにて開催。「イカの不思議発見塾」では、30～70歳代の男女16名の市民を対象に、イカの構造を学んだのち、そのイカを調理して食べ、イカを通して生物の構造を理解するための講座を実施。</p> <p>・親子で楽しく健康・体力づくり教室 (親子クッキング教室 講師) (平成20(2008)年) 北九州市こどもの健康・体力づくり推進事業を受託したスポーツクラブと協力。親子食育教室「たべものはかせになろう」を3回実施。</p> <p>・財団法人山口県ひとづくり財団社会福祉研修部主催 児童・障害者(児)福祉施設等調理担当職員研修会 講師 講義および調理実習(平成20(2008)年)、講義を担当(平成23(2011)年)。</p> <p>・北九州市シニアカレッジ(講義及び調理実習) (平成26(2014)年～27(2015)年、30(2018)年) 主催：北九州市立年長者研修大学校 周望学舎 本学学生と参加者の交流を主体とし、高齢者に有益な栄養学の講義と調理実習を実施。</p>



学校法人 東筑紫学園

九州栄養福祉大学

Kyushu Nutrition Welfare University

	<p>・東筑紫学園 子育て支援事業「子育て・親育ちの会」(講師及び調理実習) (平成 30(2018)年) 主催：九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園</p> <hr/> <p>親子食育教室を実施。こども自らが料理をしてワンプレートのランチを1食つくるよう支援。調理前には、保護者様へのお話を実施。子供たちには、食育クイズを実施して、楽しく栄養の勉強が理解できる場を設けた。</p>
所属学会	<p>日本調理科学会 (平成 4(1992)年 4 月～現在に至る) 日本栄養改善学会 (平成 10(1998)年 1 月～現在に至る) 日本穀物科学研究会 (平成 3(1991)年 3 月～現在に至る) (公社) 福岡県栄養士会 理事 (研究教育) (平成 30(2018)年 6 月～令和 2(2020)年 5 月) 日本穀物科学研究会 理事 (平成 30(2018)年 2 月～現在に至る) 日本栄養改善学会 評議員 (令和 2(2020)年 11 月～現在に至る)</p>
受賞歴	<p>日本調理科学会 奨励賞 (平成 15(2003)年 9 月 4 日) (公社) 福岡県栄養士会会長表彰 (平成 30(2018)年 10 月 7 日) 食生活研究会 最優秀論文賞 (令和 2(2020)年 7 月 14 日) 福岡県知事表彰 (栄養士養成成功労) (令和 4(2022)年 10 月 23 日)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉論 ・食事介助実習 (学外) ・国際理解 (海外研修) 韓国・台湾 <p>[食物栄養学部 理学療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉と地域ケア <p>[食物栄養学部 作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉と地域ケア <p>-----</p> <p>[東筑紫短期大学 全学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際理解 (海外研修) 韓国・台湾 <p>[東筑紫短期大学 保育学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会的養護Ⅱ ・子ども家庭支援論 <p>[東筑紫短期大学 専攻科 (介護福祉専攻)]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション技術 	
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 障害者福祉 ■ 介護福祉教育 ■ アジアの社会福祉 	
最 終 学 歴	岡山大学大学院 文化科学研究科 博士課程単位取得満期退学	
学 位	修士 (文学) (韓国大邱大学校)	
職 歴	<p>慶成高等学校 専任教諭 (平成 13(2001)年 4月～平成 16(2004)年 3月)</p> <p>第一福祉大学 人間社会福祉学部 専任講師 (平成 17(2005)年 4月～平成 19(2007)年 3月)</p> <p>福岡医療福祉大学 人間社会福祉学部 准教授 (平成 19(2007)年 4月～平成 21(2009)年 3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 (平成 21(2009)年 4月～平成 28(2016)年 3月)</p> <p>九州歯科大学 歯学部 非常勤講師 (基礎介護) (平成 24(2012)年 4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (平成 28(2016)年 4月～現在に至る)</p> <p>九州歯科大学 歯学部 非常勤講師 (韓国語) (令和 5(2023)年 9月～現在に至る)</p>	
教育上の業績	<p>○手話と点字を 40 年以上行い著書もあり、現場における実践力強化として、短大の社会福祉援助技術や専攻科のコミュニケーション技術で手話や点字を取り入れて実践形式で授業を行い教育効果を高めた。 (平成 21(2009)年)</p> <p>○管理栄養士を目指す学生の「食事介助実習」に関する取り組みについて (第 18 回日本介護福祉学会大会) で発表を行った。教科「食事介助実習」の学生へのアンケート調査では様々な専門職業務理解が十分できた、管理栄養士に期待される役割理解もおおむね出来た、食事場面をよく観察もおおむね出来た、利用者がどんな食事が望ましいかもおおむね出来たとなり、学生による授業評価アンケートは 4.81 であった。 (平成 22(2010)年)</p>	
主な研究活動	<p>【著書】</p> <p>「廃物利用教材教具の作成と使用法」 (単著、大邱大学校出版部、B5 判・188 頁 昭和 63(1988)年 9 月)</p> <p>「人間関係論」 (単著、特殊教育出版社、B5 判・296 頁 平成元(1989)年 10 月)</p> <p>「韓国の手話」 (単著、特殊教育出版社、B5 判・269 頁 平成 2(1990)年 1 月)</p> <p>「しいのみ学園」 (単著、特殊教育出版社、B5 判・316 頁 平成 2(1990)年 7 月)</p> <p>「集中日本語会話」 (単著、ECA 学院出版部、B4 版・120 頁 平成 2(1990)年 8 月)</p> <p>「詩集 韓国、台湾、そして日本」 (単著、特殊教育出版社、B5 判・76 頁、平成 5(1993)年 8 月)</p> <p>「老人福祉論」 (単著、梓書院、A5 判・193 頁 平成 15(2003)年 12 月)</p> <p>「実用のための韓国点字表記法」 (単著、梓書院、A5 判・250 頁 平成 17(2005)年 7 月)</p>	

	「手作りおもちゃ・親子愛情教室」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・46頁 平成18(2006)年4月)
	「見ておぼえる韓国手話の会話法」 (単著、梓書院、A5判・273頁 平成18(2006)年12月)
	「心あたたまるケースワークの話」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・63頁 平成19(2007)年3月)
	「新・心あたたまるケースワークの話」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・65頁 平成19(2007)年12月)
	「臨床ソーシャルワーク原論」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・68頁 平成20(2008)年4月)
	「人間関係原論」 (単著、梓書院、四六サイズ・184頁 平成20(2008)年4月)
	「新・臨床ソーシャルワーク原論」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・66頁 平成20(2008)年8月)
	「ソーシャルワーク実践論」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・56頁 平成20(2008)年11月)
	「新・ソーシャルワーク実践論」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・58頁 平成21(2009)年2月)
	「子どもの心の育ちと人間関係」 (共著、保育出版社、p152～p153、p190～p191 平成21(2009)年4月)
	「障害者福祉と教育」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・65頁 平成21(2009)年5月)
	「子どもの養護」 (共著、建帛社、p75～p89 平成21(2009)年10月)
	「新障害者福祉と教育」 (単著、大邱大学校出版部、A4版・56頁 平成21(2009)年10月)
	「保育者が学ぶ家庭支援論」 (共著、建帛社、p37～p51、P170～p171 平成23(2011)年4月)
	「福祉・栄養・看護のための社会福祉論」 (共著、建帛社、p106～p121 平成28(2016)年2月)
	【研究紀要】
	「園生の視聴覚能力の発達をさぐって」 (単著、日本愛護協会、p81～p91 昭和59(1984)年5月) 第8回ほほえみ奨励賞受賞
	「韓・日老人福祉法の比較研究」 (単著、韓国大邱大学校修士論文、A5判・60頁 平成2(1990)年2月)
	“Any Chance to Open the Paralympic Games Ahead of the Olympic Games” (単著、川崎医療福祉学会誌第2巻第2号、p242～p243 平成4(1992)年12月)
	「殖民地下の朝鮮における夜学の研究」 (単著、川崎医療福祉学会誌第3巻第1号、p99～p103 平成5(1993)年6月)
	「儒教文化圏の社会福祉(韓国における老人福祉を中心として)」 (単著、旭川荘研究年報第24巻第1号、p53～p55 平成5(1993)年3月)
	「自立を目指し地域と共に生きる」 (単著、旭川荘研究年報第25巻第1号 p48～p50 平成6(1994)年6月)
	「韓国の家族制度(R・ジャンネリの祖先祭祀と韓国社会を参考にして)」 (単著、川崎医療福祉学会誌第2巻第4号 p153～p156 平成6(1994)年10月)
	「韓国社会の転機」 (単著、川崎医療福祉学会誌第1巻第5号 p189～p192 平成7(1995)年9月)
	「ひとり暮らし老人の日韓比較研究」 (単著、旭川荘研究年報第29巻第1号 p148～p149 平成10(1998)年3月)
	「韓国の老人家庭奉仕員制度についての一考察」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol.14 No.2 p371～p376 平成16(2004)年11月)
	「韓国社会福祉の歴史(1910～1945)」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol.15 No.2 p353～p366 平成17(2005)年12月)
	「韓国社会福祉の歴史」 (単著、第一福祉大学紀要第3号 p241～p249 平成18(2006)年3月)
	「韓国介護保険制度(テスト事業実施)から見た問題点」 (単著、第一福祉大学紀要第4号 p73～p85 平成19(2007)年3月)
	「フィリピンにおける介護福祉士養成事業の一考察」 (単著、介護人材育成プラス Vol.4-No.4、p120～p126 平成19(2007)年9月)
	「障害者ソーシャルワークの研究」 (単著、第一福祉大学紀要第5号 p61～p78 平成20(2008)年3月)
	「韓国の障害者福祉の今後の展望と課題」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol-18 No.1 p109～p119 平成20(2008)年5月)
	「韓国における地域福祉の展開と福祉教育」

	(単著、福岡医療福祉大学紀要 第6号 p131-p148 平成21(2009)年3月)
	「韓国の地域社会福祉実践機関「地域社会福祉館」の研究」 (単著、川崎医療福祉学会誌 Vol-19 No.1P85-p92 平成21(2009)年6月)
	「日本と韓国の介護保険制度の現状と方向性」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第6号 p31-p49 平成21(2009)年12月)
	「社会福祉国家スウェーデンの福祉政策についての一考察 (21世紀型日本はどうあるべきか)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号 p129-p144 平成22(2010)年12月)
	「フィリピンの社会福祉政策と市民社会運動」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号 p145-p174 平成22(2010)年12月)
	“Welfare and Education for the Physically-Mentally Disabled” (身体的、精神的障害がある人ための福祉と教育) (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第7号 p175-p185 平成22(2010)年12月)
	「韓国の儒教規範と社会保障の関係」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第8号 p119-p141 平成23(2011)年12月)
	「韓国の介護職養成所における学生の介護意識」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第8号 p143-p174 平成23(2011)年12月)
	「国際交流に対する日韓比較研究 (国際交流のあり方について)」 (単著、東筑紫短期大学研究紀要第43号 p189-p208 平成24(2012)年12月)
	「韓国の契と社会保障の関係」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第9号 p119-p139 平成24(2012)年12月)
	“Relation of American Old People and Community(Real State of Sun City, Arizona)” アメリカの高齢者と地域との関係 (アリゾナ州サンシティの現状) (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第9号 p141-p154 平成24(2012)年12月)
	「韓国の療養保護士 (ホームヘルパー)の職務満足が介護サービスの質に与える影響」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第10号 p271-p320 平成25(2013)年12月)
	「際交流に対する日韓比較研究 (国際交流のあり方について) (2)」 (単著、東筑紫短期大学研究紀要第44号 p129-p153 平成25(2013)年12月)
	「国際交流に対する日台比較研究 (国際交流のあり方について)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第11号 p227-p228 平成26(2014)年12月)
	『教科「人間関係 (指導法)」の科目別履修カルテ3年間のアンケート調査とKJ法についての一考察』 (単著、東筑紫短期大学研究紀要第45号 p257-p279 平成26(2014)年12月)
	「社会資源情報マップの必要性和開発 (法人ネットワークの有効利用を目指す仕組みづくりへ)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第12号 p229-p259 平成27(2015)年12月)
	「食事介助実習の現状と課題」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第13号 p69-p93 平成28(2016)年12月)
	「日本の大学の現実 (総合ランキングについての一考察)」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第13号 p95-p122 平成28(2016)年12月)
	「食事介助実習についての一考察」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第14号 p39-p54 平成29(2017)年12月)
	「日本の大学についての一考察」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第14号 p55-p73 平成29(2017)年12月)
	「教科「国際理解」海外研修についての一考察」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第15号 p133-p152 平成30(2018)年12月)
	「日本の介護保険についての一考察」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第15号 p153-p171 平成30(2018)年12月)
	「読書ノート・調理ノートにおける学生の意識調査について」 (共著、九州栄養福祉大学研究紀要第16号 p153-p162 令和元(2019)年12月)
	「社会福祉の視点から考える食品ロスについての一考察」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第16号 p163-p184 令和元(2019)年12月)

	<p>「読書ノート・調理ノートにおける学生の意識調査について ～キャリアガイダンスⅡの取組みを通して(第2報)～」 (共著、九州栄養福祉大学研究紀要第17号 p55-p63 令和2(2020)年12月)</p>
	<p>「社会福祉の視点から考える食品ロスについての一考察(Ⅱ) ～学生アンケート調査の日韓台比較～」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第17号 p65-p93 令和2(2020)年12月)</p>
	<p>「少子高齢化社会の日本と社会保障についての一考察 ～地球規模で論じる人口問題～」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第18号 p41-p60 令和3(2021)年12月)</p>
	<p>「地域福祉の視点からまちの活性化についての一考察 ～2050年の北九州市のまちづくり構想～」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第19号 p59-p72 令和4(2022)年12月)</p>
	<p>「地域福祉の視点からまちの活性化についての一考察Ⅱ ～2050年の北九州市のまちづくり構想Ⅱ～」 (単著、九州栄養福祉大学研究紀要第20号 p19-p33 令和5(2023)年12月)</p>
	<p>【学会発表】</p>
	<p>“Any chance to Open Paralympic Game11TH ASIAN CONFERENCE ON MENTAL RETARDATION” (単独・口頭発表)、アセアン国際知的障害者研究大会(韓国ソウル) 平成5(1993)年8月)</p>
	<p>「韓国の訪問介護員制度の現状についての報告」 (単独・口頭発表)、第13回日本介護福祉学会(神奈川県立保健福祉大学) 平成17(2005)年10月)</p>
	<p>「韓国における訪問介護員養成研修事業についての現状と課題」 (単独・口頭発表)、福岡県ソーシャルワーカー協会(西日本短期大学) 平成17(2005)年11月)</p>
	<p>「フィリピン人介護者導入における一考察」 (単独・口頭発表)、第33回川崎医療福祉学会(川崎医療福祉大学) 平成19(2007)年11月)</p>
	<p>「韓国における社会福祉教育体系の現状報告」 (単独・口頭発表)、第35回川崎医療福祉学会(川崎医療福祉大学) 平成20(2008)年11月)</p>
	<p>「韓国における社会福祉教育の体系」 (単独・口頭発表)、第2回福岡県ソーシャルワーカー協会定期例会(福岡医療福祉大学) 平成21(2009)年7月)</p>
	<p>「日本と韓国の介護保険制度の比較研究」 (単独・口頭発表)、第17回日本介護福祉学会大会(文京学院大学) 平成21(2009)年9月)</p>
	<p>「日本における外国人介護労働者に関する一考察」 (単独、2009 亞洲産業競争力興企業経営管理国際学術検討会(台湾、日華金典酒店、南海技術大学) 平成21年10月)</p>
	<p>「韓国の社会福祉教育についての一考察」 (単独・口頭発表)、2009年度日本社会福祉教育学会第5回大会(鹿児島国際大学) 平成21(2009)年11月)</p>
	<p>『管理栄養士を目指す学生の「食事介助実習」に関する取り組みについて』 (単独・口頭発表)、第18回日本介護福祉学会大会(岡山県立大学) 平成22(2010)年9月19日)</p>
	<p>「福岡県介護福祉士会平成22年制度政策検討委員会取り組みについて～キャリアパスモデル(グループで発表)(福岡県介護福祉士会(案)について～第8回日本介護学会大会(岩手県民情報交流センター) 平成22(2010)年10月)</p>
	<p>「日本の障害者自立支援法の問題点」 (単独・口頭発表)、第33回東北亜福祉経済共同体国際学術検討会(韓国釜山市長善綜合福祉共同体大講堂) 平成23(2011)年5月)</p>
	<p>「社会資源マップを活用した国際環境作り」 (単独・口頭発表)、2012 福祉ビジネスの国際連携会議(韓国釜山市長善綜合福祉共同体大講堂) 平成24(2012)年7月)</p>
	<p>「社会資源マップを活用した国際環境作り 2」</p>

	((単独・口頭発表)、「東亜の福祉ビジネスと産業経営」国際学術検討会 (韓国済州島) 平成 26(2014)年 7 月)
	【投稿】 「障害者が望む法律とは何か」 (単著、手をつなぐ育成会 (ハートフルネット) 平成 22(2010)年 2 月)
	「人材不足を補うために介護の未来を選び取っていく」 (単著、「ケアスル 介護 コラム」令和 6(2024)年 4 月)
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・介護認定審査会委員 (福岡県筑紫地区) (平成 18(2006)年 4 月～平成 21(2009)年 3 月) 判定内容として要介護(支援)状態等に該当するか否かの判定、該当する要介護状態区分、要介護状態等が特定疾患によるものか否か(第 2 号被保険者の場合)の二次判定を行う。 ・日韓研究交流会アドバイザー (社会福祉法人北九州市手をつなぐ育成会) (平成 22(2010)年 7 月 10 日) 韓国ではすでに高齢者福祉は措置制度から契約制度に移行し、障害者福祉も後に続こうとしている。入所施設についても大規模な施設をなくす方向性が提案されていて、福祉の市場化や脱施設化、地域生活支援、日本の障がい者総合福祉法 (仮称) の動きなどについて活発な意見交換を行う。 小倉南区湯川 4 町内北明老会講師 老人福祉について講演 (令和 6 (2024) 年 4 月 19 日) 明老会 (老人会) にて、介護がすべての人にとって自分自身のことであるという認識や関心を持ち続けることについての講演と意見交換を行う。
所属学会	日本介護福祉学会 (平成 17(2005)年 4 月～現在に至る) 福岡県介護福祉学会 (平成 17(2005)年 4 月～現在に至る) 日本観光学会 (令和 5(2023)年 10 月～現在に至る)
受賞歴	第 8 回ほほえみ奨励賞「園生の視聴覚能力の発達をさぐって」 (日本愛護協会) (昭和 59(1984)年 5 月)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・応用栄養学 I ・臨床栄養学 II ・臨床栄養学実習 II ・食物とアレルギー ・食健康センター活動 ・栄養福祉論 ・キャリアガイダンス II ・専門ゼミナール ・卒業論文 ・管理栄養士演習 I、管理栄養士演習 II <p>[九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床栄養学特論 I、臨床栄養学特論 II ・栄養教育特論 I、栄養教育特論 II ・健康科学特別講義 I、健康科学特別講義 II ・健康科学研究法特論講義 ・健康科学研究法特論演習 ・特別研究 I、特別研究 II
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 実践臨床栄養管理 ■ 食物アレルギー ■ 母子の栄養
最 終 学 歴	山口県立山口女子大学 家政学部食物栄養学科
学 位	学士 (家政学)
職 歴	<p>医療法人博愛会 宇部記念病院 管理栄養士 (昭和 54(1979)年 3 月～昭和 56(1981)年 11 月)</p> <p>国立福岡中央病院 管理栄養士・栄養主任 (昭和 57(1982)年 4 月～平成 6(1994)年 6 月)</p> <p>国立療養所 南福岡病院 栄養係長 (平成 6(1994)年 7 月～平成 14(2002)年 3 月)</p> <p>国立療養所 東佐賀病院 栄養管理室長 (平成 14(2002)年 4 月～平成 16(2004)年 3 月)</p> <p>国立療養所 東佐賀病院附属看護学校 講師 (平成 14(2002)年 4 月～平成 16(2004)年 3 月)</p> <p>(独)国立病院機構 福岡病院 栄養管理室長 (平成 16(2004)年 4 月～平成 22(2010)年 3 月)</p> <p>(独)国立病院機構本部 九州ブロック事務所 栄養専門職 (平成 18(2006)年 4 月～平成 27(2015)年 6 月)</p> <p>(独)国立病院機構 九州医療センター 栄養管理室長 (平成 22(2010)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>(独)国立病院機構 九州医療センター附属福岡看護助産学校 看護科 講師 (平成 22(2010)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>(独)国立病院機構 九州医療センター附属福岡看護助産学校 助産科 講師 (平成 22(2010)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>公立大学法人福岡女子大学 国際文理学部食・健康学科 非常勤講師 ○病態栄養学 担当 (平成 25(2013)年 7 月・平成 26(2014)年 7 月)</p> <p>公立大学法人福岡女子大学大学院 人間環境科学研究科人間環境科学専攻修士課程 客員臨床准教授 ○臨床栄養師実習 担当 (平成 24(2012)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>原看護専門学校 非常勤講師 (平成 29(2017)年 4 月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (平成 29(2017)年 4 月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科 教授 (平成 29(2017)年 4 月～現在に至る)</p> <p>東筑紫短期大学保育学科 非常勤講師 (平成 30(2018)年 4 月～2019 年 3 月)</p>
教育上の業績	○国立病院、及び国立機構病院附属看護学校 学生に対し、病態栄養学、代謝栄養学の講義を行った (平成 14(2002)年 4 月～平成 16(2004)年 3 月、平成 22(2010)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)

	○国立機構病院附属助産学校 学生に対し、母子の健康科学について講義を行った (平成22(2010)年4月～平成29(2017)年3月)
	○福岡女子大学 学生に対し、病態栄養の講義を行った (平成25(2013)年、平成26(2014)年)
	○福岡女子大学大学院 大学院生に対し、臨床栄養師育成のための講義、および臨床栄養実践指導を行った (平成24(2012)年4月～平成28(2016)年3月)
	○国立病院機構本部 九州ブロック事務所栄養専門職として九州機構病院新採用栄養士に対する新採用者研修や栄養部門責任者研修等の企画・運営・実施を行った (平成18(2006)年4月～平成27(2015)年6月)
	○熊本県 尚綱大学 学生に対し、進路講和「専門職ガイダンス～病院栄養士の立場から」の特別講義を行った (平成28(2016)年7月)
	○食物アレルギーに関し、県内外の保健所、学校、学会等の依頼を受け教育活動を行った (平成17(2005)年～平成29(2017)年)
	○厚生労働科学研究班「食物アレルギーの栄養指導の手引き」検討委員会委員として指導の手引き、および改訂版の策定に携わった (平成20(2008)年、平成23(2011)年)
	○原看護専門学校3年課程看護学生に対し、栄養学の講義を担当している。 (平成30年4月～現在)
主な研究活動	【著書】
	メディカル管理栄養士のためのステップアップマニュアル (共著) 第一出版：平成16(2004)年7月
	チャイルドヘルス 食物アレルギーなんでもQ&A 診断と治療社：10月号：平成18(2006)年10月
	食物アレルギーの栄養指導の手引き 2008 (共著) 厚生労働科学研究班：平成20(2008)年
	ホップ・ステップ！食物アレルギー教室 (共著) 南江堂：平成20(2008)年1月
	今日の病態栄養療法 改訂第2版 (共著) 南江堂：平成20(2008)年4月
	重症心身障害児 (者) 看護ガイドライン2009 (共著) 協和企画：平成21(2009)年3月
	小児看護とアレルギー疾患 (共著) 中山書店：平成23(2011)年9月
	食物アレルギーの栄養指導の手引き 2011 (共著) 厚生労働科学研究班：平成24(2012)年
	食物アレルギーの栄養指導 (共著) 医歯薬出版：平成24(2012)年2月
	サプリメント・健康食品について 季刊「きんむい」No163.：梓書院：平成25(2013)年3月
	仙骨部、尾骨部の褥瘡発生と栄養管理・排便状況の関連性について ヒューマンニュートリション：第29号：日本医療企画：平成26(2014)年5月
	脂質異常症（高脂血症）患者への献立展開 ニュートリション・ケア第7巻11号：メディカ出版：平成26(2014)年11月
	食物アレルギー患者向けの献立作成のコツ ニュートリション・ケア第9巻3号：メディカ出版：平成28(2016)年3月
	治療食アレンジレシピ ニュートリション・ケア第10巻5号：メディカ出版：平成29(2017)年5月
	【学術論文等】
	1. 「食物アレルギーの食事療法～病棟と外来における食事療法」 日本栄養士会雑誌：第51巻：2008.12
	2. 「食物アレルギーへの対応と専門栄養士の必要性」 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌：第8巻第3号：2010.9
	3. 「入院支援センターにおける早期からの栄養介入の効果について」 日本医療マネジメント学会誌：16巻3号：2015.12
	4. 「食物経口負荷試験に際し、保護者の不安軽減のために」 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌 第14巻3号：2016.12

5 「管理栄養士の病棟業務で患者の栄養管理はどう変わる？どう変える？」

国立医療学会誌 医療：第72巻第4号：2018.4

6 【原著】「病院栄養管理部門における管理栄養士の職位別職業性ストレスの違いについて」

日本医療マネジメント学会誌：19巻4号：2019.3

【学会発表】

1. 「低栄養患者への栄養療法施行による改善効果の検討」

春田典子、池本美智子、野上裕子他

第15回日本呼吸管理学会：平成17(2005)年7月、仙台

2. 「COPD 低栄養患者における栄養指標について」

井上聡美、池本美智子、麻生博史他

第4回九州国立病院管理栄養士協議会栄養管理学会：平成18(2006)年2月、福岡

3. 「除脂肪体重からみる重症心身障害児（者）適正エネルギー量の検討」

上野佳代子、池本美智子、本村知華子他

第61回国立病院総合医学会：平成17(2005)年11月、名古屋

4. 「食物アレルギー教室受講による患児母親の意識の変化」

池本美智子、柴田瑠美子他

第25回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会：平成20(2008)年5月、奈良

5. 「地域連携室と連携した後期高齢者退院時栄養・食事管理指導のとりくみ」

池本美智子

第6回九州国立病院管理栄養士協議会栄養管理学会：平成20(2008)年7月、福岡

6. 「食物アレルギーの現状と対応～病院栄養士の立場で～」

池本美智子

第55回日本栄養改善学会学術総会：平成20(2008)年9月、鎌倉

7. 「口腔機能改善を目的とした訓練用ゼリーの使用経験」

戸次真知子、池本美智子、松本吉洋他

第31回九州地区重症心身障害研究会：平成21(2009)年3月、鹿児島

10. 「食物アレルギー児のQOL向上のために～病院栄養士の立場で」

池本美智子

第8回食物アレルギー研究会：平成20(2008)年2月、東京

11. 「アレルギー除去食に関するインシデント防止の取り組み」

井上聡美、池本美智子、小田嶋博他

第26回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会：平成21(2009)年5月、福岡

12. 「国立病院機構本部九州ブロック事務所における職種横断的NST研修の取り組みについて」

池本美智子、吉住秀之他

第11回日本医療マネジメント学会：平成20(2008)年6月、長崎

13. 「栄養管理における各職種の役割と職種間の連携～管理栄養士の立場から～」

池本美智子

日本医療マネジメント学会第9回福岡支部会：平成21(2009)年11月、福岡

14. 「重症心身障害児（者）の栄養評価における皮下脂肪厚計測の有用性について」

上野佳代子、池本美智子、本村知華子他

第7回国立病院栄養研究学会：平成22(2010)年1月、東京

15. 「食物アレルギーへの対応と専門栄養士の必要性」

池本美智子

第27回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会：平成22(2010)年5月、東京

16. 「当院におけるHIV感染患者に対する食事指導の現状と効果」

増田香織、池本美智子、山本政弘他

第24回日本エイズ学会学術集会総会：2010/11/25、東京

17. 「若年健常女性の食塩摂取量の実態および食生活との関連についての検討」

増田香織、池本美智子、土橋卓也他

第32回日本高血圧学会総会：2010/10/17、福岡

18. 「肝臓合併C型肝炎患者の栄養摂取量の現状と問題点」

戸次真知子、池本美智子、中牟田誠他

第14回日本病態栄養学会年次学術集会：2011/1/15-16、横浜

19. 「ペグインターフェロン・リビダリン併用療法導入C型肝炎患者の栄養素摂取量の推移（第2報）」

一ノ瀬雅子、池本美智子、中牟田誠他

第14回日本病態栄養学会年次学術集会：2011/1/15-16、横浜

20. 「高血圧患者における生活習慣の修正：栄養食事指導の課題」

増田香織、池本美智子、土橋卓也他

第14回日本病態栄養学会年次学術集会：2011/1/15-16、横浜



	<p>21. 「当院における閉塞性動脈硬化症患者に対する NST 介入後のアウトカムについて」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 26 回日本静脈経腸栄養学会：2011/2/17-18、名古屋</p>
	<p>22. 「市販食品および加工食品、外食店舗における食塩含有量表示の実態調査」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 34 回日本高血圧学会総会：2011/10/20-22、宇都宮</p>
	<p>23. 「電子カルテを用いた栄養サポートチーム加算の現状と今後の課題」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 13 回日本医療マネジメント学会：2011/6/25、京都</p>
	<p>24. 「急性期病院における NST 介入後の再入院症例の栄養管理上の課題」 増田香織、池本美智子、福泉公仁隆他 第 27 回日本静脈経腸栄養学会：2012/2/23-24、神戸</p>
	<p>25. 「市販食品における食塩含有量表示の実態からみた減塩指導の課題」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
	<p>26. 「肝硬変患者における内臓脂肪面積の解析」 戸次真知子、池本美智子、中牟田誠他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
	<p>27. 「急性期病院における NST 介入患者の栄養情報提供の有用性について」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
	<p>28. 「C 型慢性肝炎に対するペグインターフェロン+リバビリン併用療法時における体組成・栄養素摂取量の推移：ジェノタイプ別による比較」 一ノ瀬雅子、池本美智子、中牟田誠他 第 15 回日本病態栄養学会年次学術集会：2012/1/14-15、京都</p>
	<p>29. 「市販食品における食塩含有量表示の実態と表示に対する一般市民の認識について」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 日本高血圧学会 第 1 回臨床高血圧フォーラム：2012/5/12、大阪</p>
	<p>30. 「食物アレルギーに関与するコメディカルパートナーをいかに育てるか～医療施設に求められる管理栄養士とは～」 池本美智子 第 24 回日本アレルギー学会春季臨床大会：2012/5/12、大阪</p>
	<p>31. 「食事調査による北部九州地域の離島住民の食塩摂取量とその関連因子の調査」 増田香織、池本美智子、土橋卓也他 第 35 回日本高血圧学会総会：2012/9/22、広島</p>
	<p>32. 「地域一体型 NST への取り組み～栄養情報提供の有用性について～」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 第 14 回日本医療マネジメント学会学術総会：2012/10/12、佐世保</p>
	<p>33. 「国立病院機構本部九州ブロック事務所における食物アレルギー専門研修の取り組みについて」 池本美智子、末松栄一他 第 66 回国立病院総合医学会：2012/11/16、京都</p>
	<p>34. 「HIV/AIDS 患者における栄養指導の現状と課題」 増田香織、池本美智子、山本政弘他 第 9 回国立病院栄養研究学会：2013/1/26、岡山</p>
	<p>35. 「地域連携を考慮した急性期病院における NST の取り組みについて」 池本美智子、増田香織、福泉公仁隆他 日本医療マネジメント学会第 13 回福岡支部学術集会：2013/2/2、福岡</p>
	<p>36. 「急性期病院における管理栄養士の病棟業務を考える」 池本美智子 日本健康・栄養システム学会第 12 回九州地方会：2013/11/23、福岡</p>
	<p>37. 「HIV 感染者における栄養指導の効果について」 淵邊まりな、池本美智子、山本政弘他 第 33 会食事療法学会：2014/03/8-9、長崎</p>
	<p>38. 「これからのキャリアマネジメントを考える～栄養部門における人材育成～」 池本美智子 第 9 回医療技術学会：2014/02/1、福岡</p>

<p>39. 「栄養管理の地域連携に向けた情報発信と情報共有化の取り組み」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 日本医療マネジメント学会第13回九州・山口連合大会：2014/09/26-27、鹿児島</p>
<p>40. 「栄養ケア・マネジメントが実施できる管理栄養士の育成を目指して」 池本美智子 第13回健康・栄養システム学会九州地方会：2014/11/23、鹿児島</p>
<p>41. 「当院における造血器疾患患者に対する栄養管理の現状と課題」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 第29回日本静脈経腸栄養学会：2014/02/27-28、横浜</p>
<p>42. 「入院支援センターにおける早期からの栄養介入効果について」 池本美智子、徳永真矢、竹尾貞徳他 第16回日本医療マネジメント学会：2014/06/14、岡山</p>
<p>43. 「妊娠初期妊婦におけるサプリメントを含む食習慣、および葉酸摂取量と血清葉酸値についての検討」 池本美智子、久保紀夫他 第18回日本病態栄養学会年次学術集会：2015/1/10-11、京都</p>
<p>44. 「急性期病院におけるNST介入患者に対する握力測定の検討」 徳永真矢、池本美智子、福泉公仁隆他 第30回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2015/2/12-13、神戸</p>
<p>45. 「MNA®-SFによる肝疾患患者の栄養状態の判定結果と予後の関連についての検討」 北向由佳、池本美智子他 第13回九州国立病院管理栄養士協議会栄養管理学会：2015/9/5、福岡</p>
<p>46. 「実習終了アンケートからみる当院臨地実習カリキュラムの評価について」 池本美智子 第62回日本栄養改善学会：2015/9/24-26、福岡</p>
<p>47. 「栄養士臨地実習の一環としての周産期センターデザートバイキングの効果について」 池本美智子、淵邊まりな、佐藤和夫他 第69回国立病院総合医学会：2015/10/2-3、札幌</p>
<p>48. 「慢性腎臓病を合併した統合失調症の褥瘡患者に対するオルニチン含有食品の有用性」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 第19回病態栄養学会：2016/1/9-10、横浜</p>
<p>49. 「大腿骨頸部骨折患者の入院時食事摂取不良が入院期間に及ぼす影響についての検討」 藤岡恵、池本美智子、福泉公仁隆他 第19回病態栄養学会：2016/1/9-10、横浜</p>
<p>50. 「脳血管疾患患者の減塩指導における塩分チェックシートの有用性について」 藤岡恵、池本美智子、福泉公仁隆他 第19回病態栄養学会：2016/1/9-10、横浜</p>
<p>51. 「外来がん化学療法患者における栄養管理上の問題点」 池本美智子、徳永真矢、福泉公仁隆他 第31回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2016/2/25-26、福岡</p>
<p>52. 「急性期病院NST介入症例における転院後の予後調査について」 徳永真矢、池本美智子、福泉公仁隆他 第31回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2016/2/25-26、福岡</p>
<p>53. 「大腿骨頸部骨折患者の入院時栄養状態と入院期間との関連」 藤岡恵、池本美智子、福泉公仁隆他 第31回日本静脈経腸栄養学会学術集会：2016/2/25-26、福岡</p>
<p>54. 「職業性ストレス簡易調査票に基づく栄養部門におけるストレスの現状について」 池本美智子、辻麻里子 第18回日本医療マネジメント学会学術総会：2016/4/22-23、福岡</p>
<p>55. 「臨床栄養師育成の意義と現状、今後の課題」 池本美智子 第16回日本健康・栄養システム学会：2016/6/25、福岡</p>
<p>56. 「職業性ストレス簡易調査表に基づく栄養士の役割別職業性ストレスについて」 池本美智子、辻麻里子 第30回国立病院総合医学会：2016/11/11-12、沖縄</p>
<p>57. 「急性期病院における地域一体NSTのための栄養情報提供書の有用性について」 池本美智子、淵邊まりな、福泉公仁隆他 第32回日本静脈経腸栄養学会学術総会：2017/2/23-24、岡山</p>

	<p>58. 「急性期病院における入院時栄養スクリーニングの精度とその問題点についての検討」 淵邊まりな、池本美智子、福泉公仁隆他 第 32 回日本静脈経腸栄養学会学術総会：2017/2/23-24、岡山</p>
	<p>59. 「妊婦におけるビタミン D 含有食品の摂取傾向について」 長岳愛美、池本美智子、佐藤和夫他 第 36 回食事療法学会：2017/3/4-5、高知</p>
	<p>59. 「妊婦におけるビタミン D 認知度と魚の摂取傾向について」 長岳愛美、山口留美、池本美智子、佐藤和夫他 第 31 回国立病院総合医学会：2017/11/10-11、香川</p>
	<p>60. 「“通所リハ” 利用高齢者における食品及び栄養素摂取状況とサルコペニアの関連性」 朴祇佑、池本美智子 第 18 回健康・栄養システム学会：2018.6.23-24、神奈川</p>
	<p>61. 「2 型糖尿病患者における適正体重のためのエネルギー量の検討」 山上 知夏、久々宮 千裕、本間 愛、伊崎 育子、池本 美智子、河原 哲也 第 31 回臨床内分泌代謝 Update：2021.11. 26-27、(オンライン)</p>
	<p>62. 糖尿病教育入院患者の体重推移からみる目標体重×25kcal/kg の妥当性の検討 山上 知夏、久々宮 千裕1、本間 愛、伊崎 育子、池本 美智子 第 24・25 回病態栄養学会学術集会：2022.1.28(オンライン)</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・宮崎県栄養士会研修会にて「肝臓病の食事療法」を講演 (平成 26(2014)年 7 月) ・福岡県栄養士会生涯教育研修会にて「栄養管理記録 SOAP を用いた栄養管理記録」を講演 (平成 26(2014)年 9 月) ・福岡糖尿病療養指導士認定更新セミナーにて「食品交換表の活用と実践のポイント」を講義 (平成 27(2015)年 8 月) ・福岡市西区給食施設従業者研修会にて「特定給食施設における食物アレルギーの対応」を講演 (平成 27(2015)年 12 月) ・長崎県栄養士会医療協議会研修会にて「がんの栄養指導について」を講演 (平成 28(2016)年 6 月) ・日本病態栄養学会平成 28 年度教育セミナーにて「がんにおける症例検討」を講義 (平成 28(2016)年 6 月) ・第 16 回日本健康・栄養システム学会臨床栄養師継続研修にて「嚥下障害を合併した大腿骨頸部骨折患者の栄養管理」の講義・症例検討をおこなった (平成 28(2016)年 6 月) ・福岡糖尿病療養指導士研修会にて「糖尿病の基本治療と療法指導」の教育研修を行った (平成 28(2016)年 7 月) ・佐賀県栄養士会福祉事業部研修会にて「食物アレルギーの実際」を講演 (平成 28(2016)年 7 月) ・国立病院機構福岡病院 NST 勉強会にて「呼吸器疾患患者への NST 介入」を講演 (平成 28(2016)年 9 月) ・アレルギーケア研究会「親子のためのアレルギー教室」において「卵・牛乳・小麦を使わないみんなで作って楽しむおやつ」の実践指導を行った (平成 28(2016)年 9 月) ・佐賀県栄養士会公衆衛生事業部研修会にて「食物アレルギーの実践指導について」を講演 (平成 29(2017)年 2 月) ・佐賀県伊万里保健福祉事務所の依頼で、保育所給食研修会にて「アレルギー対応について」講演を行った (平成 29(2017)年 9 月) ・周望学舎シニアカレッジにて本学学生とともに「ロコモティブシンドローム予防のための栄養、食事」について講演・実践指導を行った (平成 29(2017)年 10 月) ・北九州市シニアカレッジにて「生き生きシニアライフは日々の食事から」の講演を行った (平成 30(2018)年 1 月) ・周望学舎シニアカレッジにて本学学生とともに「骨粗鬆症予防のための栄養、食事」について講演・実践指導を行った (平成 30(2018)年 10 月) ・日豊 食べネット 摂食・嚥下研修会において、「“嚥下調整食 学会分類 2013 “を学び直しませんか？」の講演を行った (平成 31(2019)年 1 月) ・北九州市シニアカレッジにて「“おかしい” と思ったら『FAST』を確認」の講演を行った

	(平成 31(2019)年 2 月)
	・佐賀県唐津保健福祉事務所の依頼で、保育所給食研修会にて「アレルギー対応について」の講演を行った (令和 1(2019)年 8 月)
	・福岡県博多健勝会研修会にて「健康第一！食事プラン」の講演を行った (令和 2(2020)年 1 月)
	・第 19 回多職種連携研修会にて「住み慣れた地域で、自分らしく“食べる”・“生きる”」の講演を行った (令和 2(2020)年 2 月)
	・福岡地区学校給食連合会の依頼で、学校栄養教諭等に対し、「食物アレルギーにおける個別的な相談指導について」講演を行った (令和 4(2022)年 3 月)
	・福岡糖尿病療養指導士認定試験講習会講師「ライフステージ別の栄養指導」の講演を行った (令和 4 (2022) 年 7 月)
	・福岡市保健医療局健康医療部の依頼で、令和 4 年度第 3 回給食施設従事者研修会「食物アレルギーについて」の講演を行った(YouTube 配信) (令和 5(2023)年 3 月)
	・福岡糖尿病療養指導士認定試験講習会講師「糖尿病の基本治療と療養指導(食事療法の実際)」の講演を行った (令和 5 (2023) 年 6 月)
	・令和 5 年度福岡県介護講座講師「エネルギーの源！高齢者の食事」の講演を行った 令和 5 (2023) 年 7 月)
	・行橋京都学校給食会給食主任者部会研修講師「学校給食における食物アレルギー対応のあり方」の講演を行った (令和 5(2023)年 8 月)
	・令和 5 年度嘉麻市学校給食関係職員研修会「食物アレルギーについて」の講演を行った (令和 6(2024)年 1 月)
	・第 31 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会座長 (平成 26(2014)年 6 月)
	・第 32 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会座長 (平成 27(2015)年 6 月)
	・第 70 回国立病院総合医学会シンポジウム座長 (平成 28(2016)年 11 月)
	・福岡 NST 研究会世話人 (平成 20(2008)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)
	・福岡 PEG・半固形化栄養療法研究会世話人 (平成 22(2010)年 6 月～平成 29(2017)年 3 月)
	・九州 NST 研究会世話人 (平成 22(2010)年 4 月～令和 3(2021)年 3 月)
	・日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会制度委員会委員 (平成 22(2010)年～平成 25(2013)年)
	・日本医療マネジメント学会学会誌査読委員 (平成 25(2013)年～令和 2(2020)年 3 月)
	・日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会学会誌編集委員 (平成 26(2014)年～平成 28(2016)年)
	・福岡県栄養士会常任理事 (平成 24(2012)年～平成 26(2014)年)
	・福岡糖尿病療養指導士認定委員 (平成 27(2015)年～現在に至る)
	・福岡県栄養士会理事 (平成 28(2016)年 6 月～平成 30(2018)年 5 月)
	・福岡県栄養士会理事 北九州支部長 (令和 4(2022)年 6 月～現在に至る)
認定資格等	ケアマネージャー (平成 11(1999)年 5 月) 福岡糖尿病療養指導士 (平成 12(2000)年 11 月) 病態栄養認定管理栄養士 (平成 17(2005)年 4 月) NST 専門療法士 (平成 19(2007)年 2 月) TNT・D 認定管理栄養士 (平成 22(2010)年 7 月) サプリメントアドバイザー (平成 22(2010)年 12 月) 臨床栄養師 (平成 24(2012)年 6 月) 小児アレルギーエデュケーター (平成 25(2013)年 4 月) がん病態栄養専門管理栄養士 (平成 26(2014)年 4 月)
所属学会	日本栄養士会 (昭和 54(1979)年～現在に至る) 日本病態栄養学会 (平成 13(2001)年～現在に至る) 日本静脈経腸栄養学会 (平成 15(2003)年～現在に至る) 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会 (平成 18(2006)年～平成 29(2017)年 4 月) 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会理事 (平成 21(2009)年～平成 23(2011)年) 日本健康・栄養システム学会 (平成 24(2012)年～現在に至る) 日本栄養改善学会 (平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月、平成 29 年 4 月～現在に至る) 日本医療マネジメント学会 (平成 17(2005)年～令和 2(2020)年 3 月)

	日本小児臨床アレルギー学会 (平成 29(2017)年 5 月～現在に至る)
受賞歴	(社) 福岡県栄養士会長表彰 (平成 6(1994)年 10 月)
	(社) 日本栄養士会長表彰 (平成 11(1999)年 6 月)
	全国国立病院管理栄養士協議会会長表彰 (平成 16(2004)年 11 月)
	国立病院機構理事長表彰 (平成 24(2012)年 10 月)
	第 66 回国立病院総合医学会 ベスト口演賞受賞 (平成 24(2012)年 11 月)
	福岡県知事感謝状 (平成 25(2013)年 10 月)
	福岡県知事表彰 (平成 27(2015)年 10 月)
	第 69 回国立病院総合医学会 ベストポスター賞受賞 (平成 27(2015)年 11 月)
	九州国立病院管理栄養士協議会感謝状 (平成 28(2016)年 9 月)
	日本臨床栄養代謝学会感謝状 (令和 3(2021)年 10 月)
	厚生労働大臣感謝状 (令和 4(2022)年 10 月)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>〔食物栄養学部 食物栄養学科〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアガイダンス I ・基礎統計学 ・人間関係の心理 ・栄養カウンセリング ・高齢者心理学 ・教育心理学 ・教育相談 ・教職実践演習 (栄養教諭)
専 門 分 野	■臨床心理学 (心理療法論・イメージ療法)
最 終 学 歴	九州大学大学院博士課程後期 教育学研究科/教育心理学専攻 単位取得退学
学 位	修士 (教育学)
職 歴	<p>九州大学心理教育相談室 主任及び副主任 (1998年4月～2000年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 カウンセリング I・II等 担当 (2000年4月～2007年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 栄養カウンセリング, 学校カウンセリング等 担当 (2007年4月～2018年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 栄養カウンセリング, 教育相談等 担当 (2018年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○『演習 栄養教育 (第7版)』大里進子ほか (編著) (2017年 医歯薬出版株式会社) 管理栄養士を目指す学生を対象とする栄養教育論のテキストである。筆者が分担執筆した章では、行動科学とカウンセリングの理論と技法について概説している。さらに理解を深めるために演習課題を多く設定した。</p> <p>○『イラスト栄養教育・栄養指導 (第5版)』城田智子ほか (編著) (2019年 東京教学社) 管理栄養士を目指す学生を対象とする栄養教育論のテキストである。筆者が分担執筆した章では、行動科学とカウンセリングの理論とモデルについて、イラストを多用して、わかりやすく概説した。</p>
主な研究活動	<p>【著書】</p> <p>1. 「イメージの体験様式に関する研究」田嶋誠一 (編)『現実に介入しつつ心に関わる[展開編]』 (2017年 金剛出版)</p> <p>(概要) イメージ療法の治癒要因の一つであるイメージの体験様式の変化過程に関する研究の動向と今後の展開について論じた。</p> <p>【学術論文】</p> <p>1. 「イメージ療法におけるイメージの体験様式に関する研究」 (心理臨床学研究 第26巻 第3号 2008年)</p> <p>(概要) イメージ面接を実験協力者に実施し、自己記述式のイメージの体験様式を測定する尺度を作成した。そして、イメージの中の視点, 想像的関与, 没入との関連について検討した。</p> <p>2. 「未来志向的イメージ法のマニュアル作成の試みー将来の自分の姿を思い浮かべてー」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第10号 2013年12月)</p> <p>(概要) 未来志向的イメージ法のマニュアルを作成し、実験協力者の試行的に実施した。その結果、将来に対するイメージが明確になり、前向きな姿勢が生じる等の肯定的な変化が見られた。</p> <p>3. 「イメージ療法におけるイメージの体験様式の変化過程」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第15号 2018年12月)</p> <p>(概要)</p>

	<p>イメージ面接の逐語記録からイメージの体験様式を5段階（レベル）で評定するスケールを作成し、レベルに影響を与える要因について探索的に検討した。</p> <p>4. 「九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学カウンセリングルームの現状と課題（4）」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第16号 2019年12月)</p> <p>(概要) 九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学カウンセリングルームの平成26～30年度の学生相談活動について報告し、現状を分析した上で、今後の課題について検討した。</p> <p>5. 「イメージの体験様式から見たトラウマとその治療—統合的な理解に向けて—」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第17号 2020年12月)</p> <p>(概要) トラウマ関連技法について概説し、それらの治療プロセスをイメージの体験様式と言う概念を援用することで統合的に理解できることを示した試論である。</p>
主な社会活動	<p>周防学舎シニアカレッジ講師 (2019年8月)</p> <p>児童養護施設なかべ学院安全委員会委員長 (2021年4月～現在に至る)</p> <p>福岡県栄養士会 生涯教育 支部研修講師 (2023年7月)</p>
所属学会	<p>日本心理臨床学会員 (1994年～現在に至る)</p> <p>日本人間性心理学会員 (1995年～現在に至る)</p> <p>日本催眠医学心理学会員 (1997年～現在に至る)</p> <p>日本学生相談学会員 (2009年～現在に至る)</p>
受賞歴	なし

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公衆栄養学Ⅰ、公衆栄養学Ⅱ ・公衆栄養学実習（学内） ・臨地実習Ⅱ（保健所・保健センター） ・臨地実習指導（演習）、食環境地域連携演習 ・キャリアデザイン ・管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ、専門ゼミナール
専門分野	■ 公衆栄養学
最終学歴	山口県立大学 家政学部 食物栄養学科管理栄養士専攻
学位	学士（家政学）
職歴	<p>北九州市役所 民生福祉部総務課 (昭和57年5月～昭和61年3月)</p> <p>小倉北保健所 保健予防課 (昭和61年4月～平成2年3月)</p> <p>若松保健所 保健予防課 (平成2年4月～平成5年3月)</p> <p>北九州市立八幡病院 栄養管理科 (平成5年4月～平成7年3月)</p> <p>北九州市立若松病院 栄養管理科 (平成7年4月～平成10年3月)</p> <p>北九州市教育委員会 学務部 学校保健課 (平成10年4月～平成12年3月)</p> <p>八幡西区役所 生活支援課 (平成12年4月～平成16年3月)</p> <p>戸畑区役所 生活支援課 (平成16年4月～平成18年3月)</p> <p>北九州市子ども家庭局 子ども家庭部保育課栄養指導担当係長 (平成18年4月～平成21年3月)</p> <p>北九州市子ども家庭局 子ども家庭部子育て支援課栄養指導担当係長 (保育課兼務栄養指導担当係長) (平成21年4月～平成22年3月)</p> <p>北九州市保健福祉局 地域支援部健康推進課栄養改善担当係長 (平成22年4月～平成27年3月)</p> <p>北九州市子ども家庭局 子ども家庭部栄養指導担当課長 子育て支援課母子栄養指導担当課長兼務 (平成27年4月～平成28年3月)</p> <p>北九州市保健福祉局 健康医療部食育・栄養改善担当課長 (平成28年4月～平成30年3月)</p> <p>北九州市子ども家庭局 母子栄養指導担当課長兼務 (子ども食堂担当) (平成28年10月～平成30年3月)</p> <p>北九州市保健福祉局 認知症支援・介護予防センター 地域活動推進担当課長兼務 (平成29年4月～平成30年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 特任教授 (平成30年4月～平成31年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (平成31年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>福岡県栄養士会北九州支部 副支部長 (平成18年～平成21年)</p> <p>福岡県栄養士会研究教育事業部企画運営委員 (令和4年～令和6年)</p> <p>○九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科 非常勤講師 「公衆栄養学Ⅰ」担当 (平成21年4月～平成29年9月)</p> <p>○東筑紫短期大学食物栄養学科 非常勤講師 「公衆栄養学」担当 (平成24年4月～平成28年9月)</p>
主な研究活動	<p>【学術論文】</p> <p>1. 特集「高齢期の栄養問題と介護予防～理論から実践～」 (臨床栄養 平成18年10月 P630～634)</p>

【研究発表】	
	1. 「区と医師会との連携による栄養相談の実施について」 〈主催〉福岡県公衆衛生学会 〈開催年月〉平成 17 年 4 月 (概要) 区と医師会との話し合いの場を設け、医療機関から区役所への紹介による栄養相談を受け、栄養指導結果を医療機関に戻す方策を構築した経緯についての発表
【学会発表】	
	1. 「乳児の哺乳量、離乳食摂取状況と身体発育状況の関連性について」 〈主催〉日本栄養改善学会 〈開催年月〉昭和 61 年
	2. 「区と医師会との連携による栄養相談の実施について」 〈主催〉福岡県公衆衛生学会 〈開催年月〉平成 17 年 4 月
	3. 「北九州市高齢者食生活改善事業『おいしく食べて元気もりもり教室』参加者の食品摂取状況調査から推察される栄養指導の効果判定」 〈主催〉福岡県栄養改善学会 〈開催年月〉平成 27 年 9 月
	4. 「『食生活改善推進訪問事業』による食生活改善効果について」 〈主催〉福岡県栄養改善学会 〈開催年月〉平成 28 年 9 月
【事例報告】 於「全国食事サービス活動セミナー」	
	1. 「介護予防に関する食事サービス～低栄養予防教室の実践～」について 〈主催〉全国老人給食協会 〈開催年月〉平成 18 年 7 月
【事例報告】 於「北九州市食生活改善大会」	
	2. 「低栄養予防教室の実践」について (開催年月) 平成 18 年 10 月
主な社会活動	・「東日本大震災被災地での栄養・食生活支援について」 (被災地での栄養士活動について 50 回ほど講演活動を行う) (平成 23 年 4 月～現在に至る)
	【講演】 「明るい生活はバランスのとれた食事から」(若松区地域ケア研究会) (平成 24 年 11 月)
	【特別講演】 「食を通じた健康づくり」(第 165 回福岡県鍼灸治療学会) (平成 26 年 9 月)
	【基調講演、グループワーク、事例発表、講評】 「調理員は今後保育とどう関わるか」(全国夜間保育園経験交流研究会) (平成 29 年 2 月)
	【パネリスト】 「食品安全シンポジウム～食物アレルギー」 (平成 29 年度 北九州市食品安全シンポジウム) (平成 29 年 11 月)
	【講演】 「食生活改善推進員に期待すること」(八幡東区、若松区、八幡西区食生活改善推進員協議会) (平成 30 年 4 月、31 年 4 月の 3 回)
	【講演】 「食育計画の作成と活用、食物アレルギーについて」 (社会福祉研修所 保育士等キャリアアップ研修 食育・アレルギー研修) (平成 30 年、令和元(年)、令和 2 年、3 年、4 年、5 年)
	【講演】 「乳幼児期の食事について」(光沢寺保育園など 家庭教育学級) (平成 30 年 6 月、平成 31 年 2 月)



	<p>【講演】 「食中毒予防について」〈年長者の里 施設職員対象研修〉 (平成 30(2018)年 6 月)</p>
	<p>【講演】 「保育園児に対する食物アレルギー対策」(あだちのもり保育園など職員) (平成 30(2018)年 7 月)</p>
	<p>【講演】 「乳幼児期の食事について」〈若松区子育てサポーター養成講座〉 (平成 30(2018)年 9 月)</p>
	<p>【講演】 「大切な人を災害から守るために!!・『災害への備え』(八幡東区) (平成 30(2018)年 9 月)</p>
	<p>【講演】 「子どもの食育」(ほっと子育てキャリアアップ研修) (令和 2 年 7 月)</p>
	<p>【講演】 「健康寿命の延伸を目指して」(生涯学習指導者育成ネットワーク研修) (令和 2 年 10 月)</p>
	<p>【講演・調理実習】 「やさしい在宅介護食」(北九州市食生活改善推進員協議会) (令和 3 年 7 月)</p>
	<p>【講演】 令和 3 年度男女共同参画地域フォーラム「災害と食」(八幡東区女性団体連絡会議) (令和 3 年 11 月)</p>
	<p>【講演】 「食生活改善推進員に期待すること」〈戸畑区食生活改善推進員協議会〉 (令和 4 年 4 月)</p>
	<p>【講演】 「社会福祉施設栄養士研修 栄養マネジメントについて」(北九州市社会福研修所) (令和 4 年 10 月)</p>
	<p>【講演】 「保育所調理員研修」(北九州市社会福研修所) (令和 5 年 1 月)</p>
	<p>【講演】 「食は健康の源～食を通じた健康づくりを担うヘルスメイトの 50 年の歩みと今後の役割～」 〈八幡東区食生活改善推進員協議会〉 (令和 5 年 4 月)</p>
	<p>【講演】 「健康の源はおいしく楽しい食事から～ヘルスメイトの果たす役割～」 〈若松区食生活改善推進員協議会〉 (令和 5 年 4 月)</p>
	<p>【講演】 「低栄養と認知症との繋がり」 (北九州市年長者研修大学校穴生学舎研修会) (令和 5 年 6 月)</p>
	<p>【講演・調理実習】 「親子の食育教室」(北九州市食生活改善推進員協議会) (令和 5 年 7 月)</p>
	<p>【講演】 「生き生きとした高齢期を送るための食生活」 (北九州市年長者研修大学校周防学舎シニアカレッジ) (令和 5 年 10 月)</p>
	<p>【講演】 「美味しく食べて元気もりもり！冷凍食品の活用法」(視聴覚障害者生活教室) (令和 5 年 12 月)</p>
	<p>・西部ガスキッチン情報誌 製鉄八幡記念病院 土橋院長との対談「減塩について」 (平成 27(2015)年 4 月)</p>
	<p>・糖尿病療養指導士として地域の糖尿病フェスタ等で栄養指導を実施 (平成 10(1998)年～平成 26(2014)年)</p>
	<p>・西部ガス親子クッキング審査員 (平成 30(2018)年、令和元(2019)年 10 月)</p>
	<p>・北九州市口腔保健推進会議 構成員 (令和 2 年)</p>
	<p>・「食でつながるフェスタ in 福岡」実行委員長 (令和元年 12 月)</p>
	<p>・子ども食堂ネットワーク北九州代表 (令和 2 年～現在に至る)</p>
	<p>・北九州市立保育所給食調理業務受託候補者選定検討会座長 (令和元年～現在に至る)</p>
	<p>・「北九州技の達人」検討会構成員 (令和 3 年～現在に至る)</p>
	<p>・北九州市児童福祉施設等第三者評価委員 (令和 4 年～現在に至る)</p>
	<p>・北九州市食品衛生懇話会会員 (令和 4 年～現在に至る)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども食堂開設促進事業業務委託審査委員 (令和4年) ・北九州市公営競技局子ども食堂運営等業務委託審査委員 (令和5年3月) ・北九州市社会福祉協議会総合企画委員会委員 (令和5年～現在に至る)
所属学会	日本栄養士会 (昭和58(1983)年～現在に至る) 栄養改善学会 (令和2(2020)年～現在に至る)
受賞歴	福岡県食生活改善協会感謝状 (平成元(1989)年2月) 福岡県栄養士会長表彰 (平成11(1999)年9月) 日本栄養士会長表彰 (平成14(2002)年6月) 福岡県知事感謝状 (平成26(2014)年9月) 公衆衛生事業功労者福岡公衆衛生推進機構理事長表彰 (令和2(2020)年12月)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> 健康スポーツ科学Ⅰ、健康スポーツ科学Ⅱ 運動生理学 運動処方論 専門ゼミナール 管理栄養士演習Ⅰ、管理栄養士演習Ⅱ 卒業論文 食健康センター活動（演習） <p>-----</p> <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> 運動生理学
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 健康科学 ■ 健康心理学
最 終 学 歴	日本体育大学大学院 体育学研究科 健康科学専攻
学 位	博士（医学） 修士（体育学、文学）
職 歴	<p>久留米大学医学部薬理学教室 助手 (1994年4月～2007年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科 講師 (2007年4月～2016年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 就職指導課指導主事 (2014年4月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 (2016年4月～2021年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (2021年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○文部科学省新体力テストを継続的に実施し、健康や体力に関する情報の管理活用能力および専門職への意識を高める健康教育を行っている。</p> <p>○株式会社UHA 味覚糖や株式会社ユーザーライフサイエンスと連携のもと食品の機能性（健康に対する有用性）について検証し卒業論文指導にあたっている。</p> <p>○就職指導主事として学部との連携を図り、きめ細かな就職支援を行い専門性の高い就職実績を得ている。</p>
主な研究活動	<p>【著書】</p> <p>-----</p> <p>「泣くとストレスが緩和するか なぜ泣くの；涙と泣きの大研究」(朝日新聞社発行 62-77) 共著 (概要)</p> <p>日本と韓国の大学生を対象に実施した『涙と泣き』に関する現象の調査結果について述べるとともに、ストレスを緩和する要因としての泣く事の意義について考察した。また心因性の涙を促す場面を実験的に設定し、カオスアトラクターを用いて自律神経系の変化を調べた。</p> <p>-----</p> <p>「不安研究における動物モデルの役割」(心理学評論 36(1):50-63.1993) 共著 (概要)</p> <p>防御性覆い隠し反応モデルを利用して、役割ストレスによる不安の形成と発現の生物学的基礎過程を解明する行動神経科学的研究を介し、不安の動物モデルの目的と役割などについて考察した。さらに不安の発現と関連する脳内 NA 神経系の神経科学的变化について明らかにし行動学的変化の対応について検証した。</p> <p>-----</p> <p>「ストレスコーピングの心理・生物的相関」(脳と精神の医学 5(2):149-157) 共著 (概要)</p> <p>ストレスのトランスアクションな理論によるストレスコーピング過程のメカニズムを解明するために、動物の問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングと相関する心理・生物的ストレス反応を分析し明らかにした。</p>

	<p>「ストレスの神経科学のおよび神経薬理学的研究」(ストレス科学 10 (1) 70-75 1995) 共著 (概要) ストレスが中枢神経系にどのような影響を及ぼすかを神経科学的にとらえていくための方法論 について述べた。</p>
<p>【学術論文】</p>	
	<p>1. 「月経周期に伴うメンタル・ストレス反応の変化」(久留米医学会雑誌 69 : 14-23 2006) (概要) 各月経周期にメンタルテストを負荷し、唾液中 MHPG、コルチゾール、HVA 濃度を測定するとともに精神的健康度や POMS との関連について検証した。</p>
	<p>2. 「新体力テストからみた本学学生の体力と生活習慣について」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第 4 号 平成 19 年 12 月) (概要) 本学学生における新体力テストの横断的資料を用いて身体的特徴および体力レベルを把握するとともに、運動習慣との関連について検証した。</p>
	<p>3. 「一般アスリートのコンディションにおける分岐鎖アミノ酸」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第 6 号 平成 21 年 12 月) (概要) 大学一般運動部学生のコンディションにおける BCAA 摂取の影響を検討するために、唾液中コルチゾール濃度、s-IgA 濃度の変化および主観的な気分の変化について明らかにした。</p>
	<p>4. 「女子大学生における健康行動と健康リスク意識」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第 7 号 平成 22 年 12 月) (概要) 青年期における望ましい健康行動の確立を検証するために、本学学生の健康行動と健康リスク意識について調査した。</p>
	<p>5. 「大学生におけるヤマブシタケの睡眠改善効果」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第 10 号 平成 25 年 12 月) (概要) 睡眠問題を経験している大学生を対象に抗ストレス作用のあるヤマブシタケ摂取が睡眠に及ぼす影響について NA 代謝産物である MHPG 含量および質問紙を用いて検証した。</p>

	<p>6. 「カテキン・還元型コエンザイム Q10 含有飲料摂取が運動時代謝に及ぼす影響」 (九州栄養福祉大学研究紀要 第 11 号 平成 26 年 12 月)</p> <p>(概要) 生活習慣病予防としての健康教育の一助となる機能性食品の活用が運動時のエネルギー代謝に及ぼす影響について検証した。</p>
	<p>7. The effects of <i>Hericium erinaceus</i> (Amyroban3399) on sleep quality and subjective well-being among female undergraduate students: A pilot study (Personalized Medicine Universe 4(7) 76-78.2015) 共著</p> <p>(概要) This pilot study assessed the effects of 4 weeks of administration of Amyroban 3399 on subjective well-being and sleep quality in female undergraduate students.</p>
	<p>8. 「コロナ禍における「岡大プログラム」の有効性」 (大学体育スポーツ学研究 18. 049-055 令和 3 年 4 月) 共著</p> <p>(概要) コロナ禍における大学生の身体活動量を検証するため、「岡大プログラム」を活用し「岡大プログラム」の有効性について検証した。</p>
	<p>9. 「SOYLAX®(大豆タンパク質酵素分解物)配合タンパク質食摂取がアスリートのストレス反応と主観的健康観に与える影響—ランダム化プラセボ対照二重盲検並行群間比較試験」 (薬理と治療 49 (7) 2021 1157-1164 共著)</p> <p>(概要) SDP を配合したタンパク質食の経口摂取がアスリートのストレスと主観的健康度に与える効果を検証した。</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州市スポーツ推進審議会委員 (2017 年～現在に至る) ・北九州市スポーツ協会理事 (2018 年～現在に至る) ・北九州市社会教育委員 (2023 年 11 月～現在に至る) ・東筑紫学園のキャンパスで学ぶ周望学舎シニアカレッジ (平成 19 年、20 年、27 年) 北九州市内在住の 60 歳以上の方 約 60 名の受講者を対象として「健康いきいき—食事と運動—パート 2」、「楽しい筋力トレーニングのすすめ」をテーマに健康維持、増進を目的としたレジスタンス運動や柔軟体操を実施し、安全でより高い効果が得られるよう指導を行った。 ・福岡県立戸畑高等学校家庭クラブ研修会 (2008 年、2009 年 9 月) 福岡県立戸畑高等学校 1、2 学年生徒 (514 名) を対象に「スポーツと栄養」についての研修会において講師を務めた。 ・北九州市立大学野球部栄養サポート (2007 年～2008 年) ゼミ活動の一環として野球部員の栄養サポートを行った。また 20 年にはコンディショニングにおける BCAA 摂取の影響を調査し検証した。 ・福岡県立戸畑高等学校野球部栄養サポート (2009 年 5 月～12 月) ゼミ活動の一環として生徒の栄養サポートおよび保護者会における栄養教育を行った。 ・折尾愛真高等学校女子新体操部栄養サポート (2010 年 5 月～2 月) ゼミ活動の一環として新体操部員の栄養サポートを行い、またウエイトコントロール期におけるコラーゲンペプチド飲料摂取のストレス緩和効果を調査し検証した。 ・豊国学園高等学校サッカー部栄養サポート (2012 年 5 月～2015 年 1 月) ゼミ活動の一環としてサッカー部員の栄養サポートならび保護者における栄養教育を行った。 ・福岡県立小倉西高等学校野球部栄養サポート (2015 年 5 月～現在に至る) ゼミ活動の一環として野球部員の栄養サポートを行い、栄養教育の重要性を確認し、またスポーツ貧血における鉄グミサプリメントの有用性を検証した。 ・北九州市立大学野球部栄養サポート (2019 年 5 月～2 年 3 月) 大豆由来ペプチドを用いて心身へのコンディショニングの影響を検証し、栄養教育を行った。
所属学会	<ul style="list-style-type: none"> 日本体力医学会 (2000 年～現在に至る) 日本健康心理学会 (2003 年～現在に至る)
	<ul style="list-style-type: none"> 日本心臓リハビリテーション学会 (2007 年～現在に至る) 日本スポーツ栄養学会 (2008 年～現在に至る)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・化学 ・有機化学 ・栄養薬理学Ⅰ、栄養薬理学Ⅱ [九州栄養福祉大学 大学院 健康科学研究科] ・健康科学特別講義・健康科学研究法特論講義 ・薬理学特論Ⅰ、薬理学特論Ⅱ [東筑紫短期大学 食物栄養学科] ・薬理学	
専 門 分 野	■薬理学 ■衛生薬学 ■生化学 ■薬物代謝学	
最 終 学 歴	福岡大学・大学院博士課程前期	
学 位	博士(薬学)／薬学修士／薬学士	薬学部薬学科／生化学専攻 修了
職 歴	久光製薬(株) 研究所研究員(薬理・生化学研究室) (1980年4月～1984年3月) 福岡大学薬学部助手(生化学教室) (1984年4月～1995年1月) 国立療養所南福岡病院付属看護学校兼任講師(生化学(薬理学、栄養学、免疫学を含む)) (1992年4月～1995年3月) 福岡大学薬学部講師(生化学教室) (1995年2月～1995年3月) 第一薬科大学専任講師(公衆衛生学、病態生理学、特別演習) (1995年4月～2002年9月) 博士研究員(米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(University of California at Los Angeles: UCLA) 医学部 分子薬理学教室) (1998年1月～1999年1月) 独立行政法人国立病院機構九州医療センター附属福岡看護助産学校兼任講師(生化学(薬理学、栄養学、免疫学を含む)) (1999年4月～2001年3月) 第一薬科大学専任助教授(公衆衛生学、特別演習) (2002年10月～2008年3月) 第一福祉専門学校兼任講師(公衆衛生学(3年生)) (2004年4月～2007年3月) 第一薬科大学准教授(食品衛生学A(3年生)、食品衛生学B(3年生)、公衆衛生学S(3年生)、特別演習(4年生、6年生)、入試問題作成委員(化学、生物)) (2008年4月～2010年3月) 第一薬科大学教授(食品衛生学Ⅰ(3年生)、食品衛生学Ⅱ(3年生)、薬学への招待(1年生)、特別演習(4年生、6年生)、衛生化学分野主任教授) (2010年4月～2021年3月) 第一薬科大学教務副部長 (2010年4月～2011年3月) 福岡こども短期大学兼任講師(公衆衛生学(2年生)) (2011年4月～2018年3月) 第一薬科大学教務部長代理 (2011年4月～2012年10月) 第一薬科大学学部長 (2018年3月～2020年3月) 第一薬科大学厚生部長 (2020年4月～2021年3月) 第一薬科大学大学院教授 (2020年8月～2021年3月) 九州大学大学院薬学研究院非常勤講師(衛生化学Ⅱ) (2022年10月～現在に至る)	

	九州栄養福祉大学食物栄養学部 食物栄養学科教授 (栄養薬理学Ⅰ、栄養薬理学Ⅱ、有機化学、化学) (2023年3月～現在に至る) 大学院健康科学科教授 (薬理学特論)
教育上の業績	○教育方法の実践例：講義・実習 教育内容の工夫等 基本的には板書を主体として講義を進めており、適宜配布資料とパワーポイント(パワーポイントの内容はPDFファイルで事前に配布)を用いて学生の理解を深める工夫をした。また、教育の補完・補充のため、「衛生化学および公衆衛生学実習書」、「衛生薬学実習書」(第一薬科大学 衛生化学分野 編)(2年～3年毎に改訂)、衛生薬学資料集Ⅰ、「衛生薬学資料集Ⅱ」(第一薬科大学 衛生化学分野 編)等を作成した。 ○学部学生の指導および卒業研究の指導、大学院生の研究指導等 福岡大学薬学部および大学院にて学士、修士、博士を、また第一薬科大学においても多くの学士を輩出した。さらに九州大学大学院薬学府臨床薬学専攻博士課程の大学院生を指導した。
	【作成した教科書・著書】
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「新衛生薬学系実習」(共著) 編者 手塚雅勝、山本郁夫 地人書館：担当部分(全般的全149頁)(2006年) 2. 「最新公衆衛生学(第4版)」(共著) 編者 中室克彦、小嶋仲夫、棚田成紀 廣川書店：担当部分(21頁/478頁)(2007年) 3. 「INTEGRATED ESSENTIALS 衛生化学・公衆衛生学(改訂第4版)」(共著) 編者 早津彦哉、菊川清見、大沢基保 南江堂：担当部分(22頁/450頁)(2007年) 4. 「予防薬学としての衛生薬学-健康と環境-」(共著) 編者 吉原新一、繪柳玲子 廣川書店：担当部分(56頁/437頁)(2009年) 5. 「最新公衆衛生学(第5版)」(共著) 編者 中室克彦、小嶋仲夫 廣川書店：担当部分(28頁/478頁)(2010年) 6. 「新 衛生化学・公衆衛生学」(共著) 編者 大沢基保、福井哲也、永沼章 南江堂：担当部分(20頁/425頁)(2011年) 7. 「コンパス衛生化学-健康と環境-」(共著) 編者 鍛冶利幸、佐藤雅彦 南江堂：担当部分(13頁/438頁)(2011年) 8. 「予防薬学としての衛生薬学-健康と環境- 第2版」(共著) 編者 吉原新一、山野茂、戸田晶久 廣川書店：担当部分(56頁/437頁)(2012年) 9. 「薬学のための医療統計学」(共著) 編者 竹内正弘、細川友和、山村重雄 廣川書店：担当部分(28頁/234頁)(2014年) 10. 「最新公衆衛生学(第6版)」(共著) 編者 上野仁、小嶋仲夫、中室克彦 廣川書店：担当部分(48頁/375頁)(2015年) 11. 「スタンダード薬学シリーズⅡ5；衛生薬学 健康と環境」(共著) 編者 太田茂、原俊太郎、姫野誠一郎 東京化学同人：担当部分(13頁/456頁)(2016年) 12. 「衛生薬学 基礎・予防・臨床」(共著) 編者 今井浩孝、小椋康光 南江堂：担当部分(25頁/624頁)(2016年) 13. 「コンパス衛生薬学 -健康と環境- (改訂第2版)」(共著) 編者 鍛冶利幸、佐藤雅彦 南江堂：担当部分(16頁/565頁)(2016年) 14. 「予防薬学としての衛生薬学 -健康と環境- 第3版」(共著) 編者 山野茂、戸田晶久 廣川書店：担当部分(51頁/494頁)(2016年) 15. 「衛生薬学 基礎・予防・臨床 改訂第2版」(共著) 編者 今井浩孝、小椋康光 南江堂：担当部分(29頁/674頁)(2018年) 16. 「衛生薬学 基礎・予防・臨床 改訂第3版」(共著) 編者 今井浩孝、小椋康光 南江堂：担当部分(29頁/約674頁)(2020年) 17. 「コンパス衛生薬学 -健康と環境- (改訂第3版)」(共著) 編 鍛冶利幸、佐藤雅彦 南江堂：担当部分(16頁)(2020年) 18. 「スタンダード薬学シリーズⅡ 第9巻 薬学演習Ⅲ. 薬学総論・衛生薬学」(共著) 編者 太田茂、原俊太郎、姫野誠一郎 東京化学同人：(分担執筆：SBO22～SBO29、21問)他(2020年)

	<p>19. 「予防薬学としての衛生薬学 -健康と環境- 第4版」(共著) 編者 山野茂、戸田晶久 廣川書店:担当部分 (51頁/494頁) (2022年)</p> <p>20. 「衛生薬学 基礎・予防・臨床 改訂第4版」(共著) 編者 今井浩孝、小椋康光 南江堂:担当部分 (29頁/約674頁) (2023年)</p> <p>21 「南山堂薬学大辞典」(共著) 南山堂:分担執筆 (37項目) (2025年以降に印刷予定)</p> <p>22. 「衛生薬学 基礎・予防・臨床 改訂第5版」(共著) 編者 今井浩孝、小椋康光 南江堂:担当部分 (29頁/約674頁) (2025年発刊予定)</p> <p>23. 「予防薬学としての衛生薬学 -健康と環境- 第5版」(共著) 編者 戸田晶久、杉原数美、杉原成美 廣川書店:担当部分 (51頁/494頁) (2025年発刊予定)</p>
<p>主な研究活動</p>	<p>【総説】</p>
	<p>1. 「乾癬の病態モデル動物とスーパー抗原」(単著) Farumashia, 33(2) (P195~P196) (1997年)</p> <p>2. 「薬物アレルギーとキャリアタンパク質」(単著) Xenobiotic Metabolism and Disposition, ADME Line 16, [2] (P158~P159) (2001年)</p> <p>3. 「ノシセプチンの GABA/ベンゾジアゼピンおよびオピオイド受容体の作用における関与・抗不安作用と退薬症候発現機構の関わり」(共著) Annual report of Daiichi University of Pharmacy No.27 (第一薬科大学研究年報第27号) (2011年)</p>
	<p>【学術論文】</p>
	<p>1. Effect of dl-3-pyridylalanine on serotonin concentration and tryptophan-serotonin metabolizing enzymes in rats (共著) 1981.11 Chemical and Pharmaceutical Bulletin Vol. 29, No. 10 (P2940~P2948) Shimeno H, Fukumoto Y, <u>Toda A</u>, Nagamatsu A.</p>
	<p>(概要) dl-3-pyridylalanine 投与による肝臓トリプトファンピロラーゼの酵素阻害作用によって、末梢臓器中のセロトニン含量には殆ど影響することなく、ラットの脳内セロトニン濃度の上昇のみを引き起こす事を明らかにした。この現象は、肝臓のトリプトファンピロラーゼの特異的阻害作用により血中および脳内トリプトファン濃度が生理的に上昇した結果、引き続き脳内セロトニン濃度が生理的分布で上昇しているものと思われる。</p>
	<p>2. ラット脳および末梢組織セロトニン量におよぼす DL-3-Pyridyl-alanine および 5-Hydroxy-L-tryptophan の併用投与の影響 (共著) 1983.5 薬学雑誌 Vol. 103, No. 5 (P544~P552) 占野廣司、福元洋子、戸田晶久、永松淳雄</p>
	<p>(概要) DL-3-Pyridylalanine のトリプトファンピロラーゼ酵素の特異的阻害作用によるラット脳内セロトニン濃度の上昇を明らかにしており、この作用を更に効果的にするために、セロトニン前駆体との併用を試みた。その結果、DL-3-Pyridylalanine 及び 5-Hydroxy-L-tryptophan の併用投与によってラットの脳および各末梢組織のセロトニン量上昇を明らかにした。また、DL-3-Pyridylalanine 及び 5-Hydroxy-L-tryptophan の併用効果の有用性を、条件回避反応による実験結果からも確認した。</p>
	<p>3. In vitro における Des-Arg9-bradykinin およびその kininase II 水解産物のラット多核白血球遊走におよぼす影響 (共著) 1984.6 薬学雑誌 Vol. 104, No. 6 (P659~P698) 井ノ口仁一、永松淳雄、谷口恭章、戸田晶久</p>
	<p>(概要) Kininase II は Des-Arg9-bradykinin に対して極めて強い tripeptidyl carboxypeptidase 作用を示すことから、kininase II の水解産物である Ser-Pro-Phe は、ブラジキニンと共に炎症局所における多核白血球遊走に関与している可能性が示唆された。多核白血球の遊走実験は Boyden 法を用いて検討し、kininase II の水解産物である Ser-Pro-Phe は、ブラジキニンの約2分の1の多核白血球遊走能を認めた。</p>

4. Ketoprofen ゲル状軟膏 (KPG)の薬理学的研究 (第一報) 抗炎症・鎮痛作用

(共著) 1985.5 応用薬理 Vol. 29, No. 5 (P833~P843)

斉田勝、竹之下博隆、谷口恭章、古田研一、青木哲雄、下園雄治、戸田晶久、溝口威伸、中川晃、松浦晃治、辻正義

(概要)

3% Ketoprofen ゲル状軟膏 (KPG)の経皮吸収およびウサギの抗原惹起性関節炎の効果を検討した。KPG の塗布後ケトプロフェンの筋肉及び関節組織への高い浸透性が認められた。KPG 塗布群は、対照群に比較して滑膜のプロスタグランジンの著明な減少と関節浮腫の経時的な減少が確認された。また、滑膜の酸性ホスファターゼ(AP)活性及び総蛋白量には変化は認められなかったが、関節内滲出液の AP 活性の軽度の減少が認められた。

5. Ketoprofen ゲル状軟膏 (KPG) の薬理学的研究 (第2報) 抗炎症作用および経皮吸収

(共著) 1985.5 応用薬理 Vol. 29, No. 5 (P845~P856)

斉田勝、谷口恭章、竹之下博隆、戸田晶久、古田研一、下園雄治、矢野忠則、古川一秀、権藤敏、荒木栄喜、中川晃、松浦晃治、辻正義

(概要)

3% Ketoprofen ゲル状軟膏 (KPG)の経皮吸収およびウサギの抗原惹起性関節炎の効果を検討した。KPG の塗布後ケトプロフェンの筋肉及び関節組織への高い浸透性が認められた。KPG 塗布群は、対照群に比較して滑膜のプロスタグランジンの著明な減少と関節浮腫の経時的な減少が確認された。また、滑膜の酸性ホスファターゼ(AP)活性及び総蛋白量には変化は認められなかったが、関節内滲出液の AP 活性の軽度の減少が認められた。

6. Effects of experimental diabetes on aminopyrine metabolism in rats

(共著) 1987.9 Xenobiotica Vol. 17, No. 9 (P1075~P1083)

Toda A, Shimeno H, Nagamatsu A, Shigematsu H.

(概要)

アロキサン及びストレプトゾトシンで誘導した実験的糖尿病ラットに於ける、アミノピリンの代謝を正常ラットと比較検討した。正常ラットに比較して糖尿病ラットでは、アミノピリン代謝全体が低下して多くの中間代謝物の生成量が減少するものの、一部の代謝物 (AM-CH₂OH) は逆に増加することが判明した。このことより、本代謝物生成に関与する CYP 分子種の変動が示唆された。このように一定の変化を示さない事から、病態時の薬物代謝の評価には、正常状態の薬物代謝と比較検討することが重要となると思われる。

7. Inhibition of rat liver tryptophan pyrrolase activity and elevation of brain tryptophan concentration by administration of DL- α -amino- β -pyridinepropanoic acid (pyridylalanine) analogs

(共著) 1987.12 Journal of Enzyme Inhibition Vol. 2 (P56~P66)

Shimeno H, Bou S, Harada N, Toda A, Nagamatsu A.

(概要)

DL- α -amino- β -pyridinepropanoic acid (pyridylalanine) analogs(2-PA, 3-PA および4-PA)又はその代謝物は、夫々ラット肝臓のトリプトファンピロラーゼ活性 (アポ及びホロ) を直接阻害して脳内のトリプトファン濃度を生理的組織分布に従って上昇する。その結果、上昇したトリプトファンから引き続き起こるセロトニンの生成成により生理的な組織分布で脳内セロトニン濃度の上昇が起こると考えられる。

8. Aminopyrine metabolism in primary monolayer cultures of diabetic rat hepatocytes

(共著) 1988.5 Xenobiotica Vol. 18, No. 5 (P551~P560)

Shimeno H, Toda A, Nagamatsu A, Shigematsu H.

(概要)

新規に開発したコラゲーンゲル/ポリ塩化ビニリデン(PCV)フィルム浮上法に於いて、ラット肝細胞培養を行い長期間の細胞維持に成功した。本培養法を用いて、正常および糖尿病ラット肝細胞に於ける、アミノピリン代謝を検討し、in vivo の結果と比較した。また、アミノピリンを投与した糖尿病ラットで増加する代謝物 (AM-CH₂OH) がインスリンによって用量依存的に減少することを確認した。これは、本代謝物の生成に関与するシトクロム P450 分子種の含量がインスリンにより調節されていることが考えられる。

9. Purification and aminopyrine monooxygenase activity of liver microsomal cytochrome P-450 from alloxan-induced diabetic rats

(共著) 1991.3 Drug Metabolism and Disposition Vol. 19, No. 2 (P291~P297)

Shimeno H, Toda A, S.Ogata S, Nagamatsu A.

(概要)

アロキサン誘導糖尿病ラットから得られたインスリン感受性の二つのシトクロム P450 分子種を夫々、P-450AL-1 及び AL-2 と命名した。これらの分子種は、SDS-PAGE 電気泳動で単一なバンドとして確認され、夫々、分子量 50,000 及び 48,500 で、互いに N 末端アミノ酸配列が異なり、共に既に報告されている糖尿病ラットから精製された分子種のそれとも異なっていた。また、これらの分子種は、アミノピリンに対する、高い3位の水酸化活性を有していた。

10. Cytochrome P-450 in liver microsomes of streptozotocin-induced diabetic rats: purification and characterization

(共著) 1993.2 Biochemica et Biophysica Acta Vol. 1141 (P245~P252)

Toda A, Ogata S, Nagamatsu A, Shimeno H

(概要)

糖尿病のモデル動物の一つであるストレプトゾトシン誘導糖尿病ラットの肝ミクロソームから精製したインスリン感受性の二つのシトクロム P450 分子種を夫々、P-450ST-1 及び ST-2 と命名した。これらの分子種は、SDS-PAGE 電気泳動で単一なバンドとして認められ、夫々、48,500 及び 48,000 の分子量で、互いに N 末端アミノ酸配列が異なり、共に既に報告されている糖尿病ラットから精製された何れの分子種のそれとも異なっていた。

11. 病態時の薬物代謝研究 糖尿病ラットのアミノピリン代謝

(単著) 1993.11 福岡大学 (第 460 号) 学位論文 (P1~P107)

戸田晶久

(概要)

病態時の薬物代謝研究の一貫としてアミノピリンをモデル薬物として用い、病態としては、糖尿病ラットを使用して様々な代謝実験を行った。まず、正常及び糖尿病ラットに投与されたアミノピリンの代謝を薬物速度論的に検討し、肝薬物代謝酵素系に及ぼす影響も調べた。次いで、糖尿病ラットから得られた肝細胞にて肝初代培養を行い、インスリンの効果を検討した。その結果、糖尿病ラットでは、特定の代謝物がインスリンに調節される CYP 分子種により生成していることが示唆されたため、この分子種を精製し、それらの特徴を解析した。最後に本論文では、ヒト糖尿病場合も同様に、CYP 分子種に変動が生じている可能性を指摘し、今後の病態時の薬物代謝研究の重要性を協調した。

12. Effect of adjuvant-induced arthritis on hepatic drug metabolism in rats

(共著) 1994.7 Xenobiotica Vol. 24, No. 7 (P603~P611)

Toda A, Ishii N, Kihara T, Nagamatsu A, Shimeno H.

(概要)

正常、アジュバント関節炎(AA)、インドメタシン処置 AA 及びプレドニゾロン処置 AA ラット肝臓の薬物代謝を検討した。その結果、AA ラット肝臓の P450 と b5 含量および薬物代謝酵素活性 (fp1、fp2、P450 複合酸化酵素、FAD-モノオキシゲナーゼ) がかなり低下していること、更に数種の酵素活性を正常レベルまで回復するためには AA ラットに対する抗炎症剤による治療を長期にわたって続ける必要があることが示された。

13. Studies on Drug Metabolism in Pathological States -Aminopyrine Metabolism in Experimental Diabetic Rats-

(単著) 1995.1 Pharmaceutical Bulletin of Fukuoka University Vol. 19 (P36~P53)

Toda A

(概要)

正常ラットと糖尿病ラットの薬物代謝を様々な観点から比較検討した。糖尿病ラットの肝臓を用いて検討した薬物代謝活性は、基質として用いた薬物あるいは研究者によって異なった様相を呈することを示した。また、アジュバンと関節炎モデル動物とモデル薬物として用いたアミノピリンの代謝結果からは、in vitro の結果を用いて本病態動物の薬物代謝能を一般化することの難しさも示された。今後とも、こうした視点にたつて、各種病態時の薬物代謝研究を重ねることで、薬物の代謝、薬物療法そして薬物開発研究に応分の寄与が出来るものと考えられる。

14. Selective inhibition by nimesulide, a novel non-steroidal anti-inflammatory drug, with

prostaglandin endoperoxide synthase-2 activity in vitro

(共著) 1995.3 Pharmaceutical Sciences Vol. 1 (P179~P181)

Taniguchi Y, Ikesue A, Yokoyama K, Noda K, Debuchi H, Nakamura T, Toda A, Shimeno H.

(概要)

新規に合成した非ステロイド性抗炎症薬である Nimesulide のシクロオキシゲナーゼ (プロスタグランジン エンドパーオキサイド シンターゼ) の阻害効果を検討した。その結果、ヒツジ精液から得られたシクロオキシゲナーゼ-1 に対しては有意な阻害効果を示さず、ヒツジ胎盤から得られたシクロオキシゲナーゼ-2 に対して特異的な阻害効果を示した。これは、Nimesulide が他の NSAIDs に比べて胃腸障害の少ないものになることを示唆している。

15. Liver haem metabolism in adjuvant-induced arthritic rats

(共著) 1996.4 Xenobiotica Vol. 26, No. 4 (P415~P423)

Toda A, Kihara T, Ono N, Nagamatsu A, Shimeno H.

(概要)

アジュバント関節炎ラット (AA) に於いて、肝臓中シトクロム P450 含量が低下することを既に明らかにしており、この低下とヘム代謝の関係を検討した。その結果、AA ラットでは、ヘムの分解酵素であるヘムオキシゲナーゼ活性が上昇していた。また、ヘム生合成に関与する代謝酵素活性は全体的に上昇しているものの、コプロポルフィリノーゲン オキシダーゼ活性のみが極めて低下していた。従って、シトクロム P450 含量の低下は、これらの組み合わせた作用によって起こっていると思われる。

16. Effect of interleukin 1 β -induced fever on hepatic drug metabolism in rat

(共著) 1998.6 Xenobiotica Vol. 28, No. 6 (P559~P569)

Kihara T, Toda A, Umesue I, Ono N, Shigematsu H, Soeda S, Shimeno H.

(概要)

Interleukin 1 β をラットの脳側室内に投与して作成した発熱病態のモデル動物に於いて、肝臓の薬物代謝に及ぼす影響を検討した。ラットの発熱状態においては、シトクロム P450 含量低下や第 I 相の数種の薬物酵素活性、第 II 相の抱合酵素の活性の低下が認められた。また、イムノブロット法により、発熱状態のラット肝臓では、CYP アイソザイムの内、CYP2C11 及び CYP3A が極端に低下している事が判明した。

17. Inhibition by nimesulide of prostaglandin production in rat macrophages

(共著) 1998.1 Drugs under Experimental and Clinical Research Vol. 24, No. 1 (P17~P27)

Taniguchi Y, Yokoyama K, Ikesue A, Noda K, Debuchi H, Nakamura T, Toda A, Shimeno H.

(概要)

新規に合成した非ステロイド性抗炎症薬である Nimesulide のマクロファージに於けるプロスタグランジン生成に対する阻害効果を検討した。その結果、ザイモザン刺激によるマクロファージからの PGE2 産生を阻害した。これは、シクロオキシゲナーゼ-2 (プロスタグランジン エンドパーオキサイド シンターゼ-2 : COX-2) の m-RNA 発現の阻害や COX-2 の誘導阻害ではなく、選択的な COX-2 に対する直接阻害であることが判明した。

18. Hepatic heme metabolism in rats with fever induced by interleukin1

(共著) 1999.2 Research Communications in Molecular Pathology and Pharmacology Vol. 104, No. 2 (P115~P126)

Kihara T, Umesue I, Soeda S, Toda A, Ono N, Shigematsu H, Shimeno H.

(概要)

Interleukin 1 β をラットの脳側室内に投与して作成した発熱病態のモデル動物に於いて、肝臓のヘム代謝に及ぼす影響を検討した。特に、既に明らかにしているシトクロム P450 含量の低下をヘムの生合成系と分解系を中心に調べた。その結果、ヘム生合成系の律速酵素である δ -アミノレブリン酸合成酵素とポルホビリノーゲン合成酵素の有意な活性低下を認めた。一方、ヘム分解系の中心的酵素であるヘムオキシゲナーゼの活性は著しく増加していた。

19. Antigenicity of sulfanilamide and its metabolites using fluorescent-labelled compounds

(共著) 2005.9 Xenobiotica Vol. 35, No. 9 (P911~P925)

Eyanagi R, Toda A, Ishii Y, Saito H, Soeda S, Shimeno H, Shigematsu H.

(概要)

薬物によるアレルギー発現機序の研究のため、スルファニルアミドの活性代謝物の蛍光標識化合物 (DNS-4HABA 等) を用いて肝臓における結合タンパク質の生むを検討した。DNS-4HABA が結合する蛋白を HPLC で単離精製し、N 末端アミノ酸分析を行った所、ラット肝サイトゾル画分から ubiquitin(10kDa)、fatty acid binding protein(30kDa)、ミクロソーム画分から retinol-dehydrogenase (35 kDa)が、モルモット肝サイトゾル画分からは glutathione-S-transferase B (m μ) (25 kDa)が同定された。

20. Effects of experimental diabetes on hepatic drug metabolism in rats: the activities of flavin-containing monooxygenase, the phaseII conjugation reactions and glutathione related enzymes

(共著) 2005.11 Research Communications in Molecular Pathology and Pharmacology Vol. 117, No. 118 (P13~P27)

Toda A, Eyanagi R, Saito H, Soeda S, Shimeno H, Moriyama M, Shigematsu H.

(概要)

アロキサン及びストレプトゾトシン (STZ) 誘導糖尿病ラットに於ける肝薬物代謝 (Flavin-containing monooxygenase (FMO)、グルタチオン関連酵素、phaseII 抱合反応) 等の変動を正常ラットのそれと比較した。その結果、両糖尿病ラットでは、FMO 及び数種の phaseII 抱合酵素並びにグルタチオン関連酵素の酵素活性は、正常ラットのそれに比し有意に高く、この上昇はインスリン処理により何れも正常値に回復した。一方、グルタチオン S-転移酵素活性は、STZ 糖尿病ラットのみで上昇し、これはインスリン処理により正常値に回復せず、糖尿病の高血糖状態に特異的な変化ではないことが明らかとなった。

21. Plasminogen activator inhibitor-1 aids nerve growth factor-induced differentiation and survival of pheochromocytoma cells by activating both the extracellular signal-regulated kinase and c-Jun pathwa

(共著) 2006.5 Neuroscience Vol. 141, No. 1 (P101~P108)

Soeda S, Shinomiya K, Ochiai T, Koyanagi S, Toda A, Eyanagi R, Shimeno H.

(概要)

プラスミノゲン活性化阻害因子-1(PAI-1)は、非血清下でラットの神経細胞突起の伸展とクロム親和性細胞の生存性を高め、続いて起こる神経生長因子受容体 (Trk A) と c-Jun の直接的なリン酸化の両方の活性化を増強する。PAI-1 は、神経組織の栄養因子として働くことを示唆しており、これは神経成長因子の保護だけではなく c-Jun/活性化タンパク質-1 の経路を活性化することでも起こっている。

22. The S-oxidation of PCB methylsulfoxide to PCB methylsulfone with animal liver microsomes and human cytochrome P450

(共著) 2007.4 Persistent Organic Pollutants (POPS) Resarch in Asia Vol. 1(P251~P256)

Kuroki H, Nakai H, Toda A, Mitsutake M, Eyanagi R, Kitamura S.

(概要)

MeSO₂-PCB から MeSO-PCB の S-oxidation に関係する酵素系を明らかにするために、ラット、モルモット、マウスおよびヒト・チトクローム P450 の肝ミクロソームを用いた MeSO₂-CB52 に対する 3-又は 4-MeSO-2,2',5,5'-4 クロロビフェニル (CB52) への S-oxidation を検討した。また、ヒト・フラビン含有モノオキシゲナーゼ (FMO)、3-又は 4-MeSO₂-CB52 の S-oxidation 活性を対照肝ミクロソームで比較検討した。その結果、P450 アイソフォーム、特に、CYP2B6、CYP2C9 と CYP2C19 (フェノバルビタールによる P450 の誘導性のアイソフォーム) は MeSO₂-PCB からの MeSO-PCB の S-oxidation に関与し、FMO アイソフォームはその S-oxidation に関与していないことが確認された。

23. Protective effects of carotenoids from saffron on neuronal injury in vitro and in vivo

(共著) 2007.4 Biochemica et Biophysica Acta Vol. 1770 (P578~P584)

Ochiai T, Shimeno H, Mishima K, Iwasaki K, Fujiwara M, Tanaka H, Shoyama Y, Toda A, Eyanagi R, Soeda S.



(概要)

サフランのカロチノイド色素は、ジ・クロシン、3クロシンおよびクロシンから成る。本研究において、サフランの神経保護の効果が単にクロシンだけに起因するかどうかを確認する為に、低酸素状況下で、PC12細胞におけるクロシンのGSH合成活性を調べた。神経保護の作用強度の順番は、クロシン>3クロシン>ジ・クロシンとピクロクロシンの順であり、これらのサフランの構成要素間で、クロシンが最も効果的にγ-グルタミルシステイニルシンターゼの伝令RNA発現を促進することを示した。これらのことは、カロチノイドがマウスで中大脳動脈の閉鎖に起因する梗塞部を有意に減らすことができるものと考えられる。

24. Acid sphingo-myelinase inhibition suppresses lipopoly saccharide-mediated release of inflammatory cytokines from macrophages and protects against disease pathology in dextran sulphate sodium-induced colitis in mice

(共著) 2007.9 Immunology Vol. 122 (P56~P64)

Sakata A, Ochiai T, Shimeno H, Hikishima S, Yokomatsu T, Shibuya S, Toda A, Eyanagi R, Soeda S.

(概要)

LPSを介するTHP-1マクロファージからのTNF、IL-1とIL-6の遊離、デキストラン硫酸塩ナトリウム(DSS)で誘導したマウスの大腸炎の病態および強力な抑制薬(SMA-7)の効果を報告した。SMA-7は、LPS誘発によるサイトカイン遊離と核因子(NF)-B活性化を抑制した。LPSの刺激は、酸性SMaseの活性化を4倍増加したが、中性SMaseの活性はわずかな増加であった。10μM SMA-7の存在下では、酸性SMaseは対照レベルのままであり、セラミドの生成を減弱した。しかしながら、SMA-7とLPSを処置したマクロファージを含む培地で大腸細胞を培養すると生存性が良く、セラミドは大腸細胞に対して細胞障害因子を遊離するLPS刺激情報伝達の役割があることを示唆した。

25. Cholesterol-independent, MAPK/ERK signal-mediated Simvastatin potentiation of nerve growth factor-induced neurite outgrowth in PC-12 cells

(共著) 2008.1 Pharmaceutical Bulletin of Fukuoka University Vol. 8, No. 32 (P146~P159)

Ochiai T, Fukuda K, kasutani M, Sakata A, Shimeno H, Toda A, Eyanagi R, Soeda S.

(概要)

ラットPC12細胞のNGF誘導分化に及ぼすsimvastatin、lovastatin及びmevastatinの影響を検討した。その結果、これらのstatinの内simvastatinは細胞外シグナル調節キナーゼのリン酸化(ERK)を最も促進するが、タンパク質キナーゼBに対しては効果がなく、NGF単独で起こるより高いレベルのERKのNGF誘導リン酸化状態の遅延に寄与することが半明した。

26. Role of amygdaloid nuclei in the anxiolytic-like effect of nociceptin in/orphanin FQ in rats

(共著) 2008.1 Neuroscience Letters Vol. 431 (P66~P70)

Uchiyama H, Toda A, Hiranita T, Watanabe S, Eyanagi R.

(概要)

高架式十字迷路を用いて、ラットに於けるnociceptin/orphanin FQ(N/OFQ)の抗不安作用を検討した。中心扁桃体へのN/OFQの投与によりオープンアームにおける滞在時間が増加したのに対し、腹側中脳被蓋野への投与では変化が見られなかった。また、非ペプチド性N/OFQレセプター(NOP)拮抗剤(J-113397)は、N/OFQによって誘導される抗不安作用を阻害した。これらの結果は、N/OFQの抗不安作用がオープンアームからの脱出を減じることを示しており、それはパニック作用の関与が中心扁桃体内でN/OFQシステムと関連していることが示唆される。

27. Involvement of the GABA/benzo-diazepine receptor in the axiolytic-like effect of nociceptin / orphanin FQ

(共著) 2008.5 European Journal of Pharmacology Vol. 590 (P185~P189)

Uchiyama H, Yamaguchi T, Toda A, Hiranita T, Watanabe S, Eyanagi R.

(概要)

高架式十字迷路を用いて、ラットに於けるnociceptin/orphanin FQ(N/OFQ)の抗不安作用を検討した。マウスの脳室内へのnociceptin/orphanin FQ(N/OFQ) (0.1と0.32nmol)の注入は、その抗不安作用により、滞在時間が増加した。また、非ペプチド性N/OFQ受容体(NOP)拮抗剤、J-113397(1-(3R,4R)-1-cyclooctylmethyl-3-hydroxymethyl-4-piperidyl)-3-ethyl-1,3-dihydro-2H-benzimidazol-2-one)とN/OFQによって誘発される高架式十字迷路の滞在時間増加を抑制した。一方、ベンゾジアゼピン受容体拮抗剤(フルマゼニル)、GABAA受容体拮抗剤(+ピククリン)、N/OFQによって誘発される高架式十字迷路滞在時間の増加も阻害した。しかしながら、海馬へのN/OFQの脳室内注入は、滞在時間に影響を及ぼさなかった。これら

の知見は、N/OFQ の抗不安薬様の効果が扁桃で GABA/ベンゾジアゼピン系に関連があることを示唆している。

28. Sphingo-myelinase inhibition suggests a possible new strategy for the treatment of inflammatory bowel disease

(共著) 2008.1 Current Drug Therapy Vol. 3, No. 3 (P218~P225)

Soeda S, Sakata A, Ochiai T, Yasuda K, Kuramoto Y, Shimeno H, Toda A, Eyanagi R, Hikishima S, Yokomastu T, Shibuya S.

マクロファージには炎症性サイトカイン (例えば腫瘍壊死因子 (TNF)) を分泌することによって炎症性大腸疾患 (IBD) の疾患病理学での重要な役割があることが示唆されている。IBD の治療法は、これらの炎症伝達物質の一つ以上を目標とする。特に、抗-TNF-抗体、CDP571 と Infliximab は、臨床的に、若干の成功でクローン病を処置するのに用いられた。脂質メッセンジャー・セラミドを生成するために、炎症性サイトカインとリポ多糖体 (LPS) はスフィンゴミエリナーゼ (SMases) の活性化とスフィンゴミエリン(SM)の以降の加水分解を生じる。SMase 抑制薬の設計は、新しい治療を LPS の処置に対して提供する可能性がある。

29. The stimulatory effects of caffeine with oseltamivir (Tamiflu) on light-dark behavior and open field behavior in mice

(共著) 2010.1 Neuroscience Letters Vol. 469, No. 2 (P184~P188)

Uchiyama H, Toda A, Imoto M, Nishimura S, Kuroki H, Soeda S, Shimeno H, Watanabe S, Eyanagi R.

(概要)

明暗行動と開放行動のマウスの反応をオセルタミビルを用いて検討した。オセルタミビル (75 と 150mg/kg、腹腔内に) 単独は、いずれの明暗反応とオープンフィールドテストに於ける異常反応も所要時間に対する影響もなかった。しかし、非選択的アデノシン A(1)/A(2)受容体拮抗剤、カフェイン (10mg/kg, i.p.)、オセルタミビル (150mg/kg, i.p.) と併用では、明暗反応テストで開放領域での滞在時間が増加した。これは、ベンゾジアゼピン受容体アンタゴニスト (フルマゼニル (10-20mg/kg、皮下に) によって変化しなかった。さらに、アデノシン A(2)受容体拮抗剤、SCH58261 (3mg/kg, i.p.) オセルタミビル (150mg/kg, i.p.) と併用してアデノシン A(1)受容体拮抗剤 (DPCPX (1-3mg/kg、腹腔内に)) を投与すると、オープンフィールドテストで異常運動が増加した。これらの知見は、オセルタミビルの作用がドーパミンとアデノシン系を含む可能性があることを示唆する。

30. Design, Synthesis, and Pharmacological Activity of Nonallergenic Pyrazolone-Type Antipyretic Analgesics

(共著) 2010.12 Journal of Medicinal Chemistry Vol. 53, No. 24 (P8727~P8733)

Uramaru N, Shigematsu H, Toda A, Eyanagi R, Kitamura S, Ohta S

(概要)

新規非アレルギー性ピラゾロン鎮痛薬を開発するために、ピラゾロン環の位置 1 が N-脱アルキルを経て抗原性の代謝物の形成を妨害するために最初のメチル基の代わりに置換された一連の合成物を合成した。これらのピラゾロンの類似体が、アンチピリン (AT) と同程度強い解熱作用および鎮痛効果を示すとわかった。アレルギー性の検査において、AT はモルモットで典型的皮膚反応を誘発したが、ピラゾロンの類似体は不活性だった。生体内で抗原性の代謝物に変わらなかったため、これらの新しいピラゾロンの類似体が非抗原性だったと結論した。

31. Δ9-tetra-hydro-cannabinol and its major metabolite Δ9-tetrahydro-cannabinol-11-oic acid as 15-lipoxygenase inhibitors

(共著) 2011.3 Journal of Pharmaceutical Sciences Vol. 100, No.3 (P1206~P1211)

Takeda S, Earing J, Aramaki H, Imoto M, Toda A, Eyanagi R, Amamoto T, Yamamoto I, Watanabe K.

(概要)

15-リポオキシゲナーゼ (15-LOX) は、酸化低比重リポ蛋白質 (アテローム硬化の主な原因の要因) の形成に対する鍵酵素の一つである。Δ9-Tetrahydrocannabinol (Δ9-THC) (マリファナの主要構成要素) は、アテローム動脈硬化症を抑制することが示唆された。Δ9-THC が、2.42 μ M の IC(50)値による 15-LOX の直接的な阻害剤であることがわかった。そして、もう一つの Δ9-THC 代謝物 11-OH-Δ9-THC (精神状態に影響する) 以外の、Δ(9)-THC-11-oic acid (Δ9-

THC の主要および非精神活性代謝物) が 15-LOX を阻害することが明らかとなった。

32. Covalent binding of nitroso-sulfonamides to glutathione S-transferase in guinea pigs with delayed type hypersensitivity

(共著) 2012.4 International Immunopharmacology Vol. 12, No. 4 (P694~P700)

Eyanagi R, Toda A, Imoto M, Uchiyama H, Ishii Y, Kuroki H, Kuramoto Y, Soeda S, Shimeno H.

(概要)

薬剤誘発アレルギーは、生体高分子と活性代謝物からなる抱合体によって誘発されると考えられている。3 つのニトロソ化合物 (すなわち、4-ニトロソ-スルファニルアミド (SA-NO)、4-ニトロソスルファメトキサゾール (SMX-NO) と蛍光標識のニトロソ化合物 (DNSBA-NO)) を合成して、多量のニトロソ化合物をモルモットの gpGST に結合することを調べた。各ニトロソ化合物を使用している感作モルモットは、単独で gpGST を使用して行われる誘発試験で、陽性皮膚反応を示した。従って、ニトロソ化合物がモルモットの体で gpGST と結合するとき、ニトロソ gpGST は新抗原として作用する。そして、それは自己抗体の合成を誘導する。薬の活性代謝物によるモルモットの免疫化は、ヒトで遅延型過敏反応の発生を予測するために、情報を伝える可能性がある。

33. Vasohibin induces prolyl hydroxylase-mediated degradation of hypoxia-inducible factor-1 α in human umbilical vein endothelial cells

(共著) 2012.7 FEBS Letters Vol. 586, No. 7 (P1067~P1072)

Kozako T, Matsumoto N, Kuramoto Y, Sakata A, Motonagare R, Aikawa A, Imoto M, Toda A, Honda S, Shimeno H, Soeda S.

(概要)

Vasohibin は、VEGF によって内皮細胞で選択的に誘発される脈管形成の重要な負のフィードバック調節装置であると考えられる。今回、HUVEC で過酸化水素 (H_2O_2) によって誘導される酸化ストレスの下で、HIF-1 α 発現に関して vasohibin の役割を評価した。VEGF は、vasohibin 発現の増加と関係していた有意の細胞増殖を誘発した。 H_2O_2 前処置の後、VEGF は細胞増殖を更に増加させた、しかし、単独で VEGF と比較されるとき、これは vasohibin 表現で減少と対照的に、関係していた。興味深いことに、vasohibin は H_2O_2 前処置の間、HIF-1 α 発現の低下を通して、細胞増殖を阻害した。さらにまた、vasohibin はプロリルヒドロキシラーゼ (PHD) の発現を上昇させた。これらの結果は、vasohibin が PHD を経た HIF-1 α 低下を通しての脈管形成の負のフィードバック調節装置としての十字形の役割を演ずることを示唆する。

34. Pyriproxyfen enhances the Immunoglobulin G immune response in mice

(共著) 2013.4 Microbiology and Immunology Vol. 57, No. 4 (P316~P322)

Sharmin T, Satho T, Irie K, Watanabe M, Hosokawa M, Hiramatsu Y, Talukder P, Okuno T, Tsuruda S, Uyeda S, Fukumits Y, Tamura Y, Nakashima Y, Imoto M, Toda A, Kashige N, Miake F.

(概要)

Pyriproxyfen の大用量が哺乳類で免疫応答に影響を及ぼすかどうか検討した。Pyriproxyfen の大用量投与は、特異的に全体の IgG 免疫応答を有意に増強した。これは、pyriproxyfen 投与の 24 時間後には消失していた。この結果は、pyriproxyfen が安全なものであることを示唆した。また、pyriproxyfen は、ミョウバンによるインターロイキン-4 と 10 での IgG1 の誘発に比較して、IgG2a より高い活性を有する、腫瘍壊死因子 α と γ -インターフェロンの反応を増強した。これらのことは、pyriproxyfen による免疫増強の機序がミョウバンのそれとは異なることを示している。

35. Expression and secretion of cholera toxin B subunit in lactobacilli

(共著) 2013.6 Biological and Pharmaceutical Bulletin Vol. 36, No. 6 (P952~P958)

Okuno T, Kashige N, Satho T, Irie K, Hiramatsu Y, Sharmin T, Fukumits Y, Uyeda S, Yamada S, Harakuni T, Miyata T, Arakawa T, Imoto M, Toda A, Nakashima Y, Miake F.

(概要)

乳酸菌 (LAB) が、さまざまな場所 (食物と医療用品に含むこと) で使われる。それらの「一般に、安全なものとして認められた」状態によるキャリアとして LAB を使用しているワクチン開発の多くの研究がある。コレラは、コレラ菌によって生じるコレラ毒素 (CT) のため下痢が起きる感



染症である。五量体のコレラ毒素 B (CTB) サブユニットは、毒性を持たないコレラワクチンの抗原として、さまざまな疾患に対するワクチンの分子として使われている。今回、CTB を発現を制限されている組換え型の LAB を生成した。これが GM1 ガングリオシドと結合することを明らかにした。この結果は、それが LAB と CTB を併合している新しい経口コレラワクチンの基礎として有効であることを示唆している。

36. Recombinant fusion protein of cholera toxin B subunit with YVAD secreted by *Lactobacillus casei* inhibits lipopolysaccharide-induced caspase-1 activation and subsequent IL-1 beta secretion in Caco-2 cells

(共著) 2014.5 BMC Biotechnology Vol. 14 (P1~P9)

Hiramatsu Y, Yamamoto M, Satho T, Irie K, Kai A, Uyeda S, Fukumitsu Y, Toda A, Miyata T, Miake F, Arakawa T, Kashige N.

(概要)

rCTB 分泌媒体動物 pSCTB を修正することによって、rCTBYVAD 分泌媒体動物 pSCTBYVAD を作成した。rCTBYVAD を分泌している *L. casei* は、pSCTBYVAD で変換によって発生した。pSCTB 変わる *L. casei* と浄化された rCTB の培養上清のように、pSCTB-YVAD 変わる *L. casei* の培養上清と浄化された rCTBYVAD は GM1 ガングリオシドと結合した。また、リポ多糖体 (LPS) に関係なく、浄化された rCTBYVAD と Caco-2 細胞に転位置される rCTB は rCTBYVAD を浄化するだけだったが、細胞生存度に影響を及ぼすことなく、rCTB は Caco-2 細胞で LPS によって誘発されたカスパーゼ-1 活性化と以降の IL-1 β 分泌を阻害しなかった。即ち、*L. casei* によって分泌される機能的なペプチドに溶解する rCTB タンパク質は GM1 ガングリオシド (rCTB の様な) と結合することができ、*L. casei* によって分泌される組換え型の YVAD は腸で抗炎症効果を及ぼす可能性がある。従って、*L. casei* によって分泌される rCTB には、IEC に対する YVAD の送達のための媒体動物として、潜在的な利用価値がある。

37. Effect of adenosine system in the action of oseltamivir on behavior in mice

(共著) 2015.7 Neuroscience Letters Vol. 599 (P7~P11)

Uchiyama H, Hiromura M, Shiratani T, Kuroki H, Honda S, Kosako K, Soeda S, Inoue K, Toda A.

(概要)

オセルタミビル (タミフル) 服用に関連すると考えられる異常行動と死亡は、大きな問題となっている。オセルタミビルは、その活性型として、オセルタミビル・カルボン酸塩 (OCB) に加水分解される。我々はオセルタミビルのマウス行動に及ぼす作用について、アデノシン系と OCB の効果を検討した。オセルタミビルの単独投与では異常運動は認められないが、カフェインとの併用で用量依存的に、それが出現・増強した。これは、アデノシン A2 受容体アゴニスト (CGS21680 (0.2mg/kg, 皮下)) によって無くなり、アデノシン A2 受容体拮抗剤、SCH58261 で増強した。これらの知見は、オセルタミビルの作用がアデノシン系とその代謝物に関連している可能性があることを示唆する。さらに、カフェインによるアデノシン A2 受容体の中心遮断と OCB によって誘発された行動変化の間の相互作用が示唆された。

38. Cannabidiol-2',6'-dimethyl ether stimulates body weight gain in apolipoprotein E-deficient BALB/c. KOR/Slc-Apoeshl mice

(共著) 2015.12 The Journal of Toxicological Sciences Vol. 40, No. 6 (P739~P743)

Takeda S, Hirota R, Teradaira S, Takeda-Imoto M, Watanabe K, Toda A, Aramaki H

(概要)

カンナビジオール (CBD) (カンナビス植物の主要な非向精神性構成成分) の生物活性は、詳細に調べられているが、カンナビジオール-2',6'-ジメチル・エーテル (CBDD) (CBD のジメチル・エーテル派生化合物) の生物活性については未だ検討がなされていない。そこで今回、マウスの体重変化等に関する CBDD の効果とその原因・機序について検討した。その結果、アポリポタンパク質のアポリポタンパク質 E が原因であることが判明し、これにより体重増加を促進されることを BALB/c. KOR/Slc-Apoeshl (shl) マウスを用いて確認することができた。

39. Enhancement and regulation effect of myrcene on antibody response in immunization with ovalbumin and Ag85B in mice

(共著) 2016.12 Asian Pacific Journal of Allergy and Immunology Vol. 34, No.4 (P314~P323)

Uyeda S, Sharmin T, Satho T, Irie K, Watanabe M, Hosokawa M, Hiramatsu Y, Koga T, Nakashima Y, Kashige N, Toda A, Mishima K, Miake F.



(概要)

Pyriproxyfen は、ヘルパー 1 型 (Th1) に偏った免疫応答を示す。そして、myrcene がオボアルブミン(OVA)に対する IgG 免疫応答を強化することが示された。Myrcene は OVA 特異的な IgG2a 力価を増加させ、Th1-免疫応答の誘導が示唆された。IL-13 は免疫直後に増加したが、Th1 サイトカインである、IFN- γ は免疫 8 週後に増加した。また、myrcene は免疫 5 週後に Ag85B 特異的な総 IgG 力価を増加させることが分かった。即ち、myrcene が Th1 免疫応答を強化することが示唆され、OVA と Ag85B に対して特異的な免疫応答を増強することが確認された。従って、Th1 免疫応答の強化が myrcene によって可能であることが示された。

40. Characterization of a Novel Allergenic Protein from the Octocoral *Scleronephthya gracillima* (Kuekenthal) which corresponds to a New GFP like protein named Akane

(共著) 2017.9 Luminescence Vol. 32, No. 6 (P1009~P1016)

Kato Y, Jimbo M, Sakakibara Y, Onizuka R, Takahashi T, Matsubashi S, Mita H, Amada K, Imahara Y, Tanabe K, Toda A, Kamiya H.

(概要)

特定の海洋生物が職業漁師の間でアレルギー反応を引き起こすことは、知られていた。特に、八珊瑚 (*Scleronephthya gracillima* (Kuekenthal)) が漁師でアレルギー疾患を引き起こすことに着目し、これから新規のアレルゲン物質を検索した。その結果、27kDa のタンパク質を、ウェスタンブロット法、クロム親和性細胞様免疫染色法と抗原による患者血清との吸収により確定した。これは、アカネという名称の GFP 様のタンパク質に対応する赤および緑の部分蛍光放出をする新規アレルギー性のタンパク質であることを確認した。

41. Metallo-estrogenic effects of cadmium are absent in long-term estrogen-deprived MCF-7 cells: evidence for the involvement of constitutively activated estrogen receptor α and very low expression of G protein-coupled estrogen receptor 1

(共著) 2019.11 Toxicology Letters Vol. 319 (P22~P30)

Hirao-Suzuki M, Takeda S, Kodama Y, Takiguchi M, Toda A, Ohara M.

(概要)

MCF-7 ヒト乳癌細胞は、エストラジオールにより ER α 情報伝達を通して成長を正常に示す。また、我々は、MCF-7 細胞とは異なり、LTED 細胞が内因性 ER α 活性化を起し、エストラジオールから独立した反応を示すことを示した。さらに、Cd は LTED 細胞でなく、MCF-7 細胞と ER α を介して、LTED 細胞で ER α 情報伝達を刺激し、これを MCF-7 細胞と比較すると、LTED 細胞は、Gタンパク質結合型エストロゲン受容体 1 を極めて低いレベルで発現していた。これらの知見は、Cd の発情性物質作用が LTED 細胞で、潜在的に閉経後乳癌で抑制される可能性があることを示唆するものである。

42. Effect of calcium on the hydrolysis activity of human butyryl-cholinesterase

(共著) 2020.2 Journal of Pharmaceutical Sciences Vol. 109 (P1417~P1420)

Imai T, Goksin Bahar F, Ohura K, Toda A.

(概要)

精製したヒト・ブチリルコリンエステラーゼ(HuBChE)の加水分解活性に及ぼすカルシウムの影響について、酸性薬物と塩基性薬物を用いて検討した。HuBChE による酸性薬物の加水分解はカルシウムイオンの濃度依存的に増大したが、塩基性薬物の加水分解にはほとんど影響しなかった。

さらに、Butyrylthiocholine (BTC) (陽イオン性の基質) は、二相性の活性化で加水分解され、その他の陽イオン性の基質 (ブチリルとバレリル基群によるプロプラノロール誘導体) は、HuBChE によって優先的に加水分解された。これらの化合物の加水分解率は、ほとんどカルシウムイオンの影響を受けなかった。また、カルシウムは EF-hand に強く結合する原子に加え、Km が 2~6 mM で 2 原子結合することを明らかにした。

43. Cannabidiolic acid dampens the expression of cyclooxygenase-2 in MDA-MB-231 breast cancer cells: Possible implication of the peroxisome proliferator-activated receptor β/δ abrogation

(共著) 2020.2 The Journal of Toxicological Sciences 45(4) (P227~P236)

Hirao-Suzuki M, Takeda S, Koga T, Takiguchi M, Toda A.

(概要)



COX-2 発現が MDA-MB-231 細胞でペルオキシソーム増殖因子活性化受容体(PPAR) β/δ 媒介情報伝達によって調整されることを初めて確認した。すなわち、カンナビジオール酸(CBDA)は GW501516(PPAR δ のアゴニスト)で PPAR β/δ による活性化を抑制した。そして、PPAR γ は CBDA に影響を受けなかったが、PPAR β/δ 感受性遺伝子(COX-2)はダウンレギュレートされた。さらに、細胞アクチン・ストレスファイバーの消失、PPAR β/δ の特質と GW501516 により起こる COX-2 経路の活性化は、CBDA によって効果的に逆転した。これらのことより、CBDA が PPAR β/δ 情報伝達をしないことで、COX-2 の機能的な調節装置となると考えられる。

44. (-)-Isostemonamine can enhance the anti-proliferative activity of trichostatin A against human breast cancer MDA-MB-231 cells

(共著) 2020.2 Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB) Reports (P56~P59)

Hirao-Suzuki M, Takeda S, Iwata T, Fujita S, Tomiyama T, Takiguchi M, Toda A, Shindo M.

(概要)

(-)-isostemonamine は、エストロゲン受容体 α 陰性ヒト乳癌細胞 (MDA-MB-231) に対する抗増殖因子である。そして、(-)-isostemonamine のチオアミド誘導剤である ST-4 は、この細胞の生存性に影響を及ぼさないと考えられている。本研究において、我々は、ST-4 とその関連合成物 (ST-3 と ST-5) が 5-アザ-2'-デオキシシチジンの抗増殖活性を増強することができるか否か検討した。その結果、合成物間で、ST-4 が MDA-MB-231 に対する最も強い抗増殖活性を示すことを明らかとした。しかし、この効果は、25nM trichostatin A (TSA) 濃度を超えるものでは観察されなかった。この結果は、ST-4 が抗癌剤と結合することで抗増殖活性を増強することが示唆された。このことは、最適な臨床での有効性と安全性のために必要とされる薬剤の濃度の最小化に寄与するものと考えられる。

45. Fatty acid 2-hydroxylase (FA2H) as a stimulatory molecule responsible for breast cancer cell migration

(共著) 2020.10 Biochem Biophys Res Commun Vol. 531, No. 2 (P215~P222)

Hirao-Suzuki M, Koga T, Sakai G, Kobayashi T, Yuji Ishii, Miyazawa H, Takiguchi M, Sugihara N, Toda A, Ohara M, Takeda S.

(概要)

脂肪酸 2-水酸化酵素 (FA2H) の機能には二つの役割があり、癌生物学の分野で議論されている。また、疫学的な検査にて FA2H の発現が TNBC (陰性乳癌) 症例でより短い無症候生存を伴うことが証明されている。我々は、FA2H がペルオキシソーム増殖因子活性化の受容体 α (PPAR α) であり、ヒトの乳癌 MDA-MB-231 細胞の調整遺伝子が TNBC 分析のための実験的な生体外モデルになることを報告した。本研究では、MDA-MB-231 細胞が MCF-7 細胞と比較して FA2H の発現レベルが低く、PPAR α 駆動転写性の活性がさらなる FA2H 発現に影響を及ぼして MDA-MB-231 および MCF-7 乳癌細胞遊走を反映することを示した。即ち、我々の知見は、ER α 発現の状態とは独立しており、FA2H が乳癌細胞遊走刺激物質であることを示唆している。

46. Methionine is a Key Regulator in the Onset of Atopic Dermatitis in NC/Nga Mice

(共著) 2021.2 Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB) Reports Vol. 4, Issue 1(P41~P47)

Koga K, Hirayama F, Satoh T, Ishii Y, Kashige N, Hiromura M, Soeda F, Toda A.

(概要)

アトピー性皮膚炎 (AD) は、そう痒とひっかき行動を呈して、しばしば慢性の状態に進行する皮膚障害である。NC/Nga マウスを、AD のモデルとして使用した。我々は、潜在的に AD 症状の重症度に関連した因子を特定するために、NC/Nga マウスから血清に対してメタ投入分析を行った。分析の結果、還元型の血清メチオニン・レベル間の相関を示しており、AD の重症度を増加させた。加えて、AD 症状の発症の前の過剰なメチオニンによる治療は、AD の増悪を抑制した。これに対し、AD 症状の発症の後のメチオニンの投与は、増悪を抑制しなかった。アトピー性皮膚炎 (AD) は、そう痒とひっかき行動を呈して、しばしば慢性の状態に進行する皮膚障害である。NC/Nga マウスを、AD のモデルとして使用した。我々は、潜在的に AD 症状の重症度に関連した因子を特定するために、NC/Nga マウスから血清に対してメタ投入分析を行った。分析の結果、還元型の血清メチオニン・レベル間の相関を示しており、AD の重症度を増加させた。加えて、AD 症状の発症の前の過剰なメチオニンによる治療は、AD の増悪を抑制した。これに対し、AD 症状の発症の後のメチオニンの投与は、増悪を抑制しなかった。また、システインとタウリン (メチオニンの不可逆

性代謝物) は、AD 発生を抑制しなかった。これらの成績は、メチオニン (その代謝物以外のでない) が発症 (AD の発展よりもむしろ) の変動主要因であることを示す。今後、様々な食品成分を含め検討をする予定である。今後、様々な食品成分を含め検討をする予定である。

47. Estimation of dietary intake and sources of organo-halogenated contaminants among infants: 24-h duplicate diet survey in Fukuoka, Japan

(共著) 2021.3 Environmental Research Vol. 195, Issue 110745

Fujii Y, Poma G, Malarvannan G, Soeda F, Toda A, Haraguchi K, Covaci A.

(概要)

環境の残留性有機汚染物質 (POPs) の広範囲にわたる発生は、問題となっている。本研究は、ジクロロジフェニルトリクロロエタンとその代謝物 (DDT) ポリ塩化ビフェニル (PCB) を含む有機ハロゲン化された汚染物質、クロルデン (CHLs)、ヘキサクロロベンゼン (HCB)、ポリ臭化ジフェニルエーテル (PBDE類)、6ブロモシクロドデカン (HBCDs) において、4ブロモビスフェノールA (TBBPA) (2,4,6-3ブロモフェノール (TBP)) は、レベル、プロファイルと汚染の可能性があるもとを調査するために、日本の乳児の完全な食事セット (24時間の二重の食事) で測定を行った。その結果、TBPが海草の消費 (スピアマンの $\rho = 0.46$, $p < 0.05$) と相関し、PCB-153、PCB-138、トランス・クロルデン、シス・クロルデンとトランスnonachlorはシーフードの消費 (スピアマンの $\rho = 0.45$ 0.57 ($p < 0.05$)) と相関していた。また、TBP (5.5 +/- 6.6ng/g の湿重量) の比較的高い濃度は海草サンプルで観察された。そして、海草がTBPの潜在的暴露の原因であることを示していた。

48. Effects of enriched environment on micturition activity in freely moving C57BL/6J mice

(共著) 2021.7 Low Urin Tract Symptoms(LUTS) Vol. 13, No. 3(P400~P409)

Soeda F, Toda A, Masuzaki K, Miki R, Koga T, Fujii Y, Takahama K.

(概要)

エンリッチ (豊かな) 環境 (EE) が、感情的な強化を示すことが知られている。しかしながら、脳でのEEの効果についてほとんどわかっていない (例えば尿意機能など)。そこで、本研究ではマウスを用いて、EEが尿意活性に影響を及ぼすか否か、蓄尿、自由運動の記録を実施した。その結果、様々なエンリッチ環境 (EEs) は、脳幹に対する効果を導くことと、これにより排尿反射の変化が反映される可能性があることが確認された。また、尿意活動を促進する老齢マウスにおいては、尿意活性機能障害 (例えば多尿) の緩和が認められた。今後、更なる検討を行う予定である。

49. Micturition function of freely moving BALB/c mice and their effects on rearing environment and neurogenesis inhibitor

(共著) 2021.7日本排尿機能学会誌 第31巻第2号 (P404~P410)

Soeda F, Toda A, Masuzaki K, Honda A, Moriyama S, Tashiro A, Kimura I, Kudo S, Sato A, Hashimoto T, Wakayama K, Koga T, Kobuke Y, Takahama K.

(概要)

BALB/c マウスの生理的な排尿活動および咳の誘発に伴う排尿回数を測定した。また、神経新生を阻害するテモゾロミドを用いて、排尿機能に対するエンリッチ環境と神経新生の影響について検討した。その結果、BALB/c マウスの排尿機能には性差があること、マウスの排尿機能に対するエンリッチ効果に海馬神経新生の増大が関与する可能性が示唆された。

50. Perfluorooctanoic acid (PFOA) as a stimulator of estrogen receptor-negative breast cancer MDA-MB-231 cell aggressiveness: Evidence for involvement of fatty acid 2-hydroxylase (FA2H) in the stimulated cell migration

(共著) 2022.4 The Journal of toxicological sciences (J Toxicol Sci.) 47(4) (P159~P168)

Sakai G, Hirao-Suzuki M, Koga T, Kobayashi T, Kamishikiryo J, Tanaka M, Fujii K, Takiguchi M, Sugihara N, Toda A, Takeda S.

(概要)

今回、我々は、1) PFOA が PPAR α を介した転写を活性化すること、2) PFOA が FA2H 発現に依存する移動を刺激すること、および3) 機構的に、PFOA が PPAR α 活性の PPAR β/δ 抑制を緩和して MDA-MB-231 細胞の FA2H をアップレギュレートすることを示した。

51. Dimethylglycine, a Methionine Metabolite, Participates in the Suppressive Effect of Methionine on

	<p>1-Fluoro-2,4-dinitrobenzene-Induced Dermatitis (共著) 2023.7 Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB) 46(7)(P946~P954) Koga T, Inoue K, Hirayama F, Hiromura M, Fujii K, Ishii Y, Hirao-Suzuki M, Takeda S, <u>Toda A</u>, Soeda F. (概要) 我々は以前、アトピー性皮膚炎モデルマウスに必須アミノ酸であるメチオニンを継続投与したところ、アトピー性皮膚炎の症状が緩和したことを報告した。今回は、ACDモデルマウスの作成に使用したマウスの系統によって、メチオニンの効果に系統差が見られ、この違いは、ACDによる肝臓のベタイン-ホモシステインメチルトランスフェラーゼ (Bhmt) 発現の抑制に関連する、肝臓のジメチルグリシン (DMG) 産生の抑制に起因していた。皮膚炎における肝代謝酵素の発現調節や、DMGの肝代謝状態による皮膚炎症状の緩和など、皮膚炎における肝臓と皮膚との相互作用の存在が示唆された。</p>
<p>主な学会発表</p>	<p>【国際学会及び国内学会発表】</p>
<p>国際学会</p>	<p>1. The Metabolic Activation Mechanism of Aminopyrine to Cause Allergic Reaction (主 催) 14th International Symposium on Microsomes and Drug Oxidations (MDO2002) (開催場所) Japan, Sapporo (開催年月日) 2002年7月 Shigematsu H, <u>Toda A</u>, Eyanagi R, Shimeno H. (概要) アミノピリンの中間代謝物である4-amino-1,2-dihydro-5-methyl-2-phenyl-3-H-pyrazol-3-one(ADMP)は、4-アミノアンチピリンの脱メチル化によって生成し、グルタチオンやイソオイゲノールと結合する。また、モルモットの皮膚紅斑反応を起こし、アミノピリンアレルギーに於けるハブテンであることを強く示唆している。</p> <p>2. The mechanism for dansyl chloride mediated drug allergy. Dansyl chloride-glutathione S-transferase complex has the potency of allergen (主 催) 3th North American International Society for the Study of Xenobiotics (ISSX) meeting (開催場所) U.S.A., Maui, Hawaii (開催年月日) 2005年10月 Shigematsu H, Saito H, <u>Toda A</u>, Eyanagi R, Watabe T. (概要) 我々は、グルタチオンS-transferase (GST) M1-1をダンシルクロリド (DC)処理モルモットの肝臓からのDC結合蛋白質として分離し、確認した。加えて、DCgpGSTM1-1複合体 (DCとgpGSTM1-1が結合反応によって生じる) をモルモット肝臓から精製した。これは非抗原性だった。我々の結果は薬物アレルギーを引き起こすために知られている低分子量の薬物が代謝活性化で、生体内で機能蛋白質と複合体を形成することを示している。そして、それによりはアレルギー性反応を誘発することが確認できた。我々の研究は、低分子量の薬物が生体内抗原性を得る機序と現在使用されている薬物および新規開発薬に対する薬物アレルギー反応を確認するための有効な手段を示すものと思われる。</p> <p>3. Glutathione S-transferase M1 as a potential carrier protein for allergic drugs in the guinea pig (主 催) 3th North American International Society for the Study of Xenobiotics (ISSX) meeting (開催場所) U.S.A., Maui, Hawaii (開催年月日) 2005年10月 Saito H, <u>Toda A</u>, Eyanagi R, Watabe T, Shigematsu H (概要) モルモット (GP) 肝臓T7ファージcDNAライブラリーは、PAに対して処置GPの肝臓で発現しているキャリアー蛋白質のスクリーニングのために用いた結果、GPのSMXは独立して個別のcDNAライブラリーであった。また、相補DNAのヌクレオチド配列は、これらのキャリアー蛋白質の1つがグルタチオンSトランスフェラーゼのミュー・クラス・サブユニット1 (M1) であることが示された。本研究で使用したT7ファージディスプレイ・システムは、低分子量のアレルギー性を有する化学物質や医薬品を検出するために有用な手段と</p>

なるものと思われる。

4. Analysis of Hydroxylated Sulfur-containing PCB Metabolites formed from MeSO-PCB and MeSO₂-PCB by Rat Liver Microsomes

〈主 催〉 36th International Symposium on Halogenated Persistent Organic Pollutants

〈開催場所〉 Italy, Firenze

〈開催年月日〉 2016年8月

Kuroki H, Shima T, Tazuya-Murayama K, Kitamura S, Toda A

(概要)

残留性有機汚染物質の一つであるPCBの毒性発現には、その代謝物である水酸化体 (OH-) およびメチルスルホン体 (MeSO₂-) の生物活性が関連していることが知られている。これら代謝物以外に、PCB中毒症である油症患者よりOH-とMeSO₂-の二つの官能基をもつ新規な代謝物 (OH-MeSO₂体) が見出されている。この新規代謝物の生成機構およびPCB毒性発現との関連を明らかにするため、5-MeSO₂-2,3,6-2',5'-pentachlorobiphenyl (5-MeSO₂-CB95) およびその前駆体であるメチルスルホキシド体 (MeSO-) である5-MeSO-CB95をラット肝ミクロソーム (Ms) と反応し生成物を検討した。その結果、安定な代謝物と考えられているMeSO₂体は、さらにMsにより (OH)1~2-MeSO₂体へ代謝されること、また、MeSO体からの経路も存在することが明らかとなった。

5. Influence of neuraminidase inhibitor on the abnormal jumping off behavior induced experimentally by the combined administration of haloperidol and clonidine in mice

〈主 催〉 Neuroscience 2019. 10

〈開催場所〉 U.S.A., Chicago, IL

〈開催年月日〉 2019年10月

Ono N, Yoshida M, Toda A.

(概要)

オセルタミビルが、インフルエンザA型とB型で臨床的に使われているが、自傷行為に対するこの薬とヒトにおける関連性は、未解決のままである。抗インフルエンザ薬が実験人によって誘発された異常行動に影響を及ぼすかどうか調べた。その結果、オセルタミビルは、用量依存的に飛び跳ね行動を起こした。少しの用量でも単独で使われる場合は、いかなるジャンピング行動も提示しなかった。これは、少なくともカテコールアミン作動性のシステムの複雑な影響と中枢神経系の炭酸ヒドロリアーゼの活性で抗インフルエンザウイルス薬の関与の可能性がある。

国内学会
(2018年~現在)

1. オセルタミビル及びその代謝物投与による異常行動について —プロスタグランジンE₂ (PGE₂) の作用—

〈主 催〉 第35回日本薬学会九州支部大会 (福岡)

〈開催場所〉 福岡

〈開催年月日〉 2018年11月

竹中陽美、林沙也加、内山秀盛、白谷智宣、古賀貴之、副田二三夫、戸田晶久

(概要)

インフルエンザ患者へのオセルタミビル(OT)投与による異常行動が問題となっているが、その詳細な発生機序は明らかにされていない。そこで、我々はマウスにOT及びその代謝物(OCB)を投与し、脳内のプロスタグランジンE₂(PGE₂)とそれらの関連性についてアデノシン受容体とドーパミン受容体について検討を行った。その結果、OCBとPGE₂における相互作用はアデノシン受容体とドーパミン受容体が関与する可能性が示唆された。

2. The effect of oral administration of cloperastine on micturition reflex in mice

〈主 催〉 第92回日本薬理学会年会

〈開催場所〉 大阪

〈開催年月日〉 2019年3月

Kimura I, F.Soceda F, Kudo S, Sato A, Koga T, Misumi S, Takahama K, Toda A.

(概要)

クロペラスチン (CP) (中枢性非麻薬性鎮咳薬) が齧歯動物で尿意機能障害を改善することを明らかにしている。CPの臨床応用が予想されるにもかかわらず、CPの内服が排尿反射に影響を及ぼすかどうかは知られていない。そこで、CPを経口で慢性投与した場合の覚醒時と麻酔下のマウスで、尿意機能を測定した。その結果、覚醒しているマウスにおいて、CPは暗期に、更に、対照群と比較して24時間排尿頻度、総排尿量と排尿期間を有意に増加させた。また、麻酔下のマウスにおいて、平均の尿流量は有意に減少した、そして、排尿期間は制御と比較してCP群が増加する傾向があった。これらの結果は、CPの慢性



の内服が、鎮咳薬用量で、マウスで排尿反射に影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

3. アミノ酸によるアレルギー性皮膚炎抑制作用の系統差への肝臓の寄与の検討

〈主 催〉日本薬学会第139年会

〈開催場所〉千葉

〈開催年月日〉2019年3月

古賀貴之、井上貴恵、平山芙香、武田知起、石井祐次、廣村信、副田二三夫、戸田晶久

(概要)

アレルギー性接触皮膚炎(ACD)はアレルギー応答を基盤とする皮膚疾患であり、原因物質との接触により痒みを伴う紅斑や丘疹が惹起される。経口を摂取経路とする新規ACD治療法の基礎の構築を目指した検討を実施している。その中で、ddYマウスを用いた2,4-ジニトロフルオロベンゼン(DNFB)誘導性ACDモデルマウスにおいて、恒常的なメチオニンの摂取がACD発症/進行を有意に抑制することをすでに見出している。本研究ではこれらの背景を基盤とし、新規ACD治療法としてのメチオニンの有効性・有用性を追求する一環として、メチオニンによるACD発症/進行抑制作用のマウス系統間の差異およびそれに対する肝臓の寄与について検討を行った。

4. 薬物誘発性閉経モデルマウスの排尿機能に対する既存薬の影響

〈主 催〉フォーラム2019 衛生薬学・環境トキシコロジー

〈開催場所〉京都

〈開催年月日〉2019年8月

田代明寛、副田二三夫、工藤寿未礼、木村一朗、佐藤亜紀、江藤祐里、古賀貴之、戸田晶久

(概要)

4-vinylcyclohexene diepoxide (VCD) 投与による閉経モデルマウスは、閉経周辺期以降に失禁様の排尿障害を示すこと、咳誘発物質であるカプサイシンの噴霧により、排尿回数が増加することを見出している。既存の腹圧性尿失禁治療薬であるclenbuterol (CLN) を用いて、正常および閉経モデルマウスの排尿機能に対する薬物感受性の有無を検討した。CLNはβ2受容体作動薬であることから、膀胱平滑筋や外尿道括約筋に発現しているβ2受容体がCLNにより刺激され、排尿筋の弛緩や尿道の収縮が起こり、膀胱内圧の低下などの薬理作用を発現したと考えられる。

5. アレルギー性皮膚炎による肝臓アミノ酸代謝かく乱のマウス系統差の解析

〈主 催〉フォーラム2019 衛生薬学・環境トキシコロジー

〈開催場所〉京都

〈開催年月日〉2019年8月

古賀貴之、平山芙香、石井祐次、廣村信、副田二三夫、戸田晶久

(概要)

アレルギー性接触皮膚炎(ACD)はアレルギー応答を基盤とする皮膚疾患であり、原因物質との接触により痒みを伴う紅斑や丘疹が惹起される。原因物質が特定できていない場合や身の回りに原因物質が存在するため接触回避が不可能である場合などには、回避以外の機構に基づく治療法が必要であると考えられる。ACDによる肝Bhmt抑制作用と血中IgE濃度の誘導時期には相関関係が認められなかった。このことから、肝Bhmt発現抑制には、病態としてのACDの成立は必須ではないことが示唆された。

6. IL-6誘導 JAK-STAT 経路における亜鉛錯体の作用

〈主 催〉フォーラム2019 衛生薬学・環境トキシコロジー

〈開催場所〉京都

〈開催年月日〉2019年8月

左藤悠、古賀貴之、副田二三夫、田鶴谷(村山)恵子、戸田晶久、廣村信

(概要)

HepG2細胞(ヒト肝がん細胞株)をモデル細胞として用いた。無血清培地処理した細胞に、Zn(opt)2、Opt、ZnSO4、Insulin、IL-6の処理を行った。薬剤処理後、細胞抽出液を回収し、総タンパク質濃度をBradford法により算出した。総タンパク質をSDS-ポリアクリルアミドゲルにて分離し、ウェスタンブロット法により、JAK、STAT3またはAKTなどのリン酸化レベルについて検討を行った。その結果、IL-6刺激によるSTAT3のリン酸化は、Zn(opt)2用量依存的に抑制された。一方、ZnSO4およびOpt前処理におけるSTAT3のリン酸化抑制は認められなかった。また、IL-6刺激の有無に関わりなく、Zn(opt)2によるAKTのリン酸化は検出された。Zn(opt)2前処理では、IL-6刺激によるJAKのリン酸化は検出されなかった。以上の研究結果から、Zn(opt)2の作用序として、JAKのリン酸化抑制であることが判明した。

7. 薬物誘発性閉経モデルマウスの排尿機能に対するエンリッチ環境飼育の影響

〈主 催〉日本薬学会第140年会

〈開催場所〉 京都
 〈開催年月日〉 2019年9月
 副田二三夫、木村一朗、工藤寿末礼、佐藤亜紀、古賀貴之、戸田晶久

(概要)

無麻酔・無拘束下での排尿活動測定の結果、5週間の環境飼育では、対照(SE)群に比べエンリッチ(EE)群で24時間および明期における排尿回数に有意に減少した。15~16週間の環境飼育においても同様に、SE群に比べEE群で24時間および明期における排尿回数は有意に減少した。ロータロッドテストの結果、マウスが落下するまでの潜時は、SE群に比べEE群で有意に延長した。以上の結果から、本研究で作製したEEは、既報と同様のEE効果を示すことが示唆され、5週間の環境飼育で検討した閉経周辺期、15~16週間の環境飼育で検討した閉経後、両方の時期において、EEは閉経モデルマウスの安静期である明期の排尿機能に感受性を示すことが示唆された。

8. 繊維型大麻草主成分カンナビジオール酸による PPAR β/δ の機能抑制を介した COX-2 発現低下

〈主 催〉 日本薬学会第140年会
 〈開催場所〉 京都
 〈開催年月日〉 2020年3月

平尾雅代、竹田修三、古賀貴之、瀧口益史、戸田晶久

(概要)

機能的COX-2及びPPAR β/δ を発現するMDA-MB-231細胞を用いた。MDA-MB-231細胞におけるCOX-2の発現はPPAR β/δ を介したシグナル伝達によって正に調節されていることが示唆された。MDA-MB-231細胞の増殖に影響を与えない濃度のCBDAは、PPAR α 及びPPAR γ で制御される遺伝子発現には影響を与えず、COX-2の発現のみ抑制した。また、CBDAはGSK0660(PPAR β/δ のアンタゴニスト)により発現が低下したCOX-2の発現を濃度依存的にさらに抑制した。即ち、MDA-MB-231細胞では、COX-2の発現はPPAR β/δ により正に調節されており、CBDAはPPAR β/δ の機能抑制を介してCOX-2の発現を抑制することが明らかとなった。

9. IL-6 誘導 JAK-STAT 経路における亜鉛錯体の作用

〈主 催〉 日本薬学会第140年会
 〈開催場所〉 京都
 〈開催年月日〉 2020年3月

廣村信、左藤悠、古賀貴之、副田二三夫、戸田晶久、田鶴谷(村山)恵子

(概要)

亜鉛錯体は、血糖降下作用などの抗糖尿病作用を有する金属錯体として研究開発されている。亜鉛錯体により前処理したHepG2細胞では、IL-6刺激によるJAKおよびSTAT3のリン酸化抑制が認められた。一方、細胞内亜鉛キレート剤の存在下では、亜鉛錯体によるJAKおよびSTAT3のリン酸化抑制は認められなかった。このことから、亜鉛錯体は、JAK及びSTAT3のリン酸化を負に制御していることが考えられた。そこで、JAK及びSTAT3の負の制御因子であるSHPに着目したところ、亜鉛錯体により、SHPのチロシンリン酸化が促進していることが判明した。このことから、亜鉛錯体はSHPチロシンリン酸化亢進により負の制御を活性化することで、JAK-STAT3のリン酸化を抑制していることが考えられた。

10. メチオニン代謝産物によるアレルギー性皮膚炎抑制作用の検討

〈主 催〉 日本薬学会第140年会
 〈開催場所〉 京都
 〈開催年月日〉 2020年3月

古賀貴之、廣村信、副田二三夫、石井祐次、戸田晶久

(概要)

2,4-ジニトロフルオロベンゼン(DNFB)誘導による性アレルギー性接触皮膚炎(Allergic contact dermatitis, ACD)モデルマウスについて、メチオニンによるACD症状抑制作用の有無は、マウス系統に依存すること、およびそのマウス系統差は肝Betaine-homocysteine S-methyltransferase(Bhmt)mRNAのACDによる発現抑制の程度と相関することを見出しているが、その因果関係の解明には至っていない。そこで、メチオニンによるACD抑制作用のマウス系統差におけるBhmt発現抑制の寄与について検討を行った。ACDによる肝Bhmt発現抑制が観察されたが、メチオニンによるACD抑制作用は認められなかった。一方、BHMTにより生成される代謝産物であるDMGは、用量依存的にACD抑制作用を示し、その作用はメチオニン併用で増強された。この結果から、メチオニンによるACD抑制作用の有無のマウス系統差は、ACDによる肝BHMT発現抑制に伴うDMG産生抑制に起因すると推察された。

11. エンリッチ環境飼育マウスの排尿機能に対するテモゾロミドおよびPCPAの影響

〈主 催〉 第95回日本薬理学会年会

〈開催場所〉福岡

〈開催年月日〉2022年3月

副田 二三夫、森山 柊樹、古賀 貴之、小武家 優子、戸田 晶久

(概要)

我々は最近、濃縮環境 (EE) がBALB/c雌マウスの排尿頻度と総排尿量を大幅に減少させることを報告した。この研究では、神経新生阻害剤であるテモゾロミドと、セロトニン合成酵素阻害剤である PCPA (p-クロロフェニルアラニン) が EE のマウスの排尿機能に影響を与えるかどうかを調査した。テモゾロミドは、BALB/c 雌マウスに毎週 3 日間、合計 6 週間注射され、マウスは、テモゾロミド投与終了の翌日からEEまたは標準環境(SE)で飼育した。PCPA (100 mg/kg、腹腔内、4 日間投与) は、EE の開始から 22 ~ 23 週の間マウスに注射した。PCPA投与の最終日の翌日に、自由に動くマウスの排尿活動を測定した。明期では、EE は SE と比較して排尿頻度と総排尿量が大幅に減少しました。テモゾロミドは、明期の EE グループで排尿頻度と総排尿量が有意に増加しました。暗期では、PCPA は飼育環境に関わらず、総排尿量、平均排尿量、排尿時間、最大排尿量が有意に減少した。これらの結果は、神経新生が排尿機能に対する濃縮効果に関連している可能性があることを示唆した。

12. 皮膚-肝連関による肝メチオニン代謝酵素Bhmt発現制御へのSelenium binding protein 1 (Selenbp1) の寄与の解析

〈主 催〉フォーラム 2023 : 衛生薬学・環境トキシコロジー

〈開催場所〉広島

〈開催年月日〉2023年9月

古賀 貴之、廣村 信、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、藤井 由希子、小武家 優子、戸田 晶久、副田 二三夫

(概要)

WT マウスでは、ACD により肝 Bhmt の有意な発現低下が観察された。一方、KO マウスでは同様な低下は観察されなかった。これらの結果より、Selenbp1 の欠損は ACD による肝 Bhmt 発現抑制を軽減することが示唆された。一方、メチオニンは ACD 発症/非発症に関わらず、WT および KO マウスのそれぞれにおいて肝 Bhmt 発現量に影響を及ぼさなかった。以上の結果より、上述の Selenbp1 欠損によるメチオニンの ACD 軽減作用の促進は、皮膚-肝連関に基づいた ACD による肝 Bhmt 発現抑制の軽減に起因することが示唆された。また、Selenbp1 の欠損は皮膚-肝連関を抑制する、すなわち Selenbp1 は皮膚-肝連関の制御因子であると推察された。

13. Selenium binding protein 1 (Selenbp1) 欠損による高脂肪食性脂肪肝軽減の機構解析

〈主 催〉フォーラム 2023 : 衛生薬学・環境トキシコロジー

〈開催場所〉広島

〈開催年月日〉2023年9月

古賀 貴之、廣村 信、香川 正太、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、長島 史裕、藤井 由希子、小武家 優子、戸田 晶久、副田 二三夫

(概要)

肝臓のトリグリセリド含量は WT および KO マウスともに対照群と比較して高脂肪食摂餌により有意に増加した。しかし、WT マウスと比較して KO マウスにおけるトリグリセリド含量の増加は緩やかであり、Selenbp1 の欠損は肝臓トリグリセリド含量の増加を有意に軽減した。また、高脂肪食摂餌下における細胞外への脂質排出機構の攪乱のうち、Selenbp1 の欠損は ATP-binding cassette protein a1 (Abca1) の高脂肪食による発現抑制を有意に軽減した。一方、Selenbp1 の欠損は脂肪酸β酸化に関与するカルニチンパルミトイルトランスフェラーゼ II (Cpt2) の発現を、高脂肪食摂餌下のみではあるが、有意に増加させた。

14. Selenbp1欠損による果糖誘導性非アルコール性脂肪肝の促進

〈主 催〉第96回日本生化学会大会

〈開催場所〉福岡

〈開催年月日〉2023年11月

古賀 貴之、廣村 信、香川 正太、平尾 雅代、竹田 修三、石井 祐次、石田 卓巳、長島 史裕、戸田 晶久、副田 二三夫

(概要)

NAFLDモデルは6週齢の雄性ならびに雌性のC57BL/6Jマウス (野生型、WT) およびSelenbp1欠損マウス (KO) について、果糖を添加した飲料水 (最終濃度; 30 w/v %) を用いて10週間飲水投与を行うことで作成した。投与開始後10週 (16週齢) 時点において、雌雄ともにWTマウスと比較して、KOマウスで有意なトリグリセリド蓄積の亢進が観察された。また、肝臓脂質代謝の制御に関わる代表的な核内受容体であるPPARについて、その標的遺伝子を指標に各PPARサブタイプの活性化へのSelenbp1欠損の影響を観察したところ、雌雄ともにKOマウスでのみ果糖過剰摂取によるPPAR β/δ の標的遺伝子Adrpの発現増加が観察された。一方、PPAR α およびPPAR γ の標的遺伝子の発現変化について、雌雄に共通して観察されるものはなかった。従って、Selenbp1の欠損は、特にPPAR β/δ が関与する機構を介して、果糖過剰摂取による肝臓への脂肪蓄積に対し促進的に寄与すること、およびその作用には顕著な雌雄差はないことが推察された。

15. 果糖過剰摂取による脂肪肝形成の性差への Selenium binding protein 1 (Selenbp1) 欠損の影響

(主 催) 第96回日本生化学会大会

(開催場所) 福岡

(開催年月日) 2023年11月

古賀 貴之、廣村 信、香川 正太、石井 祐次、平尾 雅代、竹田 修三、石田 卓己、長島 史裕、小武家 優子、戸田 晶久、副田 二三夫

(概要)

雌雄の WT マウスでは果糖過剰摂取による体重の増加は観察されなかった。しかし、KOマウスでは雌雄ともに果糖過剰摂取による有意な体重の増加が認められた。一方、雌雄ともに、各群の飲水量には有意な差は認められなかった。また、WTおよびKOの雌雄マウス全てにおいて肝臓のトリグリセリド含量を有意に増加させたが、WTマウスと比較して、KOマウスではその増加の程度は雌雄ともに有意に亢進していた。果糖過剰摂取による体重増加がKOマウスでのみ観察されたことから、Selenbp1の欠損は全身レベルでの脂肪の蓄積を亢進している可能性が示唆された。また、果糖過剰摂取による肝臓トリグリセリド蓄積がKOマウスで亢進したことから、Selenbp1の欠損は肝臓への脂質の取り込みを促進していることが示唆された。さらに、脂肪過剰摂取モデルとは異なり、これらの作用には明瞭な雌雄差は認められなかったことから、Selenbp1による肝臓や全身への脂質の蓄積の制御機構は、脂肪過剰摂取や糖質過剰摂取など過剰摂取した栄養素によって異なる可能性が示唆された。

国内学会発表 他125回(2024年5月現在)

主な社会活動

- ・日本私立薬科大学協会衛生化学・公衆衛生学教科検討委員会委員 (1995年4月～2005年4月)
- ・福岡市学校薬剤師会東支部例会講演 (覚せい剤とその関連化合物について) (2000年9月)
- ・第4回福岡市学校薬剤師学校保健研究大会講演 (環境アレルギーについて) (2001年2月)
- ・福岡市学校歯科医会「例会」講演 (環境アレルギーについて) (2001年7月)
- ・学校薬剤師 (玉川小学校) (2003年4月～現在に至る)
- ・福岡県薬物乱用防止講習会講師団講師 (2003年4月～現在に至る)
- ・福岡市立香椎小学校父母教師会定例勉強会講演 (シンナー乱用のおそろしさ、覚せい剤乱用の現状とその対策) (2003年12月)
- ・薬学教育協議会・衛生薬学担当教員会議委員 (2006年4月～2021年3月)
- ・薬剤師国家試験問題検討委員会 (衛生薬学部会) 委員 (2009年1月～2021年3月)
- ・「児童 (6年生) と行う、シンナー・乱用薬物の断り方のロールプレイング」、ロールプレイングの実施指導、(玉川小学校) (2009年1月)
- ・薬物乱用防止啓発キャンペーン&イベント No Drug, Know Drug～やめよう乱用！正しく学ぼう くすりの知識～ (ブースとステージ) (2010年9月～現在に至る)



・薬学共用試験センター 薬学共用試験 CBT 試験モニター員	(2011年4月～2012年3月)
・Journal of Natural Medicines (J.Nat.Med.)、論文審査員	(2012年5月～現在に至る)
・公私立大学実験動物施設協議会代議員	(2013年4月～現在に至る)
・Journal of Natural Medicines (J.Nat.Med.)、論文審査員	(2013年9月～現在に至る)
・The Journal of Toxicological Sciences (J.Toxicol.Sci.)、論文審査員	(2013年9月～現在に至る)
・Pharmacology, Biochemistry and Behavior、論文審査員	(2014年7月～現在に至る)
・杉原数美 教授(広島国際大学 薬学部)特別講演、座長(日本薬学会九州支部)	(2014年11月)
・Dr.J.Douglas Bricker(デュケイン大学 薬学部学部長)特別講演、座長(福岡市薬剤師会、日本薬学会九州支部)	(2014年11月)
・薬学教育評価員(薬学教育評価機構)(主査、副査)(東京)	(2015年4月～2017年3月)
・Journal of Pharmacological sciences、論文審査員	(2015年10月～現在に至る)
・Drug Design, Development and Therapy、論文審査員	(2016年1月～現在に至る)
・日本法科学技術学会誌、論文審査員	(2016年4月～現在に至る)
・「N-アセチルグルコサミンの加齢における変動について」、キューサイ(株)、TV放映	(2016年4月～2018年6月)
・第33回日本薬学会九州支部大会(鹿児島)、優秀発表賞審査員	(2016年12月)
・日本高等教育評価員、(日本高等教育評価機構)	(2017年4月～2020年3月)
・Neuroscience Letters、論文審査員	(2017年7月～現在に至る)
・フォーラム2017 衛生薬学・環境トキシコロジー(仙台)、座長	(2017年9月)
・福岡県薬物乱用防止講習会講師団講師、「タバコの害とその正体」講演会、香椎下原小学校	(2018年2月)
・平成29年度第5回薬学評価委員会(拡大)会議、渋谷(日本薬学会会長井記念館1階、薬学教育評価機構)(東京)	(2018年2月)
・第8回薬学教育協議会・衛生薬学担当教員会議、ホテル・グランヴェール岐山(岐阜)	(2018年2月～3月)
・九州山口薬学会運営委員会、ホテルセントラーザ博多(福岡)	(2018年4月)
・福岡県薬剤師研修協議会委員	(2018年4月～2020年3月)
・福岡赤十字病院倫理委員会 外部評価委員、福岡赤十字病院(福岡)	(2018年5月～現在に至る)
・平成30年度第1回全国薬科大学長・薬学部長会議、渋谷(日本薬学会会長井記念館1階、薬学教育評価機構)(東京)	(2018年6月)
・平成30年度「文部科学省薬学教育指導者のためのワークショップ」、慶応大学薬学部、芝共立キャンパス(東京)	(2018年8月)
・フォーラム2018 衛生薬学・環境トキシコロジー(佐世保)、実行委員	(2018年9月)
・九州山口薬学会運営委員会、別府国際コンベンション	(2018年11月)

	<p>ンセンター (大分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Journal of Traditional and Complementary Medicine、論文審査員 (2019年1月～現在に至る) ・九州山口薬学会運営委員会、ホテルセントラーザ博多 (福岡) (2019年4月) ・令和元年度薬学教育評価機構総会 (日本薬学会長井記念館長井記念ホール) (東京) (2019年6月) ・令和元年度薬学共用試験センター総会 (日本薬学会長井記念館長井記念ホール) (東京) (2019年6月) ・令和元年度第1回全国薬科大学長・薬学部長会議総会 (慶応義塾大学薬学部) (東京) (2019年6月) ・令和元年度薬学教育協議会総会 (慶応義塾大学薬学部) (東京) (2019年6月) ・令和元年度第2回全国薬科大学長・薬学部長会議総会、東京ガーデンパレス (東京) (2019年12月) ・九州薬学会雑誌、論文審査委員 (2020年4月～現在に至る) ・北九州市学校給食調理等業務委託業者選考委員会 (2023年12月～現在に至る) ・令和5年後期「北九州市民カレッジ」・「大学リレー連携講座」講師 テーマ・内容「自然毒と食中毒」 (2024年2月) 	
所属学会	<p>日本薬学学会 (1979年4月～現在に至る)</p> <p>日本薬剤師会 (1981年4月～現在に至る)</p> <p>日本毒性学会 (1996年1月～現在に至る)</p>	
受賞歴	<p>福岡市長感謝賞 (2019年11月)</p> <p>(15年永続勤務学校薬剤師功劳感謝賞)</p> <p>令和3年度 福岡市学校保健功劳者表彰受賞 (2022年1月)</p> <p>一般社団法人日本毒性学会 2023年度ファイザー賞 (2023年4月)</p> <p>令和5年度学校保健功劳賞 (2023年11月)</p>	

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解剖生理学 I・II ・解剖生理学実習 ・解剖生理学実験 ・管理栄養士演習 IA・IB ・専門ゼミナール、卒論指導 <p>[大学院 健康科学研究科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解剖生理学特論 I・II
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■組織学 (口腔組織学) ■発生学 (両生類の初期発生、歯胚発生、エナメル質形成) ■解剖学 (口腔解剖学、歯の解剖学) ■比較解剖学 (歯の進化と多様性、乳食の仕組みと進化)
最 終 学 歴	広島大学・大学院生物圏科学研究科 博士課程後期 修了
学 位	博士 (学術)
職 歴	<ul style="list-style-type: none"> ○大阪大学 歯学部 助手 (1992年5月～2001年6月) 大阪大学附属歯科技工士学校 非常勤講師 (兼任) (1993年4月～2000年6月) 東洋歯科技工士学校 非常勤講師 (兼任) (1993年4月～2000年6月) ○ヘルシンキ大学 生物化学研究所 在外研究員 (1996年10月～1997年9月) ○鹿児島大学 歯学部 助教授 (2000年7月～2007年1月) 加治木看護専門学校 非常勤講師 (兼任) (2002年4月～2006年10月) ○東京医科歯科大学 歯学部 准教授 (2007年2月～2024年3月) ○九州栄養福祉大学 食物栄養学部 教授 (2024年4月～現在に至る)
教育上の業績	<ul style="list-style-type: none"> ○大阪大学歯学部では、歯の解剖学実習、口腔組織発生学実習を担当した。同大学院では、6人の博士課程の院生を指導した。 ○鹿児島大学歯学部では、口腔組織発生学の講義と実習、神経解剖学の実習を担当した。同大学院では、多数の学位審査を担当した。 ○東京医科歯科大学歯学部では、口腔組織発生学の講義と実習を担当した。講義においては毎回130枚を超えるスライドを用意し、PDF配布を行った。下記のような教科書を出版した。多くが単著または筆頭著者である。(詳細は後述) <ul style="list-style-type: none"> 1. 「口腔の発生と組織」第4版 南山堂 2019 2. 「口腔の機能と解剖」南山堂 2021 3. 「イラストでわかる歯科医学の基礎」永末書店 2021 4. 「バーチャルスライド口腔組織学」羊土社 2021 5. 「あたらしい歯の教科書」池田書店 2022 6. 「구강의 발생과 조직」의학교육 2024 (1の韓国語版) <p>同学部では、情報教育も担当し、「SeaMonkey 教室」というHPを公開している。「喉頭・咽頭の立体紙模型」など3種の教材を開発し、頒布している。NHKへの出演、日本歯科新聞の掲載などで、歯についてレクチャーしている。同大学院では、多数の学位審査を担当し、院生指導も行った。</p>
主な研究活動	<p>【学術論文】</p> <p>歯の発生のメカニズム解明のため、歯胚培養やエナメル芽細胞の初代培養系を用いて、さまざまな分子生物学的アプローチと組織学的な解析を行っている。近年では、歯の進化研究の一環として、魚鱗を使った研究も行っていて、派生研究としてはシーラカンスの鱗研究、鱗を用いた宇宙実験などもある。学術論文は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Tabata MJ, Kawahara A and Amano A: Analysis of the formation of the animal-vegetal axis during <i>Xenopus</i> oogenesis using monoclonal antibodies. <i>Develop Growth Differ</i>, 34: 337 - 345 (1992) 2) 田畑純: アフリカツメガエルの卵形成期にみられる分布特異性細胞質抗原の同定とその解析。



- 広島大学大学院学位論文 (1992)
- 3) 田畑純: アフリカツメガエルの卵形成期にみられる分布特異性細胞質抗原の同定とその解析. 広島大学総合科学部紀要IV, 18: 101 - 102 (1992)
 - 4) Wakisaka S, Takikita S, Sasaki Y, Kato J, Tabata MJ and Kurisu K: Cell size-specific appearance of neuropeptide Y in the trigeminal ganglion following peripheral axotomy of different branches of the mandibular nerve of the rat. *Brain Res*, 620: 347 - 350 (1993)
 - 5) Kato J, Wakisaka S, Tabata MJ, Sasaki Y and Kurisu K: Induction of FOS protein in the rat trigeminal nucleus complex during an experimental tooth movement. *Arch Oral Biol*, 39: 723 - 726 (1994)
 - 6) Kato J, Wakisaka S, Tabata MJ, Itotagawa T and Kurisu K: Appearance of dynorphin in the spinal trigeminal nucleus complex following experimental tooth movement in the rat. *Arch. Oral Biol*, 40: 79 - 81 (1995)
 - 7) Tabata MJ, Kim K, Liu JG, Yamashita K, Matsumura T, Kato J, Iwamoto M, Wakisaka S, Matsumoto K, Nakamura T, Kumegawa M and Kurisu K: Hepatocyte growth factor is involved in the morphogenesis of tooth germ in murine molars. *Development*, 122: 1243 - 1251 (1996)
 - 8) Miyawaki Y, Morisaki I, Tabata MJ, Kurisu K and Wakisaka S: Calbindin D28k-like immunoreactivity in the gustatory epithelium in the rat. *Neurosci Lett*, 214: 29 - 32 (1996)
 - 9) Tabata MJ, Matsumura T, Liu JG, Wakisaka S and Kurisu K: Expression of cytokeratin 14 in ameloblasts-lineage cells of developing tooth of rat, both in vivo and in vitro. *Arch. Oral Biol*, 41: 1019 - 1027 (1996)
 - 10) Miyawaki Y, Morisaki I, Tabata MJ, Maeda T, Kurisu K and Wakisaka S: Calbindin D28k-like immunoreactivity in the developing and regenerating circumvallate papilla of the rat. *Cell Tissue Res*, 291: 81 - 90 (1998)
 - 11) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Matsumura T, Iwamoto M and Kurisu K: Developmental role of PTHrP in murine molars. *Eur J Oral Sci*, 106(s1): 143 - 146 (1998)
 - 12) Jikko A, Yamashita K, Iwamoto M, Hiranuma H, Takebayashi T, Maeda T, Sakuda M, Matsumoto K, Nakamura T, Enomoto-Iwamoto M, Tabata MJ, Fuchihata H and Kurisu K: The role of hepatocyte growth factor in growth plate cartilage. *J Bone Mineral Res*, 16: 170 - 177 (1998)
 - 13) Matsumura T, Tabata MJ, Wakisaka S, Sakuda M and Kurisu K: Ameloblast-lineage cells of rat tooth germs proliferate and scatter in response to hepatocyte growth factor in culture. *Intn J Develop Biol*, 42: 1137 - 1142 (1998)
 - 14) Wakisaka, S, Tabata, MJ, Maeda, T, Matsumoto K, Wanaka A, Muramatsu H, Muramatsu T, Kurisu K: Immunohistochemical localization of pleiotrophin and midkine in the lingual epithelium of the adult rat. *Arch Histol Cytol*. 61 (5): 475-480 (1998)
 - 15) Ohnishi T, Ooshima T, Sobue S, Tabata MJ, Maeda T, Kurisu K and Wakisaka S: Immunohistochemical localization of calbindin D28k during root formation of rat molar teeth. *Cell Tissue Res*, 297: 503 - 512 (1999)
 - 16) Pispas J, Jung HS, Jernvall J, Kettunen P, Mustonen T, Tabata MJ, Kere J and Thesleff I: Cusp patterning defect in Tabby mouse teeth and its partial rescue by FGF. *Develop Biol* 216: 521 - 534 (1999)
 - 17) Ohnishi T, Ooshima T, Sobue S, Tabata MJ, Kurisu K and Wakisaka S: Calbindin D28k-like immunohistochemical reactivity during the formation of the enamel-free area in the rat molar teeth. *Aant Record*, 258: 384 - 390 (2000)
 - 18) Liu JG, Tabata MJ, Fujii T, Ohmori T, Abe M, Ohsaki Y, Kato J, Wakisaka S, Iwamoto M, Kurisu K: Parathyroid hormone-related peptide is involved in protection against invasion of tooth germs by bone via promoting the differentiation of osteoclasts during tooth development. *Mech Dev* 95: 189 - 200 (2000)
 - 19) Tabata MJ, Fujii T, Liu J-G, Ohmori T, Abe M, Wakisaka S, Iwamoto M, and Kurisu K: Bone morphogenetic protein 4 is involved in cusp formation in molar tooth germ of mice. *Eur. J. Oral Sci*. 110: 114-120 (2002)
 - 20) Ogi H, Tabata MJ, Yamanaka A, Yasui K, and Uemura M: Comparison of expression patterns of fibroblast growth factor 8, bone morphogenetic protein 4, and sonic hedgehog in jaw development of



- the house shrew, *Suncus murinus*. *Cellular Molecular Biol.* 48: OL289-OL296 (2002)
- 21) Abe M, Tamamura Y, Yamagishi H, Maeda T, Kato J, Tabata MJ, Srivastava D, Wakisaka S, and Kurisu K: Tooth-type specific expression of dHAND/Hand2: possible involvement in murine lower incisor morphogenesis. *Cell Tissue Res* 310:201-212 (2002)
 - 22) Shibaguchi T, Kato J, Abe M, Tamamura Y, Tabata MJ, Liu J-G, Iwamoto M, Wakisaka S, Wanaka A, and Kurisu K: Expression and role of Lhx8 in murine tooth development. *Arch. Histol. Cytol.* 66:95-108 (2003)
 - 23) Tabata MJ, Matsumura T, Fujii T, Abe M, and Kurisu K: Fibronectin accelerate the growth and the differentiation of ameloblast-lineage cells in vitro. *J. Histochem. Cytochem.* 51:1673-1679 (2003)
 - 24) Fujiwara N, Tabata MJ, Endoh M, Ishizeki K, and Nawa T: Insulin-like growth factor-I stimulates cell proliferation in the outer layer of Hertwig's epithelial root sheath and elongation of the tooth root in mouse molars in vitro. *Cell Tissue Res.* 320:69-75 (2005)
 - 25) Yoshikubo H, Suzuki N, Takemura K, Hosono M, Yashima S, Iwamoto S, Takagi Y, Tabata MJ, and Hattori A: Osteoblastic activity and estrogenic response in the regenerating scale of goldfish, a good model of osteogenesis. *Life Sci.* 76:2699-2709 (2005)
 - 26) Suzuki N, Tabata MJ, Kambegawa A, Srivastava AK, Shimada A, Takeda H, Kobayashi M, Wada S, Katsumata T and Hattori A: Tributyltin inhibits osteoblastic activity and disrupts calcium metabolism through an increase in plasma calcium and calcitonin levels in teleosts. *Life Sci.*, 78: 2533 - 2541 (2006)
 - 27) 鈴木信雄, 北村敬一郎, 根本鉄, 清水宣明, 和田重人, 近藤隆, 井尻憲一, 田畑純, 新美信夫, 服部淳彦: 超音波刺激による骨形成促進作用: 魚類のウロコのアッセイ系を用いた骨芽及び破骨細胞の解析. 第15回ソノケミストリー討論会講演論文集, 3-4 (2006)
 - 28) 田畑純, 小椋幹記, 竹原重信, 五月女さき子, 瀬戸口尚志, 宮脇正一: ローカル・エリア・ネットワーク(LAN)を利用して同期と制御を行うOSCE進行プログラム"Dolphin". 歯科医学教育学会誌 22(3): 289-295 (2006)
 - 29) 宮脇正一, 小椋幹記, 瀬戸口尚志, 小山徹, 西原一秀, 吉田礼子, 坂口勝義, 田畑純, 五月女さき子, 石神哲郎, 川島清美, 佐藤強志, 重田浩樹, 西恭宏, 徳田 雅行, 志野久美子, 鳥居光男, 宮脇正一: ITの活用と導線の工夫などによる客観的臨床能力試験(OSCE)の新たな人的資源削減の試みとその効果 ; 日本歯科医学教育学会雑誌, 23(1), 56-64 (2007)
 - 30) 鈴木信雄, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 清水宣明, 田畑純, 池亀美華, 中村正久, 近藤隆, 松田恒平, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬睦, 服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究. *Space Utiliz. Res.* 23: 318-321 (2007)
 - 31) Uemura M, Sonomura T, Yamanaka A, Tabata MJ, and Nakashima M: Topographical representation of motoneurons innervating the transverse mandibular muscle in the trigeminal motor nucleus, with special reference to rats, *J. Oral Biosci.* 49(2): 136-142 (2007)
 - 32) Suzuki N, Kitamura K, Nemoto T, Shimizu N, Wada S, Kondo T, Tabata MJ, Sodeyama F, Ijiri K, and Hattori A.: Effect of vibration on osteoblastic and osteoclastic activities: Analysis of bone metabolism using goldfish scale as a model for bone. *Adv. Space Res.* 40(11): 1711-1721 (2007)
 - 33) 鈴木信雄, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 清水宣明, 田畑純, 池亀美華, 中村正久, 近藤隆, 松田恒平, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬睦, 久保田幸治, 奈良雅之, 服部淳彦: 疑似微小重力及び過重力下における骨代謝制御: 培養ウロコを用いた解析. *Space Utiliz. Res.* 24: 230-233 (2008)
 - 34) 鈴木信雄, 清水宣明, 北村敬一郎, 根本 鉄, 染井正徳, 池亀美華, 和田重人, 近藤 隆, 大森克徳, 中村正久, 井尻憲一, 田畑 純, 服部淳彦: 物理的刺激に対する骨芽細胞・破骨細胞の応答: 魚類のウロコを骨のモデルとした骨代謝の解析. 日本生体電気・物理的刺激研究会誌, 22, 31-37, (2008).
 - 35) Li Y, Nakayama H, Notani T, Ahmad M, Tabata MJ, and Takano Y: Phosphatase actions at the site of appositional mineralization in bisphosphonate-affected bones of the rat. *J. Med. Dent. Sci.*, 55, 255-265 (2008)
 - 36) Suzuki N, Omori K, Nakamura M, Tabata MJ, Ikegame M, Ijiri K, Kitamura K, Shimizu N, Kondo T, Matsuda K, Ando H, Kasahara H, Nagase M, Nara M, and Hattori A: Scale osteoblasts and osteoclasts sensitively respond to low-gravity loading by centrifuge. *Biol. Sci. Space*, 22, 3-7 (2008)



- 37) Suzuki N, Hayakawa K, Kameda T, Triba A, Tang N, Tabata MJ, Takada K, Wada S, Omori K, Srivastav AK, and Hattori A: Monohydroxylated polycyclic aromatic hydrocarbons inhibit both osteoclastic and osteoblastic activities in teleost scales. *Life Sci.*, 84: 482-488 (2009)
- 38) 鈴木信雄, 田畑 純, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 根本 鉄, 清水宣明, 染井正徳, 池亀美華, 中村正久, 近藤 隆, 古澤之裕, 松田恒平, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬 睦, 久保田幸治, 鈴木 徹, 遠藤雅人, 竹内俊郎, 奈良雅之, 服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究: 宇宙実験に適したウロコの培養法の検討. *Space Utiliz. Res.*, 25, 166-169 (2009)
- 39) Nakayama H, Takakuda K, Matsumoto HN, Miyata A, Baba O, Tabata MJ, Ushiki T, Oda T, McKee MD, Takano Y: Effects of altered bone remodeling and retention of cement lines on bone quality in osteopetrotic aged *c-src*-deficient Mice. *Calcif Tissue Int*, 86(2):172-83 (2009)
- 40) Notani T, Tabata MJ, Iseki H, Baba O, Takano Y: Introduction of a three-dimensional and layered (TDL) culture, a novel primary co-culture method for ameloblasts and pulp-derived cells. *Arch. Histol. Cytol.* 72: 187-198 (2009)
- 41) Suzuki N, Kitamura K-I, Omori K, Nemoto T, Satoh Y, Tabata MJ, Ikegame M, Yamamoto T, Ijiri K, Furusawa Y, Kondo T, Takasaki I, Tabuchi Y, Wada S, Shimizu N, Sasayama Y, Endo M, Takeuchi T, Nara M, Somei M, Maruyama Y, Hayakawa K, Shimazu T, Shigeto Y, Yano S, Hattori A: Response of osteoblasts and osteoclasts in regenerating scales to gravity loading. *Biol. Sci. Space*, 23(4) in press
- 42) 鈴木信雄, 田畑 純, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 根本 鉄, 清水宣明, 笹山雄一, 染井正徳, 池亀美華, 中村正久, 近藤 隆, 古澤之裕, 松田恒平, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬 睦, 久保田幸治, 鈴木 徹, 遠藤雅人, 竹内俊郎, 江尻貞一, 小萱康徳, 前田齊嘉, 内田秀明, 田谷敏貴, 林明生, 中村貞夫, 杉立久仁代, 芹野武, 奈良雅之, 服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究: 魚類のウロコにおけるホルモン応答. *Space Utiliz. Res.*, 26, 210-213 (2010)
- 43) 三島弘幸, 北原正大, 服部淳彦, 鈴木信雄, 田畑 純, 奈良雅之, 笈 光男, 見明康夫: 歯の象牙質における成長線の周期性と生物リズムとの関連: メラトニンによる調節の可能性. *比較内分泌学* 36, 106-112 (2010)
- 44) 鈴木信雄, 北村敬一郎, 清水宣明, 染井正徳, 笹山雄一, 大森克徳, 矢野幸子, 重藤祐子, 谷垣文章, 鈴木ひろみ, 嶋津 徹, 池亀美華, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 近藤 隆, 遠藤雅人, 中村正久, 井尻憲一, 田畑 純, 奈良雅之, 服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究, 平成22年度JAROS宇宙環境利用の展望, 第2章: 1-13 (2011)
- 45) 鈴木信雄, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 根本 鉄, 清水宣明, 笹山雄一, 染井正徳, 池亀美華, 田畑 純, 中村正久, 近藤 隆, 古澤之裕, 松田恒平, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬 睦, 久保田幸治, 土屋美和, 谷川直樹, 吉馴重徳, 大嶋一成, 鈴木 徹, 遠藤雅人, 竹内俊郎, 江尻貞一, 小萱康徳, 前田齊嘉, 内田秀明, 田谷敏貴, 林 明生, 中村貞夫, 杉立久仁代, 芹野 武, 嶋津徹, 矢野幸子, 奈良雅之, 服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究: ウロコ及び頭蓋骨に対する重力応答. *Space Utilization Res.*, 27: 209-212 (2011)
- 46) 鈴木信雄, 大森克徳, 井尻憲一, 北村敬一郎, 根本 鉄, 清水宣明, 笹山雄一, 西内 巧, 染井正徳, 池亀美華, 田畑 純, 中村正久, 近藤 隆, 古澤之裕, 松田恒平, 田渕圭章, 高崎一朗, 和田重人, 安東宏徳, 笠原春夫, 永瀬 睦, 久保田幸治, 土屋美和, 谷川直樹, 吉馴重徳, 大嶋一成, 鈴木 徹, 遠藤雅人, 竹内俊郎, 江尻貞一, 小萱康徳, 佐藤和彦, 渡邊竜太, 森部純嗣, 三島弘幸, 前田齊嘉, 内田秀明, 田谷敏貴, 林明生, 中村貞夫, 杉立久仁代, 芹野 武, 嶋津 徹, 矢野幸子, 関 あずさ, 舟橋久幸, 奈良雅之, 服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究: 新規メラトニン誘導体のウロコ及び骨疾患ラットの骨代謝に対する作用. 第28回宇宙利用シンポジウム *Space Utilization Res.*, 28: XXX-XXX (2012)
- 47) Atukorala AD, Inohaya K, Baba O, Tabata MJ, Ratnayake RA, Abduweli D, Kasugai S, Mitani H, Takano Y.: Scale and tooth phenotypes in medaka with a mutated ectodysplasin-A receptor: implications for the evolutionary origin of oral and pharyngeal teeth. *Arch Histol Cytol.* 2010;73(3):139-48.
- 48) Suzuki N, Danks JA, Maruyama Y, Ikegame M, Sasayama Y, Hattori A, Nakamura M, Tabata MJ,

- Yamamoto T, Furuya R, Saijoh K, Mishima H, Srivastav AK, Furusawa Y, Kondo T, Tabuchi Y, Takasaki I, Chowdhury VS, Hayakawa K, Martin TJ.: Parathyroid hormone 1 (1-34) acts on the scales and involves calcium metabolism in goldfish. *Bone*. 2011 May 1;48(5):1186-93.
- 49) Ahmad M, Iseki H, Abduweli D, Baba O, Tabata MJ, Takano Y.: Ultrastructural and histochemical evaluation of appositional mineralization of circum-pulpal dentin at the crown- and root-analog portions of rat incisors. *J Electron Microsc (Tokyo)*. 2011;60(1):79-87. 2010-Oct /2011年2月
- 50) Ratnayake A.R.K. Ratnayake, Dawud Abduweli, Seong-Suk Jue, Otto Baba, Makoto J. Tabata, Kaj Josephsen, Ole Fejerskov, Yoshiro Takano: Organic Anion Transport in during Rat Enamel Formation. *J Oral Biosci* (2013) 55: 40-46. 2013-Feb
- 51) Baba O, Ota MS, Terashima T, Tabata MJ, Takano Y.: Expression of transcripts for fibroblast growth factor 18 and its possible receptors during postnatal dentin formation in rat molars. *Odontology*. 2013 Dec 28. [Epub ahead of print] 2014-Jan
- 52) Abduweli D, Baba O, Tabata MJ, Higuchi K, Mitani H, Takano Y.: Tooth replacement and putative odontogenic stem cell niches in pharyngeal dentition of medaka (*Oryzias latipes*). *Microscopy (Oxf)*. 63(2):141-53. doi: 10.1093/jmicro/dft085. Epub 2014 Jan 23. (2014)
- 53) Ijbara M, Wada K, Tabata MJ, Wada J, Inoue G, Miyashin M. Enamel Microcracks Induced by Simulated Occlusal Wear in Mature, Immature, and Deciduous Teeth. *Biomed Res Int*. 16;2018:5658393. doi: 10.1155/2018/5658393. eCollection (2018).
- 54) Fukuba S, Akizuki T, Hoshi S, Matsuura T, Shujaa Addin A, Okada M, Tabata Y, Matsui M, Tabata MJ, Sugiura-Nakazato M, Izumi Y., Comparison between different isoelectric points of biodegradable gelatin sponges incorporating β -tricalcium phosphate and recombinant human fibroblast growth factor-2 for ridge augmentation: A preclinical study of saddle-type defects in dogs. *J Periodontal Res*. 54(3): 278-285. doi: 10.1111/jre.12628. Epub 2018 Nov 25. (2019)
- 55) Ikegame M, Hattori A, Tabata MJ, Kitamura K, Tabuchi Y, Furusawa Y, Maruyama Y, Yamamoto T, Sekiguchi T, Matsuoka R, Hanmoto T, Ikari T, Endo M, Omori K, Nakano M, Yashima S, Ejiri S, Taya T, Nakashima H, Shimizu N, Nakamura M, Kondo T, Hayakawa K, Takasaki I, Kaminishi A, Akatsuka R, Sasayama Y, Nishiuchi T, Nara M, Iseki I, Chowdhury VS, Wada S, Ijiri K, Takeuchi T, Suzuki T, Ando H, Matsuda K, Somei M, Mishima H, Mikuni-Takagaki Y, Funahashi H, Takahashi A, Watanabe Y, Maeda M, Uchida H, Hayashi A, Kambegawa A, Seki A, Yano S, Shimazu T, Suzuki H, Hirayama J, Suzuki N. Melatonin is a potential drug for the prevention of bone loss during space flight. *J. Pineal Res*. (2019)
- 56) Inagaki Y, Ogawa T, Tabata MJ, Nagata Y, Watanabe R, Kawamoto T, Moriyama K, Tanaka T: Identification of OPN3 as associated with non-syndromic oligodontia in a Japanese population. *Journal of Human Genetics* (2021) 66:769-775 <https://doi.org/10.1038/s10038-021-00903-3>
- 57) Ishihara S, Usumi-Fujita R, Kasahara Y, Oishi S, Shibata K, Shimizu Y, Ishida Y, Kaneko S, Sugiura-Nakazato M, Tabata MJ, Hosomichi J, Taniyama Y, Ono T, Periostin splice variants affect craniofacial growth by influencing chondrocyte hypertrophy. *J Bone Miner Metab*. 2023 Mar;41(2):171-181. doi: 10.1007/s00774-023-01409-y. Epub 2023 Mar 1.

【総説】

学術誌などの要請で書いた総説は下記のとおりである。

- 1) 栗栖浩二郎, 岩本容泰, 田畑純: アンチセンスオリゴDNAによる細胞機能の解析. *ブレインサイエンス*, 7: 81 - 89 (1996)
- 2) Kurisu, K. and Tabata MJ: Human genes for dental anomalies. *Oral Dis*, 3: 223 - 228 (1997)
- 3) 栗栖浩二郎, 田畑純: 歯の形成異常をもたらす遺伝性疾患とその原因遺伝子. *解剖誌*, 73: 201 - 208 (1998)
- 4) 田畑純, 栗栖浩二郎: 歯の発生におけるアポトーシス. *The Bone*, 13: 81 - 88 (1999)
- 5) 田畑純, 栗栖浩二郎: アンチセンス法と器官培養法による歯胚発生の研究へのアプローチ. *Arch. Comp. Biol. Tooth Enamel*, 6: 19 - 33 (1999)
- 6) 田畑純, 劉継光, 大盛朝玄, 藤井隆文, 岩本容泰, 栗栖浩二郎: 歯の発生に関与する遺伝子とその役割. *咀嚼誌* 9: 43 - 49 (2000)



- 7) 田畑純, 阿部真土, 玉村禎宏, 栗栖浩二郎: 歯の形態形成遺伝子とその異常. 現代医療 32: 1983 - 1991 (2000)
- 8) 栗栖浩二郎, 劉継光, 田畑純: マウス歯胚の発生における副甲状腺ホルモン関連ペプチド (PTHrP)の役割. 解剖誌, 75: 371 - 375 (2000)
- 9) 田畑純, 松村達志, 栗栖浩二郎: エナメル芽細胞の初代培養法. Arch. Comp. Biol. Tooth Enamel, 7: 23-32 (2000)
- 10) 田畑純: エナメル質形成の細胞生物学. 鹿大歯学部紀要, 22: 33-40 (2002)
- 11) 田畑純: 歯の発生初期の分子機構. Clinical Calcium, 13:628-633 (2003)
- 12) 田畑純: 外胚葉異形成症の原因遺伝子と歯の発生における役割. 鹿大歯学部紀要, 24: 53-61 (2004)
- 13) 田畑純, 近藤信太郎: 咬頭はどのようにしてできるのか —歯の発生・変異・進化と分子メカニズムからの考察—. Anthropol. Sci., 114: 57-62 (2006)
- 14) 鈴木信雄, 田畑純, 和田重人, 服部淳彦: 魚のウロコを用いた新しい骨モデル系の開発と歯科医療への応用. デンタル・ダイヤモンド 2006年10月号74-79 (2006)
- 15) 田畑純, 鈴木信雄, 服部淳彦: 魚鱗: 硬組織研究と再生研究のフロンティア. 細胞 39: 55-57 (2007)
- 16) 鈴木信雄, 清水宣明, 北村敬一郎, 根本鉄, 染井正徳, 池亀美華, 和田重人, 近藤隆, 大森克徳, 中村正久, 井尻憲一, 田畑純, 服部淳彦: 物理的刺激に対する骨芽細胞・破骨細胞の応答: 魚類のウロコを骨のモデルとした骨代謝の解析. 日本生体電気・物理的・刺激研究会誌, 21: 31-37 (2008)
- 17) 田畑純: シーラカンスのウロコと小歯構造の謎. 遺伝 68:238-244 (2014)
- 18) 田畑純, 杉浦真琴, 牛村英里. 顎の進化を考える—ヒトとサメの比較から— 赤ちゃん歯科ネットワーク, 3; 57-69 (2017)
- 19) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第1回 子: 木の実を嚙る. 歯界展望, 130(4): 773-779 (2017)
- 20) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第2回 丑: 草を喰む. 歯界展望, 130(5): 1005-1009 (2017)
- 21) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第3回 寅: 肉を食らう. 歯界展望, 130(6): 1213-1218 (2017)
- 22) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第4回 卯: 重歯で咀嚼. 歯界展望, 131(1): 177-181 (2018)
- 23) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第5回 辰: 究極の歯. 歯界展望, 131(2): 383-389 (2018)
- 24) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第6回 巳: 獲物は丸呑み. 歯界展望, 131(3): 573-579 (2018)
- 25) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第7回 午: 歯の皺を読む. 歯界展望, 131(4): 773-779 (2018)
- 26) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第8回 未: 毛と角のはなし. 歯界展望, 131(5): 1025-1031 (2018)
- 27) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第9回 申: 手を使う. 歯界展望, 131(6): 1247-1253 (2018)
- 28) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第10回 酉: 嘴で啄む. 歯界展望, 132(1): 197-202 (2018)
- 29) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第11回 戌: 牙と爪で闘う. 歯界展望, 132(2): 421-427 (2018)
- 30) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第12回 亥: まるで十徳ナイフ. 歯界展望, 132(3): 561-567 (2018)
- 31) 田畑純. 新十二歯考: 十二支でめぐる歯のかたちづくり. 第13回 人: おいしく食べる. 歯界展望, 132(4): 737-746 (2018)
- 32) 田畑純, 坂口もも子, 牛村英里, 杉浦真琴. 四大組織の発生学. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 4; 24-32 (2018)
- 33) 石田房枝, 角田佳折, 田畑純. 臨床の Question, 基礎の Answer. 赤ちゃん歯科ネットワー



- ク, 4; 33-41 (2018)
- 34) 田畑純、角田佳折「立体紙模型で学ぶ喉頭と咽頭のかたち」小児歯科臨床 23(12): 86-89 (2018)
- 35) 角田佳折、田畑純. 喉頭・咽頭の機能解剖学. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 33-41 (2019)
- 36) 田畑純、山本智子、角田佳折. 喉頭・咽頭の立体紙模型. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 47-53 (2019)
- 37) 田畑純、角田佳折、杉浦真琴. 臨床の Question, 基礎の Answer その2. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 54-63 (2019)
- 38) 坂口もも子、田畑純. 新生児における口蓋のかたちと大きさ [古典論文 M.F.Ashley-Montagu, The form and dimensions of the palate in the newborn, Intn. J Orthodontia and Dentistry for Children 20(8):810-827 (1934) の翻訳]. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 5; 79-87 (2019)
- 39) 田畑純. 舌の発生と構造: 向井の術式を考える. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 6; 6-13 (2020)
- 40) 田畑純. 舌癒着症の症状と術式についての解剖学的な考察. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 6; 32-38 (2020)
- 41) 角田佳折、田畑純. 口蓋の機能解剖学. 赤ちゃん歯科ネットワーク, 6; 41-49 (2020)
- 42) 坂口もも子、田畑純. 新生児における上下顎歯槽堤の咬合関係の多様性 [古典論文 L.Clinch, Variations in the mutual relationshipso fhte maxillary and mandibular gum pads in the newborn child, Intn, J. Orthodontia and Dentistry for Children 20(4): 359-374 (1934) の翻訳] 赤ちゃん歯科ネットワーク, 6; 90-101 (2020)
- 43) 田畑 純. 無歯期の意味を考える～進化と解剖の視点から. 小児歯科臨床. 2020.12; 25 (12): 66-71.

【著書】

学術書だけでなく、音楽、写真などで多数の著書がある。研究以外の著書、ソフトウェア開発、Webサイトでは、田畑休八という名義を使っている。著書のみあげる。(一部再掲)

- 1) 口腔の発生と組織 第2版, 共著, 南山堂, 東京 (1998)
- 2) 田畑休八: ムソルグスキー. In 「クラシックCD 異稿・編曲の楽しみ」青弓社 (2008)
- 3) 鈴木信雄、田畑純、服部淳彦: キンギョ. 鈴木範男編「身近な動物を用いた実験 1」, 三共出版, 東京 (2009)
- 4) 二村正之. 「ニッポン時空写真館」誠文堂新光社 (2010) (写真を多数提供)
- 5) 田畑純: 遺伝子から見た歯の進化. 後藤仁敏、大泰司紀之、田畑純、花村肇、佐藤巖編「歯の比較解剖学 第2版」、医歯薬出版、東京 (2014)
- 6) 田畑純: 歯のデザインを決めるもの. 葛西一貴、近藤信太郎編「歯科に役立つ遺伝学」わかば出版、東京 (2014)
- 7) 田畑純(編著)「口腔の発生と組織 改訂3版」, 南山堂, 東京 (2015)
- 8) 田畑純: 口腔と歯の発生. 泷端孟, 祖父江鎮雄, 西村康, 村上秀明監修「イラストでわかる歯科医学の基礎 第3版」永末書店, 京都 (2016)
- 9) 田畑純「喉頭・咽頭の立体紙模型」オフィスTB, (2018)
- 10) 田畑純(単著)「口腔の発生と組織 改訂4版」南山堂, 東京 (2019)
- 11) 田畑純(単著)「新・十二歯考: 十二支でめぐる歯の比較解剖学」医歯薬出版, 東京 (2020)
- 12) 田畑純、遠藤雅人、塩栗大輔、安川雄一郎、栗山武夫、森本元「鱗の博物誌」グラフィック社, 東京 (2020)
- 13) 田畑純: 口腔と歯の発生. 村上秀明・天野修監修「イラストでわかる歯科医学の基礎 第4版」永末書店, 京都 (2021)
- 14) 田畑純、角田佳折「口腔の機能と解剖」南山堂, 東京 (2021)
- 15) 田畑純、杉浦真琴「バーチャルスライド口腔組織学」羊土社, 東京 (2021)
- 16) 東京医科歯科大学・最先端口腔科学・研究推進プロジェクト「新しい歯の教科書」池田書店, 東京 (2022)
- 17) 「구강의 발생과 조직」의학교육 2024 (10の韓国語版)

【シンポジウム】

国内外を問わず多数の講演がある。主なものをあげる。

<国際学会>

- 1) Tabata MJ: In vitro study of tooth morphogenesis using antisense techniques. *80th General session of the IADR (Makuhari, Japan)*, June, 2001 (IADR=国際歯科医学会)
- 2) Tabata MJ, Uemura M: Molecular patterning of tooth arch formation during the development of house shrew, *Suncus murinus*. *16th Intn Congress of the IFAA (Kyoto, Japan)*, Aug, 2004 (IFAA=国際解剖学会)
- 3) Fujiwara N, Tabata MJ, Nawa T: The cell dynamics in tooth root formation: Hertwig's epithelial root sheath and cellular cementogenesis. *Intn. Sympo. of Maxillofacial & Oral Regenerative Biol.* (Okayama, Japan), Sept, 2005
- 4) Kitamura K, Suzuki N, Nemoto T, Shimizu N, Tabata MJ, Wada S, Omori K, Nakamura M, Kondo T, and Hattori A: Effects of low-intensity ultrasound on bone metabolism in goldfish scale. *Internat. Symposium of Sonochemistry Sonoprocessing (Kyoto, 2007)*, July 2007

<国内学会>

- 1) 田畑純, 久米川正好: 歯胚におけるHGFの発現と形態形成. 第100回日本解剖学会総会・ミニシンポジウム12, (東京・東京大学) 1995年4月1日
- 2) 田畑純: 歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 日本解剖学会関東地方会第5回懇話会(横須賀・神奈川歯科大学) 1995年6月17日
- 3) 田畑純: 歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 第38回歯科基礎医学会学術大会・歯科基礎医学会賞受賞講演(横須賀) 1996年10月12日
- 4) 田畑純: 歯の発生に関与する遺伝子とその役割. 第10回日本咀嚼学会総会・シンポジウムII (東京) 1999年9月2日
- 5) 田畑純, 栗栖浩二郎: 歯の発生に関与する遺伝子とその役割. 第41回歯科基礎医学会総会・シンポジウムII (東京・日本歯科大学) 1999年9月
- 6) 田畑純: 歯の形態発生の分子機構. 第105回日本解剖学会総会・シンポジウム4(横浜・横浜パシフィコ) 2000年4月
- 7) 田畑純, 劉継光, 栗栖浩二郎: 歯胚のPTHrPは破骨細胞の形成を促進し, 歯槽骨の侵入を阻止する. 第106回日本解剖学会総会・シンポジウム13(高知・高知医科大学) 2001年4月
- 8) 田畑純: マウス歯胚の器官培養とアンチセンス法の応用. 第43回歯科基礎医学会・ミニシンポジウム2(大宮・ソニックシティ) 2001年9月 [オーガナイザーと座長も務める]
- 9) 田畑純, 植村正憲: *In vitro* におけるエナメル芽細胞の増殖と分化. 第45回日本組織細胞化学会・ワークショップ(鹿児島・県民文化センター) 2004年10月
- 10) 田畑純: 咬頭形成の分子メカニズム. 第59回日本人類学会・シンポジウム(横浜・横浜市開港記念会館) 2005年11月
- 11) 田畑純: 歯と骨とウロコの話 - 魚鱗の再生過程で見られる組織構築を中心に -. 第48回歯科基礎医学会・シンポジウム(横浜・鶴見大学) 2006年9月
- 12) 田畑純: 初代培養とTDL培養を用いた歯胚上皮細胞の分化機構の解析: よく動き, 形を変える細胞たち. 第42回日本臨床分子形態学会総会・学術大会・ワークショップ(三島・東レ総合研修センター) 2010年9月
- 13) 田畑純: 硬組織の多様性と共通性: シーラカンスとキンギョのウロコの組織解析. 第53回歯科基礎医学会・サテライトシンポジウム10(岐阜市) 2011年9月
- 14) 池亀美華, 服部淳彦, 丸山雄介, 北村敬一郎, 田畑純, 井関八郎, 矢野幸子, 田渕圭章, 山本敏男, 鈴木信雄: 微小重力に対するウロコの破骨細胞の応答: 国際宇宙ステーションにおける宇宙実験. 第53回歯科基礎医学会・サテライトシンポジウム10(岐阜市) 2011年9月
- 15) 田畑純: 魚類のウロコ歯の起源を考える. 第119回日本解剖学会・全国学術集会(自治医大, 下野市) 2014年3月 [オーガナイザーと座長も務める]
- 16) 田畑純: シーラカンス・ウロコの歯の起源を考える. 第56回歯科基礎医学会・



サテライトシンポジウム6 (福岡市)2014年9月 [オーガナイザーと座長も務める]

- 17) 田畑 純: 天野先生のキセキ. 天野先生を偲ぶ会(東広島市・広島大学) 2015年3月15日
- 18) 田畑 純: 象牙質の進化と歯の進化. 第57回歯科基礎医学会・サテライトシンポジウム1 (新潟市)2015年9月 [オーガナイザーと座長も務める]
- 19) 田畑 純、杉浦真琴、山本智子: 歯の多様性を考える ～標本整理報告と「新十二歯考」の予告をかねて. 日本解剖学会・第27回関東支部懇話会(昭和大学) 2017年7月15日
- 20) 田畑 純: キンギョ再生鱗を用いた宇宙実験 ～微小重力下における破骨細胞の素顔～. 第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会(東京歯科大)2018年8月
- 21) 田畑純、牛村英里、笹川一郎: エナメロイドの組織学: 魚類の歯に見られる光沢層の形成過程とその特殊性. 第124回日本解剖学会総会・全国学術集会(新潟)シンポジウム 2019年3月28日
- 22) 田畑純: 赤ちゃんの口と乳食の進化: 比較形態学の視点から. 第68回歯科基礎医学会・アップデートシンポジウム11 (東京・お茶の水) 2023年9月18日 [オーガナイザーと座長も務める]

【学会発表】

国内外を問わず、多数の学会で口頭発表、ポスター発表を行ってきた。主なものを以下にあげる。

< 国際学会 >

- 1) Kim K, Tabata MJ, Liu JG, Iwamoto M, Nakamura T and Kurisu K: Hepatocyte growth factor participates in the morphogenesis of tooth. *73rd General Session of IADR (Singapore)*, June, 1995
- 2) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Iwamoto M and Kurisu K. Involvement of parathyroid hormone-related peptide (PTHrP) in the development of mouse tooth germ. *1st Japan-China Symposium of Anatomy (Toyonaka)*, November, 1995
- 3) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Matsumura T, Iwamoto M and Kurisu K. Parathyroid hormone-related peptide (PTHrP) is essential in the development of murine molars. *10th Intn. Congress of Histochemistry and Cytochemistry (Kyoto)*, August, 1996
- 4) Liu JG, Tabata MJ, Yamashita K, Matsumura T, Fujii F, Ohmori T, Shibaguchi T, Iwamoto M and Kurisu K: Role of PTHrP in the development of murine molars. *75th General Session of IADR (Orland, USA)*, March, 1997
- 5) Kurisu K, Liu JG, Tabata MJ, Matsumura T, and Iwamoto M: Developmental role of PTHrP in murine molars. *6th Intn. Conference on Tooth Morphogenesis and Differentiation (Göteborg, Sweden)*, June, 1997
- 6) Tabata MJ, Matsumura T, Sakuda M and Kurisu K: HGF maintains ameloblast lineage cells at early stage of development of murine tooth for the crown formation. *6th Intn. Conference on Tooth Morphogenesis and Differentiation (Göteborg, Sweden)*, June, 1997
- 7) Ohmori T, Iwamoto M, Tabata MJ, Liu JG, Fujii T, Okada H and Kurisu K: Role of Sonic Hedgehog (Shh) gene in tooth development. *76th General Session of IADR (Nice, France)*, June, 1998
- 8) Fujii T, Tabata MJ, Kato J, Iwamoto M, Wakisaka S and Kurisu K: BMP4 is involved in the cusp formation of the mouse molar. *XV congress of the IFAA (Rome, Italy)*, Sep. 11-16, 1999 (IFAA = 国際解剖学会)
- 9) Fujii T, Tabata MJ, Ohmori T, Liu J-G, Iwamoto M, Wakisaka S and Kurisu K: BMP4 is involved in the formation of the mouse molar cusp. *79th General session of the IADR (Washington DC, USA)*, Apr. 5-8, 2000
- 10) Tabata MJ, Matsumura T, Kurisu K: Effect of extracellular matrix on growth, differentiation and mineralization of ameloblast-lineage cells *in vitro*. *7th Intn. Conference on Tooth Morphogenesis and Differentiation (Lyon, France)*, June, 2001 [IADR, Intn. Association of Dental Research]
- 11) Tabata MJ, Yamanaka A, Sonomura T, Ogi H, Uemura M: Gene expression of growth factors in jaw development of the house shrew, *Suncus murinus*. *Odontology 2002 (Karuizawa)*, Sep, 2002
- 12) Suzuki N, Kitamura K, Nemoto T, Shimizu N, Wada S, Kondo T, Tabata MJ, Sodeyama F, Ijiri K and Hattori A: Effect of acceleration on osteoblastic and osteoclastic activities: Analysis of bone metabolism using goldfish scale as a model for bone. *36th COSPAR Scientific Assembly (Beijing, China)*, July,

- 2006 [COSPAR, Committee on Space Research]
- 13) Nakayama H, Takakuda K, Matsumoto HN, Miyata A, Baba O, Tabata M, Oda T, and Takano Y: Evaluation of Cementlines in Aging Bones of c-Src Deficient Mice. *55th General Session of the JADR, (Yokohama)* Nov, 2007
 - 14) Kitamura K, Suzuki N, Nemoto T, Shimizu N, Tabata MJ, Wada S, Ohmori K, Nakamura M, Kondo T, and Hattori A: Effects of low-intensity ultrasound on bone metabolism in goldfish scale. *Intr. Symposium of Sonochemistry and Sonoprocessing 2007, (Kyoto)*, Dec, 2007
 - 15) Ahmad M, Iseki H, Baba O, Tabata MJ, and Takano Y: Provisional mineralization layer in the pre-dentin of murine teeth. *56th General Session of the JADR, (Nagoya)* Nov, 2008
 - 16) Atukorala ADS, Higuchi K, Tabata MJ, Baba O, Nakayama H, and Takano Y: Impaired tooth development in reduced scale medaka mutant (rs-3). *56th General Session of the JADR, (Nagoya)* Nov, 2008
 - 17) Notani T, Tabata MJ, Baba O, and Takano Y: Three-dimensional & layered culture method for tooth induction and development. *56th General Session of the JADR, (Nagoya)* Nov, 2008
 - 18) Tabata MJ, Notani T, Iseki H, Baba O, Takano Y: Segregation and motility of enamel organ-derived cells in culture. *57th General Session of the JADR, (Wuhan, China)* Nov, 2009
 - 19) Baba O, Atukorala ADS, Tabata MJ, Mitani H, Takano Y: The expression of *edar* transcripts during tooth formation in medaka. *57th General Session of the JADR, (Wuhan, China)* Nov, 2009 (*2nd Meeting of IADR Pan Asian Pacific Federation (PAPF) & 1st Meeting of IADR Asia/Pacific Region (APR)*)
 - 20) Tabata MJ, Nishii N, Iseki H, Baba O, Takano Y: Development of mouse tooth germ without outer enamel epithelium. *58th General Session of the JADR, (Kokura)* Nov, 2010
 - 21) M. Kitahara, A. Hattori, N. Suzuki, M.J. Tabata, M. Kakei, Y. Miake, H. Mishima: The relationship between the melatonin and the periodicity of incremental lines in the tooth dentin(10.1016/j.bone.2010.04.213)
 - 22) Mishima H, Hattori A, Suzuki N, Tabata MJ, Kakei M, Miake Y, Suzuki M: The connection between the periodicity of incremental lines in the tooth dentin and the regulation by melatonin. *European Calcified Tissue Society 39th meeting (Stockholm)* May, 2012

<国内学会>

- 1) 田畑純、河原 明、天野 實: アフリカツメガエル母性物質の卵形成初期発生における局在化について. 発生生物学会第21回大会(つくば)1988年5月
- 2) 田畑純、河原 明、天野 實: アフリカツメガエル卵の細胞質抗原が示す卵形成期後期の軸形成. 発生生物学会第23回大会(広島)1990年5月
- 3) 田畑純、岩本容泰、脇坂聡、加藤穰慈、佐々木康夫、栗栖浩二郎: 培養エナメル芽細胞に対する細胞外基質の影響. 第35回歯科基礎医学会学術大会(長崎)1993年10月
- 4) 田畑純、金健志、山下和夫、岩本容泰、手塚洋子、中村敏一、久米川正好、栗栖浩二郎: ラット臼歯歯胚における肝細胞増殖因子(HGF/SF)とその受容体(c-met)の発現. 第36回歯科基礎医学会学術大会(大阪)1994年10月
- 5) 松村達志、田畑純、金健志、岩本容泰、脇坂聡、加藤穰慈、中村敏一、栗栖浩二郎: 培養エナメル芽細胞に対する各種サイトカインの影響. 第36回歯科基礎医学会学術大会(大阪)1994年10月
- 6) 金健志、劉 継光、田畑純、岩本容泰、加藤穰慈、脇坂聡、栗栖浩二郎: 肝細胞増殖因子(HGF)は歯胚の形態形成に関与する. 第100回日本解剖学会総会(東京)1995年4月
- 7) 田畑純、金健志、劉 継光、松村達志、岩本容泰、加藤穰慈、脇坂聡、栗栖浩二郎: 歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 第37回歯科基礎医学会学術大会(東京)1995年9月
- 8) 松村達志、田畑純、劉 継光、金健志、岩本容泰、加藤穰慈、脇坂聡、栗栖浩二郎: 培養エナメル芽細胞におけるHGFレセプターの発現とHGFの影響. 第37回歯科基礎医学会学術大会(東京)1995年9月
- 9) 田畑純、栗栖浩二郎: 歯胚発生におけるHGFの発現とその機能. 第5回アンチセンスシンポジウム(つくば)1995年11月



- 10) 田畑純、松村達志、劉 継光、加藤穰慈、岩本容泰、脇坂聡、松本和政、和中明生、遠山正彌、栗栖浩二郎: 歯胚の上皮・間葉細胞を特異的に認識する抗体の探索. 第101回日本解剖学会総会(福岡)1996年4月
- 11) 柴口竜也、加藤穰慈、田畑純、岩本容泰、脇坂聡、松本和政、和中明生、遠山正彌、栗栖浩二郎: LIM-homeodomain 遺伝子 L3 の歯胚における発現. 第101回日本解剖学会総会(福岡)1996年4月
- 12) 劉継光、田畑純、山下和夫、岩本容泰、栗栖浩二郎: 歯の発生における副甲状腺ホルモン関連ペプチド(PTHrP)の役割. 第14回骨代謝学会総会(大阪)1996年7月
- 13) 栗栖浩二郎、劉 継光、田畑純、岩本容泰、大盛朝玄、藤井隆文、今田淳: 歯の発生における副甲状腺ホルモン関連タンパク(PTHrP)の発現とその役割. 発生生物学会第30回大会(つくば)1997年5月
- 14) 大盛朝玄、岩本容泰、田畑純、藤井隆文、劉 継光、栗栖浩二郎: 歯胚における Sonic hedgehog (Shh) 遺伝子の発現とその役割の解析. 第39回歯科基礎医学会学術大会(北九州)1997年10月
- 15) Ohmori T, Iwamoto M, Tabata MJ, Liu JG, Fujii T, Okada H and Kurisu, K.: Role of Sonic hedgehog (Shh) gene in tooth development. 第7回アンチセンスシンポジウム(千葉)1997年11月
- 16) 藤井隆文、加藤穰慈、田畑純、岩本容泰、栗栖浩二郎: 歯胚の発生過程における BMP-4 の役割. 第103回日本解剖学会総会(大阪)1998年3月
- 17) 藤井隆文、加藤穰慈、田畑純、岩本容泰、栗栖浩二郎: 歯胚の発生過程における BMP-4 の役割. 第103回日本解剖学会総会(大阪)1998年3月
- 18) 田畑純、栗栖浩二郎: 歯胚発生における上皮・間葉相互作用—アンチセンス法による解析—. 第7回エナメル質比較発生学懇話会(軽井沢)1998年9月
- 19) 藤井隆文、加藤穰慈、田畑純、柴口竜也、大盛朝玄、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎: 歯胚における BMP-4の役割の解析. 第40回歯科基礎医学会学術大会(名古屋)1998年10月
- 20) 柴口竜也、田畑純、加藤穰慈、藤井隆文、大盛朝玄、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎: LIMホメオドメイン遺伝子L3の歯胚形成における役割. 第40回歯科基礎医学会学術大会(名古屋)1998年10月
- 21) 加藤穰慈、柴口竜也、田畑純、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎: マウス歯胚の発生過程におけるOASIS遺伝子の発現. 第40回歯科基礎医学会学術大会(名古屋)1998年10月
- 22) 田畑純: 歯胚発生のメカニズム—器官培養とアンチセンス法を用いて. 第1回AWKセミナー(広島)1998年10月
- 23) 田畑純、劉継光、藤井隆文、大盛朝玄、柴口竜也、岩本容泰、栗栖浩二郎: 歯胚発生の研究におけるアンチセンス法の有用性. 第8回アンチセンスシンポジウム(千葉)1998年11月
- 24) 田畑純、加藤穰慈、栗栖浩二郎: 歯胚発生における Ta 関連因子の探索. 第104回日本解剖学会総会(東京)1999年3月
- 25) 藤井隆文、田畑純、栗栖浩二郎: 歯胚の発生における BMP-4 の役割. 発生生物学会第32回大会(神戸)1999年5月
- 26) 劉継光、田畑純、加藤穰慈、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎: 歯の発生におけるPTHrPと破骨細胞との関連性. 第41回歯科基礎医学会学術大会(東京)1999年9月
- 27) 田畑純、阿部真土、玉村禎宏、藤井隆文、脇坂聡、栗栖浩二郎: 歯胚発生における細胞マーカー探索のための糖鎖染色法の検討. 第105回日本解剖学会総会(横浜)2000年3月
- 28) 劉継光、田畑純、栗栖浩二郎: 歯の発生におけるPTHrPの役割と破骨細胞の関与. 発生生物学会第33回大会(高知)2000年5月
- 29) 田畑純、松村達志、栗栖浩二郎: エナメル芽細胞の初代培養法とその関連技術. 第8回エナメル質比較発生学懇話会(札幌)2000年7月
- 30) 阿部真土、玉村禎宏、田畑純、柴口竜也、劉継光、栗栖浩二郎: セマフォリンHの歯胚における発現. 第42回歯科基礎医学会学術大会(大阪)2000年9月
- 31) 柴口竜也、田畑純、加藤穰慈、大盛朝玄、岩本容泰、脇坂聡、栗栖浩二郎: LIMホメオドメイン遺伝子 Lhx8 の歯胚形成における役割. 第42回歯科基礎医学会学術大会(大阪)2000年9月
- 32) 阿部真土、田畑純、加藤穰慈、岩本容泰、脇坂聡: マウスdHANDの下顎での発現と切歯発生におけるその役割. 第43回歯科基礎医学会(大宮)2001年9月
- 33) 田畑純、山中淳之、藺村貴弘、植村正憲: スクスキ歯胚における Fgf8, Bmp4, Shh の発現パターンの解析. 第44回歯科基礎医学会(東京)2002年10月



- 34) 田畑純、菌村貴弘、植村正憲: スクスの用いた *Fgf8*, *Bmp4*, *Shh* のホモログ遺伝子の探索と顎の発生過程における発現解析. 日本解剖学会第58回九州支部会(小倉)2002年10月
- 35) 田畑純、山中淳之、菌村貴弘、植村正憲: スクスの顎と歯列の発生過程における *Fgf8*, *Bmp4*, *Shh* の発現パターンの解析. 第108回日本解剖学会総会(福岡)2003年4月
- 36) 山中淳之、田畑純、菌村貴弘、植村正憲: 立体組織像構築によるスクスの歯の発生様式の研究. 第45回歯科基礎医学会(盛岡)2003年9月
- 37) 山中淳之、安井金也、菌村貴弘、田畑純、植村正憲: スクスの歯の発生過程におけるPax9の発現パターン. 第46回歯科基礎医学会(広島)2004年9月
- 38) 田畑純、田松裕一、宮下桂子、菌村貴弘、山中淳之、島田和幸、植村正憲: 歯や骨の再生のモデル系としての魚鱗: 再生鱗の組織構築と血管網形成. 日本解剖学会第60回九州支部会(福岡)2004年12月
- 39) 田畑純、田松裕一、宮下桂子、菌村貴弘、山中淳之、島田和幸、植村正憲: 歯や骨の再生実験モデル系としての魚鱗: ウロコの再生過程と血管網. 第110回日本解剖学会総会(富山)2005年3月
- 40) 山中淳之、菌村貴弘、田畑純、植村正憲: 食虫類スクスにおける歯隙のない歯列の発生様式. 第110回日本解剖学会総会(富山)2005年3月
- 41) 田畑純、田松裕一、服部淳彦、菌村貴弘、山中淳之、島田和幸、植村正憲: 歯や骨の再生実験モデルとしての魚鱗: ウロコ再生初期の組織再構築. 第47回歯科基礎医学会(仙台)2005年9月
- 42) 山中淳之、菌村貴弘、田畑純、植村正憲: 食虫類スクスにおける歯種決定に関与する遺伝子の発現パターン. 第47回歯科基礎医学会(仙台)2005年9月
- 43) 藤原尚樹、田畑純、鍵谷忠慶、石関清人、名和橙黄雄: 培養マウス臼歯の有細胞セメント質形成をIGF-IIは促進する. 第47回歯科基礎医学会(仙台)2005年9月
- 44) 山中淳之、安井金也、菌村貴弘、田畑純、植村正憲: 食虫類スクスにおける歯種決定のメカニズムの探索. 日本解剖学会第61回九州支部会(福岡)2005年10月
- 45) 田畑純、藤原尚樹、山中淳之、菌村貴弘、植村正憲: 培養下におけるエナメル芽細胞の形態形成: アメロジェニン分泌の様式と円柱化. 第111回日本解剖学会総会(相模原・北里大学)2006年3月
- 46) 山中淳之、菌村貴弘、田畑純、植村正憲: 食虫類ジャコウネズミにおける上顎歯列と前顎骨の発生. 第48回歯科基礎医学会(横浜・鶴見大学)2006年9月
- 47) 鈴木信雄、北村敬一郎、根本 鉄、清水宣明、和田重人、近藤 隆、井尻憲一、田畑 純、新実信夫、服部淳彦: 超音波刺激による骨形成促進作用: 魚のウロコのアッセイ系を用いた骨芽及び破骨細胞の解析. 第15回ソノケミストリー研究会(金沢)2006年10月
- 48) 三島弘幸、鈴木信雄、田畑純、大野由香、中石裕子、野村加代、服部淳彦: 歯の成長線の周期性にメラトニンが関与する可能性. 第61回日本解剖学会中国・四国支部学術集会(広島)2006年11月
- 49) 鈴木信雄、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、清水宣明、田畑 純、池亀美華、中村正久、近藤隆、松田恒平、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、服部淳彦: 魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究. 第23回宇宙利用シンポジウム(東京)2007年1月
- 50) 馬場麻人、寺島達夫、田畑純、高野吉郎: ラット臼歯歯冠形成期から歯根形成期における歯髄細胞増殖活性の変化. 第49回歯科基礎医学会学術大会(北海道大学)2007年8月
- 51) 鈴木信雄、北村敬一郎、清水宣明、田畑 純、池亀美華、中村正久、近藤隆、和田重人、井尻憲一、大森克徳、服部淳彦: 超音波の機械的刺激及び加速度の重力刺激に対する骨芽・破骨細胞の応答. 第78回日本動物学会(弘前)2007年9月
- 52) **Thamamonggood T**, 田畑純、中村正久、鈴木信雄、服部淳彦: キンギョのウロコを用いた種々の骨破壊-骨再生モデル系の確立. 第32回日本比較内分泌学会(栃木)2007年10月
- 53) 鈴木信雄、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、清水宣明、田畑 純、池亀美華、中村正久、近藤隆、松田恒平、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、久保田幸治、奈良雅之、服部淳彦: 疑似微小重力及び過重力下における骨代謝制御: 培養ウロコを用いた解析. 第24回宇宙利用シンポジウム(東京)2008年1月
- 54) 鈴木信雄、北村敬一郎、根本 鉄、清水宣明、池亀美華、和田重人、近藤 隆、大森克徳、中村正久、井尻憲一、田畑 純、染井正徳、服部淳彦: 物理的刺激に対する骨芽・破骨細胞の応答: 魚類のウロコを骨のモデルとした骨代謝の解析. 第35回日本生体電気・物理的刺激研究会(新



瀧)2008年3月

- 55) 鈴木信雄、Danks JA、田畑 純、池亀美華、中村正久、服部淳彦:副甲状腺ホルモンのウロコの骨芽細胞及び破骨細胞に対する作用. 第79回日本動物学会(福岡)2008年9月
- 56) 鈴木信雄、北村敬一郎、大森克徳、田畑 純、池亀美華、井尻憲一、近藤隆、山田依里、西島史恵、根本鉄、清水宣明、服部淳彦:再生鱗を用いた評価系の開発と加速度重力の解析. 宇宙生物科学会第22回大会(奈良)2008年9月
- 57) 鈴木信雄、田畑 純、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、根本鉄、清水宣明、染井正徳、池亀美華、中村正久、近藤隆、古澤之裕、松田恒平、田渕圭章、高崎一朗、和田重人、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、久保田幸治、鈴木徹、遠藤雅人、竹内俊郎、奈良雅之、服部淳彦:魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究:宇宙実験に適したウロコの培養法の検討. 第25回宇宙利用シンポジウム(神奈川)2009年1月
- 58) 馬場麻人、太田正人、寺島達夫、田畑純、高野吉郎:ラット歯髄におけるFGF18の発現:in situ RT-PCRによる検出. 第50回歯科基礎医学会学術大会(昭和大学)2008年9月
- 59) 田畑 純、野谷拓也、井関八郎、中山博登、馬場麻人、高野吉郎:エナメル上皮細胞と歯髄細胞を用いた三次元・重層培養における組織再構築と細胞相互作用. 第114回日本解剖学会学術大会(岡山大学)2009年3月
- 60) アツコアラ アツコアラ、樋口和穂、吉見雅之、田畑純、馬場麻人、高野吉郎:無汗性外胚葉異形成症モデル、Edar欠乏メダカの歯の異常解析. 第114回日本解剖学会学術大会(岡山大学)2009年3月
- 61) 田畑 純、野谷拓也、井関八郎、馬場麻人、高野吉郎:培養エナメル上皮細胞の増殖・分化とその動態. 第51回歯科基礎医学会学術大会(新潟大学)2009年9月
- 62) 野谷拓也、田畑 純、井関八郎、吉見雅之、馬場麻人、高野吉郎:エナメル芽細胞と歯髄細胞を用いた三次元・重層培養(TDL培養)系における組織分化と組織再構築. 第51回歯科基礎医学会学術大会(新潟大学)2009年9月
- 63) 馬場麻人、Devi Atukorala、田畑純、高野吉郎:メダカ顎歯および咽頭歯形成野におけるEDAR発現細胞の同定. 第51回歯科基礎医学会(新潟大学)2009年9月
- 64) 三島弘幸、北原正大、服部淳彦、鈴木信雄、田畑純、寛光男、見明康夫:象牙質の成長線の形成リズムとメラトニンの分泌リズムとの関連. 第4回バイオミネラルリゼーションワークショップ(東京大学)2009年9月
- 65) 鈴木信雄、田畑 純、大森克徳、井尻憲一、北村敬一郎、根本鉄、清水宣明、笹山雄一、染井正徳、池亀美華、中村正久、近藤隆、古澤之裕、松田恒平、田渕圭章、高崎一朗、和田重人、安東宏徳、笠原春夫、永瀬睦、久保田幸治、鈴木徹、遠藤雅人、竹内俊郎、江尻貞一、小萱康徳、前田齊嘉、内田秀明、田谷敏貴、林明生、中村貞夫、杉立久仁代、芹野武、奈良雅之、服部淳彦:魚類のウロコを用いた宇宙生物学的研究:魚類のウロコにおけるホルモン応答. 第26回宇宙利用シンポジウム(神奈川)2010年1月
- 66) 田畑 純、中野崇文、池亀美華、鈴木信雄、服部淳彦、井関八郎、馬場麻人、高野吉郎:宇宙実験のためのキンギョ再生鱗の培養法の開発と保冷・培養下での細胞動態の観察. 第115回日本解剖学会学術大会(盛岡)2010年3月
- 67) 馬場麻人、寺島達夫、太田正人、田畑純、高野吉郎:象牙芽細胞におけるFGFRの発現. 第52回歯科基礎医学会(東京)2010年9月
- 68) 矢野幸子、笠原春夫、吉馴重徳、田畑 純、服部淳彦、鈴木信雄:宇宙空間における骨代謝制御:キンギョの培養ウロコを骨のモデルとした解析(Fish Scales)ー冷蔵輸送の検討. 第24回日本宇宙生物科学会(東北大学)2010年9月
- 69) 田畑 純、馬場優里、石山巳喜夫、奈良雅之、岡田典弘、高野吉郎:シーラカンス・ウロコの歯様突起の解析. 第5回バイオミネラルリゼーション・ワークショップ(東京大学)2010年11月
- 70) Naoto NISHII, Hachiro ISEKI, Yoshiro TAKANO and Makoto J. TABATA: Is outer enamel epithelium necessary for the development of mouse tooth germs? (マウス歯胚の発生に外エナメル上皮は必要か?) 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会合同大会(パシフィコ横浜)2011年3月
- 71) Takafumi NAKANO, Hachiro ISEKI, Otto BABA, Yoshiro TAKANO and Makoto J. TABATA: Cell identification study of dental epithelium of rat incisor. (ラット切歯の歯胚上皮の構成細胞の識別研究) 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会合同大会(パシフィコ横浜)2011年3月



- 72) Yuri BABA, Hachiro ISEKI, Masayuki NARA, Mikio ISHIYAMA, Norihiro OKADA, Yoshiro TAKANO and Makoto J. TABATA: Morphological study of the denticles on the fish scales of Coelacanth *Latimeria culumnae*. (シーラカンスのウロコ上にあるデンティクルの形態学的研究) 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会 合同大会 (パシフィコ横浜) 2011年3月
- 73) Ayaka YANAGI, Hachiro ISEKI, Yoshiro TAKANO, Atsuhiko HATTORI and Makoto J. TABATA: In vitro study of regeneration mechanism of fish scales of goldfish. (キンギョ・ウロコの再生メカニズムの in vitro 研究) 第88回日本生理学会・第116回日本解剖学会・全国学術集会 合同大会 (パシフィコ横浜) 2011年3月
- 74) 池亀美華、服部淳彦、北村敬一郎、田畑 純、矢野幸子、山本敏男、鈴木信雄: キンギョのウロコに存在する破骨細胞は微小重力下で活性化する. 第29回骨代謝学会 (大阪) 2011年7月
- 75) 鈴木信雄、池亀美華、田畑 純、北村敬一郎、矢野幸子、山本敏男、服部淳彦: 宇宙におけるウロコの破骨細胞の形態及び細胞活性の変化. 日本動物学会・中部支部例会 (福井大学) 2011年7月
- 76) 田畑 純、井関八郎、馬場麻人、高野吉郎: 外エナメル上皮除去歯胚の培養下における発生. 第53回歯科基礎医学会 (岐阜市) 2011年9月
- 77) 田畑 純、井関八郎、池亀美華、宮下桂子、丸山雄介、大森克徳、遠藤雅人、馬場麻人、服部淳彦、鈴木信雄: キンギョ・ウロコを使った宇宙実験: 微小重力下における破骨細胞の超微細構造解析. 第116回日本解剖学会・全国学術集会 (甲府市) 2012年3月
- 78) Otto Baba, ADSL Atukorala, Keiji Inohaya, Makoto Tabata, Kiyoshi Mitani, Yoshiro Takano: Differential effect of aberrant expression of ectodysplasin-A receptor (edar) on scales and jaw and pharyngeal dentition of medaka. 第116回日本解剖学会・全国学術集会 (甲府市) 2012年3月
- 79) 三島弘幸、井上昌子、服部淳彦、鈴木信雄、田畑純、笈光夫、松本敬、里村一人、見明康雄: 象牙質の成長線の周期とメラトニンの分泌リズムの関連. 第7回バイオミネラルリゼーションワークショップ (東京大学) 2012年12月
- 80) 三島弘幸、井上昌子、服部淳彦、鈴木信雄、田畑純、笈光男、松本敬、里村一人、見明康雄: 象牙質の成長線形成機構と体内時計の情報伝達分子であるメラトニンの分泌リズムの関連. 第117回日本解剖学会・全国学術集会 (高松市) 2013年3月
- 81) 田畑 純: 宇宙微小重力下培養でみられたキンギョ・ウロコの形態変化. 第14回エナメル質比較発生学懇話会 (新潟・瀬波) 2013年8月
- 82) 馬場麻人、太田正人、寺島達夫、田畑 純、高野吉郎: Fibroblast growth factor (FGF) 18 とFGFRのラット象牙質形成過程での発現. 第119回日本解剖学会・全国学術集会 (自治医大) 2014年3月
- 83) 田畑 純、杉浦真琴: 外エナメル上皮・星状網除去による歯胚発生への影響. 第57回歯科基礎医学会 (新潟市) 2015年9月
- 84) 石山巳喜夫、三上正人、中富満城、岡俊哉、佐藤秋絵、田畑純、笹川一郎: エナメルとガノインの分子生物学的解析. 第58回歯科基礎医学会 (札幌市) 2016年8月
- 85) 中野崇文、杉浦真琴、坂口もも子、神部芳則、森良之、高野吉郎、田畑純: ラット切歯上皮シートを用いた初代細胞培養: 構成細胞の再集合と細胞マーカーによる識別. 第59回歯科基礎医学会 (松本市) 2017年9月
- 86) 田畑純、杉浦真琴、山本智子: 動物の歯の多様性: 食性による歯のちがひ. 第15回エナメル質比較発生学懇話会 (東京医科歯科大学) 2017年11月
- 87) 坂口もも子、杉浦真琴、田畑純: ハコフグ鱗の組織解析. 第15回エナメル質比較発生学懇話会 (東京医科歯科大学) 2017年11月
- 88) 牛村英里、杉浦真琴、田畑純: イタチザメ歯胚の鋸状縁形成とエナメロイド芽細胞. 第15回エナメル質比較発生学懇話会 (東京医科歯科大学) 2017年11月
- 89) 福場駿介、秋月達也、星嵩、松浦孝典、シュジャ・アディー・アマール、岡田宗大、田畑泰彦、田畑純、杉浦-仲里真琴、和泉雄一: 等電点の異なる β -TCP含有ゼラチンスポンジと組換え型ヒト線維芽細胞増殖因子(rhFGF-2)を併用した顎堤増大術における効果の比較検討. 日本歯周病学会60周年記念京都大会 (京都国際会館) 2017年12月15日
- 90) 牛村英里、杉浦-仲里真琴、坂口もも子、中野崇文、田畑純: イタチザメの歯胚発生における鋸状縁形成とエナメロイド芽細胞. 第123回日本解剖学会総会・全国学術集会 (日本医

科大) 2018年3月

- 91) 坂口もも子、杉浦-仲里真琴、牛村英里、中野崇文、田畑純： ハコフグ鱗の組織構造と細胞分布の解析. 第123回日本解剖学会総会・全国学術集会 (日本医科大) 2018年3月
- 92) 坂口もも子、杉浦-仲里真琴、牛村英里、中野崇文、田畑純： ハコフグ鱗の構造と形成細胞の組織学的解析. 第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会 (東京歯科大) 2018年8月
- 93) 牛村英里、杉浦-仲里真琴、坂口もも子、中野崇文、田畑純： イタチザメ *Galeocerdo cuvier* 歯胚の形態解析: エナメロイドと鋸歯縁の形成過程. 第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会 (東京歯科大) 2018年8月
- 94) 中野崇文、坂口もも子、牛村英里、杉浦真琴、田畑純： ラット切歯エナメル器構成細胞の細胞識別: 凍結切片を用いた分化マーカーの再検討. 第27回硬組織再生生物学会学術大会・総会 (東京歯科大) 2018年8月
- 95) 坂口もも子、杉浦-仲里真琴、牛村英里、中野崇文、田畑純: ハコフグ鱗の構造と境界領域の組織学的解析. 日本動物学会第 89 回札幌大会(札幌コンベンションセンター)2018 年 9 月
- 96) 角田佳折、北村清一郎、守田剛、神尾強司、田畑純、馬場麻人： ヒト、ウマ、イヌの茎突咽頭筋の走行・停止の比較からヒト茎突咽頭筋の機能を考える. 第 124 回日本解剖学会総会・全国学術集会 (新潟) 2019 年 3 月 27 日
- 97) 渡部準也、坂口もも子、高橋将人、杉浦真琴、田畑純： ラット臼歯のマラッセの上皮遺残は GDF5 を発現する . 第124回日本解剖学会総会・全国学術集会 (新潟) 2019年3月27日
- 98) 田畑純 歯の発生ものがたり ~細胞のはたらきとかたちづくり~. 赤ちゃん歯科ネットワーク・第34回例会講演 2019. 08. 22 つくば市
- 99) 田畑 純、牛村英里： エナメロイドの謎：誰がそれを作るのか. 第4回軟骨魚類研究会 (沖縄・瀬底) 2019年10月4日~5日
- 100) 牛村英里、大島勇人、田畑 純： イタチザメ (*Galeocerdo cuvier*) の歯胚におけるエナメロイド形成と鋸歯形成. 第 52 回新潟歯学会総会 (新潟) 2019 年 4 月 13 日
- 101) 角田佳折、北村清一郎、守田 剛、神尾強司、城 翠、古田 琴、濱 義之、田畑 純、馬場麻人 コモンリスザルの軟口蓋・咽頭の筋構築に関する肉眼解剖学的研究、第125回日本解剖学会総会・全国学術集会 2020年3月25-27日 宇部市
- 102) 杉浦-仲里真琴、田畑 純 組織学実習標本の整理と活用. 第 61 回日本神経病理学会総会学術研究会 2020. 10. 12 金沢市 WEB 開催
- 103) 田畑 純、杉浦真琴、柴田俊一： バーチャルスライドを用いた組織学実習の試みと今後の展望. 第 85 回 口腔病学会学術大会 2020. 12. 04 東京医科歯科大
- 104) 田畑 純、杉浦-仲里真琴： バーチャルスライドの利点を生かした組織学実習の実施報告. 第 127回日本解剖学会(大阪大学・オンライン) 2021年3月28日

【その他】

雑誌掲載、教材頒布、ソフトウェア公開、新聞やTVなどのメディア協力などがある。

<雑誌など>

- 1) 田畑 純: QuickBASIC でcolor@ 文を実行する. The BASIC, 81: 170-171 (1990)
- 2) 田畑 純: QuickBASIC の文字列入力を強化する: N88-BASIC(86)タイプの入力関数とロック入力関数. The BASIC, 110: 100-103 (1992)
- 3) 今村英夫、内田啓一、田畑純: 下顎左側第2小臼歯にみられた巨大歯の1例. 歯科放射線, 43: 196 - 197 (2003)
- 4) 田畑純: 歯と骨とウロコの話.「骨の健康づくり委員会」ホームページ/耳よりな話/今月のトピックス (2003)
- 5) 田畑純: 銀幕の中の細胞たち.「科学映像館」ホームページ/骨の映画との出会い(2007)
- 6) 田畑純: アンコウの歯の話. 東京医科歯科大学・献体の会会報 33号3-4 (2007)
- 7) 田畑純: ウロコに見られる歯のような構造. 国立科学博物館「ダーウィン展」・標本展示(2008)
- 8) 田畑純. 1000作品公開にあたって(3). 「科学映像館」ホームページ (2018)

<教材頒布>

- 1) 喉頭・咽頭の立体紙模型, オフィスTB (2018)

- 2) 喉頭の精密立体紙模型, オフィスTB (2022)
- 3) 喉頭・咽頭の立体紙模型 ver 2, オフィスTB (2022)
- 4) 動く声帯の紙模型, オフィスTB (2023)

<公開ソフトウェア>

- 1) 休八の文献管理ソフト Pigeonhole N88-Basic 版 (1984)
- 2) 休八の文献管理ソフト Pigeonhole MS-DOS 版(1992)
- 3) 休八の文献管理ソフト Pigeonhole Windows 版 (1997)
- 4) 休八の分子量計算 Mole H-100LX版 (1993)
- 5) 休八の単位計算 Q-unit (1997)
- 6) 休八の繰り返しタイマー Q-repeat (1991)
- 7) 休八の学会タイマー Q-gakkai (1998) *ビブリオバトルの公式タイマーに選定
- 8) 休八のOSCEタイマー Dolphin (2005)
- 9) 休八のスクリプト言語支援ソフト Piper (2005)
- 10) 埋め込みスクリプト ムソ歴 (2014)
- 11) 埋め込みスクリプト sidestep (2014) (その他多数)

<メディア協力>

- 1) NHK はま・なか・あいづToday 「シーラカンス研究最前線」2010年4月6日放送(福島) [出演]
- 2) NHK おはよう日本「シーラカンスの謎に挑む」2010年4月20日放送 [出演]
- 3) SPACE@NAVI-Kibo (No107) 「Fish Scales」, JAXA, 2010年6月23日(ネット配信) [出演]
- 4) NHK クローズアップ東北「シーラカンスに挑む~最先端を走る日本の研究」, 2010年9月24日放送(東北) [出演]
- 5) 三省堂 高校英語教科書 クラウン「教員用指導書」2013年4月: ハコフグの外骨格について [学術協力・写真提供]
- 6) NHK教育 ららら♪クラシック「響け! 民衆の魂 ムソルグスキーの“展覧会の絵”」2013年11月30日放送 [学術協力]
- 7) NHK教育 すイエんサー「さかなクンを超えろ! すイエんサー流 お魚図鑑を作ろう!」2016年2月2日放送 [学術協力]
- 8) フジテレビ「日本の緊急事態24時: サメの脅威は日本でも」2018年12月25日放送 (全国) [出演]
- 9) 日本歯科新聞「解説 イノシシの歯」2019年1月1日号(第2048号) [学術協力]
- 10) 日本歯科新聞「解説 ネズミの歯」2020年1月1日号(第2094号) [学術協力]
- 11) アポロニア21「レポート: 作って学ぶ解剖教材: 喉頭・咽頭の立体紙模型」2019年2月号 (No.302) [写真提供、学術協力]
- 12) 日本歯科新聞「著者に聞く: 新・十二歯考 ~十二支でめぐる歯の比較解剖学. ゾウの象牙質はヒトより進化」2020年7月14日号(第2118号) [インタビュー、学術協力]
- 13) 日本歯科新聞「解説 ウシの歯」2021年1月1日号(第2139号) [学術協力]
- 14) サンギ社長ブログ「ロズリンの部屋: インタビュー前編」2021年3月19日号 [インタビュー、写真提供] <http://roslyn-blog.apagard.com/?eid=978>
- 15) サンギ社長ブログ「ロズリンの部屋: インタビュー後編」2021年3月29日号 [インタビュー、写真提供] <http://roslyn-blog.apagard.com/?eid=979>
- 16) NHK-BS ワイルドライフ「知床の海~オオカミウオが闘い、シマフクロウ舞う~」2021年12月13日放送 [学術協力]
- 17) 日本歯科新聞「解説 トラの歯」2022年1月1日号(第2185号) [学術協力]
- 18) 毎日新聞「大学に眠る経路不明遺骨」2022年9月26日号(第52776号) [取材協力]
- 19) 日本歯科新聞「解説 ウサギの歯」2023年1月1日号(第2232号) [学術協力]
- 20) NHK ダーウィンが来た! 「怪魚オオカミウオ 大きな口で砕く! 守る!」2023年2月5日放送 [学術協力・出演]
- 21) NHK-BS ヒューマニエンス 40億年のたくらみ 「”歯” 進化を続ける人体の先兵」2023年9月11日放送 [学術協力・出演]
- 22) 日本テレビ「あなたは小学五年生よりかしこいの?」2023年11月~12月放送 [学術協力]

主な社会活動	鹿児島市立錦江台小学校非常勤講師（平成15-17年度） 各種フリーウェアの公開 赤ちゃん歯科ネットワーク 学術顧問(平成29年度～) 東京医科歯科大学・写真部 顧問(平成29年度～) さまざまな勉強会、学校、大学での講演多数	(2003年～2005年) (1986年～現在) (2017年～2023年) (2017年～2023年) (2002年～現在)
所属学会	日本発生生物学会 日本動物学会 歯科基礎医学会 日本解剖学会 日本アンチセンス DNA/RNA 研究会 歯の発生の会 日本歯科医学教育学会 International Association for Dental Research 日本骨代謝学会 エナメル質比較発生学懇話会	(1986年～2001年12月) (1987年～2001年) (1992年～現在) (1994年～現在) (1995年～2012年) (2002年～2007年) (2002年～2007年) (2007年～2017年) (2011年～2017年) (2002年～2023年)
受賞歴	歯科基礎医学会・第8回歯科基礎医学会賞 東京医科歯科大学・第1回歯学部優秀教員賞	(1996年10月) (2013年1月)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育原理 ・教職概論 ・教育制度論 ・生徒指導の理論と方法 ・教職実践演習 (栄養教諭) <p>-----</p> <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導と教育相談 ・教職実践演習 (栄養教諭)
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 学校教育 ■ 教員養成 ■ 家庭科教育 ■ 道德教育 ■ 生徒指導 ■ ジェンダー論
最 終 学 歴	九州大学大学院人間環境学府 教育システム専攻
学 位	修士 (教育学)
職 歴	<p>福岡市立中学校 教諭 (1985年4月～2005年3月)</p> <p>福岡市教育委員会 教職員課 人事主事 (2005年4月～2006年3月)</p> <p>〃 主任人事主事 (2006年4月～2007年3月)</p> <p>福岡市立原北中学校 教頭 (2007年4月～2010年3月)</p> <p>福岡市立照葉小学校・中学校 校長 (2010年4月～2013年3月)</p> <p>福岡市立平尾中学校 校長 (2013年4月～2015年3月)</p> <p>福岡市立筑紫丘中学校 校長 (2015年4月～2017年3月)</p> <p>福岡市教育委員会 研究研修課 指導員 (2017年4月～2018年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 教授 (2018年4月～2024年3月)</p> <p>〃 特任教授 (2024年4月～ 現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○佐賀県多久市 教育講演会 パネリスト (2010年)</p> <p>○福岡県中学校長会研究大会 研究発表「学校・家庭・地域による学校評価」 (〃)</p> <p>○政令市中学校長会 連絡協議会 実践発表「福岡市の小中連携教育」 (〃)</p> <p>○福岡県女性管理職会 研究大会 研究発表「創意と活力ある学校経営」 (2014年)</p> <p>○福岡県教育庁「子どもが作る弁当の日」 優良事例発表 (2015年)</p> <p>○福岡市立高取中学校研究発表会 指導助言「道德教育の推進」 (2016年)</p> <p>○キャリア教育コーディネーター養成講座 講師 (〃)</p> <p>○福岡市中学校道德研究会総会 基調講演「これからの道德教育」 (2016年2017年)</p> <p>○福岡市立松崎中学校研究発表会指導助言「考え議論する道德科の指導と評価」 (2017年)</p> <p>○福岡市立和白丘中学校 研究発表会 指導助言「道德科の評価に関する研究」 (〃)</p> <p>○糸島市青少年育成市民会議 記念講演 (2019年)</p> <p>○福岡県青少年健全育成講演会 講演 (〃)</p> <p>○八女市「青少年健全育成について話し合う集い」 講演 (〃)</p> <p>○行橋南小学校 教育講演会 講演 (〃)</p> <p>○福岡市男女共応援事業 講師 (花畑 公民館) (2022年)</p> <p>○福岡市男女共応援事業 講師 (大原公民館) (〃)</p> <p>○男女共同参画セミナー 講師 (福岡市立城南中学校) (〃)</p> <p>○男女共同参画セミナー 講師 (福岡市立長尾中学校) (〃)</p> <p>○福岡市男女共応援事業 講師 (有田公民館) (2023年)</p> <p>○男女共同参画セミナー 講師 (福岡市立横手中学校) (〃)</p> <p>○男女共同参画セミナー 講師 (福岡市立三宅中学校) (〃)</p> <p>○男女共同参画セミナー 講師 (福岡市立香椎第1中学校) (〃)</p> <p>○男女共同参画セミナー 講師 (福岡市立金武中学校) (2024年)</p> <p>○福岡市中学校女性管理職会 研修会 講師 (〃)</p>

主な研究活動	【学術論文】
	<p>1. 「生活者として共に家庭生活を営む児童生徒の育成」 (共著) (平成 14(2002)年 2 月 福岡市教育委員会研究報告 631 号) (概要) 小学校・中学校・高校の 4 名の教諭による協同研究で、中学校の実践と考察を担当した。家庭科教育の中で児童・生徒に生活者としての視点をいかに持たせるかをテーマにして、小学校・中学校・高校で一貫したカリキュラムを編成した。</p> <p>2. 「家庭科の基礎・基本を確かに身につける教育課程の展開」 (共著) (平成 15(2003)年 2 月 福岡市教育委員会研究報告 651 号) (概要) 新学習指導要領の完全実施に向け、家庭生活スキルの定着を大切にしなが、小学校・中学校の系統性を大切にした教育課程を編成した。</p> <p>3. 「生きる力を育む家庭科の学習指導」 (単著) (平成 15(2003)年 2 月 福岡市教育委員会研究報告 651 号) (概要) 新学習指導要領の掲げる「生きる力」を家庭科教育の中でどのように育成するかを研究した。指導と評価の一体化を大切にして、生徒の興味関心を高める手立てを検証しながら論文にまとめ、福岡市において優秀賞を受賞した。</p> <p>4. 「小・中・高等学校の系統性を重視し、家庭生活スキルが身に付く新 教育課程の展開」 (平成 17(2005)年 8 月 第 56 回全国家庭科教育協会全国大会紀要) (概要) 小学校・高校の教諭と 3 名で研究し、中学校の関連部分を担当した。小学校・中学校・高校の系統性を大切にしなが、家庭生活スキルが身に付く新学習指導要領の展開を論文にまとめ、福岡県代表として紙上で発表した。</p>
	<p>5. 「生徒の意識調査から見た小中連携教育の成果と課題」 (平成 26(2014)年 3 月 九州大学大学院 (修士論文) pp. 1~100) (概要) 中 1 ギャップを解消するためには小中連携の取組が欠かせない。そこで福岡市内 1,000 人の中学生を対象に量的意識調査を行い、小中連携の成果と課題を検証し、修士論文にまとめた。</p> <p>6. 「特別活動 (学校行事) における校種間連携についての一考察」 (平成 30(2018)年 12 月 九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 183~194) (概要) 多くの中学校で特別活動 (学校行事) として実施されている新入生説明会を取り上げ、参加前後の小学 6 年生の意識の変化をもとに、校種間連携の効果と今後の課題を明らかにした。</p> <p>7. 「栄養教諭を目指す学生の動機等の解明」 (令和元(2019)年 12 月 九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 207~216) (概要) 本学食物栄養学部栄養教諭教職課程の開設からの実績をまとめるとともに、学生対象の意識調査から履修・未履修の動機や中断の理由、履修による資質能力の伸長の実態等をまとめた。</p> <p>8. 「栄養教諭教職課程の学びをより良いものにするための一考察 ～ 免許取得学生による振り返りから ～」 (令和 2(2020)年 12 月 九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 107~115) (概要) 本学における 15 年間の栄養教諭養成を振り返り、明らかになった課題の一つである「履修学生の負担」を軽減し中断者を減らす方法、さらに積極的に学習に向かうための方策を探った。</p> <p>9. 「コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響：その 1 ～ 生活面に着目して ～」 (令和 3(2021)年 12 月 九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 71~83) (概要) 「コロナ禍」における大学生の生活や心情について調査を行い、コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与える影響について、生活面を中心に報告した。</p> <p>10. 「コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与えた影響：その 2 ～ 心身の健康状態に着目して ～」 (令和 3(2021)年 12 月 九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 85~97) (概要) 「コロナ禍」における大学生の生活や心情について調査を行い、コロナウィルス感染拡大防止のための自粛が大学生に与える影響について、心身の健康状態を中心に報告した。</p> <p>11 『『コロナ禍』における大学生の不安 ～ 管理栄養士を目指す学生に焦点を当てて ～』 (令和 4(2022)年 6 月 九州教育経営学会研究紀要 第 28 号 pp. 69~78) (概要) 「コロナ禍」が数年にわたって進行する中、学生がどのような不安を抱えながら日々を</p>

	<p>過ごし、その不安がどう変化しているかを明らかにした。</p>
	<p>12 「夜間中学校の変遷と『福岡きぼう中学校』の開校について」 (令和4(2022)年12月 九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 81~96)</p> <p>(概要) H28年に制定された「教育機会確保法」により、様々な事情で十分な義務教育が受けられなかった人たちのための公立の夜間中学校の開校が、全国で広がっている。夜間中学校の歴史を戦後混乱期からの振り返るとともに、R4年に福岡市に開校した「きぼう中学校」の開校の経緯を記録した。</p>
	<p>13 「大学生へのジェンダー平等教育に関する一考察」 (令和5(2023)年12月 九州栄養福祉大学研究紀要 pp. 43~52)</p> <p>(概要) 現在の日本におけるジェンダギャップを概観し、少子化や女性の貧困などの社会問題との関連を読み取ったうえで、他大学の状況なども参考にしながら大学におけるジェンダー平等教育の必要性を明らかにした。</p>
	<p>【学会発表】</p>
	<p>1. 「中学校ブロックにおける小中連携の取組と中学生の意識」(単独) (主 催) 第91回九州教育経営学会 (開 催 場 所) 福岡市立舞鶴小中学校 (開催年月日) 2015年1月</p> <p>(概要) これまでの小中連携の取組や、修士論文研究で行った中学生の意識調査をもとに、中学校ブロックにおける効果的な連携や配慮すべき点をまとめて発表した。</p>
	<p>2. 「中学校における男女混合名簿の採用と生徒の意識」(単独) (主 催) 第96回九州教育経営学会 (開 催 場 所) 福岡市立東吉塚小学校 (開催年月日) 2016年11月</p> <p>(概要) 福岡市立中学校では男女混合名簿の採用がなかなか進んでいない。その背景を調べ、混合名簿の採用は生徒の社会性とどのような相関があるのかを調査した。</p>
	<p>3. 「小中連携行事の効果を探る」(単独) (主 催) 第33回日本学校教育学会 (開 催 場 所) 東京学芸大学 (開催年月日) 2018年8月</p> <p>(概要) 福岡市の事例をもとに、小学校と中学校が情報共有のもと学校行事を実施することで、中学入学を前にした児童の意識がどのように変化したかを調査研究し、小中連携行事の効果を検証した。</p>
	<p>4. 「栄養教諭を目指す学生の動機等に関する研究」(単独) (主 催) 第103回九州教育経営学会 (開 催 場 所) 福岡市立博多小学校 (開催年月日) 2019年11月</p> <p>(概要) 2005年にスタートした栄養教諭制度を概観し、大学における栄養教諭養成における課題や、教職課程を履修する学生の動機などに関する意識調査の結果を報告した。</p>
主な社会活動	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡市総合図書館運営審議会委員 (2012年4月) ・福岡県学校給食審議会委員 (2013年4月) ・福岡県高等学校入試長期計画策定委員会委員 (2013~2014年3月) ・福岡県中学校道徳教育研究会副会長, 福岡市会長 (2013~2016年3月) ・福岡市中学校校長会 人材育成委員会委員長 (2013~2015年3月) ・福岡県立筑紫丘高等学校 学校評議委員会委員 (2015~2017年3月) ・福岡県社会福祉協議会委員 (2016年) ・福岡市人権読本「ぬくもり」検討委員 (") ・福岡県非行防止ネット依存防止地域ミーティング講師 (2018年~現在に至る) ・福岡県大規模小売店舗立地審議会委員 (2022年~現在に至る) ・福岡市男女共同参画審議会委員 (") ・北九州市教員育成協議会委員 (2023年)



学校法人 東筑紫学園

九州栄養福祉大学

Kyushu Nutrition Welfare University

所 属 学 会	日本カウンセラー協会	(2000年11月～現在に至る)
	九州教育経営学会	(2014年10月～現在に至る)
	日本学校教育学会	(2017年9月～現在に至る)
	日本道德教育学会	(2019年5月～現在に至る)
受 賞 歴	福岡市教育委員会 教育論文 優秀賞	(2004年)

所 属	九州栄養福祉大学	食物栄養学部	食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実用英語の基礎Ⅰ、実用英語の基礎Ⅱ ・実用英語Ⅰ、実用英語Ⅱ ・国際理解（海外研修） <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実用英語の基礎Ⅰ、実用英語の基礎Ⅱ <p>[東筑紫短期大学 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語Ⅰ、英語Ⅱ ・国際理解（海外研修） <p>[東筑紫短期大学 保育学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際理解（海外研修） 		
専 門 分 野	<p>■機械工学</p> <p>■粉体力学分野</p>		
最 終 学 歴	九州工業大学	工学部機械工学科	卒業
学 位	学士（機械工学）		
職 歴	<p>泉台学習教室経営</p> <p>福岡市東区の清明美術館でマネージャーとして勤務。</p> <p>渡米 Shinkenko America Inc. NY 及び LA 支部長として勤務。</p> <p>同団体 財務取締役、そして、その後、秘書取締役を歴任。</p> <p>帰国、英会話及び TOEIC 講師として働く。</p> <p>トライグループ</p> <p>ECC</p> <p>Berlitz</p> <p>アルク教育社</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科講師</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科准教授</p> <p>九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 指導主事</p> <p>九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 学生指導課長</p> <p>九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学 学生部次長</p>		<p>(1983年4月～1986年3月)</p> <p>(1986年4月～1990年4月)</p> <p>(1990年5月～2012年11月)</p> <p>(1997年9月～2012年11月)</p> <p>(2013年5月～2017年3月)</p> <p>(2013年8月～2017年3月)</p> <p>(2013年8月～2017年3月)</p> <p>(2014年8月～2017年3月)</p> <p>(2016年8月～2017年3月)</p> <p>(2017年4月～2018年3月)</p> <p>(2018年4月～現在に至る)</p> <p>(2019年4月～2020年3月)</p> <p>(2020年4月～2024年3月)</p> <p>(2024年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○2019年11月、米国バルビューカレッジとの協力提携の調印をまとめる</p> <p>○2023年10月、フィリピン国ラプラプセブ国際大学との協力提携の調印をまとめる</p>		
主な研究活動	<p>1. 日本人が出せない英語音の習得</p> <p>（概要）日本人が英会話を苦手とする根本的な理由は、日本語の音や抑揚で発話する、いわゆるカタカナ英語にある。英会話習得の基本は、聞きなれない英語の音の一つ一つを発声する能力を日本語では使われない口や舌周りの筋肉を繰り返しトレーニングすることである。そして、その習得に伴いリスニング力は自然と強化されていく。</p>		

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科	
担当科目	[食物栄養学部 食物栄養学科]	
	<ul style="list-style-type: none"> ・栄養教育論Ⅰ、栄養教育論Ⅱ、栄養教育論Ⅲ ・調理学実習Ⅲ ・栄養教育論実習Ⅰ ・専門ゼミナール、キャリアデザイン、管理栄養士演習Ⅰ、Ⅱ 	
	[ハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科]	
	<ul style="list-style-type: none"> ・健康と栄養 	
	[東筑紫短期大学 食物栄養学科]	
	<ul style="list-style-type: none"> ・公衆栄養学 	
専門分野	■ 栄養教育	
最終学歴	中村学園大学 家政学部食物栄養学科	
学位	家政学士	
職歴	門司鉄道病院	(昭和57年4月～昭和62年3月)
	北九州市役所小倉南保健所保健予防課	(昭和62年4月～平成4年3月)
	門司保健所保健予防課	(平成4年4月～平成9年3月)
	北九州市保健所健康増進課	(平成9年4月～平成12年3月)
	小倉南区役所保健福祉課	(平成12年4月～平成16年3月)
	小倉北区役所生活支援課	(平成16年4月～平成19年3月)
	保健福祉局総務課監査指導課	(平成19年4月～平成20年3月)
	総合保健福祉センター管理課 栄養指導担当係長	(平成20年4月～平成21年3月)
	市立八幡病院栄養管理課 栄養管理係長	(平成21年4月～平成25年3月)
	子ども家庭局子ども家庭部保育課 栄養指導担当係長 (子育て支援課兼務母子栄養担当係長)	(平成25年4月～平成27年3月)
	保健福祉局地域支援部健康推進課 食育・栄養改善担当係長	(平成27年4月～平成28年3月)
	保健福祉局総合保健福祉センター管理課 栄養指導担当係長	(平成28年4月～平成30年3月)
	子ども家庭局子ども家庭部保育課 栄養指導担当係長 (子育て支援課兼務母子栄養担当係長)	(平成30年4月～令和2年3月)
	北九州市役所定年退職	(令和2年3月)
	九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科 准教授	(令和2年4月～現在に至る)
	東筑紫短期大学 食物栄養学科 兼任講師	(令和元年9月～現在に至る)
教育上の業績	○九州栄養福祉大学：学外実習「公衆栄養学について」講義	(平成27年)
	○九州女子大学：「行政栄養士の立場から～」講義	(平成17年、平成27年)
	○西南女学院大学：「地域栄養活動論」講義	(平成26年、平成27年)
	○北九州市立大学：「地域活動論」「食と健康」講義	(平成27年)
	○九州栄養福祉大学：北九州市食品衛生カレッジモニター 「栄養成分表示について」「行政栄養士の業務について」講義	(平成28年、平成29年)
	○東筑紫短期大学：「公衆栄養学」講義	(令和元年9月～現在に至る)
	【作成した教材等】	
	・保育所給食の手引き	(平成26年)
	・小児肥満予防リーフレット	(平成25年～平成26年)
	・小児肥満予防ポスター (おやつ)	(平成25年～平成26年)
	・食生活改善ポスター	(平成28年～平成29年)
	・リーフレット (野菜・肥満予防)	(平成28年～平成29年)
	・リーフレット (離乳食)	(令和2年)
主な研究活動	【学会発表】	
	「北九州市食生活実態調査結果について」 (主催) 日本栄養改善学会 (開催年月日) 平成9年10月	

	<p>第 39 回福岡県栄養改善学会 (研究発表)「北九州市における小児の肥満と生活習慣の関連」 (主催) 福岡県栄養改善学会 (開催年月日) 平成 25 年 10 月</p>	
<p>主な社会活動</p>	<p>保健所における一般市民に対する栄養指導 (昭和 62 年～平成 18 年)</p> <p>ライフステージごとの栄養指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母子栄養指導 妊婦栄養指導・・集団、個人栄養指導 ・幼児栄養指導 離乳食教室・・・集団、個人栄養指導、訪問栄養指導 ・学童栄養指導 幼児栄養教室・・・集団、個人栄養指導 <p>幼稚園・保育所における集団指導</p> <p>親子クッキング・幼児や学童期の子どもとその保護者に対する調理、栄養指導</p> <p>家庭教育学級 (対象; 保護者) の調理、栄養指導</p> <p>生き生き子ども講座 (対象: 児童)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・壮年期栄養指導 健康料理教室 (対象: 一般) ・高齢者栄養指導 高齢者栄養指導・低栄養予防教室、認知症予防教室、一般高齢者栄養教室 ・生活習慣病予防教室 病態別栄養教室の開催における栄養指導 <p>肥満教室・・・集団、個人栄養指導</p> <p>糖尿病教室・集団、個人栄養指導</p> <p>高血圧・高脂肪教室・集団、個人栄養指導</p> <p>各教室の企画、実施、評価</p> <p>食生活相談・・・個人栄養相談</p>	
	<p>ボランティアの養成 (昭和 62 年～平成 18 年)</p> <p>食生活改善推進員教室の開催</p> <p>食生活改善推進員の支援、指導</p>	
	<p>集団給食施設指導 (昭和 62 年～平成 18 年)</p> <p>医療監視 (平成 20 年、28～29 年)</p> <p>社会福祉法人施設の監査指導</p> <p>その他集団給食施設指導</p> <p>集団給食施設栄養士研修会の開催</p> <p>〃 管理者研修会の開催</p>	
	<p>学生実習 (昭和 62 年～平成 18 年)</p> <p>学生実習の指導</p>	
	<p>国民栄養調査 (昭和 62 年～平成 18 年)</p> <p>国民栄養調査の市内とりまとめ、実施 (平成 20 年、28～29 年)</p>	
	<p>病院における給食管理 (特別食献立管理・栄養指導) (平成 21 年～平成 24 年)</p> <p>院内給食管理</p> <p>食事箋による献立作成</p> <p>委託会社指導</p> <p>栄養指導 (入院患者・外来) (集団・個人)</p> <p>糖尿病、高血圧、高脂血症、腎臓病、クローン病、潰瘍性大腸炎、胃腸切除後、胃潰瘍、貧血 等</p> <p>病棟訪問</p> <p>NST 活動、褥瘡回診</p> <p>感染対策委員会、安全委員会、給食管理委員会 等</p> <p>糖尿病患者会</p>	
	<p>保育園児の栄養管理</p> <p>保育所の献立作成 (平成 25 年～平成 26 年)</p> <p>衛生マニュアル作成 (平成 30 年～令和元年)</p> <p>給食調理員指導 (〃 〃)</p> <p>給食調理員指導研修 (〃 〃)</p>	



	<p>保育所給食委託化に関すること (平成30年～令和元年)</p> <p>(保護者説明会、業務状況確認、指導等)</p> <p>給食調理員・保育士・保育士主任食育研修 (")</p> <p>乳児担当保育士乳児研修 (")</p> <p>保護者に対する栄養指導 (")</p> <p>キャリアアップ研修 (保育士・調理員) (")</p> <p>認可外保育所、地域型保育事業者に対する研修 (")</p> <p>保育所入所児童の健康管理 (")</p> <p>ホームページによる食育推進 (")</p> <p>実体調査関係業務 (")</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肥満児実態調査 ・アレルギー実態調査 ・食材価格調査 ・食育状況調査
	<p>乳幼児・妊婦の栄養管理</p> <p>全市的な母子栄養関係とりまとめ (平成25年～平成26年)</p> <p>母子栄養関係企画 (平成30年～令和元年)</p> <p>栄養指導用資料の作成 (")</p>
	<p>栄養管理業務統括 (平成27年)</p> <p>栄養改善事業の企画立案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食育イベントの等の企画 <p>介護予防事業の新規取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の低栄養予防対策 (サロンでの教室) 企画・立案 ・認知症予防 栄養ラボ 企画・立案
	<p>食育推進計画の進捗管理 (平成27年)</p> <p>食育推進計画の進捗管理</p> <p>(ライフステージに応じた食育推進、学校、保健所、事業所などの給食を通じた食育推進、食環境整備、食品ロス、地産地消に関する食育推進)</p>
	<p>食環境整備 (平成28年～平成29年)</p> <p>健康づくり応援店事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養士会への委託説明会 ・ガイドブックの作成 ・応援店による掲示ポスター、リーフレット作成 ・啓発活動 <p>食品表示関係の指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・栄養成分表示 ・虚偽誇大広告 <p>社員食堂による健康づくり事業</p>
	<p>周望学舎のシニアカレッジ (講義) (令和4年10月)</p> <p>主催：北九州市立年長者大学校周望学舎</p> <p>学生も一緒になり、健康寿命の延伸をめざした食生活についての講話</p>
その他の社会活動等	<p>・福岡県栄養士会理事 (公衆衛生事業部長) (平成28年～平成29年)</p>
所属学会	<p>日本栄養士会 (昭和57年4月～現在に至る)</p> <p>日本栄養改善学会 (令和4年5月～現在に至る)</p>
受賞歴	<p>福岡県栄養士会長表彰 (平成9年5月)</p> <p>日本栄養士会長表彰 (平成14年6月)</p>

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食品学総論 ・食品学各論 ・食品基礎実験 ・食品学実験Ⅰ ・食品学実験Ⅱ ・食品バイオテクノロジー ・食品の官能評価・鑑別演習 ・栄養福祉論 (分担) ・専門ゼミナール ・卒業論文 ・管理栄養士演習ⅠA、管理栄養士演習ⅠB、管理栄養士演習Ⅱ ・食健康センター活動(演習) (分担)
専門分野	■ 食品学・水産生物化学・水族毒性学
最終学歴	鹿児島大学大学院 連合農学研究科博士課程修了
学位	博士(水産学)
職歴	<p>鹿児島大学教育センター共通教育 非常勤講師 (平成14(2002)年5月～平成22(2010)年3月)</p> <p>尚絅大学短期大学部 食物栄養学科 准教授 (平成22(2010)年4月～令和2(2020)年3月)</p> <p>熊本市医師会看護専門学校 非常勤講師 (平成24(2012)年4月～令和2(2020)年3月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科 准教授 (令和2(2020)年4月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○ものづくり商品開発等への取組み (平成26(2014)年5月～令和2(2020)年3月)</p> <p>栄養士養成課程において専門知識、専門技術の習得を目指している学生に対し、ものづくり体験・食育体験を通じ、食に関して更なる興味を抱いてもらおうと同時に献立作成アイデアの向上などを目的とした取組みを行ってきた。これまでに平成26年の『TKUの日オリジナル弁当 米平燕(マイピーエン)』、平成26年度長島町水産加工グループ受託研究費における『オリジナルさつま揚げのレシピ開発』、平成28年度西田精麦株式会社及び尚絅食育研究センター共同開発による『大麦を用いたスイーツ開発』などに参画した。</p> <p>○ジビエ肉を用いた商品開発等への取組み (令和5年11月7日～令和5年11月30日)</p> <p>北九州市鳥獣被害対策課と協力し、近年野生動物による農作物への獣害が問題となっているイノシシの肉を利用して食用普及を目指し、イノシシ肉の特性実験やそれを活用したレシピ開発を行った。猪肉を一般的に普及させるため、猪肉に類似し一般的に扱われている豚肉(ロース)を対象とし、豚肉の各部位・猪肉の各部位を重曹に浸漬させることで、硬さ・重曹の残留感・保水力の数値を豚肉(ロース)に近づけるあるいは上回ることについて検討し、イノシシ肉を活用したレシピ開発に活かし、11月中旬に開催された農林水産祭で市民の方々へ向けた研究発表、試食提供を行いました。</p>
	【作成した教材等】
	<p>○「食べ物と健康 食品の安全」南江堂(2013.4)(共著)</p> <p>有菌幸司(編集)、小野 要 他18名</p> <p>(概要)</p> <p>動植物が保有している有害物質を誤飲して引き起こる食中毒について、管理栄養士・栄養士が知っておく必要がある項目をまとめている。</p> <p>担当：第4章 食中毒 d-自然食中毒 (pp.83-91.) (総頁数243頁)</p>
主な研究活動	【著書等】
	<p>○「食べ物と健康 食品の安全」南江堂(2013.4)(共著)(再掲)</p> <p>有菌幸司(編集)、小野 要 他18名</p> <p>(概要)</p> <p>動植物が保有している有害物質を誤飲して引き起こる食中毒について、管理栄養士・栄養士が知っておく必要がある項目をまとめている。</p> <p>担当：第4章 食中毒 d-自然食中毒 (pp.83-91.) (総頁数243頁)</p>
	【学術論文】

1. Synthetic surfactants for protecting cultured fish against toxic phytoplankton. (共著)

K. Ono, O. Arakawa, Y. Onoue, 他 8 名 Aquaculture Research, 29:569-572 (1998)

(概要)

有毒ラフィド藻に対して有効な防除剤を開発するために、各種高級脂肪酸(C₁₂-C₁₈)をモル数の異なるポリエチレンオキサイドと反応させてポリオキシエチレンアルキルエステルを合成し、その防除剤効果と魚毒性について調べた。

担当部分：ほぼ全ての本文を執筆

2. 「沖縄県沿岸に分布する腐肉食性および肉性巻貝の毒性と毒成分」(共著)

谷山茂人, 高谷智裕, 反町太樹, 相良剛史, 久保弘文, 大城直雅, 小野 要, 肖 寧, 橋 勝康, 荒川 修
日本食品衛生学会誌, 54(1):49-55 (2011)

(概要)

水産食品としての巻貝類の安全性確保に資するため、沖縄県沿岸に分布する腐肉食性及び肉性巻貝の 8 科 15 種を対象に毒性スクリーニングを実施し、有毒種の毒性と毒成分を検討した結果、5 種が有毒であり、今後も警戒を続ける必要があると結論づけた。

担当部分：試料採集等

3. 「熊本県漁業士会との地域連携学習活動による人材育成について」(共著)

水本恵子, 秋吉澄子, 小野 要
熊本県生活科・総合学習教育学会誌 生活と総合, 47-53 (2013)

(概要)

食文化や食材としての水産物が生活に密着しており、魚介類の栄養成分は、生活習慣病予防効果や健康機能成分など注目されているにもかかわらず魚食離れが進んでいる。この現象をふまえ、将来栄養士として活躍が期待される尚絅大学短期大学部学生を対象に熊本県漁業士会と協力し、魚食普及に取り組める人材育成を目的に特別セミナーを行った。また、学生に対して魚食に対するアンケートを行い、その結果について報告した。

担当部分：地域連携学習活動の責任者、アンケート実施及びデータ解析

4. 「ビタミンD・カルシウム強化牛乳が思春期小児の骨密度に与える影響の検討」(共著)

酒井一樹, 西山宗六, 小野 要, 鈴木光幸, 成高中之
小児科臨床 68(5), 1051-1058 (2013)

(概要)

熊本近郊に在住する思春期前後の女子 16 例、男子 4 例に対しビタミンD・カルシウム強化牛乳が骨密度増加に及ぼす影響、尿中カルシウム排泄量による教科牛乳負荷の安全性について検討した。思春期前後の小児の強化牛乳負荷の骨密度の増強に有効で尿路結石を考慮した安全性も高いと考えられた。

担当部分：データ解析及び文献検索

5. 「栄養士養成課程学生における炊き出しボランティア活動経験の効果と今後の課題」(共著)

小野 要, 秋吉澄子
熊本県生活科・総合学習教育学会誌 生活と総合, 41-48 (2015)

(概要)

平成 28 年熊本地震において認定特定非営利活動法人キャンパーが実施した益城町での炊き出し活動に、尚絅大学短期大学部食物栄養学科の学生 53 名と教職員 8 名が参加し、その活動内容と、被災者及び参加した学生に行ったアンケート結果について報告した。

担当部分：論文作成、アンケート実施及びデータ解析を担当

6. 「乾燥ナマコの投与がラットの実験的肝再生に及ぼす影響」(共著)

小野 要, 川合若菜, 宮崎里帆, 平坂勝也, 谷山茂人, 橋 勝康
日本食品化学学会 24(2), 44-49 (2017)

(概要)

乾燥ナマコ粉末 1%及び 5%含有飼料を摂取させたラットに対して、実験的に 70%部分肝切除手術を行い、実験的肝再生を行った。乾燥ナマコ粉末含有飼料を与えたラットの再生後の肝臓総タンパク質量は対照群で 1.27±0.16、5%ナマコ群 1.53±0.16 と 5%ナマコ群が有意に高く、また、肝臓の組織観察においても対照群と比較して 5%ナマコ群に変化が確認できたことからラットの実験的肝再生に乾燥ナマコの投与は有用である可能性が示唆された。

担当部分：論文作成、組織観察及びデータ解析を担当

【研究紀要】

1. 「平成 28 年熊本地震における益城町での炊き出し活動に参加して」(共著)

秋吉澄子, 小野 要

尚綱大学研究紀要, 127-140 (2017)

(概要)

平成 28 年熊本地震において認定特定非営利活動法人キャンパーが実施した益城町での炊き出し活動に、尚綱大学短期大学部食物栄養学科の学生 53 名と教職員 8 名が参加し、その活動内容を報告した。
担当部分：炊き出し活動の実施と活動内容のまとめ

【学会発表】

1. 「アオリイカ外套筋の氷蔵中における微細構造の変化」(共著)
田中幹大、梁 佳、肖 寧、水谷麻衣子、川口夕貴、小野 要、谷山茂人、橋 勝康
(主 催) 日本水産学会
(開 催 場 所) 長崎大学
(開 催 年 月 日) 平成 23(2011)年
2. 「一本釣り漁獲したカツオの血合筋の肉質と鮮度に及ぼす保存条件の影響」(共著)
梁 佳、榎本六秀、小野 要、黒坂浩平、山下秀幸、小河道生、谷山茂人、橋 勝康
(主 催) 日本水産学会
(開 催 場 所) 長崎大学
(開 催 年 月 日) 平成 23(2011)年
3. 「養殖プロトロボミオシン特異抗体の作製とヤケ肉発生に伴うトロポミオシンの変化」(共著)
宮崎里帆、肖 寧、小野 要、谷山茂人、橋 勝康
(主 催) 日本水産学会
(開 催 場 所) 長崎大学
(開 催 年 月 日) 平成 23(2011)年
4. 「コイ氷蔵中における筋タイプ別の生鮮度低下に伴う微細構造の変化」(共著)
梁 佳、榎本六秀、肖 寧、川口夕貴、小野 要、濱田友貴、谷山茂人、橋 勝康
(主 催) 日本水産学会
(開 催 場 所) 長崎大学
(開 催 年 月 日) 平成 23(2011)年
5. 「東シナ海産アカムツの可食部における一般成分組成とおいしさの関係」(共著)
藤丸達也、梁 佳、小野 要、岡本 昭、森 奈保美、谷山茂人、橋 勝康
(主 催) 日本水産学会
(開 催 場 所) 長崎大学
(開 催 年 月 日) 平成 23(2011)年
6. 「熊本県漁業士会との地域連携学習活動による人材育成について」(共著)
水本恵子、秋吉澄子、小野 要
(主 催) 熊本県生活科・総合学習教育学会
(開 催 年 月 日) 平成 25(2013)年
7. 「栄養士養成課程学生における炊き出しボランティア活動経験の効果と今後の課題」(共著)
小野 要、秋吉澄子
(主 催) 熊本県生活科・総合学習教育学会
(開 催 年 月 日) 平成 29(2017)年

【その他論文等】

1. Groundwater in Ryukyu archipelago is adequate to rear kuruma shrimp *Marsupenaeus japonicas* LARVAE (共著)
Saichiro Yokoyama, Kaname Ono, Yumiko Kimura.
(主 催) 養殖業者対象の研究会等
(開 催 年 月 日) 平成 22(2010)年

主な社会活動

- 尚綱公開講座講師 (平成 23(2011)年 9 月)
「キッチンサイエンス」というテーマにて尚綱公開講座の講師を務めた。
- 尚綱大学短期大学部夏季研修会講師 (平成 25(2013)年 9 月～令和元(2019)年 9 月)
例年 9 月に開催される学内研修会において、「人体の構造と機能および疾病の成り立ち・基礎栄養学」(生化学・栄養学)、「食べ物と健康」(食品衛生学)について講義を担当した。
- 菊陽町健康フェア講演会講師 (平成 28(2016)年 2 月)
菊陽町健康フェア(菊陽町健康づくり講演会)「キッチンサイエンス～健康は食事が大事～」というテーマで約 120 名の菊陽町市民に対して講演を行った。
- 「未来の種」事業「脱炭素にチャレンジ vol2～食卓から 0 カーボンを考えよう～」講師
(令和 4 年 8 月 23 日)



	「これからの献立を考える」～何をどう食べたら地球にやさしくできるのか～をテーマに小中学生を対象に環境変化と変わりゆく私たちの食について講演を行った。
	<p>・東筑紫学園のキャンパスで学ぶ周望学舎シニアカレッジ「元気にシニアライフを愉しもう2022」講師 (令和4年10月12日)</p> <p>「私たちにできること」～SDGsから学ぶ～をテーマにシニア世代の方々に対して地球温暖化による食の変化や「食品ロス」をテーマに行ってきたSDGs活動紹介により日々の生活の中で取り組めることを見つけ、私たちができることを探索する内容で講演を行なった。</p>
所属学会	<p>日本水産学会 正会員 (平成7(1995)年4月～現在に至る)</p> <p>日本増殖学会 正会員 (平成7(1995)年4月～現在に至る)</p> <p>マリントキシン研究会 正会員 (平成10(1998)年4月～現在に至る)</p> <p>マリントキシン研究会 役員(会計監事) (平成23(2011)年4月～現在に至る)</p> <p>日本食品衛生学会 正会員 (平成22(2010)年9月～現在に至る)</p> <p>日本食品化学学会 正会員 (平成29(2017)年4月～現在に至る)</p>
	<p>日本食品衛生学会第116回学術講演会実行委員会委員 (平成31年3月～令和2年5月)</p> <p>日本食品保蔵科学会正会員 (令和3年4月～現在に至る)</p> <p>日本食品衛生学会第118回学術講演会実行委員会委員 (令和3年9月～令和4年12月)</p>
受賞歴	<p>北里大学同窓会若手研究者研究奨励賞 (有毒ラフィト藻 <i>Heterosigma akashiwo</i> の出現と二枚貝の毒化に関する研究) (平成14(2002)年5月)</p> <p>海のお掃除プラントロボット夢コンテスト審査員特別賞 (令和3(2021)年11月)</p>

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎化学 ・微生物学 ・食品衛生学 ・食品学実験 I (集中実験) ・専門ゼミナール <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎化学
専門分野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 食品衛生学 ■ 微生物学 ■ 生化学
最終学歴	東京理科大学大学院 理学研究科化学専攻博士課程満期退学
学位	博士 (理学)
職歴	<p>盛岡大学短期大学部 食物栄養科 助手 (平成 17(2005)年 4 月～平成 22(2010)年 3 月)</p> <p>盛岡大学 栄養科学部栄養科学科 助教 (平成 22(2010)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>株式会社クオルテック 生化学分析部リーダー (平成 29(2017)年 4 月～令和 2 年 3 月)</p> <p>大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 客員研究員 (平成 29(2017)年 8 月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部食物栄養学科 准教授 (令和 2(2020)年 4 月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>○管理栄養士国家試験、全国統一模擬試験等模擬試験作題 (平成 25(2013)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>管理栄養士国家試験、全国統一模擬試験等の模擬試験において「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」区分の昨題を担当した。</p>
	<p>○九栄サプリ (モバイルアプリ) の開発 (令和 4 年 4 月～)</p> <p>管理栄養士の過去問題を解くことで、正答率や成績、勉強時間などをスマートフォンで簡単に管理できるアプリの開発を行った。学生や教員からアイデアを集め、アプリの開発を繋げ、管理栄養士国家試験の自主学習のサポートを行った。アプリは令和 4 年 4 月から 4 年生に配布し使用を開始した。</p>
	<p>○qA さん (栄養サポートアプリ) の開発 (令和 5 年 4 月～)</p> <p>ChatGPT をベースとした栄養サポートアプリを開発した。食事メニュー、体重、体組成、年齢などの情報を入力すると、推奨食事メニューを提案し、カロリーや栄養成分を出力する。北九州市の年長者研修大学校や子供食堂で実証実験を行った。薬との食べ合わせについては正確に情報を提供するが、食中毒物質については誤情報が出力されるため、事前学習で修正を行っている。</p>
主な研究活動	<p>【著書】</p> <p>1. 「三訂 食品衛生学実験」 建帛社 (2021.4) (共著) 編著 後藤政幸・熊谷優子、共著 一条知昭・上田龍太郎・金井美恵子・古賀信幸・坂尻徹也・杉山千歳・高橋真美・中島肇・中村智英子・梶田和彌・松浦寿喜・吉田徹</p> <p>2. 「三訂 食品衛生学実験 (第 2 版)」 建帛社 (2023.5) (共著) 編著 後藤政幸・熊谷優子、共著 一条知昭・上田龍太郎・金井美恵子・川野光興・古賀信幸・坂尻徹也・杉山千歳・高橋真美・中島肇・中村智英子・梶田和彌・松浦寿喜・吉田徹</p>
	<p>【学術論文】</p> <p>1. Absence of Binding Between the Human Transferrin Receptor and the Transferrin Complex of Biological Toxic Trace Element, Aluminium, because of an Incomplete Open/Closed Form of the Complex. (共著)</p>

Tetsuya Sakajiri, Takaki Yamamura, Takeshi Kikuchi, Kaoru Ichimura, Takako Sawada,
 Hirohumi Yajima

Biological Trace Element Research, vol.136:pp.279-286. (2010.9)

(概要)

キャピラリー電機泳動を用い、鉄トランスフェリンとアルミニウムトランスフェリン、そのレセプターの結合時の表面電荷変化の測定を行った。鉄トランスフェリンのブリッジ領域に大きな表面電荷の変化を見出し、鉄トランスフェリンは容易にレセプターと結合するがアルミニウム結合トランスフェリンがレセプターと結合しない理由が判明した。

担当部分：研究全般に参画

2. Calculations of inter-and intramolecular vibrations of a perylene derivative to intercept observed absorption spectra of the crystal. (共著) (2011.10)

Toshiaki Osuga, Akira Itoh, Tetsuya Sakajiri, Hirohumi Yajima, Shin-ichi Nagamatsu,

Keiko Kitagishi, Seiji Tsuzuki

IRMMW-Yhz 2011 M5.25, pp.183-185.

Doi:10.1109/irmmw-Thz.2011.6104865

(概要)

ペリレンは有機半導体や有機 EL 等の広範な材料となる。赤外振動と弾性振動の間にあるテラヘルツ分光によって、結晶における分子の集団運動や分子間相互作用を同定し、材料開発の基本データとする。

担当部分：分子軌道法による振動解析

3. Density functional theory study on metal-binding enagies for human serum transferrin-metal complexes. (共著) (2012.1)

Tetsuya Sakajiri, Hirohumi Yajima, and Takaki Yamamura

ISIRN Biophysics vol.2012 Article ID 124803 5pages

Doi:10.5402/2012/124803

(概要)

生体内微量元素のトランスポーターとして働くトランスフェリンと金属イオンとの溶液内における結合様式、結合エネルギーを知ることを目的とし、分子軌道法によるトランスフェリンと金属錯体エネルギーと結合速度について解析を行った。その結果、トランスフェリンとの結合には溶媒とエネルギーが重要であることが分かった。

担当部分：研究全般に参画

4. Further Theoretical analysis of absorption peaks of perylene-3,4,9,10-tetracarboxylic dianhydride in the terahertz region. (共著) (2012.9)

Toshiaki Osuga, Yusuke Izutani, Tetsuya Sakajiri, Keiko Kitagishi, Seiji Tsuzuki and Hideo Orita

Infrared, millimeter, and Terahertz Waves (IRMMW-Thz),

2012 International Conference on 2 pages

Doi:10.1109/IRMMW-Thz.2012.6380426

(概要)

ペリレンは有機半導体や有機 EL 等の広範な材料となる。赤外振動と弾性振動の間にあるテラヘルツ分光によって、結晶における分子の集団運動や分子間相互作用を同定し、材料開発の基本データとする。

担当部分：分子軌道法による振動解析を担当、分子全体の振動条件を追加することにより低波長領域の改良を試みた

6. COMPATONAL PREDECTION FOR CRITICAL RESIDUAL PAIRS IN COMPLEXAION BETWEEN DIFFERIC TF AND TFR2. (共著) (2013.5)

Tetsuya Sakajiri, Katsuya Ikuta, Hirohumi Yajima, Takaki Yamamura

American Journal of Hematology, vol.88,69

(概要)

トランスフェリンとその受容体 2 との相互作用を、組換え細胞作成のうえフローサイトメトリー法、表面プラズモン法により解析を行った。その実験データと計算のモデルを比較した。トランスフェリンとその受容体 2 との複合体の構造形成に必要なアミノ酸基を特定した。

7. Natronomonas pharaonic halorhodopsin Ser81 plays a role in maintaining chloride ions near the Schiff base. (共著) (2018.9)

Yuko Sakajiri, Eriko Sugano, Yoshito Watanabe, Tetsuya Sakajiri, Kitako Tabata, Takeshi Kikuchi,

Hiroshi Tomita

Biochem Biophys Res Commun, 503, 2326-2332

(概要)

網膜色素変性症、黄斑変性症は、光受容を担う網膜が変性し、視野が狭窄し、完全に失明する。ビタミンAにより症状の進行が遅れることが報告されているが、現在のところ治療法はない。本研究では、古細菌由来のハロロドプシンを視覚神経に導入することで高度な視覚再生法の確立を目指し、ハロロドプシンのシミュレーション解析を行い、パッチクランプ法により確認を行った。
担当部分：研究全般に参画

8. Development of an optogenetic gene sensitive to daylight and its implications in vision restoration. (共著) (2021.10)

Yoshito Watanabe, Eriko Sugano, Kitako Tabata, Akito Hatakeyama, Tetsuya Sakajiri, Tomokazu Fukuda, Taku Ozaki, Tomoya Suzuki, Tatsuki Sayama, Hiroshi Tomita, *NPJ Regen Med*, 14(6), 64, doi: 10.1038/s41536-021-00177-5.

(概要)

網膜色素変性症、黄斑変性症は、光受容を担う網膜が変性し、視野が狭窄し、完全に失明する。ビタミンAにより症状の進行が遅れることが報告されているが、現在のところ治療法はない。本研究では、微生物由来の陽イオンチャネルを視覚神経に導入することで高度な視覚再生法の確立を目指し、新たな陽イオンチャネルを設計し、シミュレーション解析を行い、遺伝子組換えによるパッチクランプ法により確認を行い、これまでより弱い光でも惹起可能なイオンチャネルを作成することができた。
担当部分：研究全般に参画

9. Zinc mediates the interaction between ceruloplasmin and apo-transferrin for the efficient transfer of Fe(III) ions. (共著) (2021.12)

Tetsuya Sakajiri, Masatoshi Nakatsuji, Yoshiaki Teraoka, Kosuke Furuta, Katsuya Ikuta, Kotoe Shibusa, Eriko Sugano, Hiroshi Tomita, Takashi Inui, Takaki Yamamura, *Metallomics*, 13 (12), mfab065

(概要)

鉄は生体内で必須の元素であるが、過剰な鉄は活性酸素を生成し、細胞毒性を有する。よって、多くのタンパク質により制御されている。トランスフェリンは、鉄輸送タンパク質として、セルロプラスミンは鉄酸化タンパク質として役割を担っている。血中に取り込まれた二価鉄はセルロプラスミンにより酸化され、トランスフェリンにより全身に運ばれることが知られている。しかしながら、セルロプラスミンからトランスフェリンへの鉄の移動については不明であった。本論文では、亜鉛イオンがセルロプラスミンの構造に影響を与え、セルロプラスミンとトランスフェリンが結合をすることをITCおよびSPR法により見出した。
担当部分：研究全般に参画

10. Properties of a Single Amino Acid Residue in the Third Transmembrane Domain Determine the Kinetics of Ambient Light-Sensitive Channelrhodopsin. (共著) (2023. 3)

Akito Hatakeyama, Eriko Sugano, Tatsuki Sayama, Yoshito Watanabe, Tomoya Suzuki, Kitako Tabata, Yuka Endo, Tetsuya Sakajiri, Tomokazu Fukuda, Taku Ozaki and Hiroshi Tomita, *International Journal of Molecular Sciences*, 24, 5054 (2023) doi: 10.3390/ijms24055054

(概要)

網膜色素変性症患者の視力回復の遺伝子治療でチャンネルロドプシンが使われており、視覚の応答速度にはチャンネル速度が重要である。172番目のアミノ酸残基が異なるComV1変異体のチャンネル速度を調査したところ、172番目の置換がチャンネル速度に影響した。置換アミノ酸残基のサイズや溶解度が速度に関係することが分かった。分子動力学シミュレーションでイオントンネル構造変化を確認した。172番目のアミノ酸残基はチャンネル速度を決定する重要な残基であり、我々の知見は視覚回復の改善に役立つことが考えられた。研究全般に参画。

【その他論文等】

1. 「ペプチド核酸を用いた高感度・オンサイト利用可能な家畜感染ウイルス検出システムの開発」(共著) 平成30年度 戦略的基盤技術高度化支援事業(サポイン)成果報告書 (2019.3)

(概要)

ペプチド核酸 (PNA) を用いた PNA クロマトによる家畜ウイルス検出キットの開発についての報告書をまとめた。申請企業として、関連会社の研究員の研究進捗を管理し、その成果についてまとめた。

2. 「ペプチド核酸を用いた高感度・オンサイト利用可能な家畜感染ウイルス検出システムの開発」(共著) 令和元年度 戦略的基盤技術高度化支援事業(サポイン)成果報告書 (2020.3)

(概要)

ペプチド核酸 (PNA) を用いた PNA クロマトによる家畜ウイルス検出キットの開発についての報告書をまとめた。申請企業として、関連会社の研究員の研究進捗を管理し、その成果についてまとめた。

3. 「ペプチド核酸を用いた高感度・オンサイト利用可能な家畜感染ウイルス検出システムの開発」(共著) 最終年度 戦略的基盤技術高度化支援事業(サポイン)研究開発等成果報告書 (2021.5)

(概要)

ペプチド核酸 (PNA) を用いた PNA クロマトによる家畜ウイルス検出キットおよび、ウイルス濃縮ピペットチップ型カラム、自動ウイルス濃縮検査装置の開発についての報告書をまとめた。開発期間 3 年間にわたるサポイン開発の関連会社による研究開発成果についてまとめた。

【学会発表等】

1. 「ヒト血清トランスフェリンとその受容体の複合体構造モデルと分子認識機構の解明」 (共同)

第 34 回 日本鉄バイオサイエンス学会学術集会

坂尻徹也、矢島博文、菊地武司、下仲基之、林もゆる、山村堯樹

〈主 催〉日本鉄バイオサイエンス学会

〈開催場所〉東京都

〈開催年月日〉平成 22(2010)年 9 月

(概要)

トランスフェリン(Tf)-その受容体(TfR)複合体に関する既知の知見を考慮し、STf の構造モデルと TfR の結晶構造解析の結果をもとに、Stf-TfR 複合体の構造モデルを計算化学的に予測した。その結果、apoSTf または、Fe₂Stf と TfR との複合体形成を誘引し、分子認識を支配する pH 依存的イオン結合の残基対がそれぞれの複合体において分子構造に対して特異的に存在することを新たに発見した。一方、Al イオンの STf 錯体(Al₂STf)の物理化学的特性の実測結果から、Al₂STf が Fe₂Stf と apoSTf の中間的構造をとると推定され、TfR に対する Al₂STf の非特異性は TfR との複合体形成に必須のイオン結合残基対の形成が抑制されるためと結論された。以上により、STf と TfR との間の分子認識機構を明らかにした。

2. Prediction of Contact Sites between Transferrin and Transferrin2 (共同)

第 48 回 生物物理学会年会

Testuya sakajiri, Hirohumi Yajima, Takehi Kikuchi, Motoyuki Shimonaka, Takaki Yamamura

〈主 催〉生物物理学会

〈開催場所〉仙台市

〈開催年月日〉平成 22(2010)年 9 月

(概要)

トランスフェリン(Tf)とトランスフェリン受容体 2(TfR2)の結合残基を Tf-TfR1 複合体構造を利用して結合残基の予測を行った。結果、ウシトランスフェリンが TfR2 特異的に結合する残基対を発見した。
担当部分：研究全般に参画

3. Computational Structure Model of Differic and Apo Transferrin-Transferrin Receptor 2 Complexes (共同)

European Iron Club Annual Meeting 2010

Takaki Yamamura, Tetsuya Sakajiri

〈主 催〉European Iron Club

〈開催場所〉Nijmegen (Nederland)

〈開催年月日〉平成 22(2010)年 9 月

(概要)

トランスフェリン受容体 2 とトランスフェリンとの分子認識機構の解明を試みた。その結果、トランスフェリン受容体 2 が受容体 1 と比較して複合体結合能が 1/30 になることは、複合体内のイオン結合対が一つ減少することを見出した。
担当部分：研究全般に参画

4. Computational Structure Model of Diferric and Apo Transferrin-Transferrin Receptor 1 and Transferrin-Transferrin Receptor 2 Complexes (共同)

4th Protein and Peptide Conference

Takaki Yamamura, Testuya sakajiri

〈開催場所〉 Beijing (China)

〈開催年月日〉 平成 23(2011)年 3 月

(概要)

トランスフェリンレセプター1(TfR1)は生体鉄の細胞内取込を担っている。一方トランスフェリンレセプター2(TfR2)は肝臓から分泌されるヘプシジンという生体鉄を制御するホルモンの産生に関わっている。これら二つの受容体のアミノ酸一次配列は非常によく似通っているが、生体内における機能は大きく異なる。本研究は、TfR1 を TfR2 の構造ホモロジーモデリングによりモデリングを行い、トランスフェリンとその TfR1 及び TfR2 複合体の構造を予測し、それらの構造と機能の比較を行った。その結果、TfR2 と TfR1 で複合体を構築するイオン結合残基の位置が異なることが分かった。このことにより、ヘプシジンの生産性に関わる Tf と TfR2 の結合能を制御していることが分かった。

5. PREDECTION FOR RESIDUAL CONTACT PAIRS BETWEEN TRANSFERRIN AND TRANSFERRIN RECEPTOR 2 by COMPUTATIONAL STRUCTURE MODELING. (共同)

International Bioiron society 2011

Testuya sakajiri, Hirohumi Yajima, Motoyuki Shimonaka, Moyuru Hayashi, and Takaki Yamamura

〈開催場所〉 Vancouver (Canada)

〈開催年月日〉 平成 23(2011)年 5 月

(概要)

トランスフェリンレセプター2 とトランスフェリンとの複合体モデル構造から、複合体構成するアミノ酸残基の結合状態を計算した。血清鉄濃度の制御に関わるアミノ酸残基対を予測した。

担当部分：研究全般に参画

6. The Computational Structure Model of the Diferric Transferrin-Transferrin Receptor 2 Complex Involved in Body's Iron Homeostasis . (共同)

7th Asia Pacific Conference on Clinical Nutrition

Takaki Yamamura, Testuya sakajiri

〈開催場所〉 Bangkok (Thailand)

〈開催年月日〉 平成 23(2011)年 6 月

(概要)

高血圧の要因の一つである内因性平滑筋収縮ホルモンの異常分泌について研究を行った。本研究において、副腎髄質ホルモン、ノルアドレナリン交感神経の緊張時に多量に分泌され、細動脈収縮 (血圧上昇) にいたるメカニズムについて調査を行った。

担当部分：研究全般に参画

7. Lowering of Binding Affinities of Agonists to Their Receptors by Inhibition of Rho-associated Kinase(ROCK) in Rat Aorta. (共同)

24th Scientific meeting of the international society of hypertension

Takaki Yamamura, Testuya sakajiri

〈開催年月日〉 平成 24(2012)年 9 月

(概要)

高血圧の要因の一つである内因性平滑筋収縮ホルモンの異常分泌について研究を行った。本研究において、副腎髄質ホルモン、ノルアドレナリン交感神経の緊張時に多量に分泌され、細動脈収縮 (血圧上昇) にいたるメカニズムについて調査を行った。

8. 「残基間平均距離統計マップ(ADM)によるハーフβバレルタンパクのフォールディング機構の解析」(共同)

第85回 日本生化学会大会
石塚由子、松岡雅成、坂尻徹也、菊地武史
(主 催) 日本生化学会
(開催年月日) 平成24(2012)年9月

(概要)

βバレルタンパク質のフォールディング機構についてADM法を用いて解析を行った。Kisterの提唱したフォールディングに重要なKey残基がADM法によっても予測されることを見出した。

9. 「鉄トランスフェリン及びアポトランスフェリンとそのレセプター2との複合体構造予測」(共同)

第85回 日本生化学会大会
坂尻徹也、矢島博文、山村堯樹
(主 催) 日本生化学会
(開催場所) 福岡市
(開催年月日) 平成24(2012)年9月

(概要)

トランスフェリンとその受容体2との相互作用を自由エネルギー摂動法で求め、組換え実験データとの比較を行った。トランスフェリンとその受容体2との複合体形成に関わるアミノ酸残基対を予測した。

10. Computational Prediction for Critical Residual Pairs in Complexation between differic Tf and TfR2 (共同)

International Bioiron society 2013
Tetsuya Sakajiri, Katsuya Ikuta, Hirohumi Yajima, and Takaki Yamamura
(開催場所) London (England)
(開催年月日) 平成25(2013)年4月

(概要)

トランスフェリンとその受容体2との相互作用について組織換細胞を作成し、フローサイトメトリー法、表面プラズモン法により解析を行った。その実験データと計算のモデルを比較した。トランスフェリンとその受容体2との複合体の構造形成に重要アミノ酸基を特定した。

11. 「亜鉛イオン結合セルロプラスミン(Cp)とトランスフェリン(Tf)との相互作用：Fe(III)は安全にCpからTfへ移行」(共同)

第39回 日本鉄バイオサイエンス学会学術集会
坂尻徹也、山村堯樹
(主 催) 日本鉄バイオサイエンス学会
(開催場所) 岡山市
(開催年月日) 平成27(2015)年8月

(概要)

生体必須鉄イオンは腸管から二価鉄として血中に吸収される。二価鉄は二価鉄酸化酵素セルロプラスミン(Cp)によって三価鉄に酸化される。三価鉄は血中鉄輸送タンパク質トランスフェリン(Tf)に結合され、造血細胞をはじめ各細胞に供給される。三価鉄は遊離の状態で存在する毒性が強いため、いかにCpからTfへ三価鉄が移行するか、鉄代謝における長年の課題であった。

今回の研究で、その移行の機構(CpとTfの相互作用)が解明され、そこには亜鉛イオンが必要不可欠であることが判明した。また、この事実が最近特に問題となっている亜鉛欠乏性貧血の病因解明の一助になると学会から評価され、学術奨励賞を受賞した。

12. Study of interaction between transferrin and transferrin receptor 2 by molecular simulation and flow cytometry. (共同)

第 53 回 生物物理学会年会

Tetstya Sakajiri, Katsuya Ikuta, and Takaki Yamamura

〈主 催〉生物物理学会

〈開 催 場 所〉金沢大学

〈開 催 年 月 日〉平成 27(2015)年 9 月

(概要)

鉄抑制ホルモンであるヘプシジンの産生のトリガーとなるトランスフェリン受容体 2 の機能解明を目的とする研究を行った。トランスフェリンとその受容体 2 との相互作用について、組織換細胞を作成し、またその比較として受容体 1 の強制発現細胞を作成したうえでフローサイトメトリー法、表面プラズモン法により解析を行った。その実験データと計算のモデルを比較し、計算結果と実験データとの相関をとることができた。トランスフェリンとその受容体 2 との複合体の構造形成に重要なアミノ酸残基を特定した。

13. Zinc(III) facilitates interaction between the multicopper ferroxidase celuroplasmin and the Iron transporter transferrin resulting in safe transfer Fe(III) from the former enzyme to The latter protein. (共同)

The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies(PACIFICHEM 2015)

坂尻徹也、山村堯樹

〈開 催 場 所〉Honolulu(Hawaii(U.S.A.))

〈開 催 年 月 日〉平成 27(2015)年 12 月

(概要)

トランスフェリンとセルロプラスミンの相互作用解析を表面プラズモン共鳴のみならず等温滴定型カロリーメトリーでも確認を行った。その結果亜鉛イオン結合セルロプラスミンとトランスフェリンの間で結合を確認することができた。このことから Fe(III)が Cp から Tf へ安全に移動することがわかった。

14. 「トランスフェリンレセプター-2 S138 及び E686 は鉄結合トランスフェリンとの相互作用を下げけるキー残基である」(共同)

第 16 回 日本蛋白質科学会

坂尻徹也、生田克哉、山村堯樹

〈主 催〉日本蛋白質科学会

〈開 催 場 所〉福岡市

〈開 催 年 月 日〉平成 28(2016)年 6 月

(概要)

鉄抑制ホルモンであるヘプシジンの産生のトリガーとなるトランスフェリン受容体 2 の機能の解明を目的とした研究を行った。トランスフェリンとその受容体 2 との相互作用を組織換細胞を作成し、またその比較として受容体 1 の強制発現細胞を作製した。フローサイトメトリー法、表面プラズモン法により解析を行った。その実験データと計算のモデルを比較し、複合体の構造形成に重要なアミノ残基 S138 と E686 であることを特定した。

15 「トランスフェリン受容体 2 における鉄トランスフェリンとの間の生体鉄センサーに関わるキー残基の探索」(共同)

第 40 回 日本鉄バイオサイエンス学会

坂尻徹也、生田克哉、山村堯樹

〈主 催〉日本鉄バイオサイエンス学会

〈開 催 場 所〉名古屋市

〈開 催 年 月 日〉平成 28(2016)年 9 月

(概要)

鉄抑制ホルモンであるヘプシジンの産生のトリガーとなるトランスフェリン受容体 2 とトランスフェリンの複合体の解析を試みた。また HFE との複合体についてディスカッションした。

16. ZINC MEDIATES A DIRECT PROTEIN-PROTEIN INTERACTION BETWEEN CERULOPLASMIN AND TRANSFERRIN. (共同)

16th International Nutrition & Diagnostics conference

Sakajiri T., Nakatsuji M., Teraoka Y., Ikuta K., Inui T., Yamamura T.

〈開催場所〉 Prague (Czech)

〈開催年月日〉 平成 28(2016)年 10 月

(概要)

鉄の吸収、鉄の利用に重要なセルロプラスミンからトランスフェリンへの鉄の移動に必要な要因を確認した。トランスフェリンとセルロプラスミンの相互解析を表面プラズモン共鳴のみならず等温滴定型カロリメトリーで確認を行った。また、native-PAGE, 等電点電気泳動によりセルロプラスミンの表面電荷変化が亜鉛により引き起こされることがわかった。その結果亜鉛イオン結合セルロプラスミンとトランスフェリンの間で結合を確認することができた。さらに Cp から Tf への Fe(III)の移動が活性酸素の発生をともなわずに行われることが確認された。

17. Zinc deficiency causes concurrently iron deficiency and production of non-transferrin-bound iron (NTBI). (共同)

8th congress of the International Bioiron Society

Sakajiri T., Nakatsuji M., Teraoka Y., Ikuta K., Inui T., Yamamura T.

〈開催場所〉 Prague (Czech)

〈開催年月日〉 令和元(2019)年 5 月

(概要)

鉄の吸収、鉄の利用に重要なセルロプラスミンからトランスフェリンへの鉄の移動に亜鉛が関わっていることを報告したが、実際に亜鉛欠乏血清や血漿における鉄の移動について調べた。血清、血漿内でも亜鉛が必要であることがわかり、移動できなかった鉄は活性酸素の発生要因でもある非トランスフェリン結合鉄になることを発見した。

18. 分子動力学シミュレーションに基づくアミノ酸間相互作用解析と高機能チャネルロドプシンの開発

第 43 回 日本眼薬理学会

〈開催場所〉 北海道大学 (札幌)

〈開催年月日〉 令和 5(2023)年 11 月

(概要)

網膜色素変性症患者の視力回復の遺伝子治療において、チャネルロドプシンが使用されている。視覚の応答速度にはチャネル速度が重要であり、172 番目のアミノ酸残基が異なる ComV1 変異体のチャネル速度を調査した。その結果、172 番目の置換がチャネル速度に影響を与え、置換アミノ酸残基のサイズや溶解度が速度に関係することが分かった。分子動力学シミュレーションでイオントンネル構造の変化も確認した。172 番目のアミノ酸残基はチャネル速度を決定する重要な要素であり、この知見は視覚回復の改善に役立つと考えられる。研究全般に参画した。

【招待講演】

1. The modeling for complex structure of Sumol-SMAD4 in silico. (共同)

坂尻徹也、山村堯樹

〈主 催〉 東北師範大学生命科学院

〈開催場所〉 中国中春市

〈開催年月日〉 平成 24(2012)年 8 月

(概要)

Sumol-SMAD4 の機能と抗癌作用について英語による講演を行った。また、複合モデルの構築法について説明した。

2. Instructure for homology modeling and binding energy calculation of complex structure. (共同)

坂尻徹也、山村堯樹

〈主 催〉 東北師範大学生命科学院

〈開催場所〉 中国中春市

〈開催年月日〉 平成 24(2012)年 8 月

(概要)

最近の計算化学の手法について講演を行った。特にモデリングの方法、ソフトウェアや分子動力学計算による結合エネルギー解析について英語で説明した。

【リサーチセミナー】

1. 「**計算化学による鉄代謝機構の解明**」(単独)

坂尻徹也

〈主 催〉立命館大学生命情報学科

〈開 催 場 所〉立命館大学

〈開 催 年 月 日〉平成 28(2016)年 12 月

(概要)

計算化学 (分子動力学、ホモロジーモデリング) による鉄代謝機構の解明についてセミナーを行った。

【共同研究】

1. **トランスフェリンの遺伝子組換えおよびその受容体との相互作用解析、トランスフェリンの分子認識機構の解明** (平成 22(2010)年度～平成 23(2011)年度)
東京理科大学理学研究科 矢島研究室・下仲研究室
(概要)
トランスフェリンとその受容体の複合体構造の解明を目的とする共同研究。
担当部分：分子モデリング及び分子間の相互作用解析
2. **HLADH によるトリプチセンの酸化還元反応と分子モデリングによる予測**
(平成 22(2010)年度)
東京理科大学理学研究科 竹村研究室
担当部分：HLADH とトリプチセンの複合体構造の予測及び学生指導
3. **芳香環化合物のテラヘルツ分光**
(平成 23(2011)年度)
大阪大学レーザーエネルギー学研究センター
(概要)
芳香環化合物は、有機半導体や有機 EL 等の広範な材料となる。赤外振動と弾性振動による中間にあるテラヘルツ分光によって、結晶における分子の集団運動や分子間相互作用を同定し、材料開発の基本データとすることを目的とした研究。
担当部分：分子軌道法による振動解析
4. **トランスフェリンとその受容体との表面プラズモン共鳴を用いた相互作用解析**
(平成 24 年度～現在に至る) ※継続研究中
旭川医科大学第三内科
担当部分：トランスフェリンとその受容体との表面プラズモン共鳴を用いた解析
5. **SMAD4 と SUMO-1 の複合体構造予測**
(平成 24(2012)年度～平成 25(2013)年度)
東北師範大学生命科学学院 李曉萌研究室
担当部分：発がん制御に関わる SMAD4 と SUMO-1 の複合体構造への分子モデリング解析
6. **イムノクロマト法による食品アレルギー検出方法の開発 PNA クロマトによるウイルス検査キットの開発**
(平成 27(2015)年 8 月～現在に至る) ※株式会社 クオルテックにて継続研究中
株式会社 クオルテック
(概要)
イムノクロマト法による食品アレルギー検出法開発を行った。設備のない施設においても食品アレルギーの検出を簡便、低コストで行うことを目的として開発した。検出には抗体を結合して蛍光ビーズを用い、専用の蛍光光度計によって検出を行う方法を開発した。
7. **視細胞保護のための光作動性ペプチド誘導ベクターの開発**
(平成 29(2017)年 4 月～現在に至る) ※継続研究中 (基盤 C)
岩手大学工学部視覚再生研究室
(概要)
視覚再生研究室菅野先生との共同研究。
8. **鉄欠乏性貧血症に関わるタンパク質間相互作用ならびに亜鉛との関連性の解明**
(平成 30(2018)年 4 月～現在に至る) ※継続研究中 (基盤 C)
大阪府立大学生命環境科学研究科 生体高分子機能学研究室
旭川医科大学医学部 第 3 内科
(概要)
大阪府立大学 生体高分子機能学研究室 乾先生との共同研究
旭川医科大学医学部 生田先生との共同研究

所属学会

- | | |
|---------------|--------------------------|
| 生物物理学会 | (平成元(1989)年 10 月～現在に至る) |
| 日本鉄バイオサイエンス学会 | (平成 18(2006)年 9 月～現在に至る) |
| 国際バイオ鉄学会 | (平成 19(2007)年 4 月～現在に至る) |
| 日本生化学学会 | (平成 20(2008)年 7 月～現在に至る) |

受賞歴

- | | |
|--------------------------|--------------------|
| 第 39 回日本鉄バイオサイエンス学会学術奨励賞 | (平成 27(2015)年 8 月) |
|--------------------------|--------------------|

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調理学実習Ⅲ ・栄養士のための農園演習 ・スポーツ栄養学 ・管理栄養士演習 <p>-----</p> <p>[リハビリテーション学部 理学療法学科・作業療法学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食と農園
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 管理栄養士養成 ■ スポーツ栄養学
最 終 学 歴	鹿児島大学 応用生命科学専攻
学 位	博士 (農学)
職 歴	<p>医療法人共和会 小倉リハビリテーション病院 管理栄養士 (平成 20(2008)年 4 月～平成 22(2010)年 3 月)</p> <p>学校法人 タイケン学園 日本ウェルネス専門学校北九州校非常勤講師 (「スポーツ栄養学」担当) (平成 23(2011)年 10 月～現在に至る)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (平成 24(2012)年 4 月～平成 27(2015)年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助教 (平成 27(2015)年 4 月～平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 講師 (平成 29(2017)年 4 月～令和 3(2021)年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 (令和 3(2021)年 4 月～現在に至る)</p>
主な研究活動	<p>【学会発表】</p> <p>「摂食パターンからみた乳製品の栄養生理学的研究 —運動時の血清クレアチンホスホキナーゼ活性に及ぼす影響を中心として—」 (概要) 牛乳の栄養効果の効果的発現にむけて食物摂取行動としての摂食パターンをとりあげ、CPK をメルクマールとして運動時の筋損傷の修復に及ぼす影響について検討を行った。(第 59 回日本栄養改善学会発表)</p> <p>「トマト酢」レシピ作りプログラムが管理栄養士養成課程学生の「ライフスキル」に及ぼす影響 (概要) 「トマト酢」の有効性試験を行うための「トマト酢」を用いたレシピ作成プログラムが、発達段階の心身ともに最終段階を迎える年齢期の学生にどのような影響を及ぼすかということに焦点をあて、日常生活スキル尺度 (大学生版) を用いて評価・検討をすることを目的とし事前平均値(標準偏差)57.18±6.59 点、事後 63.06±6.51 点と有意に得点が増加した(p<.01)。管理栄養士として育っていく本学学生に、このような小さな実学体験を通して地についた主体性・創造力を養成できればと思われる。(第 22 回日本健康教育学会発表)</p> <p>「管理栄養士養成課程学生における自己管理能力育成プログラムの実践」 (概要) 自らの体型に悩みがあり、管理栄養士となる学生が、自己管理能力育成プログラムを実践することで自らの行動変容の難しさを実感し、対象者の気持ちを楽しみ、質の高い栄養指導に繋げられることを目的とした。対象者は、本学寮生 (18.4±0.52 歳)、毎朝身体測定を行い、月に数回の自己管理能力育成プログラムを行い、プログラム前後に食生活アンケートを実施した。プログラム前後において、体重の平均値を検討した結果、10 月 1 週目と 11 月 1 週目において有意に減少した (p<.05)。毎朝の身体測定、目標設定の記録を行うことで、自己管理能力が身に付き、また集団で実施することが意識を高めることに繋がり行動変容をし、持続することを促した。(第 22 回日本健康教育学会発表)</p>

「成熟トマト・未成熟トマトの機能性評価」

(概要)

トマトを栽培する場合は、栽培途中に、間引きという作業を行うため、未成熟の青トマトや葉・茎等も廃棄物となる。成熟(赤)トマトおよび未成熟(青)トマトの各部位(蒂・果肉・外皮・葉・枝・根)の水抽出物、EtOH 抽出物における機能性を評価し、廃棄物となる部分を有効活用する方法を探索することで、付加価値の高い新たな利用法を見出すことを目的とした。サンプルの抽出にあたっては、EtOH 抽出物、水抽出物を調製し、抗酸化活性の測定には、ORAC 法で行い、メラニン生成抑制活性の測定には、MTT 法による細胞生存率、メラニン量の測定を行った。未使用、廃棄物である葉や青トマトに、抗酸化活性作用・メラニン生成抑制作用が検出されたため、今後、当該部分を用い、化粧水・美白化粧水等の付加価値の高い利用法の開発が期待される。(第 60 回栄養改善学会発表)

「トマトの部位別におけるリパーゼ阻害活性の検討」

(概要)

成熟(赤)トマト、未成熟(青)トマトを部位別に分類しリパーゼ阻害活性試験を行うことで網羅的にトマトの未利用部分も含めた機能性評価を行った。成熟(赤)トマト、未成熟(青)トマトの各抽出物がリパーゼの活性へ与える影響を検討した結果、トマト(葉)の EtOH 抽出物、トマト(茎)の水抽出物、青トマト(外皮)の水抽出物にリパーゼ活性が確認された ($p < .01$)。リパーゼ活性が阻害されるような物質は、摂取エネルギーを低下させ、抗肥満効果を発揮する有効なアプローチの一つとして考えられ、トマトの未利用部位を含めた新規活用法の開発が期待される。(第 60 回日本栄養改善学会発表)

「世界の一体化」をめぐる歴史叙述の試み

—教科に関する科目(大学院)「スポーツ史演習」の教育実践—

本学学生の食意識及び運動習慣

食生活については、国民健康・栄養調査の 18~29 歳の同世代と比較すると有意な差は認められなかったが、日本人の食事摂取基準と比較すると、推奨量並びに、目標量に達しておらず、管理栄養士、理学療法士、作業療法士を目指し国民の健康増進に携わる専門家としては、まず自らの食行動の見直しが課題となる。特に、心身ともに成熟期を迎える年齢時の「食と運動」の基本姿勢の「確立」はその後のライフスタイルに大きな影響を及ぼすことが考えられることから、この時期での正しい食習慣の形成を重要視しなければならない。

Repression effects of hydrolysates from hen-egg proteins on amyloid fibril formation

Volume 25, Issue 59, 2022, Pages 384–391,

The Journal of Poultry Science

Yukiko Muroi, Izumi Aburaya, Takuro Shima, Mitsuharu Matsumoto, Ryo Sasahara, Takahisa Suzuki, Keiichi Watanabe, Koji Wada, Yasushi Sugimoto

概要:

鶏卵タンパク質のプロテアーゼ消化物つまりペプチドにアミロイド線維抑制効果があるかを調べ、アミロイド線維形成タンパク質である HEWL に対してペプチドに効果を観察した結果、卵白 (EW-ペプチド) およびカラザペプチド (C-ペプチド) に強い抑制効果を認めた。また、ヒトリゾチーム (h-Lz) およびヒトアミロイドβペプチド 1-42 (Aβ1-42) の線維形成に対してもカラザペプチドは強い抑制効果を示した。さらに、アミロイド線維形成を促進する 2 価の金属イオンの効果を減少させる効果を持つことも確認された。

Stability of hen egg-white lysozyme during embryonic development

Volume 86, Issue 10, October 2022, Pages 1353–1361

Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry

Muroi, Yukiko, Aburaya, Izumi, Kiyokawa, Yuki, Watanabe, Keiichi

WADA, Koji, ABE, Yoshito, Sugimoto, Yasushi

概要:

発生過程で卵白タンパク質の機能が維持されているかを検討し、発生過程において、精製されたリゾチームタンパク質は、Micrococcus lysodeikticus に対する酵素活性および溶菌活性、ならびに Staphylococcus aureus に対する増殖阻害能を有することが認められ、胚発生が進行するにつれて、精製されたリゾチームは、Km と Vmax の変化、変性温度のわずかな低下、および表面疎水性の増加を示した。また、トリプトファン環境にも変化が認められた。リゾチームが発生後期まで、酵素活性および抗菌活性を維持しながら、

	<p>多少の構造変化が起きていることが確認された。</p> <p>豆腐の微細構造とゲル強度に及ぼすトリグリセリドの脂肪酸組成の影響(農芸化学会、2024年3月) (概要) 大豆油の脂肪酸組成は、通常リノール酸約50%、オレイン酸約20%であるが、高オレイン酸系統大豆は、オレイン酸含量が80%以上で著しく高い。</p> <p>我々は、分離大豆タンパク質(SPI)に通常大豆油(SO)または高オレイン酸大豆油(HOSO)を添加して豆乳を調製後、凝固剤としてCaSO₄を加え、脂質組成の異なる2種の豆腐を作成した。走査型電子顕微鏡で観察した結果、HOSO豆腐は、SO豆腐より、密度の高い均一な微細構造をしていることを見出した。さらに、豆腐のゲル強度に及ぼす脂肪酸組成の影響を調べるために、SPIにSOまたは80%オレイン酸を含むオリーブオイル(OO)を添加して豆腐を作成し、破断強度試験を行った。その結果、OO豆腐は、SO豆腐よりゲル強度が高く、弾力があることが分った。このOO豆腐の物性は、HOSO豆腐がより密度の高い微細構造を有していたという結果と一致しており、トリグリセリド中の高いオレイン酸含量に起因するものと考えられる。</p>																																																
【九州栄養福祉大学農園便りの編集】																																																	
	<ul style="list-style-type: none"> ・「九州栄養福祉大学 農園便り」春季 第一号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」秋季 第二号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」冬季 特別号三号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」春季 第四号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」秋季 第五号 ・「九州栄養福祉大学 農園便り」冬季 第六号 																																																
<p>主な社会活動 (講師依頼)</p>	<table border="0"> <tr> <td>子育て支援事業講師</td> <td>平成25年～現在</td> </tr> <tr> <td>北九州市食育推進委員</td> <td>平成29年～平成31年</td> </tr> <tr> <td>北九州市農事センター食育講師</td> <td>平成29年～平成30年</td> </tr> <tr> <td>「(公財)日本スポーツ協会公認スポーツリーダー養成講習会」講師</td> <td>平成30年～現在</td> </tr> <tr> <td>福岡県栄養士会スポーツ栄養講師</td> <td>令和2年9月</td> </tr> <tr> <td>保育所(園)調理研修講師</td> <td>令和4年1月</td> </tr> <tr> <td>令和4年度 男二代子育て講座講師</td> <td>令和4年6月</td> </tr> <tr> <td>大谷市民センター食育講座の講師</td> <td>令和4年6月</td> </tr> <tr> <td>地域の多面的健康づくり教室講師</td> <td>令和5年1月</td> </tr> <tr> <td>上毛町立上毛中学校食育講師</td> <td>令和5年6月</td> </tr> <tr> <td>葛原市民センタースポーツ栄養講師</td> <td>令和5年7月</td> </tr> <tr> <td>大原医療スポーツ製菓専門学校北九州「教育課程編成委員会」委員</td> <td>令和5年～令和7年</td> </tr> <tr> <td>大谷市民センター食育講座講師</td> <td>令和5年10月</td> </tr> <tr> <td>福岡県幼稚園連盟「食育・アレルギー」講師</td> <td>令和5年11月</td> </tr> <tr> <td>北九州市保育園連盟 乳幼児期食育講座講師</td> <td>令和5年11月</td> </tr> <tr> <td>(地域連携活動)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>・世界体操・世界新体操北九州 丸ふじコラボ スポーツ弁当</td> <td>令和3年年9月</td> </tr> <tr> <td>・「出張子ども食堂」戸畑区子ども食堂イベントでのトマトカレー提供</td> <td>令和4年年5月</td> </tr> <tr> <td>・第1回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当</td> <td>令和4年10月</td> </tr> <tr> <td>・世界水泳福岡2023で、丸ふじとコラボ弁当販売</td> <td>令和5年9月</td> </tr> <tr> <td>・スポーツ弁当ベジタリアン、最強×西京弁当</td> <td></td> </tr> <tr> <td>・北九州市立高校とコラボして、第36回竜王戦でチョウチンジャー弁当作成・販売</td> <td>令和5年10月</td> </tr> <tr> <td>・第2回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当</td> <td>令和5年10月</td> </tr> <tr> <td>・トマトのおんがえしサプリメント開催</td> <td>令和5年11月</td> </tr> </table>	子育て支援事業講師	平成25年～現在	北九州市食育推進委員	平成29年～平成31年	北九州市農事センター食育講師	平成29年～平成30年	「(公財)日本スポーツ協会公認スポーツリーダー養成講習会」講師	平成30年～現在	福岡県栄養士会スポーツ栄養講師	令和2年9月	保育所(園)調理研修講師	令和4年1月	令和4年度 男二代子育て講座講師	令和4年6月	大谷市民センター食育講座の講師	令和4年6月	地域の多面的健康づくり教室講師	令和5年1月	上毛町立上毛中学校食育講師	令和5年6月	葛原市民センタースポーツ栄養講師	令和5年7月	大原医療スポーツ製菓専門学校北九州「教育課程編成委員会」委員	令和5年～令和7年	大谷市民センター食育講座講師	令和5年10月	福岡県幼稚園連盟「食育・アレルギー」講師	令和5年11月	北九州市保育園連盟 乳幼児期食育講座講師	令和5年11月	(地域連携活動)		・世界体操・世界新体操北九州 丸ふじコラボ スポーツ弁当	令和3年年9月	・「出張子ども食堂」戸畑区子ども食堂イベントでのトマトカレー提供	令和4年年5月	・第1回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当	令和4年10月	・世界水泳福岡2023で、丸ふじとコラボ弁当販売	令和5年9月	・スポーツ弁当ベジタリアン、最強×西京弁当		・北九州市立高校とコラボして、第36回竜王戦でチョウチンジャー弁当作成・販売	令和5年10月	・第2回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当	令和5年10月	・トマトのおんがえしサプリメント開催	令和5年11月
子育て支援事業講師	平成25年～現在																																																
北九州市食育推進委員	平成29年～平成31年																																																
北九州市農事センター食育講師	平成29年～平成30年																																																
「(公財)日本スポーツ協会公認スポーツリーダー養成講習会」講師	平成30年～現在																																																
福岡県栄養士会スポーツ栄養講師	令和2年9月																																																
保育所(園)調理研修講師	令和4年1月																																																
令和4年度 男二代子育て講座講師	令和4年6月																																																
大谷市民センター食育講座の講師	令和4年6月																																																
地域の多面的健康づくり教室講師	令和5年1月																																																
上毛町立上毛中学校食育講師	令和5年6月																																																
葛原市民センタースポーツ栄養講師	令和5年7月																																																
大原医療スポーツ製菓専門学校北九州「教育課程編成委員会」委員	令和5年～令和7年																																																
大谷市民センター食育講座講師	令和5年10月																																																
福岡県幼稚園連盟「食育・アレルギー」講師	令和5年11月																																																
北九州市保育園連盟 乳幼児期食育講座講師	令和5年11月																																																
(地域連携活動)																																																	
・世界体操・世界新体操北九州 丸ふじコラボ スポーツ弁当	令和3年年9月																																																
・「出張子ども食堂」戸畑区子ども食堂イベントでのトマトカレー提供	令和4年年5月																																																
・第1回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当	令和4年10月																																																
・世界水泳福岡2023で、丸ふじとコラボ弁当販売	令和5年9月																																																
・スポーツ弁当ベジタリアン、最強×西京弁当																																																	
・北九州市立高校とコラボして、第36回竜王戦でチョウチンジャー弁当作成・販売	令和5年10月																																																
・第2回メディカルフェスタ食物栄養学ブース担当	令和5年10月																																																
・トマトのおんがえしサプリメント開催	令和5年11月																																																

	<ul style="list-style-type: none"> ・市長と語ろう！みらいミーティングで、北九州市立高校との取り組みや、九州栄養福祉大学の取り組みを発表 ・地球の歩き方北九州出版イベント、丸ふじ、北九州市立高校コラボ「恵方巻チョウチンジャーバージョンお披露目」 ・北九州マラソンの給食で、トマトのおんがえしサブレをゆめマートと一緒に配布 ・北九州市放課後児童クラブのお弁当献立作成 松浦ファームから規格外野菜をいただき、丸ふじが手作りお弁当を作成し子どもたちへ提供 ・門司みなと祭 2024 で B&W とコラボして「九栄大トマトの焼きカレー」販売 	<p>令和5年11月</p> <p>令和6年2月</p> <p>令和6年2月</p> <p>令和6年3月</p> <p>令和6年5月</p>
<p>所属学会</p>	<p>日本栄養改善学会 日本栄養士会 日本スポーツ栄養学会 日本リハビリテーション研究会 日本健康教育学会 大学地域連携学会</p>	<p>(平成23(2011)年1月～現在に至る)</p> <p>(平成23(2011)年4月～現在に至る)</p> <p>(平成25(2013)年4月～現在に至る)</p> <p>(平成24(2012)年4月～現在に至る)</p> <p>(平成25(2013)年4月～現在に至る)</p> <p>(令和6(2024)年4月～現在に至る)</p>

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<p>[食物栄養学部 食物栄養学科]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食経営管理論 ・給食管理 ・応用栄養学実習 ・給食管理実習 ・臨地実習Ⅲ (特定給食施設) / 臨地実習指導 (演習) ・管理栄養士演習ⅠA、管理栄養士演習ⅠB、食健康センター活動 (演習)・専門ゼミナール
専 門 分 野	<ul style="list-style-type: none"> ■ 給食経営管理論 ■ 給食管理実習 ■ 応用栄養学実習
最 終 学 歴	中村学園大学大学院 流通科学研究科 修士課程修了
学 位	修士 (流通科学)
職 歴	<p>学校法人中村学園 事業部 (昭和 59(1984)年 4 月～昭和 60(1985)年 8 月)</p> <p>同 給食課 副主任 (昭和 60(1985)年 9 月～昭和 61(1986)年 10 月)</p> <p>同 給食課 主任 (昭和 61(1986)年 10 月～平成 9(1997)年 3 月)</p> <p>同 給食課 支配人 (平成 9(1997)年 4 月～平成 16(2004)年 4 月)</p> <p>同 給食課 係長 (平成 9(1997)年 4 月～平成 26(2014)年 5 月)</p> <p>同 給食課 課長代理 (平成 26(2014)年 6 月～平成 26(2014)年 6 月)</p> <p>株式会社 真慈会 (平成 30(2018)年 7 月～令和 3(2021)年 9 月)</p> <p>株式会社 リスマイル (令和 3(2021)年 10 月～令和 4(2022)年 3 月)</p> <p>九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 准教授 (令和 5(2023)年 4 月～現在に至る)</p>
教育上の業績	<p>教育方法の実践例</p> <p>○中村学園大学短期大学部「栄養士総合講座」担当 (平成 25(2013)年 11 月)</p> <p>同 (平成 26(2014)年 9 月)</p> <p>○中村学園大学短期大学部「中村学」担当 (平成 27(2015)年 7 月)</p>
主な研究活動	<p>【学術論文】</p> <p>1. 特集「給食事業の新たなビジネスモデルの構築」(単著) (中村学園大学院流通科学研究科修士論文集 平成 29(2017)年 3 月)</p> <p>(概要)</p> <p>給食事業における課題のうち 2 点の解決に向けて取り組んだ。</p> <p>第一に、労働力不足を改善するために毎日の食事を安全で安心に提供できる食材の入手方法について検討した。</p> <p>第二には、増加傾向にあるインバウンドへの対応として、日本食の良さについて発信した。</p> <p>特にハラル市場への発信を中心として検討をおこなった。</p> <p>九州内の大規模法人における 3 つの優良事例を中心に、給食事業の新たなビジネスモデル構築に向けて調査研究をおこなった。</p>
	<p>【学会発表】</p> <p>1. 「学生食堂における食育推進活動の取り組み—第 1 報—」(共著) 城田知子、寺澤洋子、近江雅代、岩本昌子、三好恵美子、内田和宏、松隈美紀、<u>中野眞弓</u>、松永美歩 (主 催 等) 第 59 回 日本栄養改善学会 (開催場所) 愛知県 (開催年月) 平成 24(2012)年 9 月</p> <p>2. 「学生食堂における食育推進活動の取り組み—第 2 報—」(共著) 内田和宏、寺澤洋子、近江雅代、岩本昌子、三好恵美子、松隈美紀、<u>中野眞弓</u>、松永美歩、城田知子 (主 催 等) 第 59 回 日本栄養改善学会 (開催場所) 愛知県 (開催年月) 平成 24(2012)年 9 月</p>



	<p>3. 「学生食堂における食育推進活動の取り組み—第3報—」 (共著) 松永美歩、中野眞弓、岩本昌子、三好恵美子、内田和宏、松隈美紀、城田知子、寺澤洋子 〈主催等〉第59回 日本栄養改善学会 〈開催場所〉愛知県 〈開催年月〉平成25(2013)年9月</p> <p>4. 「事業所における食育推進活動の実施状況と評価—第1報—」 (共著) 高橋清美、中野眞弓、城田知子 〈主催等〉第61回 日本栄養改善学会 〈開催場所〉神奈川県 〈開催年月〉平成26(2014)年8月</p> <p>5. 「事業所における食育推進活動の実施状況と評価—第2報—」 (共著) 高橋清美、中野眞弓、城田知子 〈主催等〉第62回 日本栄養改善学会 〈開催場所〉福岡県 〈開催年月〉平成27(2015)年9月</p>
<p>【事例報告】 於「全国食事サービス活動セミナー」</p>	
	<p>1. 「介護予防に関する食事サービス～低栄養予防教室の実践～」 について 〈主催〉全国老人給食協会 〈開催年月〉平成18(2006)年7月</p>
<p>主な社会活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 「九電工スポーツ寮における栄養管理等参画」 (スポーツ選手寮における献立作成及び喫食状況の確認等通じて食事面からのサポートを実施した) (平成19(2007)年12月～平成22(2010)年2月) • 「中村学園三陽中学校における学校給食の献立作成と運営サポート」 (福岡県内の私立中学校における初の試みとして学校給食を導入した) (平成22(2010)年4月～平成28(2016)年5月) • 「セミナーハウスのアレルギー食対応マニュアル」 (研修施設のセミナーハウスにおける個別対応用のアレルギーマニュアルを作成した) (平成25(2013)年7月) • 「高齢者施設における食事形態別対応の整理」 (高齢者施設における栄養士の負担軽減のために、 利用者の食事形態を電子化するなど運営業務を整理した) (平成25(2013)年11月～12月)
<p>所属学会</p>	<p>日本栄養改善学会 (平成24(2012)年8月～平成28(2016)年5月) 日本栄養士会 (令和4年2月～再入会 現在に至る)</p>

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目	<p>【食物栄養学部 食物栄養学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床栄養学Ⅲ ・臨床栄養学実習Ⅰ ・臨床栄養学実習Ⅱ ・臨地実習Ⅰ ・キャリアデザイン ・臨地実習指導（演習）
専門分野	<p>■臨床栄養学分野</p> <p>■医科学分野</p>
最終学歴	大分大学・大学院博士課程前期/後期 医学系研究科/医学専攻 卒業/修了/単位取得満期退学
学位	博士（医学）/修士（医科学）/学士（栄養学）/準学士（）/専門士
職歴	九州栄養福祉大学食物栄養学部食物栄養学科（令和6年4月～現在に至る）
教育上の業績	<p>○マルチメディア機器を活用し、オンライン配信として市民公開講座として、口腔ケアの意義と食事との相互作用について講演を行なった。</p> <p>○臨床栄養学に関する複数の動画をインターネット上にアップロードし公開した。</p> <p>○栄養食事指導 500 症例以上。NST/嚥下/褥瘡委員会、(NST:120 症例/年、嚥下造影検査：300 症例/年、褥瘡：60 症例/年)。院内感染予防委員会、新人管理栄養士の教育接遇指導を実施した。</p> <p>○特定保健指導(80 症例/年)、口腔ケア事業(50 症例/年)および高齢者の介護予防と一体的な事業(100 件/年)を担当した。</p> <p>○Swift：これまでに iOS 用のアプリケーションの開発としてこれまでに管理栄養士養成用（科目：臨床栄養学）の教材を作成した。</p> <p>○マイクロソフト VBA：マクロを用い、行政と大学機関、歯科医師会との情報を連携するシステムを開発した。</p> <p>○栄養食事指導 500 症例以上。NST・嚥下褥瘡委員会、(NST:120 症例/年、嚥下造影検査：300 症例/年、褥瘡：60 症例/年)。院内感染予防委員会、新人管理栄養士の教育接遇指導</p> <p>○特定保健指導(80 症例/年)、口腔ケア事業(50 症例/年)および高齢者の介護予防と一体的な事業(100 件/年)を担当。</p> <p>現在は、口腔ケア事業を中心として、在宅患者さまの栄養アセスメントや栄養食事指導に従事</p> <p><資格></p> <p>栄養士免許証、管理栄養士免許証、栄養教諭第一種免許、アメリカ心臓協会 BLS プロバイダー</p>
主な研究活動	<p>【学術論文】</p> <p>1.仮想式ランチバイキング法を用いた行動療法の実践 肥満研究 Vol. 17(3), 216-23 平成23年12月 青佐泰志、千葉政一、石川真奈美、湯浅玲子、嶋田知生、中塚和夫、加隈哲也、吉松博信 (概要) 特定健診対象者 44 名に対してランチバイキング(仮想式食品選択訓練)法を行い、支援前後における臨床診査値を比較した。さらに積極的支援 6 名は腹囲、糖脂質代謝、循環動態を指標とする血液検査値を比較した。食品選択内容についてロジスティック回帰分析を行った。その結果、保健指導のランチバイキング法の導入は、保健指導の維持および体重の減量、BMI の是正効果が認められ、積極的支援者においては収縮期、拡張期血圧、中性脂肪の改善が認められた。食品選択の特性は、飽和脂肪酸の摂取比率の増加が病態悪化のリスクを高めることが示唆された。 [全頁担当]</p> <p>2. 糖尿病外来における HbA1c の季節変動解析と食事栄養指導介入による影響 日本病態栄養学会誌 Vol.17(4), 459-64 平成26年8月 青佐泰志、千葉政一、家原麻理、甲斐愛祐美、魏会興、浅井祥子、村上由希子、三橋由美子、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、柴田洋孝、井野辺純一</p>

(概要) 2 型糖尿病患者における HbA1c を時系列的に解析した。次に栄養指導の介入が糖尿病患者の HbA1c の季節変動に及ぼす影響について検討した。対象は I 病院の 2 型糖尿病外来患者 122 名とした。非介入群の HbA1c は夏季から秋季にかけて有意な減少、冬季から春季にかけて有意な増加が認められた。一方、介入群では、冬季から春季における HbA1c 上昇の有意な抑制が認められた。季節 ARIMA 解析により、両群の HbA1c の変動パターンが有意に異なった。栄養指導により、HbA1c の季節変動において有意な改善が認められ、2 型糖尿病患者の糖代謝の改善への有効性が示唆された。

[全頁担当]

3. A clinical approach to brown adipose tissue in the para-aortic area of the human thorax
 PLoS One 10(4):e0122594.

Huixing Wei, Seiichi Chiba, Chinatsu Moriwaki, Hirokazu Kitamura, Keisuke Ina, Taishi Aosa, Kenichiro Tomonari, Koro Gotoh, Takayuki Masaki, Isao Katsuragi, Hitoshi Noguchi, Tetsuya Kakuma, Kazuyuki Hamaguchi, Tatsuo Shimada, Yoshihisa Fujikura, Hirotaka Shibata

(概要) We analyzed 1550 healthy adults who underwent medical check-ups by positron-emission tomography and computed tomography (PET-CT) imaging, 8 cadavers, and 78 autopsy cases in an observational study. We first characterized the difference between the mediastinum and the supraclavicular areas using counts of BAT detection and conditions based on PET-CT outcomes. Para-aortic area (paBAT) may be one of the essential sites for clinical application in BAT study because of its visible anatomy with feeding vessels and sympathetic/parasympathetic innervation functionally affected by outer condition and senescence.

Overview of BATs and cwlls. P11, Determinants of BAT morphology. P12

4. Distribution of histaminergic neuronal cluster in the rat and mouse hypothalamus
 J Chem Neuroanat 68:1-13:10. 1016

Chinatsu Moriwaki, Seiichi Chiba, Huixing Wei, Taishi Aosa, Hirokazu Kitamura, Keisuke Ina, Hirotaka Shibata, Yoshihisa Fujikura

(概要) We examine stereological distributions of hypothalamic HDCi neuronal clusters of rats and mice by the Inagaki's nomenclature. We reveal the characteristic patterns of the distributions of HDCi clusters especially in E4 and E5. The precise identification of the HDCi clustering may provide useful information for further investigations.

HDCi neuronal clusters of the hypothalamus of rats. P4, 5, HDCi neuronal clusters of the hypothalamus of mice. P7, 8, 9

5. Pore alterations of the endothelial lining of rat fenestrated intestinal capillaries exposed to acute stress

Histol Histopathol(7):807-17.

Taishi Aosa, Seiichi Chiba, Hirokazu Kitamura, Keisuke Ina, Shuji Tatsukawa, Chinatsu Moriwaki, Huixing Wei, Koro Gotoh, Takayuki Masaki, Tetsuya Kakuma, Hirotaka Shibata, Yoshihisa Fujikura

(概要) We evaluated changes in the diameter and density of endothelial pores of the lamina propria of intestinal villi induced by continuous light (CL) exposure for 48 h and the correlation between these changes and serum IL-6 concentration in the portal vein in a rat model. We found significant increases in both the pore diameter and density, accompanied by a significant increase in portal IL-6 concentration. In contrast, intravenous noradrenaline administration mimicked CL-induced modifications of the diameter and density of pores and the elevation of portal vein IL-6 concentration. These findings suggested that stress-induced inflammatory responses in the portal system may be a part of the modifications of the endothelial pores triggered by sympathetic activation.

ALL

6. Dietary education suppresses the seasonal exacerbation of HbA1c with type 2 diabetes mellitus patients in Japan

別府大学大学院紀要 24. 117-125.

Taishi Aosa

(概要) Type 2 diabetes mellitus patients show seasonal variation in their hemoglobin A1c levels. Seasonal variation in hemoglobin A1c levels was able to observe in type 2 diabetes mellitus patients; it decreased between summer and autumn and increased in winter to spring. HbA1c in diet-educated type 2 diabetic mellitus patients decreased independently of seasonal variation. Furthermore, early intervention improved blood glucose levels effectively; this may prove to be important in regulating carbohydrate

ALL

7. 豊前市口腔ケアプロジェクトにおける栄養評価の取り組みとその成果.

栄養学雑誌. Vol. 81 No. 1 40-49

岡田圭子、濱寄朋子、角田聡子、朴祇佑、茂山博代、片岡正太、山田志麻、酒井理恵、芹田千穂、白木光、星野行孝、相良献、廣島屋貴俊、岩寄正則、青佐泰志、松本研一、石田昌嗣、出水幹夫、平良祥、大津ナツミ、倉富慶太郎、金光真由美、末永公恵、川端真純、田利ひさみ、辻元利美、園田まち子、夕田光、鳥井寛子、伊藤美保子、亀甲真奈美、中野渚、筒井修一、安細敏弘。

(概要) 口腔ケア実施後には、ベースライン時と比較して骨格筋指数、骨格筋量が有意に高くなっていった。口腔ケア実施後に、栄養状態良好な者の割合が高くなっていったことに着目し、再評価時の簡易栄養状態評価表を目的変数とした多変量のロジスティック回帰分析を行った。その結果ベースライン時の骨格筋指数と食品摂取の多様性評価票の点数が有意に低栄養評価と関連していた。口腔のみならず栄養や全身健康状態の改善がみられたことは、有意義で実践的な取り組みであるといえる。

データ抽出、栄養食事指導を担当。

8. Influence of Age on Associations of Occlusal Status and Number of Present Teeth with Dementia in Community-Dwelling Older People in Japan: Cross-Sectional Study

Int J Environ Res Public Health. 1;20(9):5695. doi: 10.3390/ijerph20095695.

Hikaru Shiraki, Satoko Kakuta, Ji-Woo Park, Taishi Aosa, Toshihiro Ansai

(概要) The present study examined the associations of tooth loss and occlusal status with dementia in the older people, as well as the effects of age on those relationships. A total of 196 older participants were enrolled. Occlusal status was assessed using functional tooth units (FTU), calculated based on the number of paired natural or artificial teeth. The results showed that higher FTU was associated with lower risk of dementia. Furthermore, when stratified by median age, the association was greater for those aged less than 84 years. On the other hand, there was no significant association of number of present teeth with dementia.

データ抽出、栄養アセスメント、栄養食事指導を担当

	<p>【学会発表】</p> <p>1. 特定保健指導におけるランチバイキングを用いた行動療法の実践 〈主 催〉第31回日本肥満学会 〈開催場所〉前橋市 〈開催年月日〉平成22年10月 (概要) S 病院における特定保健指導において、ランチバイキング法を用いた食品選択の特性を解析した。 <u>青佐泰志</u>、石川真奈美、湯浅玲子、千葉政一、嶋田知生、吉松博信</p> <p>2. 仮想形式ライチバイキング法を用いた行動療法の実践 〈主 催〉第32回日本肥満学会 〈開催場所〉姫路市 〈開催年月日〉平成23年11月 (概要) ランチバイキング法を用いた食品選択の特性をロジスティック回帰分析にて解析し行動療法の有用性を示した。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、石川真奈美、魏会興、嶋田知生、加隈哲也、吉松博信</p> <p>3. ランチバイキング法を用いた行動療法 〈主 催〉第17回日本病態栄養学会 〈開催場所〉京都市 〈開催年月日〉平成24年1月 (概要) 保健指導のランチバイキング法の導入は、保健指導の維持および体重の減量、BMI の是正効果が認められ、積極的支援者においては収縮期、拡張期血圧、中性脂肪の改善が認められた。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、石川真奈美、魏会興、嶋田知生、加隈哲也、吉松博信</p> <p>4. 交感神経活性化による腸管有窓性毛細血管の微細構造の検討 〈主 催〉第22回日本病態生理学会 〈開催場所〉由布市 〈開催年月日〉平成24年8月 (概要) Wistar 系雄性ラットの尾静脈にNoradrenaline を投与し、腸管の有窓性毛細血管の小孔を電子顕微鏡にて観察した。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、北村祐和、加隈哲也、伊奈啓輔、藤倉義久、原政英</p> <p>5. ヒト後縦隔褐色脂肪組織の生物学的特性 〈主 催〉PEC-CT を用いてヒト褐色脂肪組織の電子顕微鏡像を観察した。 〈開催場所〉京都市 〈開催年月日〉平成24年10月 (概要) PEC-CT を用いてヒト褐色脂肪組織の電子顕微鏡像を観察した。 魏会興、千葉政一、北村裕和、伊奈啓輔、森脇千夏、<u>青佐泰志</u>、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、浜口和之、原正英、藤倉義久</p> <p>6. 交感神経活性化に伴う腸管微細構造の検討 〈主 催〉 〈開催場所〉京都市 〈開催年月日〉平成24年10月 (概要) istar 系雄性ラットの尾静脈にNoradrenaline を投与し、腸管の有窓性毛細血管の小孔を電子顕微鏡にて観察した。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、北村祐和、魏会興、森脇千夏、加隈哲也、伊奈啓輔、藤倉義久、原政英</p>
--	---

	<p>7. 高コレステロール食慢性投与による脳コレステロール合成とヒスタミン神経細胞への影響 (i) 〈主 催〉 第 16 回日本ヒスタミン学会 〈開催場所〉 岡山市 〈開催年月日〉 平成24年10月 (概要) C57BL/6 雄性マウスに 4 週間のコレステロール添加食を摂取させると脳内にタウタンパク陽性反応を示した。 森脇千夏、千葉政一、北村裕和、魏会興、<u>青佐泰志</u>、伊奈啓輔、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、浜口和之、藤倉義久、原政英</p>
	<p>8. ヒスチジン投与による骨格筋量の検討 〈主 催〉 第 56 回日本糖尿病学会 〈開催場所〉 熊本市 〈開催年月日〉 平成25年5月 (概要) C57BL/6 雄性マウスにヒスチジン添加食を投与すると骨格筋量の増加と糖代謝改善機能が認められた。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、魏会興、正木孝幸、後藤孔郎、加隈哲也</p>
	<p>9. 持続的な照明ストレスが及ぼす生体応答と毛細血管構造の動態変化 〈主 催〉 第 34 回日本肥満学会 〈開催場所〉 東京 〈開催年月日〉 平成25年10月 (概要) Wistar 系雄性ラットの概日リズムを変調されるとストレス応答に応じて、体重増加傾向、耐糖能異常および循環動態の増悪を認めた。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、北村祐和、魏会興、森脇千夏、加隈哲也、伊奈啓輔、藤倉義久、柴田洋孝</p>
	<p>10. 地域糖尿病予防教室におけるインスリン抵抗性改善のための目標減量体重の設定 〈主 催〉 第 35 回日本肥満学会 〈開催場所〉 宮崎市 〈開催年月日〉 平成26年10月 (概要) F 市における 2 型糖尿病教室の開催においてインスリン抵抗性改善のための減量目標値を示した。 川原愛弓、森脇千夏、吉村加奈、矢野義記、<u>青佐泰志</u></p>
	<p>11. 飢餓における H1 受容体を介した視床下部ヒスタミン機能 〈主 催〉 第 18 回日本ヒスタミン学会 〈開催場所〉 尼崎市 〈開催年月日〉 平成26年10月 (概要) 飢餓状態の H1KO マウスは大動脈周囲の褐色脂肪細胞における UCP1 の活性を認めた。 魏会興、千葉政一、<u>青佐泰志</u>、森脇千夏、伊奈啓輔、正木孝幸、後藤孔郎、加隈哲也、柴田洋孝、藤倉義久</p>
	<p>12. 持続照明を用いた慢性ストレスにおけるラットの生体応答の解析 〈主 催〉 第 36 回日本肥満学会 〈開催場所〉 名古屋市 〈開催年月日〉 平成27年10月 (概要) Wistar 系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した場合、耐糖能異常、炎症反応を認めた。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、北村裕和、森脇千夏、立川修二、伊奈啓輔、藤倉義久</p>
	<p>13. Wistar 系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した結果、門脈中の IL-6 濃度の上昇を認めた。 〈主 催〉 第 18 回日本病態栄養学会 〈開催場所〉 京都市 〈開催年月日〉 平成27年1月 (概要) Wistar 系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した結果、門脈中の IL-6 濃度の上昇を認めた。 <u>青佐泰志</u>、魏会興、森脇千夏、千葉政一、伊奈啓輔、藤倉義久</p>

	<p>14. 2型糖尿病患者のHbA1cの季節変動解析と栄養指導介入による影響 〈主 催〉第18回日本病態栄養学会 〈開催場所〉京都市 〈開催年月日〉平成27年1月 (概要) 2型糖尿病患者に栄養指導を継続的に行うとHbA1cの季節変動値が改善を認めた。 <u>青佐泰志</u>、魏会興、森脇千夏、千葉政一、伊奈啓輔、藤倉義久</p>
	<p>15. A profiling of food selection of patients of lifestyle related disease 〈主 催〉12th Asian Congress of Nutrition 〈開催場所〉横浜 〈開催年月日〉平成27年5月 (概要) ランチバイキング法を用いた生活習慣病患者の食品選択のプロファイリングを行った結果、飽和脂肪酸に有意な差を認めた。 重永雅美、千葉政一、<u>青佐泰志</u>、森脇千夏、後藤孔郎、正木孝幸、加隈哲也、柴田洋孝</p>
	<p>16. 慢性ストレスを負荷したラットの脂肪分布解析 〈主 催〉第37回日本肥満学会 〈開催場所〉横浜 〈開催年月日〉平成28年10月 (概要) Wistar系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育した場合、肩甲骨下の褐色脂肪組織中のUCP-1の活性は低下した。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、北村裕和、森脇千夏、伊奈啓輔、藤倉義久</p>
	<p>17. Wistar系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育し高脂肪食を与えると肝組織中に大型脂肪滴の沈着と炎症反応を認めた。 〈主 催〉第20回日本病態栄養学会 〈開催場所〉京都市 〈開催年月日〉平成29年1月 (概要) Wistar系雄性ラットに持続的な照明環境下で飼育し高脂肪食を与えると肝組織中に大型脂肪滴の沈着と炎症反応を認めた。 <u>青佐泰志</u>、千葉政一、北村裕和、森脇千夏、伊奈啓輔、藤倉義久</p>
	<p>18. 高齢者における日本版地中海食スコア (jMDS) と生命予後との関連性 〈主 催〉第70回日本口腔衛生学会 〈開催場所〉沖縄 〈開催年月日〉令和3年5月 (概要) 日本版地中海食スコアが高い者は、現在歯数が多く、食生活の質が維持されている可能性があることから死亡のリスクが低いことが考えられた。 朴祇佑、角田聡子、濱寄朋子、岡田圭子、<u>青佐泰志</u>、酒井理恵、芹田千穂、茂山博代、片岡正太、筒井修一、岩寄正則、安細敏弘</p>
	<p>19. 地域在住女性高齢者における認知症と食事パターンとの関連 〈主 催〉第72回日本航空衛生学会 〈開催場所〉大阪 〈開催年月日〉令和5年5月 (概要) F市における高齢女性の認知症発症と食事のパターンを解析した。その結果、脂肪酸の摂取量が認知症の有無と関係していることがわかった。 白木 光、角田聡子、朴 祇佑、遠藤景子、<u>青佐泰志</u>、筒井修一、安細敏弘</p>

主な社会活動	・福岡県豊前市 在宅歯科訪問事業における栄養アセスメントおよび栄養食事指導 ・福岡県豊前市立小学校における口腔ケア事業
所属学会	日本栄養士会学会（平成28年～） 日本臨床栄養学会（令和3年～） 日本健康栄養・システム学会（令和6年～）
受賞歴	大分大学 学業成績表彰（第3条第1号）授与（平成24年3月）

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目	<ul style="list-style-type: none"> ・調理学実習Ⅲ ・料理特別実習Ⅲ（中華料理） ・栄養教育論実習Ⅰ ・食品加工学実習Ⅲ ・栄養士のための農園演習
専 門 分 野	■管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学大学院 健康科学研究科 修了
学 位	修士（健康科学）
職 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科助手（令和2年4月～現在に至る）
主な研究活動	<p>【学術論文】</p> <p>1.鶏卵ペプチドのアミロイド線維形成抑制効果 （概要）鶏卵タンパク質のプロテアーゼ消化物つまりペプチドにアミロイド線維加制効果があるかを調べ、アミロイド線維形成タンパク質である HEWL に対してペプチドに効果を観察した結果、卵白（EW-ペプチド）およびカラザペプチド（C-ペプチド）に強い抑制効果を認めた。また、ヒトリゾチーム（h-Lz）およびヒトアミロイドB ペプチド1-42（Aβ1-42）の線維形成に対してもカラザペプチドは強い抑制効果を示した。さらに、アミロイド線維形成を促進する2価の金属イオンの効果を減少させる効果を持つことも確認された。</p> <p>【学会発表】</p> <p>1. 鶏卵ペプチドのアミロイド線維形成抑制効果 〈主 催〉第69回 日本食品科学工学会 〈開催場所〉オンライン開催 〈開催年月日〉2022年8月25日</p> <p>（概要）アミロイド線維形成における鶏卵タンパク質加水分解物の抑制効果 ヒトリゾチーム（h-Lz）およびヒトアミロイドB ペプチド1-42（Aβ1-42）の線維形成に対してもカラザペプチドは強い抑制効果を示した。さらに、アミロイド線維形成を促進する2価の金属イオンの効果を減少させる効果を持つことも確認された。</p> <p>2.豆腐の微細構造とゲル強度に及ぼすトリグリセリドの脂肪酸組成の影響 〈主 催〉日本農芸化学会 〈開催場所〉東京農業大学 〈開催年月日〉2024年3月25日</p> <p>（概要）大豆油の脂肪酸組成は、通常リノール酸約50%、オレイン酸約20%であるが、高オレイン酸系統大豆は、オレイン酸含量が80%以上で著しく高い。 我々は、分離大豆タンパク質（SPI）に通常大豆油（SO）または高オレイン酸大豆油（HOSO）を添加して豆乳を調製後、凝固剤としてCaSO₄を加え、脂質組成の異なる2種の豆腐を作成した。走査型電子顕微鏡で観察した結果、HOSO豆腐は、SO豆腐より、密度の高い均一な微細構造をしていることを見出した。さらに、豆腐のゲル強度に及ぼす脂肪酸組成の影響を調べるために、SPIにSOまたは80%オレイン酸を含むオリーブオイル（OO）を添加して豆腐を作成し、破断強度試験を行った。その結果、OO豆腐は、SO豆腐よりゲル強度が高く、弾力があることが分った。このOO豆腐の物性は、HOSO豆腐がより密度の高い微細構造を有していたという結果と一致しており、トリグリセリド中の高いオレイン酸含量に起因するものと考えられる。</p>

所属学会	<ul style="list-style-type: none">・公益社団法人 福岡県栄養士会 (2020年4月～現在に至る)・日本健康・栄養システム学会 (2022年6月～現在に至る)・特定非営利活動法人 日本栄養改善学会 (2023年6月～現在に至る)・公益社団法人 農芸化学会 (2023年11月～現在に至る)・大学地域連携学会 (2024年4月～現在に至る)
------	---

アキタ

榎田 ののか AKITA Nonoka 助手

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・〔食物栄養学科〕 調理学実習Ⅰ ・〔食物栄養学科〕 調理学実習Ⅱ ・〔食物栄養学科〕 食品加工学実習 ・〔食物栄養学科〕 料理特別実習Ⅱ
専 門 分 野	■ 管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
学 位	学士（食物栄養学）
職 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (令和4(2022)年4月～現在に至る)

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・食品基礎実験 ・基礎栄養学実験 ・生化学実験 ・栄養教育論実習Ⅱ ・キャリアガイダンスⅡ
専 門 分 野	■ 管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
学 位	学士 (食物栄養学)
職 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (令和4(2022)年4月～現在に至る)

ヤマモト アカネ
山本 茜

YAMAMOTO Akane 助手

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・〔食物栄養学科〕 臨床栄養学実習Ⅰ ・〔食物栄養学科〕 料理特別実習Ⅰ ・〔食物栄養学科〕 臨床栄養学実習Ⅱ ・〔食物栄養学科〕 応用栄養学実習 ・〔食物栄養学科〕 キャリアデザイン
専 門 分 野	■管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 卒業
学 位	学士（食物栄養学）
職 歴	株式会社ケアリング 管理栄養士 (2022年4月～2022年8月) 九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (2023年4月～現在に至る)

おおの ゆうな
大野 優菜

ONO Yuna

助手

所 属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担 当 科 目 〔講義補助〕	[食物栄養学部 食物栄養学科] ・〔食物栄養学科〕 解剖生理学実験 ・〔食物栄養学科〕 公衆栄養学実習 ・〔食物栄養学科〕 専門ゼミナール ・〔食物栄養学科〕 解剖生理学実習 ・〔食物栄養学科〕 食品衛生学実験
専 門 分 野	■管理栄養士養成
最 終 学 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 卒業
学 位	学士（食物栄養学）
職 歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (2023年4月～現在に至る)

ゆ

マツモト アヤカ
松本 綾華

MATSUMOTO Ayaka 助手

所属	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科
担当科目 〔講義補助〕	〔食物栄養学部 食物栄養学科〕 ・〔食物栄養学科〕 給食管理実習 ・〔食物栄養学科〕 食品学実験Ⅱ ・〔食物栄養学科〕 臨地実習指導(演習) ・〔食物栄養学科〕 キャリアガイダンスⅠ
専門分野	■管理栄養士養成
最終学歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 卒業
学位	学士 (食物栄養学)
職歴	九州栄養福祉大学 食物栄養学部 食物栄養学科 助手 (2024年4月～現在に至る)